



**PHF**

阿拉伯史五十年史

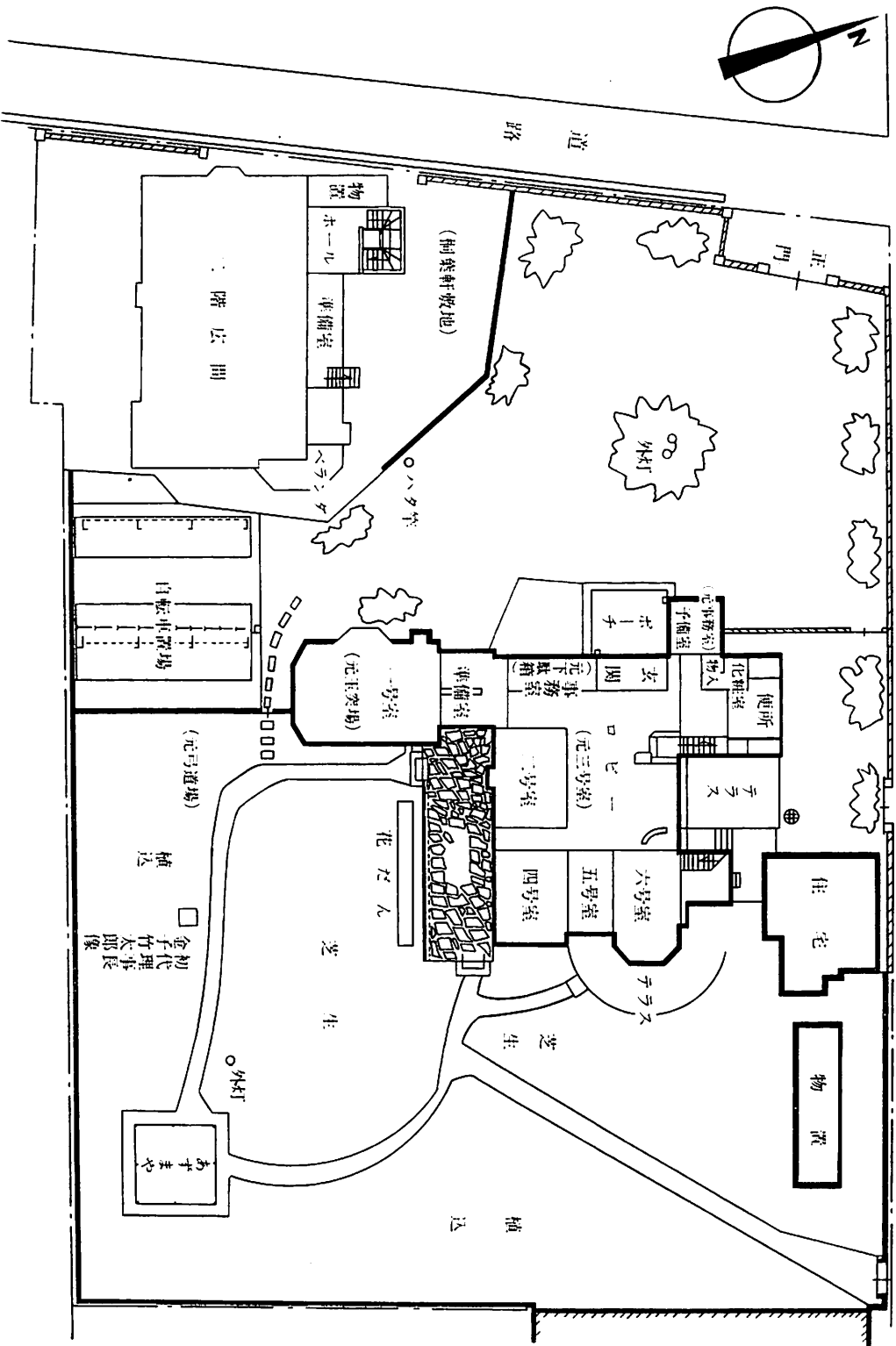
桐生俱樂部五十年史

社団法人 桐生俱樂部



# 桐生倶楽部配置図

道路





桐 生 俱 楽 部 正 面



創立功勞者

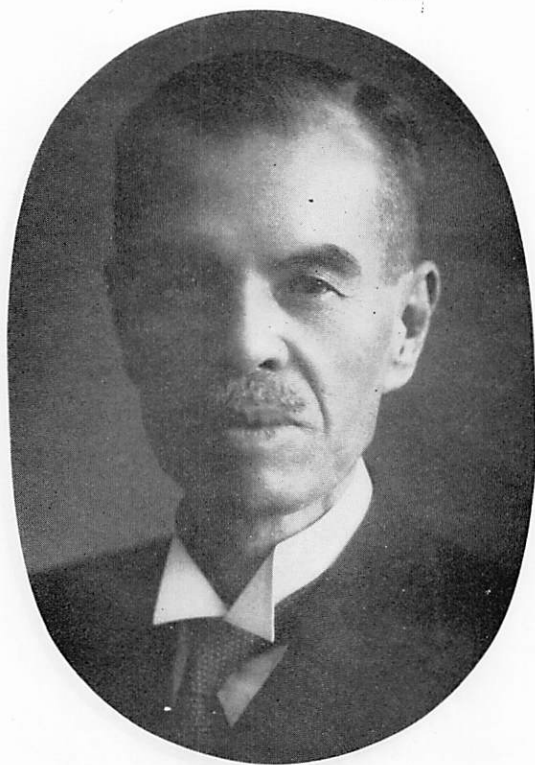
故 森 宗久 氏



創 立 功 勞 者  
初 代 理 事 長

故 金 子 竹 太 郎 氏





創立功勞者

故 前 原 悠 一 郎 氏



二代理事長

氏門左文上書



三代理事長

氏 平 長 藤 齋



四代理事長

故 境野武夫氏



五 代 理 事 長  
現 理 事

長 沢 義 雄 氏



六代理事長

故 前原一治氏



現 理 事 長

川 村 佐 助 氏



名譽社員  
大川英三氏



名譽社員  
故前原準一郎氏



大川英三氏



故前原準一郎氏





理 事  
平野元吉氏



副理事長  
小池久雄氏



理 事  
前原勝樹氏



理 事  
吉野一郎氏



理 事  
花 桐 逸 策 氏



理 事  
齋 藤 喜 平 氏



理 事  
森 口 順 四 郎 氏



理 事  
木 村 貞 一 氏



理 事  
飯 山 清 治 氏



理 事  
塚 越 平 人 氏



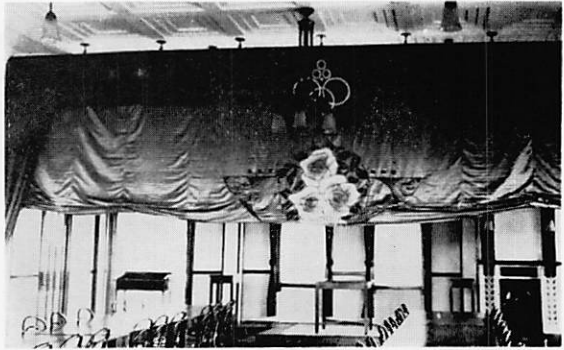
理 事  
森 島 秀 氏



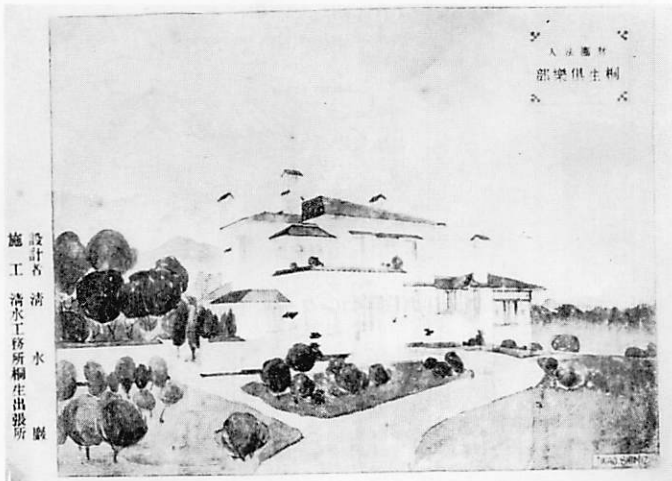
理 事  
吉 田 展 雄 氏



初代事務員  
故 永井 源平氏



二階ホールのミドン帳、【東京三越寄贈】



桐生倶楽部最初の設計図案

AMERICAN HOUSE  
425 BOSTON STREET  
BOSTON, MASS.

MAIN HOUSE  
OSAKA, JAPAN



**YAMANAKA & CO.**  
DEALERS IN JAPANESE AND CHINESE  
ART OBJECTS

254 FIFTH AVENUE  
NEW YORK

LONDON HOUSE  
157 NEW BOND STREET  
LONDON W. 1, ENG.

BRANCH HOUSE  
AWATA, MIOTO

Jan. 5th. 1917.

Iwao Shimizu Esq.  
Tokio,  
Japan.

Dear Sir:-

We take pleasure to inform you that the drawing which you submitted to Yamanaka Competition has been awarded "First Prize"-300. yen. All members of the jury were very much interested in your design, and we expect to publish it, one of the leading architectural magazines in Japan and in U. S. A.

Your cash prize can be obtained from the Institute of Japanese Architect upon presentation of this letter.

Congratulations upon the success of your effort.

Yours truly,

Manager of Yamanaka & Co.

Director of Competition

*Iwao Shimizu*

Tokio, Yotsuya, Branch 88  
Shimizu & Co.



↑ アメリカ住宅コンクール1等入選通知状(1917年)

← 設計者 清水巖近影

目 次

題字 五十年史編集委員長・五代理事長 長沢義雄筆  
口絵写真

桐生倶楽部五十年史刊行を祝う

高橋誠一郎

創立五十周年を祝して

神田坤六

ごあいさつ

荒木歆一郎

桐生倶楽部五十年史に序す

川村佐助

桐生の茶の間

三

桐生懇和会とその業績

三

桐生懇和会規約

三

社団法人桐生倶楽部の誕生

三

A 設立時代

三

B 会館新築

三

C 敷地と庭

三

D 桐葉軒

三

E 整頓時代

三

社債の募集と定款改正

三

定款改正問題

三

名士しきりに来桐

三

男の息の抜き所	七
紳士道修業	七
受難時代	八
桐生の客間	八
境野・南川ライン	九
桐生倶楽部青年部について	九
1 青年部の発足	九
2 青年部の事業	一〇
3 解散に至る経過	一〇
財政たて直し	一〇
改装つづく	一〇
長沢理事長の外遊	一一
創立四十年記念行事	一一
会館使用情况	一二
土地問題	一二
会報発行	一二
前原理事長と委員会活動	一三
前原理事長急逝	一四
川村理事長出馬	一四
社団法人桐生倶楽部内規(現行) 抜萃	一五
五十年史編集終る	一五
桐生倶楽部現理事一覧	一六

桐生倶楽部入社順員数表 ..... 一〇六

桐生倶楽部社員年令別表 ..... 一〇六

歴代理事氏名 ..... 一〇六

歴代理事役歴表 ..... 一〇七

歴代理事長及び功労者略歴 ..... 一〇七

物故された功労者と理事長の菩提寺と戒名 ..... 一〇七

歴代事務職員 ..... 一〇八

敷地・会館の変遷 ..... 一〇八

倶楽部精神を明示したシャンデリア ..... 一〇九

倶楽部のドラ ..... 一〇九

座 談 会 ..... 一〇九

第一部 創立時代から斎藤理事長時代まで ..... 一〇九

第二部 境野理事長時代から現代に至るまで ..... 一一九

(参考) 桐生倶楽部創立当時の群馬県と日本の動き ..... 一二三

社員寄稿所感集 ..... 一二五

社員紹介 ..... 一二五

個人の部 ..... 一二九

法人の部 ..... 一三〇

事務職員 ..... 一三三

桐生倶楽部年表 ..... 一三五

編集後記 ..... 一三七

桐生倶楽部五十年史研究をめぐって



## 桐生倶楽部五十年史刊行を祝う

財団法人 交詢社 理事長

高橋 誠一郎

この度「桐生倶楽部五十年史」が刊行されて、私に序文を書くように求められたのでよろこんで筆をとった。というのは、大変失礼な申分ではあるが、地方の一小都市に、五十年も昔から続いている倶楽部がある事を知ったからである。倶楽部経営は東京のような大都市でも、さまで容易ではないが、まして地方都市ではその経営には色々な工夫が必要であろうし、その困難は頗る大なるものがあると思う。そうした中を、とに角五十年の長期間、無事に今日まで継続され、しかも隆昌を誇っているというのであるから誠によろこびに堪えない。

しかもその創立に当って当時の桐生市の先覚者金子竹太郎、前原悠一郎の両氏が、わざわざわが交詢社を訪問され、色々研究を重ねられた結果、わが交詢社の規約その他に従って桐生倶楽部を創設されたというのであるから、いわば親子か兄弟の關係のような親しみを感じる。「姉妹倶楽部」とでも言うことが出来るのであろうか。

前理事長前原一治氏は十数年の長期にわたって桐生市政を担当し、「文化市長」としての令名が高かったそうであるが、その時代に計画されたこの「桐生倶楽部五十年史」が、現理事長川村佐助氏によって完成したということは、計画、実現がともに人を得たたまもののような気がする。川村理事長は糸業界に名をなした大実業家であられるそうだから、これからの倶楽部経営も必ずや発展向上の一途を辿るものと信じられる。「桐生倶楽部五十年史」編集委員長沢義雄氏の求めに応じ、本書の刊行を祝ってここに一文を草した次第であるが桐生の先覚者が遺した偉大な遺産を、決して失うことなく、さらにその功績を拡大強化されるよう心からお祈りしてやまない。

## 創立五十周年を祝して

群馬県知事

神 田 坤 六

社団法人「桐生倶楽部」が、栄えある創立五十周年を迎えられましたことを県民の皆様とともに心から御祝い申し上げます。

大正初期、懇話会を母胎として誕生した当倶楽部が、変転極まりないこの半世紀のあいだ、会員の皆様が互いに固く手を取り合い、つねに変らぬ友愛の精神をもつて、たゆみない活動を展開され、桐生市はもとより本県発展の原動力として寄与されたご功績は図りしれないものがあります。

殊に、創立当時の並々ならないご苦心、ご苦勞を偲ぶにつけても、早くからこのような立派な組織をつくられ、見事に育てあげられた幾多先輩の方々を始め会員各位の鋭い洞察力と、あふれんばかりの隣人愛、郷土愛に、ただただ深く敬意を表するばかりであります。皆様方のご活躍により、今や桐生市が伝統と歴史に輝く織物と、機械金属工業を中心としてめざましい発展を遂げ、今後更に両毛広域都市建設の重要拠点として大いなる繁栄が期待され、その前途正に洋々たるものがありますことは誠に力強い限りであります。

お陰様で、県勢もまた着実な伸展を示し、最近では、全国いずれの地方県にくらばましても、決しておくれをとらない実力県になりました。

私が常に主張して居ります「産業の調和ある発展」「社会生活環境の整備充実」「人間能力の開発」、この三つの柱を中心とした県政に対し、皆様方が、天下に誇り得る「桐生倶楽部」の活動を通じ、一層のご理解とご協力を下されば、県勢の発展は期して待つべきものと存じます。

ここに、倶楽部の輝かしい歩みを記した五十年史が発刊されましたことは、時あたかも明治百年の記念すべき年にあたり、先人の偉業を讃えるとともに、今後の郷土発展に資する上から誠に意義深く、心からお喜び申し上げます。に、関係各位に深く感謝をささげる次第であります。

ごあいさつ

桐生市長

荒木 歓一郎

このたび社団法人桐生倶楽部が創立五十周年を迎え、記念として五十年史を發行されますことを、心からお祝い申しあげます。

桐生倶楽部の前身であり、母体でもありました桐生懇和会が、かがやかしい業績をあげて、発展的解散をし、大正八年に新しく倶楽部会館が竣工しましてから五十年間、めまぐるしい世相の推移と、いくた経済界の変遷に対処しつつかずかずの苦難に遭遇しながら、よくこれを打開し、常に本市の政治・経済・文化等の、あらゆる部門の進展に、倶楽部のもつ推進的役割を果してまいりました。いま私どもの先輩各位が築かれた、輝かしい歴史と伝統を保持された、今日の倶楽部に接しえますことは、まことにご同慶にたえないところであります。

ここに倶楽部の使命を成し遂げてこられました歴代理事長並びに理事・社員のかたがたに対し、深く敬意を表するものであります。

いまや桐生市は、人口十三万を超え、市の占める地位、産業のすう勢等、年

毎に重要な度合いを増しているのですが、本市における各般の代表的な  
かたがたをもつて構成されている、桐生倶楽部の役割も、今後ますます期待さ  
れますとともに、その使命と責任も、また大なるものがあると考えます。

どうか、いよいよ遠大な抱負と、ますます清新な企画とをもつて、その使命  
達成のため、まい進されますよう、熱望してやみません。

ここに社員各位のご健康と桐生倶楽部今後の御発展とを、心から祈念いたし  
まして、ごあいさついたします。

## 桐生倶楽部五十年史に序す

桐生倶楽部理事長

川 村 佐 助

前原前理事長時代に桐生倶楽部五十年式典の計画がたてられ、その一つとしてこの「五十年史」刊行が予定された。私はこうした仕事には全然門外漢であるので、よい計画であることはわかっていたが、どの位の大事業であるかは見当がつかなかった。愈々始まってみると仲々大変なものだという事がオボロゲながらわかり出した頃、前原理事長の急逝によって、私がある後継者としての事業の全部を引受けねばならなくなった。私にとっては驚きであり迷惑でもあったが、倶楽部の社員として籍を置く以上は誰れかが引受けねばならないお互いに責任がある。それで最初は固辞したが遂に引受けてやる事にしたのである。

さて理事長になってみると、この本を出すための予算の問題、やれ座談会、やれ何の会と相当なお引まわしにあずかって、やっと出版にまで漕ぎつけたのであるが、こんな立派な会館を持つ倶楽部は、地方都市には皆無といつてよい現状で、五十年もの長い歴史を持ち、しかも現代人にすら誇り得るこの会館を

建ててくれた、私たちの先人先覚者に対して、私はこれをどうしても護り通さねばならないという強い信念に燃えたのである。

大きく言えば、やがては日本の「貴重建造物」の一つにもなりかねないこの倶楽部会館を持つわが桐生倶楽部は、倶楽部を作り、会館を建ててくれた先人諸先輩の霊に対して、大きな感謝を表すると同時に、その感謝の意を明確に具体化するためにも、この会館を護り、五十年の歴史にさらに栄光あらしめるために、現在及びこれからの社員諸君の協力と努力が一段とのぞまれるのである。

最後に本書出版に当たっての長沢編集委員長以下各委員編集者の御苦勞に對し心から敬意を表すると同時に御協力下さった社員その他の諸氏に感謝申しあげる次第である。



## 桐生の茶の間

### “桐生の茶の間”

これは三代理事長齋藤長平氏の桐生倶楽部評である。けだし至言といえるだろう。

桐生を初めて訪れる人の殆んどが、今となつては古典的なこの桐生倶楽部の会館を見て、桐生の先人たちのすぐれたセンスに敬意を表さないではおられまい。

この会館が建てられてから五十年、桐生の歴史はこの会館を中心に発展して来たとも言える。桐生の政治・経済、そして文化のあらゆる事業の胎動を、この“桐生の茶の間”が感じとっていた。

この会館のベルギー製の壁紙は、ここに入出した多くの偉大な人たちの声を吸い込み、先輩たちの影を写した。

“桐生の茶の間”は同時に、“桐生の客間”でもあった。

来桐した多くの知名の士は殆んどこの会館を訪ね、部厚い絨氈の上に足跡を印し、豪華なシャンデリヤに昼食又は晚餐にほてらせた顔を輝かせた。クリスマス夜の夜、ストーブには赤々と火が燃え盛って、童話の絵のそのように、北欧風の屋根に突き出たあの煙突からは、静かに灰色の雲がたなびき流れた。モーニングに威儀を正した若き社員たちは、ゆらゆらとゆらくローソクの灯の中で敬虔な祈りを捧げ、心行くまで語りあかした。

何れも当時一流のインテリジェンスを誇るこれらの人たちは、先輩の激励と信頼のもとに、この倶楽部を心の糧ともし、人格練精の道場とも考えた。

この人たちの父たちは、こうした若い人達が倶楽部に行くことをよるこび、安心してその会合を支援した。

今は殆んど故人となった先覚者たちが、桐生の発展のために多くの苦難とたたかってこの会館を造り、この会館からいくつかの歴史が生れ、そしてそれは成長した。

威儀を整えたボーイが玄関に出迎えたり、白足袋に袴でなければ入れなかった(斎藤長平氏談)というこの倶楽部会館も、五十年の星霜にかなりその姿を変えて来た。会館の外部と二、三の部屋を残して、他はいろいろと模様かえをされ、内部の裝飾備品なども、第二次大戦の供出などですっかり様子をかえてしまった。

桐生倶楽部に関する公式記録ともいうべきものの最古と思われるものに「桐生市制十五年誌」(昭和十二年刊)がある。その「前篇第十五章官公衙其の他」の中の「第二節 通信及交通機関」の「第四項社交機関」の中に、次のように記されている。

桐 生 倶 楽 部

(所在地 桐生市高砂町)

明治の末葉、桐生懇話会組織せられ、故森宗作、故書上文左衛門、故大沢福太郎の諸氏を中心とし、町政、教育、経済、産業の振興策を樹立し、以て一般を指導せる所勉ならず。而して更に之を有力なる社交機関たらしむべく、其の計画を進め、大正七年社団法人として設立の認可を得ると共に、敷地千五百八十六坪、建坪百六十八坪、総工費四

万一千余円を以て会館を建設せり。

当時理事長は、金子竹太郎氏にして、其の後書上文左衛門氏を経て現在は齋藤武助氏なり。又常務理事は青木峰蔵氏外二名、理事は森宗作氏外十名、特別社員二十九名、正社員百二十八名となれり、設立以来十七年を閲し、其の間各種の集會、講演會、音楽會、繪画展覽會等の會場に使用せられ、桐生地方の社交機關として郷土に貢献すること渺ならず。

そこで桐生倶楽部の母体であつた桐生懇話會について次に記そう。

### 桐生懇話會とその業績

当時館林に本店を持つ四十銀行の支店長であつた秋田氏が提案、森宗作・大沢福太郎などの諸氏が中心となり、桐生町とその周辺町村の有志の団体として、明治三十三年九月に誕生したのが「桐生懇話會」であつた。この會は前記のような立派な社交クラブとしての業績を遺したのであつたがその成功を「桐生市史」の編集者である郷土史家故八木昌平氏は次のように分析している。

①設立の時期を得たこと。

幕末以来、桐生經濟界の王座を占めていた佐羽家が没落して、その中心を失つた人々が、第二の佐羽家の出現を待望していたところへ呼び掛けがあつた。

②指導者を得たこと。

こうした情勢の中に、父祖の蓄積した財力の上に立った森宗作氏は、「郷土の発展はやがて自己の発展である」という強い信条の下に、終始一貫した行動をとって、よき指導者として常に先頭に立っていた。

ことなどが、桐生懇話会の誕生とその発展の要因であったというのである。

桐生懇話会創立当時、会員の一人であった故前原悠一郎氏は、その著「桐生の今昔」の中で

「株式会社四十銀行の本店が桐生町へ移り、森宗作氏が頭取に大沢福太郎氏が専務に就任し、更同行の発展を期するため、総支配人として東京高等商業学校出身の秋田宗四郎氏を迎え、同行業務の刷新を図った。秋田氏は、森・大沢両氏と協議の結果、銀行が桐生地方の有志と密接なる関係を保つことが肝要であるとし、更に地方の有力者を網羅して一団体を作り、桐生町発展のため尽くすことが急務であるとして、書上氏もこれに参加し、本会を設立することとなり会則を作成し、明治三十三年九月九日第一回の会合を四十銀行裏の行宅（待賓館）に開いた。」

と述べている事によっても明かであるように、設立の動機はまさに郷土桐生の発展を目的としたものであった。当時の規約と会員は次の通りである。

### 桐 生 懇 話 会 規 約

第一条 本会は懇話会と称し会員相互の交通親和を旨とし兼ねて実業上健全なる発達を期するを以て目的とす

第二条 本会は毎月十四日午後三時に開会す

第三条 本会の事務を整理する為幹事六名を置き毎期半数宛輪次交代するものとす

第四条 幹事は会員中より投票を以て選挙し其任期を一ケ年と定む

第五条 本会に入会を望むものは会員二名以上の紹介を要す

第六条 前条入会の諸否は出席会員の無記名投票を以て決す

但出席会員は全会員に対する過半数なるを要す

第七条 本会は特別会員を置く 其推薦は本会の決議による

第八条 会員にして本会の体面を汚すべき行為ありと認むるものは本会の決議を以て退会を命ず

但決議の方法は第六条に準ずるものとす

第九条 本会員は会費として毎月一円を出席の有無に拘はらず出金するものとす

第十条 第六条但書の出席人員は当分の内十名以上を以て過半数と見做す(原文のまま)

会 員 名 簿

氏 名	住 所	職 業	備 考
今 泉 健次郎	桐生町桐生新町	生糸商・撚糸商	
岩 崎 民三郎	桐生町安楽土村	整練業	桐生物産同業組合長
今 泉 勝 藏	桐生町下久方	生糸商・撚糸商	
石 井 政 平	境野村	織物仲買商	
井 岡 大 造	桐生町桐生新町	教員	県立織物学校長
福 田 伴 作	桐生町	白木屋呉服店出張所主任	
西 山 啓之助	桐生町新宿	生糸商・撚糸商	

小野里喜左衛門	桐生町桐生新町	織物仲買商	桐生物産同業組合顧問役
大沢 栄八	桐生町桐生新町	織物製造業	
大沢 福太郎	桐生町新宿	織物製造業・銀行員	
書上 文左衛門	桐生町桐生新町	織物仲買商	桐生物産同業組合顧問役
神山 芳次郎	桐生町桐生新町	呉服商	桐生物産同業組合会計役
加藤 正一	桐生町桐生新町	織物製造業	
横山 嘉兵衛	桐生町新宿	織物製造業	桐生物産同業組合副組長
高村 勝太郎	桐生町桐生新町	織物仲買商	
高橋 善十郎	境野村	織物製造業	桐生物産同業組合顧問役
田沼 米蔵	桐生町桐生新町	乾物商	
常見 喜太郎	桐生町新宿	質屋業	桐生物産同業組合顧問役
中里 宗五郎	川内村東小倉	織物製造業	
福田 森太郎	桐生町新宿	織物製造業	桐生物産同業組合評議員
福田 常吉	桐生町新宿	織物製造業	桐生物産同業組合顧問役
藤生 佐吉郎	広沢村	織物製造業	三井桐生出張所主任
藤田 朝次郎	桐生町桐生新町	会社員	
小林 利平	桐生町桐生新町	唐糸商・染料商	
青木 倉蔵	梅田村上久方	織物製造業	
新井 藤太郎	境野村	織物製造業	
秋田 宗四郎	桐生町桐生新町	銀行員	第四十銀行桐生支店支配人
斎藤 正七郎	桐生町桐生新町	唐糸商	
山同 藤十郎	福岡村小平	織物業・生糸商	桐生物産同業組合顧問役
北川 恭平	桐生町安楽土	織物製造業	
平田 栄三郎	桐生町桐生新町	生糸商	

高木辰男	桐生町桐生新町	会社員	メーリン商会菅川出張店代務人
蛭間貞次郎	相生村下新田	生糸商	
森宗作	桐生町桐生新町	織物仲買商・唐糸商	桐生物産同業組合顧問役
森山芳平	桐生町安楽土	織物製造業	桐生物産同業組合評議員
鈴木卯三郎	桐生町桐生新町	銀行員	第二銀行桐生支店支配人
金子竹太郎	桐生町桐生新町	教員	県立織物学校教諭明治三三年二月入会
望月餽三郎	桐生町桐生新町	官吏	桐生郵便局長明治三四年二月入会
小島常太郎	桐生町桐生新町	教員	県立織物学校教諭明治三四年四月入会
前原悠一郎	桐生町桐生新町	教員	県立織物学校教諭明治三四年四月入会
原田与左衛門			

〔備考〕

織物製造業	一二	織物原料商	八	呉服・乾物・質屋	三
織物仲買商	五	織物整練業	五	銀行	六
官吏・教員	五			会社員	六
計	四〇				

〔注〕原田与左衛門氏を記録したのは「桐生の今昔」にあるものに従ったもので、「桐生倶楽部記録」には青木念蔵、新井藤太郎の二氏があつて原田氏は脱落しているので、最後に附記した。教員は織物学校の教諭である。

会員中実に七五%が織物関係業者であつたことは当時の織物関係業者が如何に真剣に業界の発展に就いて考えていたかを知る好資料と言える。

ここで四十銀行に就いて少し述べておきたい。言うまでもなく四十銀行とは第四十国立銀行で、旧館林藩士族が奉還した秩祿の代償として下付された金禄公債を出資して創立されたもので、当然

本店は館林にあり資本金十五万円で旧館林藩士のみを株主として明治十一年十一月五日に成立したものであったが、翌明治十二年十二月に桐生支店を開設し明治十七年には株式の一般公募を行って資本金二十二万円となり、明治三十一年九月に株式会社四十銀行に改組した。当時桐生には「土地生えぬきの金融機関」がなかったことから（明治二十八年には足利に足利銀行があった）森、書上、大沢の三氏の大活躍によって、館林側の反対を押し切って遂に四十銀行の本店を桐生に移し、明治三十一年森宗作氏が頭取に就任、大沢福太郎氏が専務取締役に選任されたのである。本店は現在の大成相互銀行桐生支店の所に置き、後現在第一銀行支店の所に移転したのである。（後幾多の変遷を経て今日の第一銀行に合併した。詳細は二四三頁の「参考」参照）

このような事情で桐生懇話会の誕生も、四十銀行がその舞台として使用されたのである。

この会設立以来十七年、大正四年一月十四日に今日の桐生倶楽部として発展的解散を遂げるまでの業績は、誠に偉大なものがあつた。その詳細は前記の前原悠一郎氏著の「桐生の今昔」に詳細に記されているが、ここにその重なるものをあげてみる。

① 桐生商工案内の発行（明治三十三年九月九日協議）明治三十五年七月十四日決議。

岩下亀太郎（県立織物学校教諭）片沢新太郎（桐生織物同業組合書記長）両氏による原稿がまともすり、一千五百部を印刷した。

② 桐生停車場改築問題（明治三十三年十月協議）

明治三十三年十一月。日本鉄道株式会社へ交渉のため、森宗作、大沢福太郎、常見喜太郎、秋田宗四郎、高橋善十郎の五氏を改築陳情委員に選定。交渉運動の結果改築内定、設計図出来下検分もすんだよしであつたが、なかなか着工を見るにいたらなかつたので陳情書の提出となつた。



明治三十四年五月。日本鉄道会社々長と関係各重役に対し陳情書提出（注3参照）

明治三十六年桐生停車場改築遂に完成。本会から感謝状を贈った。

③通信機関の設備設置に協力

当時通信機関の完全なるものがなく、桐生商工業上の真相が社会に紹介されることが少なく、時に事実相違のことがあって直接間接に損害を蒙ることもあったので、通信員を設けること、若し差支えあれば本会に於て実業上に関する通信は担当してもよい旨の交渉を時事新報社に対し行ない各新聞社に対しては、「実業上に関する重要問題に成るべく公平に、且つ正確なる事実を社会に発表する必要あるに付、その事実の真相調査を必要とする場合には、各社の依頼に応じ調査回答する」ことを書面として発送した。

④電話設置問題（明治三十七年一月十四日協議）

明治三十七年一月十五日付で時の逓信大臣大浦兼武に対して請願書を送り、同四十年三月十日をもってその実現をみた。

（注）桐生倶楽部記録と「桐生の今昔」とではこの月日に相違がある。

⑤電力問題（明治三十八年十一月十四日協議）

森宗作氏の発言で桐生地方への電力供給の必要を痛感し、電力調査委員を挙げて次の諸氏を選んだ。

森山芳平 北川恭平 飯塚春太郎 井岡大造 前原悠一郎 福田常吉 登坂秀興

明治三十九年一月調査委員会を開いて渡良瀬水力電気株式会社設立の準備を進めることとなった

明治三十九年五月十七日創立總會を開いて遂に同社の設立をみたのである。

附記

当時桐生には明治二十年旧富士紡績株式会社桐生工場に設立された日本織物株式会社の原動力であるタービン（現在の厚生病院と産業文化会館の中頃に現存）の余力を使って点灯していた桐生電灯合資会社があったが、この時これを併合した。

（注）1、日本が広く（大都市中心だが）電灯による恩恵を受け始めたのは明治二十一年前後であるから、桐生の電灯は大変早期のものであったと言える。

⑥ 講演会

明治三十八年八月、桐生物産同業組合で

極東最近史

早稲田大学講師 野村文学士

日露戦争の終局

帝国大学教授 岡田法学博士

の講演があり、明治四十二年六月二日には書上文左衛門氏の尽力によって渋沢栄一男爵の講演会を桐生織物同業組合楼上で開いた。

⑦ その他

討議されたり、後に実現されたものなどを次に挙げてみる。

(一) 桐生商工業の改善ならびにその方法

(二) 玉突場の設置

(三) 商工業者消費組合の設置

(四) 商工会議所の設置

(五) 織物標本陳列場の設置

(六) 織物共同販売所の設置

(七) 桐生「市日」改正案協議

等があり、これらの諸問題はすべて談笑のうちにすめられ、その運営は和合一致、桐生町の発展と桐生織物振興のために、常に難問と進んで取り組み、その完成に努力した。

これら「その他」の項にあげられた諸問題は桐生懇話会の解散までには実現を見なかったものも多かったが、これが今日桐生の発展に大きく寄与した事は言うまでもない。

右のうち(二)の玉突場は後に桐生倶楽部に引継がれ、(四)の商工会議所は幾多の変遷を経て昭和二年九月発布され、昭和三年一月施行の商工会議所法に準拠し、昭和十五年四月五日正式設立許可となり今日にいたっている。(座談会記録大川英三氏発言参照)

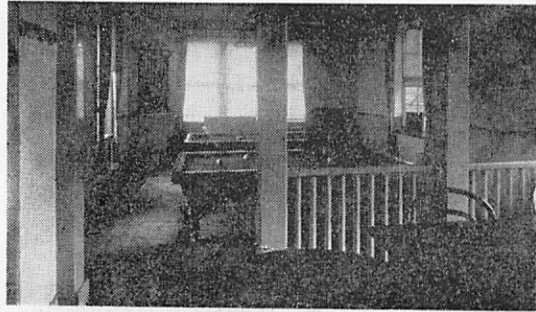
玉突場を造るに当たってもいろいろ研究を重ねたあとが書類その他のもので遺され、見本として取りよせたラシャ地なども発見されたが、現在の一号室にかなり長期にわたって設置されていた。

(注) 2、参考までに当時の料金を次にしるす。

玉突料金      百ゲーム迄      金五銭      百ゲーム以上      金十銭

(注) 3、桐生停車場改築に付陳借書

謹啓 陳は貴鉄道両毛線桐生停車場は曾て旧両毛鉄道会社事業創始の経営に係り其當時に在ては設備其宜しきに適ひ交通運輸上毫も不便を感じざる次第に有之候処近時当地方に於ける工業は著しく進歩発達し交通運輸日々頻繁を加ふるに至れり、然り而して足尾鉄道は当地を起点として着々起工せらるべく、又本県会は桐生町、



## 場 突 玉

相生村、相互間連鎖の必要より、鉄橋加設に五万余円の工事費を決議せられたるが如き事情を以て、自然当地の繁栄は今後日進月歩の勢を以て増進すべく、加え前記足尾鉄道並に架橋工事に於て一朝竣工するに至らば、交通運輸の關係は全く一変し昔日と日を同ふして論ずべき事にあらざるべくと存候。然るに現存に於ける停車場は御承知の如き規模にして聊か現在の事情に副はざるの觀有之、夫故乗客は常に停車場外に溢出し、寒風夏雨の場合と雖も之を避け之を凌ぐべき場所なく、殊に当地若くは足利・伊勢崎各市日に相当する場合に在ては、其雜踏困難実名状すべからざる次第に有之、尚其上二、三等室の設備なきが為内外貴紳の迷惑は勿論其結果此等上流人士の往來を妨ぐるの頗も有之に承知致居候。右は当地の盛衰消長にも相関し、等閑視すべき事に無之と存じ兼に本会は、森宗作外四名を停車場改築陳情委員に撰定し、昨年十一月中、閣下へ具に其実状を訴へ、且併せて改築の必要を陳情すべき筈なりしも、其当日閣下御不在の爲久保運輸課長に御面会の上詳細に右事情を陳述仕候処、改築工事は足尾鉄道と連絡上早晚必要なるべきも、他に経営すべき必要工事の都合あるを以て今俄かに着手云々を回答すべき場合に無之殊に右停車場改築の事は未だ重役会の決議なければ詮なきも、一、二等室を設くることは刻下の急に屬し、且修繕の範圍に屬するものなるを以て、可成至急着手の事に詮議すべしとの御答言に有之候。爾來聞く所によれば右一、二等室の設計図面等は已に出来し、久米理事殿其他当局者の御検査も終了致居候哉の趣に承知致居候間、御差支も無之候はば可成一日も早く御着手の上御完成被下度、若し在昔御推移相成候ては交通上不便なるは勿論、梅雨の季節も間近に相成從て口雨に曝され候事は衛生上差支の次第も御座候に付右事情御諒察の上何分の御詮議被下度、尚実況等に付御諮問の廉も有之候はば何時にても上京可仕候 此段謹て稟請仕候

敬 具

明治三十四年五月

群馬県山田郡桐生町

懇話会会員総代

森 宗作

書上文左衛門

大沢福太郎

常見 喜太郎

今泉健次郎

高橋 善十郎

秋田宗四郎

日本鉄道会社社長曾我祐準殿

## 社団法人桐生倶楽部の誕生

桐生倶楽部創設当時から常務理事として事業の主体となって活躍した故前原準一郎氏の記録によれば

「故森宗作（晩年家督を長子故普一郎氏に譲り、名を宗久と改め、昭和七年五月に没した）が、大正四年始めのころ、故金子竹太郎、前原悠一郎両氏にあてた書簡が、桐生倶楽部創設の動機にたったように思われる。次の大要は私の記憶にある範囲で記したものであるが、前原悠一郎、書上文左衛門の両氏にも確めたものである。

長い間創立に努力を続けて来た桐生の高等工業学校も、いよいよ近く開校の運びとなり、多数教職員も当地に在住されることになろうが、当地にはその居住に適する住宅も少なく、さらにこういう人達が懇談したり慰安となる場所もない。何時も料亭が利用されねばならないようでも困るし、撞球場の設備ぐらい欲しいものである。（明治三十年代にも新宿に有志の作った撞球場があった。）来桐される名士や、われわれ有志の話し合いの場としても、是非クラブ風のものが欲しいと思うので、同志と話合せて設立に尽力して欲しい。

## 附記

当時の懇談会場や名士の来桐に当って使用されたのは、元佐羽家の茶室（現大成相互銀行裏前出の前原悠一郎氏の記録に見える四十銀行行宅）で、公開されていたものでなく、厚意的使用であり

閑院宮も二回程ここに来られたように覚えている。」(昭三三、九、一二記)とあるように、森宗作氏の創意によって設立準備が始まった。

(注) 当時佐羽家の茶室で用いられた茶器などが、本町三丁目の徳永ツル氏方に保存されている。尚当時の庭にあった灯籠一基が天満宮に、他の一基が太田の大光院に寄進してあるという。

④ 設 立 時 代

大正四年一月十四日、桐生館で開かれた懇和会新年会の席上、森宗作氏は「クラブ設立案」を發議し、満場一致で議決され、ただちに調査委員十五名を選任した。

金子 竹太郎	前原 悠一郎	前原 良太郎
前原 準一郎	高村 勝太郎	宮崎 律三
森 宗作	境野 源八郎	大沢 福太郎
斎藤 正七郎	佐々木 伝吉	原田 与左衛門
小林 利平	福田 兼吉	福田 常吉

の諸氏がそれであり、特に前原悠一郎・金子竹太郎の両氏がその調査を進めるよう委嘱された。兩氏は東京に出張し、交詢社・日本橋倶楽部・同気倶楽部等を視察し、その設備ならびに経営方法を調査し、これを報告した。

大正四年六月二十二日には桐生撚糸株式会社で委員会、おなじ月に二回の会合を桐生館に開いて「倶楽部」の内容、規模、諸費概算等について協議し、次の諸件を可決した。

① 調査委員十五名を実行委員に委嘱する。

②委員中より左記五名を常任実行委員とする

前原良太郎 前原悠一郎 金子竹太郎

前原準一郎 高村勝太郎

このようにして設立準備が着々と進行している大正五年六月初旬に森宗作氏は、設立資金として金五千円寄附の申出をしたのである。これは倶楽部の中心となる会館建設に大きな力を与えたもので、しかもその使用方法に就いては金子・前原（悠）両氏に一任するというものであった。そこで両氏は勇躍会館の建設に取り組んだのである。

大正五年六月十四日桐生懇話会は倶楽部設立の案を可決し、翌六年九月十五日社団法人桐生倶楽部設立を内務大臣と文部大臣に申請、翌七年八月六日その筋の許可を受けた。

大正七年九月二十九日、桐生織物同業組合で第一回社員総会を開いて次の理事十五名を選んだ。

金子 竹太郎 前原 悠一郎 前原 良太郎

前原 準一郎 高村 勝太郎 書上 文左衛門

森 宗作 境野 源八郎 大沢 福太郎

斎藤 正七郎 佐々木 伝吉 原田 与左衛門

小林 利平 福田 兼吉 福田 常吉

さらに理事長代表理事として金子竹太郎、副理事長として前原悠一郎の各氏を互選した。

ここに社団法人桐生倶楽部は完全に誕生したのであるが、同時に幾多輝かしい業績をのこした桐生懇話会は発展的解消を遂げ、桐生倶楽部に移行したのである。

第一回総会決議録には



桐生倶楽部創設費用として五千元を供出された時の  
【写真説明】 故森宗作翁書簡

近來桐生人士ガ総テノ会合ニ歡ンデ多数ノ出席ヲ看ルハ頗ル美風ヲ増進  
セルモノノ如シ。之ハ先輩諸君ノ誘導其宜シキ得タルノ賜ト深ク信ジテ疑  
ハザル処ナリ。此機会ヲ善用シテ、ヨリ以上ノ發展ニ資セラレンコトヲ望  
デ止マズ。不肖夙夜焦慮セル処アリト雖モ、固ヨリ痴愚、加エ近來牀軀自  
由ヲ欠キ、自然世事ニ遠ザカリテ的確ナル考案ヲ造成スルコト能ハズ。甚  
ダ遺憾トスル処タリ。回顧スレバ曩キニハ懇話会ノ企画セル倶楽部（公会  
堂）設立モ宿題トナリ、又新進ノ諸士ガ希望セル中学問題モ無期延期ノ恐  
レアリ。桐生今日ノ情態ニ照シ是方成立ヲ見ザルハ、能ハザルニアラズシ  
テ或ハ為サザルノ責ニ歸スル処ナキヤヲ疑フ。全町ノ有志諸君ニ更ニ一ノ  
勞ヲ咨マサランコトヲ冀フ。

中学校問題ノ如キ教育問題ニアリテハ、本県郡町何レカガ当然ナスベキ  
事ニ屬シ、又早晩行ハルベキヲ信ス。倶楽部（公会堂）ノ如キ比較的巨額  
ヲ要スル或ル部属ノ事業ニ於テハ、特ニ有志ノ助力ヲ要セザルヲ得ズ。単  
リ懇話会ノ努力ニ委セズ、全町ノ有志諸君ノ一大奮発ニ依リ速成セシメラ  
レンコトヲ願フ。不肖死没ノ場合ニ於テ、若干金ヲ公共事業ニ遺贈セント  
懐シコトアリ。今日情ニ考慮スルニ、是ハ迂遠ノ計ニシテ寧ロ生存中醸出  
シテ以テ之ガ資ニ供スルノ便レルニ若カザルコトヲ確念シ、諸君ノ一考ヲ  
煩ハサントスル所以ナリ。可否可然御垂教アランコトヲ  
概要左ニ。

- 一金五千元 桐生倶楽部設置費
- 毎年金壹千円宛五ヶ年支出ノコト

☆便宜上句読点を加えた。



出席社員（委任状とも）五拾八名

とあるが、会計報告によれば、

寄附金総人員壹百貳拾六人

とあるので、最初の会員総数は百貳拾人内外と見るべきであろう。

次に「桐生の今昔」から社員名簿を転記する。

創立当時の社員（○印は旧懇話会々員）

伊藤 定次郎	岩崎 誠藏	岩野 善助	石井 一郎
岩沢 富士吉	井戸 恭一	岩野 新三郎	石原 和一郎
岩崎 満四郎	泉 嘉造	○石井 政平	○飯塚 春太郎
飯塚 三郎	○原田 与左衛門	橋本 正治	服部 芳松
原勢 鉄之助	林 久雄	株式会社八十一銀行	西山 政藏
西山 理作	西村 支店	日本網燃株式会社	堀 林藏
星野 晉藏	堀越 三郎次	星野 竹次郎	堀 祐平
星野 半五郎	遠田 安藏	遠坂 岩吉	利根発電株式会社
研 次一郎	東洋織布株式会社	両毛整織株式会社	○大沢 福太郎
岡部 重三郎	岡本 良太郎	○大沢 栄八	小野田 新太郎
大屋 茂八	大沢 金六	大沢 徳次郎	大沢 嘉平次
荻原 四郎	岡部 権右衛門	小内 養藏	綿貫 大操

○書上 文左衛門

金子 清十郎

金子 喜一郎

吉田 熊次郎

○高村 勝太郎

蓼 沼 平 吉

田 島 覚太郎

中 村 弥 市

上 野 角太郎

野 村 直次郎

山 田 岩 雄

真 尾 源一郎

増 田 定 吉

○福 田 兼 吉

小 林 利 平

後 藤 定 吉

江 原 辰之助

○青 木 英 作

朝 倉 文三郎

神 山 芳次郎

金 谷 芳次郎

梶 井 健十郎

横 山 朝四郎

高 木 栄 枝

田 村 和 一 郎

竹 内 藤 吉

奈 良 嘉 平

内 田 垣 三

野 尻 亀 吉

○前 原 良太郎

松 本 房太郎

松 井 仙太郎

不 破 守 二

小 林 歴 三

小 林 友 太 郎

江 原 友次郎

○新 井 慶三郎

新 井 錠 三

○金 子 竹太郎

加 納 為五郎

金 居 善太郎

吉 野 喜代松

田 中 梅之助

○高 橋 善十郎

塚 本 武一郎

永 井 支 店

野 口 周 善

桑 原 文 作

○前 原 悠一郎

前 沢 政 吉

松 島 茂三郎

○福 田 森太郎

小 林 平 内

江 原 貞 助

阿 部 越三郎

青 木 藤太郎

株 式 会 社 足 利 銀 行

○加 藤 正 一

神 山 賢 助

笠 木 万 吉

吉 田 善 太 郎

蓼 沼 貞次郎

○田 沼 米 藏

塚 島 合 名 会 社 支 店

内 沼 周 吉

野 間 善次郎

暮 田 三 次 郎

○前 原 準 一 郎

松 島 富 三

○藤 江 良 作

福 田 常 吉

小 林 安 次 郎

江 原 庄 兵 衛

赤 堀 恵 助

朝 倉 茂三郎

新 井 安 造

新井 孟一	新井 鷺五郎	青木 峰藏	阿部 邦三郎
荒川 伊三郎	○佐々木 伝吉	○齋藤 正七郎	齋藤 嘉吉
○沢田 莊太郎	○境野 源八郎	佐々木 元吉	坂田 為之助
齋藤 元四郎	齋藤 重三郎	北川 政七	木村 偉三郎
桐生機械株式会社	明治商業銀行	○宮崎 律三	三島 喜一郎
塩沢 一直	島田 俊	島崎 貞	霜鳥 増藏
鹿村 英明	正田 順吉	塩谷 亀次郎	清水 勇三郎
島田 安太郎	周東 藤太郎	○平田 準一郎	平田 小三郎
平田 善七	平田 長作	○森 宗作	茂木 信四郎
○森山 芳平	森口 唯八	森山 文三郎	森島 秀
本橋 林次郎	関口 金三郎	鈴木 徳平	須藤 友次郎
住吉 善藏	鈴木 留太郎	須永 富次郎	須永 裁七
岩崎 安太郎	○久保田 健次郎	小林 惣太郎	計 一七五名

右の外特別社員二十八名  
賛助会員二十名  
次に会計報告を転記する。

会 計 報 告

一、金四千五百沓円也	寄 附 金 額
一、金四千貳百円也	借 入 金 額
計金八千七百沓円也	收 入 金 額 合 計
一、金参千五百円也	借 入 金 返 却 金
一、金参百貳拾五円参拾七銭也	手 形 割 引 金 額
一、金四千円也	敷 地 買 入 金 額
一、金四拾七円六拾九銭也	登 録 税 金 額
一、金八拾円八拾六銭也	諸 雑 費
一、金六円四拾七銭也	出 張 実 費
一、金五円貳拾五銭也	諸帳簿並に諸印刷その他雑費
計金七千九百六拾五円六拾四銭也	支 出 金 総 額
差引金七百参拾五円参拾六銭也	八十一銀行桐生支店預金現在高

(注) 八十一銀行は四十銀行が大正七年栃木県最初の銀行四十一銀行と合併して出来たものである。

寄 附 金 額

一、金貳万四千五百七拾円也

寄 附 総 額 計

(内訳)

金四千五百沓円也

大正七年九月迄受入高

金参百四拾五円也 一時払込に付割引金  
 金壹万九千七百貳拾四円也 未 収 入 金

支 払 予 定 額

一、金参万貳千五百五拾八円五拾銭也 予 定 額 総 計

(内訳)

金四千五拾八円五拾銭也 地 所 購 入 代 金

金貳万五千円也 建 築 費

金参千五百円也 雑 費

差引金壹万参千貳百参拾参円五銭也 不 足 金

一、寄 附 金 総 人 員 壹 百 貳 拾 六 人

一、全 額 払 込 人 員 貳 拾 九 人

一、半 額 払 込 人 員 拾 壹 人

一、未 払 人 員 貳 拾 七 人

一、借 入 金 未 済 分 金 七 百 円 也

一、全額払込・半額払込に付割引金 金 参 百 四 拾 五 円 也

以 上

(注) このうち建築費金貳万五千円は借入金としその返済は寄附金を以て漸次返済することにした。  
 設立の動機に就いては前記の他に、前原準・書上その他諸氏の説明によれば、「桐生出身者で上京勉強

をしたものが、掃桐して郷里のために働らく者が少くなり、殆んどが他出してしまふ事に対して、何か事業を起したり、集会して互いに娛しみ研鑽を積むところが必要だ」と考えられた事も、倶楽部設立の動機の一端をなしていたと言う。両毛整織、日本絹撚、桐生機械などの会社も、こうした目的で桐生振興のために設立されたものであった。

㊦ 会 館 新 築

いよいよ会館の建築である。色々調査の結果四十銀行（現在の第一銀行桐生支店）の設計者であった小林力雄氏に設計を依頼したが、それがあまりにも規模が大きく資金の点から実現不可能であったので、やむなく他に適当な設計者を物色せねばならなかった。たまたま野間清治氏を東京に訪ねこの話をしたところ、野間氏は適当な人物があるとして清水巖なる人を紹介した。同氏はアメリカでの建築設計コンクールに出品し、一等に入選したという有能な設計者であったので、すすめに従って同氏にその設計を依頼し、それが適当と認められたので同氏の直営事業として清水氏の監督の下に工事をすすめることとなった。

（注）清水氏と当時のくわしい事に就ては他の「功勞者」の欄で詳記する。

大正七年十月二十日に敷地買入れ登記をすませ、大正八年一月十九日に理事立会の上で上棟式が行なわれ、同年十二月に内外の工事が完成したのである。すなわち現在の桐生倶楽部がそれであり当時の地番は

桐生町東安楽土字阿武久田二七〇番地であり、敷地坪数は

一五八六坪一六合（五二八七・二平方メートル）

でその価格は九、九二〇円五〇銭であった。

建物は

本館 延坪 一四二坪五合（四七五平方メートル）

付属家屋延坪 二六坪（約八七平方メートル）

本館 建築費 三万五千元

付属建物及び諸工事費 五、二七四円五〇銭

室内装飾費 一一、一五〇円

（注）室内装飾は主として福田宗空氏に委任した。

以上建築費用総計は五一、四二四円五〇銭となるが、最初の予算は五万円であり、倶楽部員の寄附金と一部借入金とで賄う事となっていたが、これを憂慮した森宗作氏は、前記のように卒先して五千元を寄附したのである。「この際森氏の五千元がなかったならば、会館の建設も覚束なかったと思われる。」と「桐生の今昔」に述懐された前原悠一郎氏は、当時の心境を如実に伝えたものといえよう。

この森氏の五千元を基本として約二万円の寄附金を得、二万六千円の借入金を加えて会館の建築に漕ぎつけたのである。

大正八年一月二十九日の総会決議録には次のように記されている。

總會決議錄

大正八年正月拾九日午後壹時 群馬県山田郡桐生町大字安楽土卷千八百式拾番地  
日本絹燃株式会社に於て開會

出席社員（委任状共）五拾八名

理事長金子竹太郎議長席に着き、決議せる事項左の如し

財産目録

一、金四百円也	寄附割引金
一、金八千参百七拾四円七拾八錢也	地所
一、金五千円也	建築費仮払金
一、金七百貳円五拾六錢也	諸損金
一、金参千貳百五円六拾八錢也	銀行預金
一、金七拾四円七拾六錢也	金銀
合計金卷万七千七百五拾円七拾八錢也	

貸借対照表

（負債之部）

一、金卷万貳千七百五拾七円七拾八錢也	寄附金
一、金五千円也	支払手形



合計金壹万七千七百五拾七円七拾八錢也

(資産之部)

一、金四百円也

寄附割引金

一、金八千參百七拾四円七拾八錢也

地所

一、金五千円也

建築費仮払金

一、金七百貳円五拾六錢也

諸損金

一、金參千貳百五円六拾八錢也

銀行預金

一、金七拾四円七拾六錢也

金銀

合計金壹万七千七百五拾七円七拾八錢也

諸損金内訳書

一、金參百四拾壹円七拾九錢也

手形割引料

一、金壹百參拾壹円六拾九錢也

登録税

一、金壹百參拾円也

手当金

一、金拾壹円七拾五錢也

消耗品代

一、金八拾七円參拾參錢也

雑費

合計金七百貳円五拾六錢也

以上満場之を承認せり

## 事務報告の件

議長金子竹太郎より設立当時より大正七年度末に至る事務経過を報告し満場一致之を承認せり  
右決議候也

この決議録は美濃紙十行野のものに立派な楷書で書かれ、これ以後のものは貸借対照表だけが保存され、大正九年からは事務的に簡素化され、複写紙を用いて書かれたものなどが大多数となつてゐる。

(注) 前原悠一郎氏の「桐生の今昔」に「大正八年度貸借対照表」として記載されているものは、この後のものようである。

## ◎ 敷地と庭

敷地は二代理事長となつた書上氏の所有地で当時は安楽土の竹藪が見わたせる一面の原地で、人家もあまりないような所であつたので、「駅から降りてまっすぐ来た所に竹藪が見えたのでは、何とも具合が悪い。それをかくすためにもこの土地に建物を建てた方がよい。」という意見もあつて決定したというのであるから(書上氏談)会館を建てるのにも、桐生の町の姿や発展の事を考えた先人の配慮には全く敬意を表さざるを得ない。(所感集の木村貞一氏の文参照)

さらに敷地については前原悠一郎氏も大変心配して、現在の会館所在地の外に現在の吉野屋前の「きの眼科」のある所を、私財を投じて購入し、どちらでもよいから使うようにと提供されたといふ。

さて会館は出来たものの庭が出来ていない。穴だらけの凹凸の激しかったものを当時の東京市公園課長をしていた井草氏に相談し、庭に木を植える事にした。大正九年四月十九日には桜の苗木五十本を植えたというが、それが現存していたならばすばらしい桜の名所が出現していたことであろうが、残念ながら今は一本も見当らない。その他

大正十年三月十八日

松十五本を前庭に

同 年五月九日

楠苗百本と十年成長のもの十本

同 年六月二十八日

弘道会から榎四本

桐生機械株式会社からポプラ外十種、百五十三本

佐中会から松三本

などの寄贈植木が記録されているが、現存するものはきわめて少数で、大多数は枯死した模様である。

正面玄関に向って左側に大きくそびえる楠。その他が目立つもので残余のものは明確ではない。

現在の前庭は昭和十六年六月十二日の理事会に報告された。

シ ュ ロ 十株

エ ッ カ ー 一株

竹 四 つ 目 垣 等

とあるそれらしく、後庭には桐葉軒が数本の果樹を寄附したとある。

この沢山の寄贈樹木の中に一つのエビソードがある。それは――

桐生機械から寄贈されたポプラの中に「巨大ポプラ」と称されるきわめて珍種の一本がまぎれこんでいたということである。

これを発見したのは農学博士中島吾一氏（昭和四十二年群馬大学教授を定年退官、上武大学教授となる。）で、当時群馬県立桐生女子高等学校教諭として着任間もない時であった。博士は会議が桐生倶楽部にあるというので出席したが、時間を聞きがちがえたらしく予定時間より大分前に倶楽部に着いて、きわめて不満であった。その気持のやり場もなく窓から外を眺めているうちにこの珍らしい一本に気がついたのである。すぐそれを群馬大学に持参し研究の結果「巨大ポプラ」である事がわかり、大学で苗木をそだて、遠く山口、新潟、山梨、福島、埼玉、茨城、栃木等の諸県にバルブ用原木として送られ、数万本の子孫を生んだというのである。しかし肝心の本家本元であるわが桐生倶楽部の原木は数年前に枯死してしまった。博士は遺伝学の研究者として著名であるが、

「何が仕合わせになるか、わからないのですよ。」としみじみ述べられた事がある。「巨大ポプラ」とは、成長率のきわめて巨大なことから来た名称であって、わが国植物界では珍種とされ、バルブ用原木として重用されている。一号室よりの裏庭にあったが、当時のものとして現存していたポプラも、昭和三十三年九月二十六日の二十二号台風で、もろくも倒れた。根元から二本にわかれ十メートルもあるうか、その割に根が浅かったものと見えて、無惨にもその残骸を横たえてしまった。これで当時のポプラも全滅したわけである。

## ① 桐 葉 軒

さて会館が出来てみると、内部の充実をはからねばならず、先ず食堂を設けることに就いて協議した。席上前原準一郎氏は次のような提案を行なった。

「食堂には料理場も付設したいが、倶楽部員だけを対象とするのでは、営業になるまいから、倶楽部員以外の人達のために街路から入り易い位置にレストランを併設し、両者の間に料理場を置いてはどうか。」

しかしこの案は実施にいたらなかったが、倶楽部ではテーブルによる本式の洋風食事がとれるようにしたいということには意見が一致していた。当時の桐生では牛鍋料理の赤城亭などが、客の求めに応じて座敷に洋風一品料理を運ぶ程度であったので一応意見の一致を見たのだが、倶楽部の直営事業とすることには問題があり、設備も経営も外部に委せる事とし、松島富三氏を社長とする株式会社桐葉軒が敷地内に創設され、倶楽部の食事は専ら同軒が引き受けることになった。そこで松島氏は、義兄の伊沢規一氏を同道、全国料理同盟理事三宅孤軒氏の紹介で、築地精養軒の専務を訪ねて助力を求め、食器類は一切同軒と同様のもの百二十人分を買い調べ、料理人と給仕人も同氏の斡旋で経験深い人を聘したのである。

洋食用の食器や会館内部の什器などは、購入方を福田常吉（宗空）氏に委ね、金子、前原（悠）両氏が同行上京して整えた。このようにして株式会社桐葉軒は桐生倶楽部構内の付属洋食料理店として、大正九年一月二十日開店の運びとなり、今日にいたった。

さてここで今までの桐生懇話会は正式にその姿を消すこととなり、大正九年二月十四日、新築さ

れた会館で開かれた懇和会の席上、この会を解散し、一切を桐生倶楽部に引継ぐことが議決され、桐生懇和会はその輝かしい十余年の幕を閉じたのである。

⑤ 整 頓 時 代

大正八年十二月二十四日付で永井源平氏を初代書記に採用、同九年九月十一日には電話（第七五番）が開通。倶楽部も軌道に乗った。（大正八年六月十三日付で電話特急架設申請をしている。）経営の費用は一切社員からの会費によらねばならないので大正九年二月から維持費の徴集を始めた。同年三月一日には小暮寛次氏講演会。四月十日には正門と両袖垣の工事を開始、四月十八日には前記桜苗木五十本の植付を行ない、九月二十九日には臨時社員総会を開いて

理事満期改選の件

を協議し、全員重任と決定した。十月九日の理事会では「専任理事七名選任の件」を可決、次の諸氏を選挙した。

前 原 悠一郎	前 原 良太郎	高 村 勝太郎
書上 文左衛門	前 原 準一郎	福 田 常 吉
金 子 竹太郎		

十二月四日には沢柳政太郎氏来館、十二月二十七日には構内電話四個設置、十二月三十日というのに専任理事会を開いて、定款並びに内規改正、会館各室の名称その他に就いて協議するという熱心ぶりであった。

門柱につけるための大理石看板を浅草の石田大理石工作所に発注したものが、二十八日に発送さ

れたという葉書があるので、門柱が完成したのはこの頃であったようだ。

会館は種々の会合に使用されたが、現代流行の結婚式場の利用が、当時すでに考えられ、現名誉社員大川英三氏がこの会館を使用して結婚式を挙げた、第一号であった。さらに社員生活の合理化運動の先陣として互礼午餐会が計画され、大正十年一月元日、前原準一郎氏の提唱による互礼午餐会が開かれることとなった。

この会の変形ともいべきものが、五十年後の今日桐生市に継承され、正月元日に市長以下有志が産文会館に集って新年会を催し、各地各様に行なわれる地区別新年会を開くことの重複と、時間及び費用の浪費を省こうとしているが、当時すでにこの種の新生活運動に先鞭をつけたことは、やはり桐生倶楽部の在り方を示すものとして興味あるものといえよう。

これに就いて前記前原氏は次のように述べている。

「正月元日には、多くの者が関係方面の年賀廻りに出かけて、ただ名刺をおいて来るか、留守宅の者に簡単な挨拶をするくらいで、お互いが親しく新春の祝詞を述べ合うことは少ない。この虚礼的儀礼もさることながら、お互いが一堂に会し新年を祝うのがはるかに有意義であると考え、クラブ員はその友人を案内してクラブに会することを企てた。

当クラブの前身である桐生懇話会でも年々一月十四日に新年宴会を開いていたが、正月ともなればいろいろな関係で、あちこちの料亭で開かれる新年宴会の数は数知れぬものであった。そこでクラブとしては、新時代に即する行き方が——と考えた結果、少なくとも桐生では始めての互礼午餐会を元日に開き、洋式の会食をすることにした。

最初にこの会の開かれたのは、私が初代常務理事になって間もない大正十年の一月元日であって

出席者は満員の盛況であった。

当時日本絹織の社員山下親純氏（慶応出身の極めて器用な人）の助力が得られて、万事好都合に運んだ。

桐葉軒も開業早々なので、初めに買い整えた食器なども揃っていて、魚用の銀メッキナイフやフォークなどがあったので、魚の料理を加え、次の鳥料理の皿には小さいながら七面鳥までも給仕が一々配って廻った。ところがそれが、どうした訳かメインテーブルから初めたので、最後になった右側の何人かは、足らなくなり、付合せの栗だけが配られたため、

『七面鳥は栗の味がする』

と言われ、気の毒でもあり、おかしくもありといった。とんでもない珍景を展開した。

酒類は会費その他の関係もあり用意されなかったが、和やかな楽しい会合であった。給仕人は経験を積んだ男であったが、六十人あまりを一人で扱ったので、あとで腕がひどく疲れたと言っていた。

この互礼午餐会は年々続いたが、境野理事長時代の昭和三十年頃から新年宴会となり、酒中心にかわって行ったのを淋しく眺めていたものである。」

ついで一月七日には社員とその家族のために音楽会が開かれるなど、着々と事業は進められて行った。

この年の三月十八日には秀友会から松十五本の寄贈があり、これを前庭に植えたり、四月一日には同年三月一日に実施された桐生市制施行祝賀会が開かれ、松田源治氏外多数の名士が来館し、同



月二日から三日にかけて挿花競技会を開いて社員とその家族を招待した。

四月二十一日には若槻礼次郎氏来館、五月九日には森宗作氏から楠苗百本、同十年成長のもの十本の寄贈があり、五月十四には「おとぎばなし会」を開いて東京日日新聞社の丸山義一氏を招き、五月二十一日には桐生積善会との共同主催で学術講演会を開き、椎尾弁匡氏が来館している。五月二十四日には御召秀友会寄附の正面庭園工事完成。五月二十五日には第一回学芸会を開いて次の講師を招いている。

添 田 敬一郎 労資協調会理事

小 林 鉄太郎 労資協調会労務課長・中央労働学院講師・法学士

西 田 博太郎 桐生高等工業学校長 工学博士

長 竹 信 次 右校教授 工学士

このように、ほとんど連日にわたる諸行事が開催されたのであるが、当時の会館の様相を前原準一郎氏は次のように記している。

「倶楽部の設立が第一次大戦の好景中であつたため、加盟の勧誘に応じたものが相当あり、大正九年二月から維持費の徴集を始めたが、それが思うように捗らない中に三月十五日に大ガラが起り、ますます困難となつた。(二四二頁「参考」参照)

その前に建物は完成し、内部の調度什器類は、金子・前原両氏の外に故福田常吉氏が出京して比較的豊かなものを調えたが、物価騰貴のため資金が欠乏し、屋外には殆んど手がとどかず、庭園どころでなく壁土を取った跡がそのまま通路さえも整わず、随所が凹凸だらけであつた。」

しかし事業は順調に展開、七月三十一日には倶楽部徽章の決定、八月十六日には三越から緞帳の寄贈があってこれを取付けた。(口絵参照)これについて前原準一郎氏は次のように語っている。

「大広間に組立式ステージを設けたので、余興でもするときには緞帳が欲しいと言う意見があった私は近くの三越出張所の所長松沢盛一氏と親しくしていたので、氏に寄附を頼んだところ、早速本店と打合せて引受けてくれた。

それにしても緞帳には、倶楽部の紋章を現わしたいので、急いで紋章を定めることが必要となった。たまたま当地に凶案業者の会合があったので、その会員に凶案を委嘱した処、幾つかは集ったが、結局はそのとき東京から来た某氏の案が、特に優れていたのを採用することにしたそれは下に三つの大円を、上にはやや小さい円を三つ画いて桐の花を現わしたものであったが、紋章としては偶数の六よりも奇数の七の方がよいと気付いて、私が中央に小円を一つ加えることにして、決定したのが現行のものである。

この紋章を中央に縫取りした緞帳を三越本店で調製し、係員が出張して取付けたのが大正十年八月十六日であった。その後三年ほど経過したとき、色があせたというので三越では新しいものと取り替えてくれた。それが昨年夏までそのまま使用されていた。」

(注) 昨年↓昭和二十二年

十月八日には文学博士椎尾弁匡氏講演。(二度目の来館)十月二十三日には東京朝日新聞編集長・衆議院議員安藤正純氏を招待して晩餐会。十一月十二日には桐生倶楽部概要とクラブ絵葉書の発行。数えあげるにいとまない程の事業の連続は大正十五年頃まで続いている。

大正十四年七月十日に講演会があり

群馬県知事 牛塚 虎太郎

群馬県地方課長 島田 昌福

群馬県官房主事 能勢 某

群馬県社会課長 中村 元治

の諸氏が講師として出席した。

(注) 社会課長中村氏は倶楽部の「月次会誌」によれば社会課属となっている。

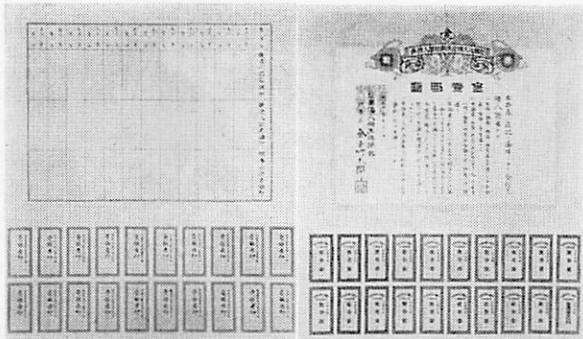
同年十一月十三日には

「欧州巡礼を回想して」と題して陸軍大佐樋口鉄太郎氏の講演があり、これと前後して倶楽部史上大事業として記録さるべき大出版「郷土史」の基礎となった岡部福蔵氏の連続講演が始められたのである。この講演は大正十五年三月二十二日第八回をもって終了。昭和三年五月一日の理事会で、御大典記念事業として「桐生郷土史」の出版を決定、十月三日に約五百部を配本している。(詳細は後出) 樋口大佐の書簡が保存されている。

(注) 書名は「桐生地方史」となっている。

この間金子初代理事長退任。大正十四年一月三十日の社員総会で二代理事長として書上文左衛門氏決定。三月十三日の理事会では、倶楽部借入金利子寄附依頼の件を決議した。

ここで当時の倶楽部の経済事情に就いて述べることにする。



借入証券 (右が表、左は裏)

## 社債の募集と定款改正

前記前原準一郎氏手記の中にもあるように、「倶楽部の設立が第一次大戦の好況中であつたため加盟の勧誘に応じたものが相当あり、大正九年二月から維持費の徴集を始めたが、それが思うように捗らない中に三月十五日に大ガラが起りますます困難となつた」ので、「倶楽部の建物は完成したが、屋外には殆ど手がつかず、庭園などというどころでなく壁土を取つた跡がそのまま通路さえも整わず、随所が凹凸だらけであつたといふ。

そこで大正九年十二月十六日の専任理事会で前原準一郎氏は常務理事として①会員の整理 ②構内の整備 ③日常の運営などに当ることとなり、年末ではあつたが早速会員の整理に着手、毎日のように申込者を歴訪して会員の勧誘につとめた。次の年の六月末までかかつて一応整理がつき、脱退者も十余名あつたが、何とか建物の内外も一応調整されるまでになつた。前原準一郎氏は

「私が人に寄附を仰いだのは、これが初めてであつた。」

と語つたが、会員中から樹木の寄附を求めて構内の庭を整備した。

このようにして一応形式的には整つたが、さてこれに要した費用の問題で、大正十年七月二十七日に開かれた理事会で、金子理事長外七名の出席の下に次の決議がなされた。

(1)、借入金貳万五千円借替の件

(2)、借入金実行委員を左記十名に委嘱する。

新井 錠三 岩沢 善助 岩崎 誠蔵 福田 兼吉 原田与左衛門  
 齋藤 正七郎 前原 準一郎 書上文左衛門 高村 勝太郎 金子 竹太郎

ついで八月二十七日、九月二十九日の委員会を経て、十月十五日に東海銀行からの借入金貳万五千円の内、老万八千円を、十一月五日には残額七千円を返済して完済となった。

この間前原常務理事はこの返済のため、会員から社債を募集するために東奔西走して遂に大正十年十月一日、社債券発行に成功した。一口金百円とし総額貳万五千円であった。利子は一口につき月一円とし、十年十二月から二十年六月まで支払うこととし、その一部を維持費に振替えたりして元金は毎年抽選で数口ずつ返済した。

(注) 当時のいろいろな資料が現存し、社債返還に用いた抽選用ボール紙製番号札が、本箱の中に整理保管されてい

る。大正十四年十二月までで、この社債利子の支払と元金の償還は停止され、さらに昭和十一年八月頃には、債権者に対し社債券の寄附を求めた。

### 定 款 改 正 問 題

大正十一年一月十四日の理事会に、前原準一郎氏から定款改正に就いての提案があった。前原常

務理事は設立許可申請当時の定款は、改正を要する点が少なくないとし、当時の東海銀行（後に第一銀行）支配人新井錠三氏の紹介で、同行の顧問弁護士三宅碩夫氏の意見を求めたりして立案したものであった。

一月二十二日、同三十一日、二月七日の理事会を経て二月二十二日の定款改正委員会での定款改正案は可決された。

前原常務理事は中国出張を理由に常務理事辞任を申出、三月訪中、四月帰国。四月十二日には理事会をかねて前原準一郎氏招待会を開いてその席上県から返戻された付箋つき定款改正案につき協議、訂正進達方を理事長に一任した。九月二十日には、森宗作・書上文左衛門氏らが倶楽部に集り前原準一郎氏を招いて昼食をともしながら、同氏に対し理事長就任の懇望があった。これに対し前原氏は「私は元々の流儀として、すべてのことに「長」となることを避けている。御承知のように、私の創設した桐生機械でさえも、代表取締役であつて社長とは言わないのであるから、何としても理事長になることは遠慮したい。」と固辞したので、遂に森翁も憤然として「それでは、私もあなたの会社の相談役を辞任しよう。」

と申出る一幕もあつたが、結局前原理事長の出現は見られず、金子・書上と理事長は続けられ、前原氏は外部から特別な協力をすることになった。

（注）定款改正は、その後なかなか許可にならず、金子理事長が調べた結果、改正の必要が説明されていないためとわかり、理由書の作製することとなり、折りよく居あわせた大川弁護士（大正十四年一月三十日書上理事長就任と同時に新任された大川英三理事の実兄）に依頼した。しかしその結果はきわめて明確を欠いている。前原準一郎氏の手記によれば

「昭和二年から三年のあるとき、臨時理事会が開かれて、定款修正案が付議された。前記（大川弁護士依頼）の改正理由書とは別に、定款の全面的修正案であり、その中には従来の「特別会員」を準会員と改めることなど、当倶楽部設立の根本精神に反する点もあり、私には理解出来なかった。その後の臨時総会でも賛成し兼ねたので早退したため、出席者は極めて少数となったようであるが、その後は私の知らないことである。」

ということでは、その後のことははっきりしないが、そのまま改正にはならなかった。

定款改正に就いては「社団法人桐生倶楽部記録」には

三宅弁護士の見

とあり、「同議事録」には

草案者大川貞三氏より改正原案の説明があり、改正定款第五章社員の部で長時間論議あり、同第十一條の金額五〇〇円を三〇〇円と改め可決した。

とあるだけで、その後の記録はなく、関係書類も殆んど遺っていない。

（注）参考資料として次にその全文を掲げることにした。

社団法人 桐生倶楽部 定款

第一章 名 称

第一条 本倶楽部は社団法人桐生倶楽部と称す

第二章 目 的

第二条 本倶楽部は社員相互の知識を交換し親睦を敦ふし公益に関する事業を攻究し之か遂行を期するを以て目的とする

第三条 本倶楽部は前条の目的を達する為め左の事業を行なう

一、学術講演会談話会を開くこと

二、名士を招待し又は其談話を聴取すること

三、慈善的演芸会を催すこと

四、図書を備へて縦覧に供すること

五、其他本俱樂部の目的を達するに必要な事項

第四条 本俱樂部の事業を行う方法に付ては理事会の決議を以て別に之を定む

### 第三章 事務所

第五条 本俱樂部は事務所を群馬県桐生町大字桐生三百三十四番地に置く

### 第四章 資産

第六条 本俱樂部の資産は寄附金品社員の会費事業及び財産より生ずる収入を以て成る

第七条 本俱樂部の資産は理事之を管理し国債証券又は確実なる有価証券を買入れ若しくは銀行に預金して其利殖を図るものとす

第八条 本俱樂部の経費の經常費は資産より生ずる収益及び資産中の会費並に費途指定の寄附金を以て支弁す

但し臨時に要する費用は理事会の決議を以て之を定む

### 第五章 社員

第九条 本俱樂部の社員の種類は左の如し

正社員

特別社員

名誉社員

第十条 本俱樂部の事業を襄賛し金品を寄附したるものは理事会の決議を経て賛助員となす

第十一条 正社員たらんと欲するものは社員二名以上の紹介を以て申込むべし

前項の場合に於て其許否は理事会の決議によりて之を定む

第十二条 正社員は理事会に於て別に定むる金額を寄附するものとす

但し一時に前納せんとするものは理事会の決議により別に其額を定む



第十三条 特別社員及び名譽社員は学識名望あるもの若しくは本倶楽部の為め特に尽力せられたるものより理事会に於て之を推薦す

第十四条 正社員及び特別社員は会費として理事会に於て決定せる金額を毎月納付すべきものとす

第十五条 社員にして本倶楽部の名譽を汚し又は其義務を履行せざるものは總會の決議を以て之を除名することを得

第十六条 社員の既納金は退社又は除名其他如何なる場合に於ても之を返還せざるものとす

#### 第六章 役員

第十七条 本倶楽部に理事拾五名を置く

第十八条 理事中より正副理事長各一名を互選す理事長は本倶楽部を代表し一切の事務を処理するものとす

理事長に事故あるときは副理事長代つて事務を行ふものとす

第十九条 理事は社員總會に於て選挙し得票の多数を以て当選者と定む

若し其行為に不都合あるか又は其任務に堪へずと認むるときは社員總會に於て之を解任することを得

第二十条 理事は名譽職とす

第二十一条 理事の任期は二ヶ年とす但し再選することを得

補欠の任期は前任者の残任期に止む

欠員あるも事務に差支なき限りは改任期迄其選挙を延期することを得

第二十二条 本倶楽部に必要なる職員は理事長之を任免す

#### 第七章 總會及理事会

第二十三条 本倶楽部は毎年一月社員總會を開く但し左の場合に於ては臨時總會を開くものとす

一、理事長に於て必要と認めたるとき

一、社員五分の一以上より會議の目的たる事項を示して請求ありたるとき

總會の決議は社員三分の一以上出席の上過半数に依り之を決議す但し招集再回の場合には出席者定数に充たすと雖も開会し其過半数を以て之を決議するものとす

第二十四条 理事会は必要に応じ理事長之を招集し理事三分の一出席の上過半数を以て之を決定す

第八章 会 計

第二十五条 本倶楽部の会計年度は毎年一月一日に始まり十二月三十一日に終る

第二十六条 本倶楽部の収支決算は社員總會の承諾を経るものとす

附 則

第二十七条 本則に定めなきものにして本倶楽部の目的を実施するに付必要なる事項は理事会の決議を経て之を行ふ

☆以下は創設当初本文に附記されたものである

第二十八条 第十四条の毎月の会費の徴収は会館建築落成迄之を行はざるものとす

第二十九条 本倶楽部成立前理事就職に至る迄常任委員五名を置き理事に関する一切の諸務を掌らしむ

大正六年九月十五日

当初理事の就職に至る迄は桐生倶楽部設立常任委員五名を置き理事と同一の職務を行うことに申請人等に於て決議したり其人名左の如し

前原良太郎 前原悠一郎 金子竹太郎 高村勝太郎 前原準一郎

★参 考 本篇六九頁記載の定款問題の大川弁護士案とおぼしきものが謄写刷でのこされているのでその一部を次に抜き書きした。

社 団 桐 生 倶 楽 部 定 款  
法 人

第一章 名 称

第一条 本倶楽部は社団法人桐生倶楽部と称す

第二章 目 的

第二条 本倶楽部は社員相互の親交を敦ふし以て各自の品性と知能の向上揚達を図り進んで公益に関する事業の功究をなし之が成果の実現を期するを目的とす

第三条 本倶楽部は前条の目的を達する為め左の事業を行ふ

- 一、会館を建設し社員の集会其他の会合に使用すること
  - 二、談話会又は講演会を開きて社員各自の意見を交換し又は研究の結果を発表すること
  - 三、名士を招待し談話会又は講演会を開くこと
  - 四、演芸会其他之に類する会合を催し高尚なる趣味の普及を図ること
  - 五、図書を具へ閲覧に供すること
- 其他本倶楽部の目的を遂行するに必要な事項

### 第三章 事務所

第四条 本倶楽部の事務所を群馬県桐生市大字安楽土二百七十番地に置く

### 第四章 資産

第五条 本倶楽部の資産は寄附金品社員の拠出する加盟金並に維持費、倶楽部の事業及財産より生ずる収入其他の諸収入より成る

第六条 本倶楽部の経常費は資産より生ずる収益及社員の納付する維持費並に使途指定の寄附金を以て之を支弁す

但し臨時に要する費用は評議会の決議を以て之を定む

### 第五章 社員

第七条 本倶楽部の社員の種類は左の如し

- 正社員
- 準社員
- 特別社員
- 名誉社員

第八条 成年以上の男子又は法人にして社員二名以上の紹介により加盟を申込みたる者は理事会の決議を経て正社員となす

第九条 正社員として加盟の承認を得たる者は一カ月以内に加盟金として金壹百円以上を納附することを

要す

但し期間内に其五分の一以上を納付し残額は其後五カ月以内に分納することを得

第十条 第八条の申込をなしたる者特別の事情あるときは理事会の決議により加盟金を免除し準社員となすことを得

第十一条 本倶楽部の事業を支援し一時若くは数回に金參百円以上の金円物件を寄附したるものは評議員会の決議を以て特別社員に推薦することを得

第十二条 学識名望ある者にして特に本倶楽部に功勞ある者は社員總會の決議により名譽社員に推薦す

第十三条 正社員及準社員は本倶楽部の維持費を納付することを要す  
但し其金額は社員總會に於て之を定む

第十四条 正社員又は準社員にして海外旅行若くは久しきに渉る疾病其他の事故あるときは評議員会の決議により其期間中維持費を免除することあるべし

第十五条 社員たる資格は左の事由により之を喪失す

一、退社の申出

二、死亡又は法人の解散

三、破産

四、禁治産及準禁治産

五、除名

第十六条 社員にして本倶楽部の名譽を汚し又は其義務を履行せざる者は總會の決議を以て除名することを  
を得

第十七条 社員の既納金は退社又は除名其他如何なる場合に於ても返還せざるものとす

#### 第六章 役員

第十八条 本倶楽部に左の役員を置く

一、理事長 専名

二、理事 貳名

三、監 事 貳名

四、評議員 拾五名

第十九条 役員は名譽職として其任期を貳カ年とす  
但し再選することを妨げず

両者を比較してみると大分変更されている個所があるが、結局この大川案は「案」として終り、従来のものが使用され今日にいたっている。

大正十四年一月三十日の社員総会で、二代理事長として書上文左衛門氏が選ばれた事は前記したが、それから大正十五年九月二十八日までの一年八カ月は同氏によって運営された。

### 名士しきりに来桐

書上時代は短かったが、その短期間の中にも、来桐した名士は殆んど必ずといってよい程この会館を利用した。

大正十四年三月十五日の落合慶四郎氏を筆頭に、七月十八日には田中竜夫工学博士、同月二十八日には子爵前田利定、八月十一日には宮部乙彦、九月二十三日には尾崎行雄、大正十五年一月十六日には片岡弓八、三月十六日には弓道の大家阿波見鳳の各氏が来館している。講演会も前記のように多彩なものがあり、大正十五年三月九日には太田代理学博士の学位獲得祝賀会となかなかの多事であり、名士の来桐はこれからかなりの期間続くのである。

書上氏は一ツ橋大学に学び、当時すでにピアノなどをたしなむ近代的文化人で

「今の小さな五つ六つの子供が、簡単にソナチネなどを弾くと、汗をかいてやった昔のピアノ時代を思い出して、全くながかりしますよ。」

と述懐する。

倶楽部会館新築の時なども、清水氏設計の二つの図面が提示されて、理事諸氏の間で討議されたが、現建築の設計図の方が他方よりも断然すぐれており、

「嫁の見合いに、美人の方を見たあとで、不美人と見合いたって、誰れが不美人を貰うものか……」

と言った諧謔もあり、

「どうせ足りない予算なら、裸になって出してもよいから、よい方の設計でやろうじゃないか。」と大いに張り切ったのも書上氏であったという。

大正十五年二月十二日の理事会で「倶楽部北側に道路新設」に就いての協議があり、三月二十日に「倶楽部所有地北側部分を新設道路敷地」として市及び内務省へ寄附登記を行ない、その残地を上田信次郎、前原卓太郎、斎藤芳雄、片山文之助の諸氏に売買登記をし、四月十日の理事会では、御大典記念事業として前記「桐生地方史」出版を定め、五月一日に次の出版委員十名を選出した。

岡部 福 蔵 大川 英 三 金子 竹太郎

田村 春 莊 野口 周 善 真尾 源一郎

藤江 守四郎 青木 專 治 前原 寛 三

斎藤 武 助

五月二十二日には予約募集開始、十月三日に出版配本をしたこの「桐生地方史」は上下二巻からなり（合本一冊になっている）岡部福蔵氏の研究になるもので、当時の菊版（現在のA5版）五百十一頁に及ぶもので、発行部数は約五百冊であった。

御大典記念にふさわしく表紙の布を黄櫨染とし、両毛織で特別に織らせたものであった。（斎藤長平氏談）

（注）この「桐生地方史」は倶楽部に現存するもの僅かに一部。今は貴重な文献の一つということが出来よう

### 男の息の抜き所

前原準一郎氏は「倶楽部」の在り方に対し、外国での在り方を説明して次のように言う。

「外国ではオフィス帰りなど、気楽に立寄って休んで帰えるのだから、紳士の「いいこの場」であり「男の息の抜き所」であるべきだ。」（大川英三氏なども同意見）

たしかに当時あれだけの設備を誇ったのだから、紳士の「いいこの場」としては立派なものであったにちがいない。又同氏はこうも言っている。

「倶楽部は私たちのためのものであって、それを貸すのは私たちの好意によるものだから①使用目的 ②集る人たちは当然はつきりさせなければいけない。」

だから集会に芸者を入れることの可否に就いても論議があり、金木屋女将松島英さんなどにも相当地な思い出ばなしがあつたが、「宴席に侍するものと舞台に立つものとははつきり区別すべきだ。

会館は部屋を貸すが料亭とは違うのだから、その区別を明確にする必要がある。」

という前原氏などの主張があつて、結局芸者の入館は認められたが、入る場合はエプロンを着用させた。

和服着用者のために貸袴を用意したり、二階にピアノを置いたり、食事に純洋風のものをとるといった「紳士」としての教養をたかめるための努力が払われた。

靴に就いても問題があつた。最初靴は脱いで入館させたが、当時外遊から帰ったばかりの青木専治氏は

「洋館に靴を脱いであがるというテはない。」といつので、論議のすえ、結局靴のまま入館することになった。(斎藤長平氏談)

これに対して前原悠・準両氏は

「靴は最初から脱がないで入館していたようだ。」

といふことであつた。斎藤・大川氏等の記憶では、斎藤・大川時代までは脱がせていたといふ。

大正十年十月頃開かれた月例会で、当時の売っ子、小林一郎氏を招いての講演会で、当時は珍らしいとされていたサンドイッチを昼食に用意し、それが足りないで、そばを追加注文したという話や、東大教授加茂博士を招いて新しい蒸気機関の講演を依頼したところ、外人同道で来桐し通訳つきの講演で、これ又当時の人々に大変珍らしがられたといふ。今では何でもない事が、当時としては新しく珍らしい事だらけの行事が、この倶楽部を中心にいろいろと繰広げられ、六十才を超える長老から、三十代新進気鋭の壮年にいたる大巾な年令層の社員が、和氣あいあいの中その発展を楽しんだのである。

(注) パンは桐生にはあまり適当なものがなく、わざわざ古河から取り寄せていたといふ。(大川英三氏談)



## 紳士道修業

大正十五年九月二十八日の理事会で齋藤武助氏（後に長平と改名）が理事長に互選され、常務理事として青木專治、大川英三の両氏が選ばれた。十月三日には中島徳蔵、同月十日には町田忠治、生方大吉、井本常作など当時政界の大物諸氏が続々と来桐。何れもこの「桐生の茶間」で休息した。

十一月三日の社員総会では次の事を決議した。

①倶楽部東側に新設道路が出来るにつき、約六拾坪を残して南北に貫通する巾四間、長さ約二十五間の道路敷地を無償寄附のこと。

②但しその代償として、当倶楽部東側に沿うて通ずる市道を、倶楽部に無償払下げを懇請すること。

③尚新道路工事に伴い、倶楽部東側石垣は改修原形に復すること。

三代理事長齋藤長平氏（前名武助―公式書類以外には今後長平と呼ぶ）は、大正十二年九月一日の関東大震災火災の時、鮮人虐殺の惨状を見せつけられ、鮮人の不遇見るに忍びずとして同志を募り「結社赤城社」を創設し、基金として一人金壹千円也を拠出してこれを郵便預金とし、青木專治、大川英三氏らとともに

「われらは鮮人にその罪を謝すべきである。」と主張したという熱血漢であったが、残念ながら

あとに従うものなく、雄図むなくついで、当時の預金通帳のみが現存しているというエピソードの持主である。

さてこの「桐生の茶の間」では色々思い切ったことが行なわれたが、その先陣を承ったのが前原準一郎氏であった。氏は人も知る「几帳面居士」で、その研究心の旺盛さと実行力の強さにいたっては比肩するものがない幾何学的実践家といわれたのだから、そのやり方にいたってはトコトンまでやるという「トコトン方式」であった。しかもそれは「ひとりわが道を行く」いわゆる独走型で、全く驚くべき強い信念と情熱を傾けた行動であった。これを支持したのが斎藤、大川氏などの当時の若手組で、これが倶楽部の気品を高め、今日の倶楽部の基礎を作りあげた原動力であったのだが、特に金子・書上両理事長時代には殆んど一切を前原常務理事に一任した型で、書上氏の如きは晩年（創立四十周年記念座談会での発言）

「事実上の理事長を前原さんにやって頂くという条件で就任したので、すべてを前原さんに聞いて下さい。あの人程の実行家はいませんよ。」  
と言った絶讃ぶりであった。

前原氏は倶楽部を「紳士道修業の場」とし「紳士の社交場」とし、前記のような見解から着々それを実行に移した。すなわち「月次会」を作って毎月の会合を開き、倶楽部員であるなしにかかわらず、桐生市にある官公署、学校、銀行などの代表者が離着任の場合、又特別に榮進された際には必ずこれを招待するにしたり、新春を寿ぐために「五礼午餐会」を開いたり大広間の組立式ステージとその緞帳、紋章の制定、社債の問題など倶楽部発展のために限りない努力を払ったのである。

紳士道修業の一コマとして、洋食作法に就いての逸話を次に述べよう。

洋食器一五〇人分。ナフキンは紋章入り両毛整織特製の麻生地。二階の大広間にズラリと並んでさて御馳走は――

メニューに曰く

「仔牛酒湖に遊ぶ」

なんと、これは肉のブドウ酒煮の訳語である。メニューには、ひとつひとつに使用すべきフォークとナイフが指示してある。

「紳士をブジョクしおる」と大いに憤慨した御仁もあつたそうだが、当時の倶楽部員は「すべての桐生文化を指導するものは桐生倶楽部である。」という大きなスローガンの下に、行政から離れた一切の新しい試みは倶楽部から――という意気込みであつたのだから、社員の選考なども敢重を極め、倶楽部社員にあらざれば文化人にあらずぐらいの気概を持つていた。(大川英三氏談) 当時齋藤氏三十代であり、大川氏はより若かつた。救世軍会堂建設に尽力して現在の会堂を建設したり米人の太平洋洋横断飛行成功に感激して、集つて祝盃を挙げたり、商工会議所の必要を力説して大川英三氏が「商工会議所創設趣意書」の草案を書いて、飯塚貞一氏の名で檄をとばしたり(その時の草案は今は大川氏の手元にもなくなつてしまつたと同氏は残念がっていた。)したというのである。こうしたことが次から次へ行なわれた当時であつてみれば、洋食作法も「指導」するという立場であつたであろうから当然の事であり、又そうせねばならない当時の桐生の町の実情であつたのではなからうか。

しかし特記すべきは前記メニューの“名文句”であって、こうした幾つかの“名文句”が斎藤・大川氏らによって作り出されたというのであるから、如何に当時の若手社員諸氏が、その各自の持つ学識才能をフルに活用して倶楽部を楽しんだかが想像されるのである。前記前原準一郎氏の記録にも出て来た七面鳥と栗の話は、クリスマス祭の時の話であったと斎藤氏は言う。大川氏はこのクリスマス祭も、正式パーティーの在り方を教えるものとして、第一部に厳肅な教会的儀式を中心に讃美歌をうたい敬虔な祈りを捧げ、第二部に楽しむためのパーティーを開き“紳士道”の在り方を示す事に注意を払ったという。カルピスが売り出された頃には

「西洋甘酒じゃないか。」

と驚きの眼を見張ったというのだから、洋食会には着席した椅子をテーブルに引きつけるように押して廻ったり、ボーイを前橋から呼んで給仕をさせたり、とにかく大変な騒ぎであった。その時のボーイで当時二十一才の佐通氏は現在菱町に料亭を経営している。

こうして教養面を高める一方、情操面でも大いに活躍をして音楽会などもしばしば開き、社員の家族とともに楽しんだ。

宮中音楽部を呼んだこともある。早慶の音楽部に来てもらったこともある。社員の中でマンドリンググループを作って、大いにかき鳴らした。有名な郷土の大詩人萩原朔太郎もはるる前橋からはせ参じ、ギターの伴奏をやったこともしばしばであった。

第一次大戦中、地中海で犠牲にされた八坂丸引揚に活躍して世界の話題をさらった片岡弓八氏に“引揚金貨”持参で講演してもらい、大いに人気を博したのもこの頃のことであった。片岡氏は「桐生倶楽部四十年誌」（原稿だけで出版を見ずに終った）編集中の昭和三十三年十月一日に永眠

した。

当時の桐生高等工業学校には沢山の留学生がおり、毎年卒業して帰国する数も相当なものがあつたので、国際親善のためにもこうした人たちと交歓することは有意義であるとし卒業した留学生を招待して食事を共にし、大いに語りあつた。これが縁となつて私宅に遊びに来るものも出来るという誠に大成功を取めたが、招待留学生の数は約二十名、一堂に会した時斎藤理事長は情熱を傾けて次のような挨拶をした。

「私たちは互いに同色のアジア人だ。アジアは一つでなければならぬ。帰国されてからも、日本を忘れず桐生を忘れず大いに共に手を握つてやうに行きたい。そこで今夕は桐生での仕上げのもりで、この晩餐会を開いた。心行くまで飲を尽し、楽しんでもらいたい。」

なみいる留学生たちは大いに感激して将来を約束し合つた。フィリッピン人を筆頭に、タイ・ビルマ・インド・中国などからの人たちが多かつた。この会合は学校側からも大きな支持を受けその後数回続けて開かれた。開会期日のおくれた時などは当時の校長西田博士から督促されたという程であつた。

こうした紳士道修業場にも型破りの事件もあつた。

飯塚代議士の演説会に来桐した若槻礼次郎氏は有名な酒呑みで、この人も勿論来館した。オープンカーで堂々と乗り込んだが、ここで一杯飲むことは予定していなかつた。ところがやはり一杯ということになつて、時間ギリギリまで飲み続け、さらに退館しようとする若槻氏を車に乗つてからもこれを追つて彦部駒雄氏などが盃を持って酒を注ぎ、若槻氏もまたそれを受けて飲むという一幕もあつたというのであるから、当時の「紳士」なるものも仲々変化に富んだものと言ふべきである。

## 受 難 時 代

う。

戦争はすべてのものに受難をもたらす。わが桐生倶楽部も不思議なしに受難の時代を迎えた。しかも「社交機関」などというものは、当時の軍部の考えからしてみれば、全くの有閑施設であり無用の長物にちがひなかった。金属類の供出を求められ、豪華なシャンデリヤからドアのノブ、はてはストープに用いた火箸にまで及ぶにいたって、さすがの倶楽部当局も軍部への抵抗を感ぜずには居られなかった。しかし軍部に

「上流階層の人たちが出入する、こうした所こそ、進んで籠を示すべきである。」  
ときめつけられてみると、これには何とも返えず言葉がなかった。

供出は仕方がないとしても、その後倶楽部に加えられた圧力は日に増し強力なものとなり、倶楽部の接収という危機が遂に到来した。当時軍はロータリ倶楽部などに対しても大きな弾圧を加えていたので、当時の文化人の殆んどは軍からマークされるといふ状態であった。その間にあって理事長齋藤長平氏は断固軍に対する抵抗を決意した。

当時の桐生は比較的軍の施設も少なかったが、被服廠関係の一部が設けられるに及んで、遂に倶楽部会館の接収という事になったのである。交渉に來た小林主計中尉（大阪の有名おこし店の息子で、後に大和紡社長加藤正人氏の婿となる）は温厚な紳士で、応待に出た齋藤長平理事長の軍を恐れない拒否の態度に大きな感動を示し、接収をあきらめて桐生図書館に変更したのであった。

この事件は終戦二年前頃であったが、こうした状態であるから当然倶楽部の行事も衰微の一途を辿り、月次会なども開くには開いたが流会が多く、活動はほとんど停止してしまった。

しかし、日米交渉が始まって、野村・ハル会談が行なわれた当時の昭和十六年六月十二日の理事會記録によれば出席理事七名によって次のような事が議決され、それが実行されたようである。

①貸室人員改正の件

②ペンキ塗替及び器具手入の件

③雇員増員の件

④庭園模様替報告

となっているのだから、当時まだ余裕綽々たるものがあつたようだ。

十二月二十七日の理事会では火災保険を五万円から拾万円に引上げているが、戦局不利となつたミッドウェー海戦のあつた、十七年九月二十五日の記録にも会館修繕の件があり、学徒出陣の始まつた十八年十二月二十四日正午の會議では

「年始は時局柄例年行なっている互礼會を廢することに決定」した。サイパンが陥落して東条内閣が倒れた後の昭和十九年八月五日の記録は

①中島飛行機KK小泉製作所

桐生久方工場長 長門 春松

②沖電気株式会社桐生工場長

木戸 栄治

③帝国潤滑油工業KK

桐生工場長 伊沢弘一

等各氏の新社を認め、同時に桐生市長広瀬勝滋氏の入社を承認している。広瀬市長は陸軍少将であったのだから、戦時態勢の盛り上りを示したものである。さらに九月二十八日の理事会では、次の諸氏の入社を認めて、益々戦時色濃厚の度を加えている。

①大日本機械工業KK桐生工場長

畑 義博

②岩崎通信機KK桐生工場長

花 桐逸策

③第二精工舎桐生工場長

富 樫千春

以上何れも軍需工場の桐生進出にともなうものであった。これと同時に桐生郵便局長時山角平氏の申出により、「非常対策としての場合本館全部借用方懇請」のことが記録され、愈々桐生も臨戦体制に入った。

昭和二十年。この年には本土決戦作戦大綱が決定され、米軍ルソン島上陸。硫黄島の日本軍が玉砕した二月には、東亜航空・小倉製作所・田辺航空等の疎開工場が入社し、桐生に集った軍需工場の殆んどが顔を揃えた。

二月二十七日の理事会は

時局愈々緊迫し重要工業方面並びに官庁等の当市に疎開する者頻々たる情況にて、当倶楽部会館に借用申込殺到の状況故、この際倶楽部事業の運行に支障なき限り情勢に即応する事を協議した



る結果、群馬県商工経済会桐生支部に階下の一部を貸与し、其他の室は桐生市と経済会並びに当倶楽部の集會に充当する方針

を決定した。当時東京空襲は激烈の度を加えていた。

ポツダム宣言發表二日後の七月二十八日には桐葉軒も中島飛行機吾妻工場に貸与される事になった。

八月六日広島に、八月九日には長崎に原爆投下。かくして戦況は日日不利の度を加え、遂に終戦に迫られたのである。

終戦後の倶楽部活動は極端に低調化し、昭和二十一年一月三十日の定時社員總會の如きは、総社員百三十七名中

出席者 九名

委任状 四十六通

という有様であった。

しかし終戦の二十年九月十日の理事会では「米國進駐軍、倶楽部使用申出ありたる場合、如何なる方法を取るべきか。」

に就いて協議

「その場合は、理事会を開いて改めて協議決定すること。」

などをきめて、混乱の中にも倶楽部の態度に就いては色々な考慮が払われたが、その後の理事会は流會が多く、この年九月三十日には理事改選のための總會が開かれた。この時は前記總會よりも社

員総数も百五十名と多く出席者も委任状もわずかながら多かったのである。(出席十一名、委任状七十二通)

こうした中で、やはり敗戦国の悲哀は訪れた。中華民國居留民団は、戦勝国として強引に会館使用の申入れをして来たのである。

斎藤理事長は断固これを拒否したので、民団は止むなく中華料理店「富士」の楼上に落つくの止むなきにいたった。

この事あって倶楽部が今日の命脈を保ったものとも考えられる。もし民団の手に落ちていたならば、最悪の場合、今日の「桐生倶楽部」は存在していなかったかも知れないからである。

同年九月二日にはミズリー号上で降伏文書に調印。戦犯容疑者第一次指令があるという動きの中で八日理事会を開いて、会館東方物置わきに消防第六分団火の見建設のための土地借用申入れを承認している。

おなじ年の十月三日には、弓道場寄附受入の件を承認

(注) 弓道場は桐生弘友会(代表者小林利平氏)が場所を借りて建てたもので、桐生倶楽部社員も自由に使用してよいという条件のものであった。ところが社員には殆んど使用者がなく、法的に登記はしていなかったが、十数年間倶楽部が納税していた。杉皮葺平家の矢場がついていたが、後年立ちぐされてなくなってしまった。

弓道場内には種々の器具がおいてあったので、その管理のために留守番をおいてあった。それが後年又立退きなどで問題の種をまいたことなど後記の通りである。

戦時中入居した桐生商工会議所は五月十三日に織物会館に移転、六月にその移転あとを改装、卓

八脚、椅子三十二脚を新調。桐生製材請負で玄関、天井壁、便所タイル張等個増設などの工事を行った。

## 桐生の客間

最初にも書いたが、「桐生の茶の間」を誇った倶楽部の会館は、同時に「桐生の客間」でもあった。前記若槻氏の話にも見るように、桐生を訪れた多くの名士はほとんど言うてよい程ここを訪れここで食事し、ここで語り、ここで休息した。その署名は二冊の「芳名録」に遺され、その数五百を超え、うち四十数名が第三国人である。

最初の署名者は当時の帝國教育会長として令名の高かった沢柳政太郎氏で、「芳名録」の題字は同氏の筆であり、二冊目の題字は藤沼庄平氏（昭和十年九月二十二日）の筆である。大正九年十二月四日に来桐した沢柳政太郎氏を迎えた当時の常務理事前原準一郎氏がこの「芳名録」を思いついた。沢柳氏は山田郡教育会の招きに応じて来桐したもので、前原理事が前橋中学在校当時の校長であった関係から、関係者十数名を招いて晩餐をとにした時の記念であった。

大正十年四月一日には、当時の大政治家として著名であった松田源治氏を筆頭に、武藤金吉代議士ら数人が来館、中には清水留三郎氏の名も見えている。同月二十一日は前記の若槻礼次郎氏が飯

塚代議士の報告演説会出席のため来館、大正十一年二月十四日には救世軍司令官であった山室重平氏。八月四日には郷土の生んだ文学博士綿貫哲雄氏。大正十二年一月十九日には政治家島田俊雄、片岡直温の両氏、同十三年三月十日には建部逯吾、九月二十八日深井英五、同十四年七月十八日には工学博士田中竜夫、同月二十八日には子爵前田利定。十一月一日には、桐生で青年時代を過したという文学博士中村孝也（南小の助教をしていたこともあった）大正十五年七月には商学博士上田貞次郎、八月十七日には外交官長井亜歴山、十月三日には群馬県赤堀村の生んだ評論家中島徳藏、十月十日には町田忠治、生方大吉等の諸氏。

昭和に入ってから、二年六月七日に内ヶ崎作三郎、翌八日に大森信一、八月二日井上秀子、八月十三日徳川家正（この人の署名は非常にか変わったものである）九月十四日秋田清、十一月十三日宮田修。昭和三年三月十一日仏化南無（ブカナンを日本文字にあてたもの）、七月十七日には大津淳一郎、田中善三、八月三十一日に青木精一、十二月二日蓮沼門三、十二月九日大川平三郎等の諸氏。

昭和四年四月十九日には桐生市境野町の出身陸軍中将新井亀太郎、同五年一月十三日には井上準之助、九月二十一日平沼淑郎、十月十九日秦豊助、同日木暮武太夫、中島知久平兩代議士、十二月十三日俵孫一を筆頭に木檜三四郎外四名、同六年二月十九日海軍大将大角峰生、九月十五日鈴木富士弥、同二十三日小泉又次郎と政界人の来訪しきり。

明けて昭和七年二月九日には大雄弁家氷井柳太郎（この署名も映画俳優のサインのような変わったもの）八月三十一日には「ユダヤ禍問題」をひっさげて陸軍中将四王天延孝、十一月五日国粹学者安岡正篤。

同八年三月二十九日には貴族院で南朝正統論を展開して有名になった菊地武夫、六月八日には小原直、七月九日にはイタリーでのムッソリーニとの親交で盛名をはせた下位春吉、十一月十八日大妻コタカ、十二月十九日賀川豊彦。

同十年六月二十八日、西式健康法の創設者西勝造、十月二十五日勅使河原蒼風、この頃に日時不詳だが青柳篤恒と、各階層の諸氏来館。これで第一巻が終り第二巻の筆頭が前記の藤沼庄平氏を筆頭に牧野賤男氏。ついで昭和十三年十月となって野田豊、十一月五日伊豆凡夫、十二月十日石橋湛山の各氏。

昭和十四年五月十五日には珍客三人、すなわち大日本回教協会の加藤久氏に同道された回教徒の署名がある。

昭和十五年二月二十五日、日本農民運動史に記録された新田郡強戸村の須永好、九月二十六日には経済学博士土方成美、十一月五日には河上丈太郎の諸氏。

昭和十六年八月二十四日「文芸銃後運動」の看板をかかげて、久米正雄、長谷川伸、今日出海等の有名作家。

(注) この年七月には日本軍は南部仏印に進駐していた。

九月二十三日には堀内謙介、十二月四日伯爵柳原義光の各氏。

昭和十七年三月二十一日海軍大將中村良三、次の日には陸軍中將香月清司と陸海の将星あいついで来館、七月十五日赤松小寅、同二十七日には大口喜六、十月十一日山本杉と羽仁説子、十五日には作家片岡鉄兵の諸氏。

昭和十八年十一月二十三日海軍報導班員として作家の井上康文。

終戦後の昭和二十一年十一月十二日には檜橋渡、同月小汀利得の各氏。

昭和二十三年五月七日「白滝さまのうたをつくりに来て、新緑の桐生にて」と題書して平山蘆江五月二十九日商学博士島田孝一、八月九日中山伊知郎の諸氏。

昭和二十四年七月八日植原悦二郎外三名、同月二十三日蜷川虎三、八月五日日本生活協会講師二瓶一、九月二十四日明大教授後藤守一、十一月二日武藤貞一の各氏。

昭和二十五年十月八日救世軍中将植村益蔵。同二十六年四月六日芦田均、木内キョウ。同二十七年二月十六日金森徳次郎、六月十七日古賀上野動物園長、九月十五日重光葵、同月二十四日高瀬荘太郎、同月神近市子。

昭和二十九年には七月一日に和田博雄、佐多忠隆、九月十一日には岸信介、福田赴美、藤枝泉介昭和三十年十月二日村田省蔵、十一月二十日糸川欽也、同三十二年九月十六日に須磨弥吉郎、二月木謙三医学博士（この人の署名は二度にわたって書かれてある。）同三十三年二月二十四日内山憲尚の諸氏。

以上その大略をあげたが、総理大臣片山哲氏もきているが署名なく、又あまりに達筆すぎて如何にも判読しがたいものもあり、ここにあげたものはその一部であるが、これによって桐生の変遷の一部を伺い知る事ができる。戦時中の人の往来、又政界の動きなどから桐生と中央との結びつき。又当時の日本の政界人の活動の在り方などを知るに足る好資料であるが、これも昭和三十年頃を最後として有名人の来館も激減し、「桐生の客間」にも淋しさを加えて来たのである。勿論これには産業文化会館が造られ、その方に会合が多くなったことも原因と思われる。

## 境野・南川ライン

朝鮮動乱による特需増大が「糸へん景気」を生み、桐生業界好転の中、即ち昭和二十五年十月二十一日改選によって境野武夫理事長、長沢義雄副理事長が出現した。ここで大正十五年九月以来十期廿四年にわたる起伏多く且つ多難であった斉藤時代はその幕を降したのである。長い年月を倶楽部と共にすごした斉藤長平氏としては、

“老兵は消え去るのみ”

の感慨を深くして退陣した事であつたらう。

境野理事長の出現は全く倶楽部の様相を変えてしまった。商売関係だけでなく、広く社会党、共產党にまで顔売っていた氏は、会館をこうした人たちの便にも供したため、今までの社交倶楽部としての存在は忽ち急変して、或は革新陣営の懇談会場となり、或は貸事務所と化し去つたのである。先ず日中友好会（会長森田勇治氏）が事務所を会館内に置き、さらに昭和二十四年一月十四日には、両毛考古学会（藺田桐生高等工業学校教諭指導）も事務所を設けた。そのため或る部屋には出土品が山積され足の踏み場もない有様となり、昔の面影は徐々にうすれて行つた。

境野氏は、従来のエリート意識の強かった倶楽部を、一般庶民の線まで引き下げて、大衆の場としての再出発を企図したものであった。「倶楽部のおとろえは“大衆への敷居の高さ”にある」と

考え、これを大衆に開放する事によって倶楽部の隆昌をはかったのである。この「境野計画」に賛同したのが、文士南川潤氏であった。南川氏は当時の新進作家として売出し中であつたが、米桐して宮本町に居を構え、後に菱町（当時は栃木県菱村）に転じて桐生川を見降す丘上に住んだ。昭和二十九年九月倶楽部の理事となり境野理事長と組んで、桐生文化戦線の確立をはかった。

昭和二十二年三月二日（斉藤理事長時代）に誕生した「桐生倶楽部青年部」は大川英三氏を部長として発展段階にあつたが、南川氏らはこれの指導に当り、助成金を与え社員相当待遇として倶楽部の自由使用を許し、文化運動の前衛部隊として活躍させた。境野・南川案は、小池・斉藤喜平両氏らの青年部員によって実行に移され、その活動ぶりは目覚ましいものがあり、その発展は大いに期待されてよかつたのである。ところが会員同志の結婚が多く、漸次「開店休業」状態が続ぎ、結局はよき配遇者の選択所となつた形で發展的解消を遂げたのであつたが、当時活動の中心となつていた人たちは、今日立派な社員として倶楽部活動の推進力となつている。

桐生倶楽部青年部は斉藤理事長末期に大川英三理事らの発案になり、昭和二十二年一月中旬、小池現副理事長らに話があり、境野・長沢氏らの援助があつて創設され、昭和二十五年まで活躍を続けた。会員数約三十名を数えたが、倶楽部社員の家族を中心に最初は女子二名が参加したにすぎなかつた。

当時の部員であり現社員である斉藤喜平氏の思い出によれば、軍服くずれのカーキ色の服を着て集り、司会・企画など一切を当番制によつて部員がやり、倶楽部活動の本質は決して犯さなかつたという。（座談会記録参照）

小池、茂木、大橋等の諸氏が企画し、毎週日曜に会合を開いた。その会合には二十五名ぐらゐは



何時も集った。工場見学、経済夏季大学（三日間ぐらい）教養講座、講演会、その他多くの公開会合を持ち、クリスマスには女子部員手作りの料理に舌つずみを打ち、小池氏作の演劇などに興じた。詳細は小池氏の記録にゆずることとする。

（注）「桐生倶楽部青年部について」参照

昭和二十七年二月八日の理事会で自動車部を設置、境野理事長から自動車を借り受け、とりあえず理事者だけで利用、市内一回五十円で五枚つづりのチケット発行などを決めた。同二十八年三月十六日には群馬県商工課から「公益法人」としての指定を受けた。

昭和二十八年九月二十八日、群馬県民生部長から「公益法人監査指導の結果」次のような示達があった。

#### 記

一、定款の処理について

①会費月一元 入会金六十円の規定を依然掲記するのはよくない。物価に変応する措置をとること。

②基本財産について明確な規定がない。

③目的事業として会館の維持管理を明記した方がよい。

二、事業経営

定款に定むる公益に関する事業の遂行は不充分。今後新しい社会状況に即応するよう努力されたい。

三、その他

- ① 会館の維持管理は良好である。借間料は実費として社員に対しては出来るだけ便利を図って公益に供するよう配慮すること。
- ② 理事及監事は事務員のみならず事務を委任せず、絶えず事務室に臨み、執行管理に当ること。
- ③ 資産台帳の一覧及役員の履歴書を整備されたい。

当時の月次会は年数回しか開かれなかったが、その主なものをあげれば次のようなものであった。

昭和三十年三月二十四日 講演

高血圧について 小口医学博士

同 五月二十八日

川村佐助氏紺綬褒賞祝賀会

同 六月二十五日

スライド利用による近代絵画の鑑賞

小島市造県立女子高校教諭

同 十月二十七日

中国の影絵の展覧と説明会

彫刻家 鈴木賢二

しかし社員は漸減の一端を辿り、百名内外となり財政窮乏を救うため、理事は会費の倍額以上を拋出するという状態であった。そこで内部の改革にも色々苦心を払い、喫茶店を開設したり、パー

をこれに併置する事を考えたり、社員バッジの図案を募集し、これを制定配布したり、インドアゴルフ場の設置に協力して、当時太田の進駐軍関係のメンバーが集って柘植氏が会長をしていた会の人たちのために後庭にこれを作ったりしたが倶楽部にはあまり好影響はなかった。

(注) 作家坂口安吾の紹介で読売新聞がこれを取り上げ「二〇〇円ゴルフ」として一躍有名な存在となった。  
 この使用料金が月額一〇〇円だったのである。

坂口安吾は昭和四十三年四月末までTBSテレビで放映されていた「クラクラ日記」で紹介されたように、晩年は南川氏の世話で桐生に移住、二代理事長書上氏邸の離れに生活していた。書上氏は前述のようにモダン生活に終始した人で、ゴルフも桐生では最初の人と言われ「スコア屋にあらざるゴルフ」の尊称をたてまつられたと、自ら語って居られたし、邸内の物置にレッスン所を作っていた。そこで坂口安吾も練習をしたよして、そんな事が読売への記事を書く因をなしていたのであろう。

彼は倶楽部社員として正式に入社はしていなかったが

“安吾を囲む会”

などで倶楽部に出席、一夕の歓談にウイスキー角びん二本を平げて平然としていた酒豪ぶりには、一驚を吃したという事である。(長沢義雄氏談)

南川、坂口両氏ともこの桐生でその生涯を終えたが、何れも倶楽部に関係があった事を忘れてはなるまい。

南川氏は昭和三十年九月二十二日、四十二才、菱の自宅で、坂口氏は散々“大虎、小虎”の蛮勇を發揮したあと前記書上氏邸内で昭和三十年二月十七日四十八才で永眠した。この年は京大カラコ

ルム探検隊が出発、東大の国産ロケット実験の成功。佐久間ダム完成、そして文学界では幸田文が「流れる」石原慎太郎が「太陽の季節」で令名を馳せている。

## 桐生倶楽部青年部について

### 1 青年部の発足

戦後すぐに桐生にも、学生文化協会・青年タイムス・北親青年団・青年親交会等々、青年の手によるいくつかの文化団体が出来て活動を始めた。

未だ食糧難に喘ぐ時代であったが、長い戦争から解放された自由を精一杯享受して青年達は未だとまどいながらも、今迄知り得なかつた事を学びたい、今迄出来得なかつた事をやってみたいという気持ちに駆られていたからである。

桐生倶楽部青年部も、そうした機運の中で昭和二十二年三月二日に誕生した。

それ以前から時偶、倶楽部の大先輩である斎藤長平（当時の理事長）前原悠一郎・前原準一郎茂木米吉等の諸氏と、茂木光夫氏（茂木米吉氏四男、現在は板倉姓）を中心とする青年達との話し合いの会が持たれていて、長老達が桐生懇話会時代からの桐生発展の苦心を語り、青年達への期待を述べれば、青年達は新しい時代の桐生のあり方等について遠慮ない抱負を語るといふ風であった。



それが機縁で、青年達だけの会合の場所にも斎藤理事長の御計いで倶楽部を頻繁に利用させてもらうようになった。

当時、戦争の影響で倶楽部社員の平均年齢が高くなり、青壮年の社員は殆んど居なかつた時であるので、やがて「これからの時代を背負う若い人達に倶楽部を積極的に利用させよう。それが桐生にとっても倶楽部にとっても将来の発展につながる事である。但し無制限に誰にでも開放するわけには行かないので、社員の子弟及び其の友人と、メンバーを限り青年部のようなものを作つたらどうか」という意見が理事会でまとまり、二十一年の暮頃から桐生倶楽部青年部の案が具体化した。

青 一方、小池久雄・斎藤喜平・吉成敏郎氏等の青年達は、前々から南川潤氏(作家)からの積極的な応援をうけ独自の青年男女の社交クラブを作りたいという案を持っていた。これは決して桐生倶楽部を念頭においたものではなかつたが、倶楽部の大川英三氏(当時の理事)から前述の倶楽部側の意向を受け青年部設立に参加するよう小池久雄氏に呼び掛けがあり、小池氏等は、運営は、すべて青年達にまかせるといふ条件で応じることとなった。

とりあえず世話人制で発足することとして、当初の世話人は倶楽部側、大川英三・境野武夫・長沢義雄の三氏、青年側は、茂木・小池・柘植織衣(現在竹股姓)の三氏が選ばれた。創立総会には倶楽部社員全部に案内状を出したが世話人以外では梶井海一・斎藤正七郎の両氏のみ出席、青年側では男子十三名、女子二名が創立メンバーとして出席した。

①毎週日曜日の午後、倶楽部二号室で例会を持つこと ②運営はすべて青年側が自主的に行なう

こと ③メンバーを三十人位にすること等を取りきめただけで会則も作らず、世話人だけで役員も作らない事にし、とも角、初めは気楽な会合にしたいという意見が多かった。

毎日曜日の例会には、倶楽部側の世話人の他に、ゲストのような形で、作家の南川潤氏、絵の先生であった小島市造氏、社員の斎藤正七郎氏等が参加され、追々メンバーも増え多い時は三十名近い出席者になった。当時の会員氏名は左の通りである。

茂木光夫	茂木立夫	吉野一郎	小池久雄
斎藤喜平	大橋政吉	寺内三郎	小林淳一
片山博二	書上文爾	折茂博	須田滋
藤江秀憲	青木治郎		
曾我良子	寺内美恵子	書上佳子	柘植織衣
柘植敏子	書上文字	原勢千恵子	宮田益子
赤堀いき子	石井艶子	茂木富子	小池文子
竹内カツ子	石川和子	斎藤八重子	野間茂子
内田淑子	石川千代子	加藤けい子	

## 2 青年部の事業

初めは会員の親睦、知識の交換、教養の向上という目的で、漠然と話しをしたり、ゲームに興じたりという程度からスタートし、やがて当番を定め例会毎にテーマを持つこととなった。討論会・

読書会・経済研究会・レコードコンサート、時には外へ出てハイキング、工場見学、観劇会などもやった。

更に青年部内だけの活動では、あきたらず、外への働きかけもしなければという機運が醸成され東京から講師を招いての講演会や、夏期大学などを開催するようになった。特に、東大の我妻栄教授を迎え二日間にわたり、新民法の講義を聞いた時は、一般にも大きな反響があった。

二十二年十一月から斎藤喜平氏の提案された週報が発行されるようになり、その事業が細かく記録されているので、二十三年末迄約一年間の事業を列記してみると、

二十二年

- |     |      |                      |
|-----|------|----------------------|
| 十一月 | 二日   | 例会「仮名手本 忠臣蔵」解説 小池    |
| 同   | 八日   | 観劇会 於東劇 歌舞伎「忠臣蔵」     |
| 同   | 九日   | 日展、西洋美術展見学           |
| 同   | 十四日  | 経済研究会「全体機構について」 吉成担当 |
| 同   | 十六日  | 例会 工場見学、大間々赤城社       |
| 同   | 二十二日 | 例会 レコード・コンサート        |
| 同   | 三十日  | 例会 クリスマス祭打合せ         |
| 十二月 | 七日   | 例会 お茶の会 解説大川氏        |
| 同   | 十三日  | 経済研究会「金融機構について」 小池担当 |
| 同   | 十四日  | 例会 討論会「幸福論」          |
| 同   | 二十二日 | 青年部クリスマスパーティー        |



青年部の活動

同 二十三日 桐生倶楽部クリスマス祭

二十三年

一月 四日 新年会 於吉野会館

(此の新年会は各自夕食持参としてある。青年部で食事する場合は、弁当持参か、材料持参の料理が常であった)

同 十八日 例会 星座の研究

同 二十五日 例会 中国研究所々員尾崎庄太郎氏を招き話を聞く

「国際情勢の展望」(中国を中心として)

二月 一日 例会 「アンナ・カレーニナ」の輪読

同 八日 例会 「アンナ・カレーニナ」輪読及び青年部のあり方について意見交換

同 十五日 階上で中野画伯個人展あり鑑賞其のあと児童画集を見て小島氏を中心に絵画論

同 二十二日 例会 南川氏を中心に文学論

三遊亭金馬師が偶然倶楽部に来られたので古典落語鑑賞

同 二十九日 例会 部員寺内美恵子さんが結婚され桐生を去られるので送別会

三月 七日 青年部創立一周年祝賀会

同 十四日 例会 原勢ガーデン(現在の吾妻公園)に於て観梅・スケ

送別会

三月 七日 青年部創立一周年祝賀会

同 十四日 例会 原勢ガーデン(現在の吾妻公園)に於て観梅・スケ



ツチ会

同 二十一日 例会 草月流夏季花展を観る

同 二十八日 例会 原勢ガーデンに於てスケッチ会

四月 十一日 総会

同 十八日 例会 時事問題(国際・文化)研究 講師 境野武夫氏

同 二十五日 例会 今後の行事予定について打合せ会

五月 九日 例会 気象の話 片山担当

同 二十三日 例会 レコード・コンサート ストラビンスキー

同 三十日 例会 音楽について

六月 六日 例会 独占禁止法・集中排除法・事業者団体法・協同組合法等についての話

境野武夫氏の解説

同 十三日 例会 コーラスの練習

同 二十日 例会 放談会

同 二十七日 例会 討論会「芸術家と道德」及び夏期大学について打合せ

七月 四日 例会 レコード・コンサート及び夏期大学について打合せ

七月 十一日から  
七月 十七日まで  
一週間  
夏期教養講座 会場 桐俱二階一般青年層に呼びかけ連日百名程度の参加者あり

講師 南川潤・小島市造・境野和子・大島万世・境野武夫氏等

同 二十五日 例会 放談会

- |                            |    |                                      |
|----------------------------|----|--------------------------------------|
| 八月 一日                      | 例会 | 盃汁会・句会                               |
| 八月 八日から<br>八月 十二日まで<br>五日間 |    | 経済夏期大学 会場 織物会館 一般市民に呼びかけ連日二、三百名の聴衆あり |
|                            |    | 講師 一橋大学 中山伊知郎、小原、美濃口等の教授             |
| 同 二十二日                     | 例会 | 読書会                                  |
| 同 二十九日                     | 例会 | 話の泉                                  |
| 九月 五日                      | 例会 | スケッチ会                                |
| 同 十二日                      | 例会 | 秋の家族懇親会の打合せ                          |
| 同 十九日                      | 例会 | 同右                                   |
| 同 二十五日                     | 総会 | 例会は今後月二回第一及び第三日曜と変更                  |
| 十月 三日                      | 例会 | 短歌を作る会                               |
| 同 十七日                      |    | 足尾線沿線へハイキング                          |
| 十一月 七日                     | 例会 | 桐倶クリスマス祭打合せ                          |
| 同 二十一日                     | 例会 | 同右                                   |
| 十二月 五日                     | 例会 | 同右                                   |
| 同 十九日                      | 例会 | 同右                                   |
| 同 二十三日                     |    | 青年部クリスマス祭                            |
| 同 二十六日                     |    | 桐生倶楽部クリスマス祭                          |

倶楽部側の良き理解のもとに青年部が育って行くに従い、青年部のメンバーも自然に色々の形で倶楽部に愛着をおぼえ協力するようになって行った。庭の夏草とりをやったり、部屋に花を飾ったり、特に今も恒例行事になっているクリスマス祭なども殆んど青年部が主体になって開催した。二十二年十二月二十三日のクリスマス祭の記録をみると、出席者、社員及び其の家族百三名、青年部二十二名、計百二十五名の賑やかさで、そのプログラムは

第一部 1 讚美歌 八十八番

2 聖書朗読 大川英三

3 讚美歌 百五番

4 説話 大川英三

5 讚美歌頌詠

(讚美歌はすべて青年部メンバーによる四部合唱)

第二部 1 ヴァイオリン独奏 紋谷貞子

2 二十の扉 社員六名・青年部六名

3 劇「迷盗譚」二景 原作 南川潤

出演者 青年部

### 3 解散に至る経過

青年部のメンバーは男子は約半分が学生、残りの半分が社会人であり、女子は殆んど二十四、五

才迄の未婚者であった。

当時は東京も全く索漠としたものであり、特に食糧不足が甚だしく、東京に下宿生活をしている学生でも、やむを得ず週に一度位は桐生へ帰るのが常であったし、社会へ出た者も統制経済下にあるって思うような事業活動も出来ないという時代であったからこそ青年部もこれだけ頻繁に会合を持ち得たのであろう。然し、メンバーの環境も満二年を経た二十四年頃から急激に変って来た。

当初メンバーになった時は学生であった者も卒業し東京へ就職してしまふ。社会へ出ている者は各自の事業が忙しくなる。女子も結婚する者が相つぐ、勿論、新しいメンバーを増やす事にも可成り意を用いた筈であるが、脱落する数が余りにも多く、二十四年十二月四日の例会で「此のままじり貧を待つより潔よく解散して、メンバーの中で希望する者は倶楽部の正社員にさせてもらう」と決定したのである。

その存続した期間は決して長くはないが、斎藤理事長・大川名誉社員・境野前理事長・長沢前理事長・南川潤氏・小島市造氏・斎藤正七郎氏等の先輩達の理解と愛情のもとに育てられた青年部の存在は、倶楽部の歴史の上に全くユニークなものであった。メンバーの誰もが「貴重な青春の記録」として青年部の数々の憶い出を、いつまでも胸裡に残しているに違いない。

尚、参考までに青年部のメンバーで現在社員として活躍しておられる方の名前を左に記しておく。

小池久雄・吉野一郎・斎藤喜平・吉成敏郎

## 財政たて直し

昭和三十一年八月十五日、境野理事長永眠のあとを受けて、長沢義雄副理事長が理事長代行となり、同年九月二十八日の改選で理事長に選出された。副理事長は前原勝樹氏、社員数百十八名。

境野氏の「桐生倶楽部の大衆アツピール策」は不幸にして成功を見ず、多大の負債を次期理事長に引き継いだ形となったので、長沢理事長は先ず「倶楽部財政のたて直し」をはかると同時に、倶楽部本来の姿である「創設当時の社交場」としての立場を取り戻すべく、内外に対して大々の改造を試みた。

①先ず館内整備のため、館内に事務所を設けていた団体に対して移転を求め、②極端な政党色や思想を持つ団体の集会を拒否し、③貸室規定を明確化して収入の拡大をはかり、④会員増加を図るため、今まであまり開かれていなかった月次会を毎月開催し、社員懇談の場をつくり、それによって社員の教養面の向上をはかり、文化、情操の面でも広く一般大衆にアツピールする事に重点をおくことにした。

すなわち共に楽しみ共に語り、社員一同が生活をエンジョイする中から、平和郷文化都市としての郷土桐生の産業と文化の振興と発展を期待して、着々その計画の実現につとめた。

当時一番問題であった財政面では当面の責任者として最大の苦勞をした会計理事平野元吉氏は、長沢理事長の経営手腕を礼讃するとともに、当時の財政苦境を次のように語った。（座談会記録参照）

「桐葉軒の借金だけでも五万円もあり、その他借金が山積していた。第一帳簿が不明確であり、収入の部の一部が破りとられているなど、全く收拾つかない有様であった。調査の結果借金の大整理を敢行せざるのやむなきにいたったので、桐生信用金庫から百万円の融資を受けてこれにあてた私が理事になったのは昭和二十二年で、理事会には何時も三名乃至五名の理事が集っていたが、当時の会計は神谷理事で、神谷氏が東京に移住するというので私にオハチが廻って来たわけだ。私としては引受ける意志は全然なく、固辞したがとうとう推されて会計となったが、長沢理事長のおかげで大過なく借財の返済も出来、更に会館改造のため又百万円の借入れをして今日のこの姿になった。長沢理事長の経営手腕がなかったら、この財政危機を脱する事はむずかかったと思う。」

この財政危機に就いて、あまり名譽な話ではないが、当時の某事務員の不始末も相当な影響を与えていたことも記録せねばなるまい。事務員某は境野理事長の信任を得て境野家の自動車運転士から何時の間にか倶楽部に入り、きわめてまじめに執務し、事務処理なども整然とされていたが、その能力と弁説におぼれ、遂に会計上の失態を招来したもののようであった。昭和三十六年二月末日附で自然退職の形で倶楽部を去った。

この財政危機中特記すべきは昭和三十二年三月二十五日の固定資産税滞納による会館附属の弓道

場の差押えであった。

滞納期間五カ年、七十五万六千九百八十円に及ぶもので、六月四日遂に公売公告に接し、五月二十日公売に附された。

一、弓道場一棟 二十二坪二合五勺

一、公売価格 五十万六千三百三十円

この間長沢理事長は再三の市との交渉によって、この弓道場一棟に金十万円をつけて市に供出することで漸く解決に成功した。

これが昭和三十六年四月一日に相撲道場とともに市民に開放された。産業文化会館と厚生病院との間に移築され、多くの人々によるこぼれている弓道場である。

(注) 弓道場に就いては織物会館事務局長の前原忠平氏は次のように語った。

「私たちの弓の会は小林利平さんが初代会長で二代が松島茂三郎さん、それから小林克己、斎藤元吉さんなどを経て今の渡辺さんになったんだが、私が桐生倶楽部の弓道場に通い始めた頃は中年の婦人が一人で留守番していて、何時でも勝手に出入りして早朝から夜になるまで弓がひけたものだ。それが何かの事情でおおき 朴木繁寿という夫婦ものに代ったのだが、これは小野眼主人の世話であったようだ。初めはいくらかでも手当を出していたので、こちらもわがままにやっていたが、そのうち会員も減って、当時二円ぐらいの会費だったが、それも集まらなくなり、会員も時計商の生方、近伝の佐々木、加工業の加藤、鉄道員の真下など十人足らずになってしまった。中でも黒崎という老人が居られて、この人は実に熱心に弓に關しては世話をしてくれ、忘れることの出来ない功勞者であった。会費が集まらないから手当も出せないという事になると自然朴木夫妻の態度もかわるし、こちらも遠慮するようになって、段々に会員も集まらなくなり、朴木夫妻は道場を自分の住居のようにするようになって、弓道場の存在価値はなくなりました。私たちは当時若かったので先輩諸氏のやっている事はよくわからなかったが、何でもよいから楽しく弓が引け

ることを望んで色々な進言をしたものだ。晩年は弓をひきに行つて、代りにマージャンをやつて帰るといふような事もあつて、当時の代表者渡辺康明さんに、市へ寄附するように申し入れ、渡辺さんは倶楽部の理事長と話し合ひでそういう事にするという話し合ひをした。

私が通ひ始めた最初は、会員は三、四十人居り、常時十人ぐらいつめかけていたものだった。その中には当時の関口市長や、境野町の関口亀太郎氏など知名人が相当いたものだった。倶楽部に寄附する話は私たち若手は市へ寄附するよう進言したのだったが、色々な事情——地代の未払、税金滞納その他——で一応倶楽部へ寄附という事になったものようだ。それが再転して市へ寄附するという事になり、それが物納になった事など全然知らなかった私たちは、当時の前原市長に色々と難題を持ちかけて、私たちは寄附したんだという大きな顔をしていたが、前原市長は物納に関する事は一切私たちには話さず、仕事を進めてくれた。今考えると申しわけない事をしたような気がしてならない。

現在の所に移つてからも色々問題はあつたが、弓は立派なスポーツとして、桐生市民の楽しみ場として公開され、現在は高校生約四十名一般二十名ぐらゐの会員が常に弓を楽しんでいる。特に最近は勤労者のために夜間開放も考えてもらい、「木曜会」というのを作って私や中里（中和織物）さんなどが中心になつて、夜九時頃までやらせてもらつている。」

境野理事長時代の記録にも、財政上の問題で苦勞した様子が記録され、昭和二十六年五月十一日には固定資産税二十五年第三期分残額一万二千百十円のうち六百円だけ納金の事が承認され、十月十二日には社員会費を月額百五十円とし二か月分ずつ集金する事をきめ、二十八年四月十日の理事会では役員会費を五百円とし、その月から集金する事に決めている。こうした財政危機も、原因はその以前から温存されていたようであり、昭和二十二年の会館修築のための十四万九千円也の小川組見積を承認した頃から始まり、その年の六月十六日には修理費として十万円を約束手形で当時の帝国（現第一）、安田（現富士）、足利、群馬大同（現群馬）など四銀行から各二万五千円ずつ



借入れることをきめ、翌二十三年五月八日の理事会記録には

①借入金総額残金十一万円となる。

内訳 市内銀行金六万円也

境野武夫氏五万円也

②銀行借入金は返済納期延長を申入れること。

③今回返済分は銀行二万円、境野氏一万円とする。

とあり、二十四年一月になっても

銀行借入金三万円を償還のこと

などと記録されている。

財政苦難時代といっても昭和二十八年の六月十二日の理事会では、桐生市文化祭に使用した会館使用料九千六百円を、そのまま市へ寄附したり、ラジオの購入（但し月賦にて——とことわってあるが）階上照明を螢光灯（四〇ワット六個）に改変したり（昭和二十九年一月）その他の修繕などが行なわれていた。

桐生倶楽部創設当時の思い出を辿ることも忘れられてはいなかった。「金子竹太郎初代理事長を囲む会」や「偲ぶ会」、などが何度か催されている。

理事会が「定例理事会」として毎月開かれるようになったのは昭和二十三年五月八日の第一回定例理事会からで、記録は第五十三回理事会をもって（昭和二十七年十一月十四日）回数をかぞえる事は終っているが、その後も比較的忠実に理事会は開かれ、倶楽部事業は検討されて行ったのである。

(注) 月次会の開催が決定したのは昭和二十二年五月二日の理事会の時からしく、それ以前に月次会の名は出ていないようである。

昭和三十三年三月一日には、滞納市税特別会議を開き、長沢理事長、前原勝樹、神谷英司、森田勇治の各理事の他特に斉藤長平、書上文左衛門両氏の出席を求め、市側からは角田税務課長を招いて談合した。その会談の主なもののは

- ① 昭和二十六年からの未納総額金七十五万六千九百八十円也のうち延滞金を免除されたい。
- ② 本税金五十四万五千六百十円也のうち弓道場を金三十万円と評価物納し、残額二十四万五千円を年賦として支払う。

という事であった。さらに四月二十七日に再び角田課長を招いて次のような話し合いをした。

- ① 滞納金七十五万円の処理
    - a 延滞利子二十一万円切りすてのこと。
    - b 現金十五万円を支払うこと。
    - c 五十五万円で、弓道場を寄附形式として三十二万円に見積り、これを落すこと。
  - ② 第一期固定資産税三万四千円を四月三十日に支払う。
- こうした苦しい財政の中にあっても、社屋の改修をせざるを得ない状態にあったので、百万円の子算でこれを行うこととなり、
- ① 五十万円を銀行から二年間借用

②五十万円を理事二十五万  
一般社員二十五万 } の社債募集

③社債は二年据置の利子五分位との案を立てたが、六月五日の理事会では

①借入金を行わず、寄附金一本とする。

②情勢によっては募金範囲内の改造をする。

ことに決議され、直ちに「募金趣意書」を理事及び一般社員に廻すことにした。

九月五日の理事会で、小川組に落札決定が報告されたが、その金額は二百三十三万円であったので、百万円以内で実行する事にきめられた。その席上

労働争議関係には、倶楽部を貸与しないという一条が決議された事をみても、境野時代の「大衆提携時代」のほとぼりがまだこの頃まで遺っていたものと思われる。

募金は順調に進んだが、十月十二日の臨時理事会の記録によれば

①応募記帳者数 八十二名

②記入金額 六十一万五千円

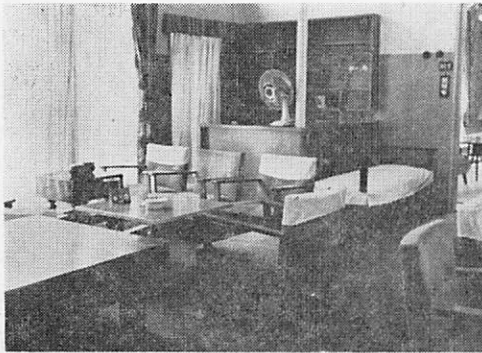
③実納金額 三十七万五千円

④未応募者数 百十六名

⑤目標金額に達するまで募金続行のこと。

⑥万一不足金の生じた場合は再募集の事。

この場合の責任については、全理事の責任とすること。  
を決議した。



改装なった中央ロビー

工事は早く着工する必要があったので、十月十五日には小川組が着工。十二月二十日に完工している。改装の大要は次の通りである。

①二階広間

緞帳（三越寄贈）を取外し、天井、壁の塗上げ、床板張替。電気配線を新らしくし、コンセント五か所新設。六〇ワット蛍光灯六基をつける。床上に濃緑色リノリウムを張る。

②階下

三号室除去。中央ロビーに改装。新しい机四、椅子十六脚を入れ、地下ガストーブ三台、カウンター新設。蛍光灯四基をつけ、社員の無料使用としてテレビ一台を設けた。

各談話室は壁、天井を新装し、コンセント二個ずつ付ける。

旧理事室は室内を塗替え、社員専用の無料応接室とした。

③外装

門柱の間隔を一米開き、自動車の出入に便にした。扉の代りに夜間はクサリを掛けることにした。

屋根瓦の修整。雨樋全部取替。外壁は前通りの色合で吹き着けをする。

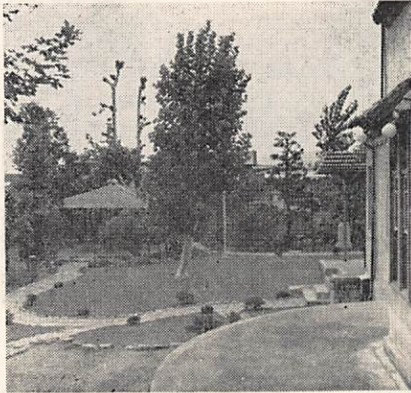
東と北側バルコニーは上面セメント塗りで仕上げる。

準備室に、流し場新設。下水道は西表通り下水まで出す。

以上

昭和三十三年一月二十一日、金木屋に理事会を開いて、この工事完了の報告を行った。

①収入 百十七万七千円



ク ラ ブ 庭 園

②支 払 百三十六万五千九百四十円

③不足金 十九万五千九百四十円

(注) 不足金に就いては、三月五日理事会で川村佐助氏から六十万円を無利子で借入れ毎月返済する事をきめてゐる。

# 改 装 つ づ く

昭和三十六年三月、庭園改装に着手。桐生信用金庫から百万円を借入れ、水道電気その他の追加工事を予測し、特別会費六十口を募ることに定め、理事はその一口を持つことにしたが、五月五日の理事会報告によれば、次のようになってゐる。

## 庭園改装完成報告

- ① 桐生信用金庫より借入金 百三十万円
  - ② 小川建設支払金 (塀あずま屋等) 六十五万円
  - ③ 小山音吉支払金 (植木) 三十七万円
  - ④ 関田家具店支払金 十万円
- (テーブル2・調理準備室衝立一式とテーブル1)



庭園

七月七日には「桃色電話架設」を承認。その費用一万四百円。八月中「桐生倶楽部重要記録」をまとめ、書類保管用書庫（岩井金庫店より一万六千円で）一個購入。十月七日日には便所手洗器を新調した。（大川ポンプ店から購入。四千八百円）同月三十日には社員氏名一覽掲示板を作成。同月二十二日には「桐生倶楽部社員門標」三百枚を造って各社員宅の門柱又は玄関に掲示する事にした。

昭和三十七年二月二十二日から二十四日までの間に、玄関ホール、二・四・六号室にナガセロンカーペットを敷く。一号室と入口廊下にリノリュームを敷く。六号室にテールブル三、椅子十脚を入れる。

四月十五日には吉野桜の苗木二十本を植え、その日から十七日までに室内のペンキ塗りと修理を終る。

初代理事長金子竹太郎氏胸像を庭園内に移したが（昭和三十六年四月十日の理事会で金子竹太郎氏遺族よりの申出承認。昭和三十七年九月移転）その名入プレートを高崎市新井将光氏に依頼して作製（四月十九日出来）、五月三日の憲法記念日を期して改装庭園を使用して園遊会を開く。

六月三日、正門鉄扉並びにレール完成。この価金九万円等、改装は続けられ、面目を一新した今日の桐生倶楽部となったのである。

⑤ 関東電気支払金

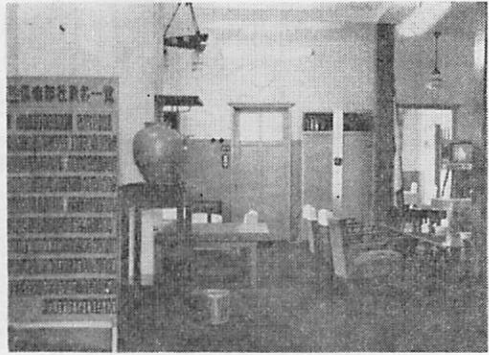
六万五千元

⑥ 水道その他

五万六千元

⑦ 小川建設追加工事払

二十万円



昭和三十七年六月十八日午後六時、近年まれな降雹があつて、テラスにかなりの電害がありアクリライト四十枚が破られ、その修繕に一万九千五百七十円を要した。

ル 長沢理事長の会館に対する執念にも似た愛着心は、次から次へと改装・修繕の手をのぼして休むことがなかった。備品も暖房用のストーブ、扇風機の購入やいれ替へ、国旗二本、紅白幕二十三間の新調、流し台、ガステーブル、配膳台の新設と昭和三十八年だけでも精力的な活躍ぶりを示した。しかもその詳細な記録を「重要記録簿」に記入、各種の統計一覧表を作成、重要会合のあとには必ず反省を記録して後進のため参考に供しようとする努力にいたっては、ただ感嘆の外ないのである。毎年の事業概況はタイプ印刷に付されて社員に配布され、「桐生タイムス」はこれを記事として公表している。

昭和三十八年十月十四日には、群馬県知事から「公益法人監督に関する規則」が送付された。この規則は昭和三十八年三月十八日に成立をみたもので、これによれば

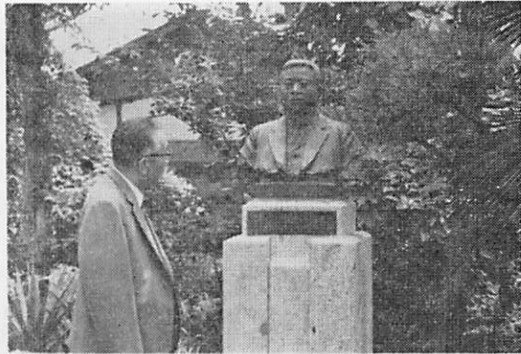
今後の監督は群馬県商工労働部がこれを行なう。ということであり、附記に

①事業終了後三カ月以内に業務報告書を提出すること

②事業所に備えつけおくべき書類

等について明示してあった。

長沢時代最後の社屋大改装は昭和三十九年五月十一日から七月三日に至るもので、小川建設を中心とする計八社の参加によるものであった。



初代理事長金子竹太郎氏胸像  
(立っているのは長沢編集委員長)

## 長沢理事長の外遊

長沢理事長の熱心な経営の中にあつて、前原勝樹副理事長その他各理事の努力によつて、各種の

①室内塗替

②事務室、三号室、裏階段室の床リノリユウム敷替

③二号室壁紙張替、四号室内テラコート塗替

④便所タイル張替、小便器取替

⑤カーテンレール取付

⑥ルームクーラー二台取付

⑦夏・冬用カーテン購入

等で、桐生信用金庫からの借入金百万円と、倶楽部経常費からの支出二十六万で処理した。

(附記) 軽鉄骨で波形スレート屋根、床割栗石張りコンクリート打の自転車置場を建て庭内に水銀灯を設け、小川建設寄贈の火石を移転、高ライ芝約一〇坪を植え長沢氏寄贈の御影石二十枚を正門附近に敷いたのは前回改装の時であつた。



行事が進められ、園遊会、クリスマス祭などきわめて盛大なものとなり、各会合には社員は家族連れで出席するという誠に好現象が多くなったのである。中でも特筆すべきは、かつて先輩が行なった群馬大学工学部留学生との国際親善会の再現である。

昭和三十二年五月二十四日、台湾(一)香港(二)カンボジア(三)等から留学している、六名を招いて懇談したが、昭和三十八年十月二十三日には十一名(インドネシア四、タイ二、カンボジア一、中国四)を招いて、きわめて友好的ふん囲気の中に盛大に行なわれたのであるが、従前のこれらの催しは、その場限りのもので、留学生が帰国してしまえばそれで万事終ってしまう事を反省し、帰国後も社員の個人同志とでもよいから交際を続ける事を求め、サンプルとして平野理事の尽力により織物組合からの贈物を呈し、倶楽部からはYシャツ一着ずつを贈ったのである。

昭和三十三年四月十九日、長沢理事長はセイロンでのアジア・アフリカ教育会議出席のため同地におもむいたが、同時に欧州諸国の視察をして、約一カ月後に帰朝した。これによって見聞を広めた長沢理事長は、倶楽部経営に対する意欲をさらに深めたようである。更に昭和三十八年七月六日にはブラジルのリオデジャネイロ市で開かれた世界教育会議に出席のため再度の外遊をして、ヨーロッパ諸国、中南米からカナダ、アメリカ、ハワイ等を視察して、九月七日二ヶ月振りで帰国。前記外人留学生招待会を開いたり、同年十一月二十五日にはガーナのエンクルマ理工科大学助教教授ライオネルKアイダン氏を招き、書上誠之助氏の通訳で講演会を開くなど多様な行事を繰り上げたのである。

今となつては珍らしくもない“外遊”であるが、当時は、“珍らしい”部類に入り、特にコロンボのようないわゆる僻地的な所に行く人は少なく、その上この教育会議は第三回であったが、日本

の参加は初めてであり、プロペラ機で南ベトナムのサイゴンやインドの各地を「飛び石」づたいに  
 コロンボに行った事は非常な好経験であり、帰桐しての倶楽部での帰国挨拶の会台には九十余名の  
 出席者が集って、その旅行談に耳を傾けたなどは当時の情勢を知る一端ともなるであらう。

(注) 留学生参加者氏名は次の通りである。

①昭和三十二年五月二十四日の懇談会出席者

林宗華(台湾) 陳海芳、沈文耀(以上香港)

トウン・ケアン、エン・リー・セン、リ・キ・トン(以上カンボジア)

②昭和三十八年十月二十三日参加外国人留学生氏名

国	籍	氏名	在学年	費用	宗教		
インドネシア		○ニルワン	電気三年	国費	回教		
		○フトタバア	織維三年		キリスト教		
		○スギアルト	電気二年	私費	キリスト教		
		○アリマラジョン	織維二年		回教		
		○タナキット	電気三年		仏教		
		○ブラサード	機械二年	私費	仏教		
		○リーキー・レアン	応化三年		回教		
		○ウピユケン	応化三年		回教		
		カンボジア		吳柄權	短大色染三年	私費	
				○シヨウセイミン			
姜世民							
ホンコン		○イエンポーミン	紡織二年	私費			
		○ヤンシイン					
〃		揚士允					
〃							

大学側から 福田秀次郎（大学）橋川高明（短大）・両事務官

## 創立四十年記念行事

昭和三十三年九月五日の理事会は、十一月中に創立四十年記念式を行なう事を話し合い、記念事業として「桐生倶楽部四十年史」の発行をきめ、その編集を中川信彦氏に依頼することにした。

おなじ月の二十六日には定時社員総会が開かれ長沢理事長重任。十月九日の理事会で「創立四十年祝賀企画委員会」を作って一切の企画をする事になった。おなじ月の十五日第一回委員会を開いて委員長に平野理事を選び、分担を定めた。十月二十五日に月次会として

桐生倶楽部創立当時を偲ぶ夕

を開いた。二代理事長書上文左衛門、三代理事長斉藤長平の両氏と、創立時代からの関係者として前原準一郎氏、それに大川英三氏を加えて、長沢理事長司会のもとにきわめて有意義な座談会となり、一切をテープレコーダーに記録、編集者中川氏も同席して質疑応答があった。詳細を「四十年史」に記録する事とし特に前原氏の発言は貴重なものであったが、同氏はさらに不足の点を補って後日手記を提供して誠意を示された。出席社員四十二名。夕食をともにして歓を尽した。（注参照）



創立40年記念寄せ書き

十一月二十一日、桐生倶楽部会館に創立四十年記念祝賀会が開かれた。出席社員九十三名、招待者二十一名。全員記念署名の上二階大広間で開会されたが、満員の盛況で

竹腰俊藏群馬県知事

長谷川四郎衆議院議員

前原一治桐生市長

小竹為吉桐生図書館長

齊藤長平氏

らの祝辞があり、ついで前原準一郎氏を名誉社員に推薦、大川英三氏の能舞等あつて盛況裡にその

幕を閉じた。

一名あたりの費用九百円としそのうち五百円を会費とし徴集、料理は「芭蕉」に一任したが、清楚の中に味わいのあるものであった。

無事祝賀会は終わったが、記念事業としての「四十年史」出版は、費用その他の点で、残念ながら実現に至らず、原稿のまま保存されることとなった。しかしながらこれによって桐生倶楽部創立時代の郷土桐生の諸

先輩の偉大さを改めて認識させられた事、又倶楽部の果たした役割の如何に大きくあったかを互いに認めあつたことなどだけでも、大きな効果であつたと思われる。

昭和三十六年初頭、服部事務員が桐生倶楽部倉庫を整理中発見した、創立当初からの古文書を整理するため、長沢理事長は中川信彦氏と共に、七・八の両月にわたつてこれが整理に当り、書類入れを作つてこれを保存する事にした。「重要記録」は、これを「重要記録簿」に記入、バラバラになつているものは散逸を防ぐため綴じ込みとし、大体創立当時のものの分類を終つた。結局はこれも四十周年記念事業の一つとも言ふべきであらう。

(注) 座談会中特に重要と思われるものを次に。

前原準一郎氏

①懇話会は会費一円、毎月十四日の午後開かれ、会員は四十名ぐらいであつた。

②話合の中から桐生高等工業学校が「第八高等工業」として生まれたが、「町」で高等学校を持ったのは桐生が初めてであつた。

③この会館の設計者清水敏氏は野間清治氏に紹介されたもので、当時三十歳でアメリカの設計コンクールに出品、一等に当選した逸材であつた。

④庭は当時の東京市公園課長井草氏に相談して木を植えた。

⑤当時から中食にサンドイッチを使用した。

⑥森宗作氏その他から理事長就任をすすめられ固辞して、書上氏が理事長になる事になった。

書上文左衛門氏

①斎藤内閣へのバトンを渡すためのいわば選挙管理内閣で、名前だけの理事長だった。一切を前原氏に托した。

斎藤長平氏

①ソツのない大川、理想家肌の青木との三羽鳥でやった。

- ②文化運動の源泉として大いに誇ってよいと思う。
- ③戦時中は社員の退会相次いで大いに苦しんだ。本文に記載された外に太田の中島からも貸りに来るし、これを守るだけでも大いに苦斗した。
- ④私は当時三十に手が届くか届かない頃だったが、そうした青年を育てあげてくれた当時の先輩は偉かった。今の倶楽部も年齢層をもっと引下げねばならない。私などの時代は理事で医師の藤江先生などがいて、大いに指導して引き上げてくれたものだ。

大川英三氏

- ①私の結婚はこの会館の新築と同時にこの会館で挙式したので、私にとっては忘れることの出来ない記念品である。
- ②地方でこれだけ立派な独立した社交クラブを持っているところはない。大いに誇るべきだ。
- ③最初はマーシャン五台、玉突二台などがあって、裏には宇野という盆栽屋が住んでいて、あづまやなどがあったとてもよい風情のものだった。
- ④社員には医者、弁護士などが非常に多かった。個人織屋の入会の少ないのは残念だ。
- ⑤境野時代の低姿勢政策は成功したといえない。やはり誇りが必要だ。

## 会館使用状況

桐生倶楽部会館も前記のように数回にわたる大修築で、内部の模様など全く面目一新の感があるが、その利用状況も年々活発の度を加え、定期的に使用する団体だけでも次の五団体がある。

①桐生ロータリークラブ（毎週月曜）

② 桐生青年会議所

③ 桐生銀行会

④ 桐生金融懇談会

⑤ 桐生聖書研究会（毎日曜）

この他華道教授にも使用されていたが、色々な都合で中止となった。

中でも桐生聖書研究会は、名譽社員大川英三氏を中心とするもので、会館創設以来毎日曜欠かすことなく集会が行なわれ、常に十数名の会員が参集している。桐生ロータリークラブは、五十年記念座談会記録にも述べられているように、「是非ともこの会館を使用したい、出来れば半永久的に」という惚れ込み方で、倶楽部事務室内にロータリーの事務室を同居させ、会員の増加を防がなければ会館も使用に堪え切れない状態になったので、南地区にもう一つのロータリークラブを造るという有様である。というのもこの会館の風格と落つき、手頃な使いよい広さと位置のよさなどが物を言っているようである。従って外部からの利用者も年々その数を増し、昭和三十九年の報告によれば

使用回数 七百七十五回

使用人員 一万七千五百四十八名

使用料 八十四万円

となり、以後順調な延びを示している。

会館が今日のようなロビーを持つようになったのは、長沢理事長英断の賜物で、それまではここに小部屋三号室があって、集会があっても待合室もない有様であったが、それをロビーに改造して

参集者の便に供する事にした。理事諸氏に相談したが、この大改造にはさすがに踏み切りかねて明確な決定が出されなかった。長沢理事長は小川建設に研究させ、思い切ってロビーへの改造に踏み切ったが、残念ながら玄関から入ってすぐの大きな柱だけではどうしても取り除くことが出来なかった。この改造は理事や社員の好評を得て、現在では非常に有効に使用されているが、改造当時の苦心と決断は大いに賞讃されてよいものがあつた。

部屋は次のような定員とし、冷暖房も完備したので使用料も改めた。

桐生倶楽部各室定員数並びに使用料(昭三九・四・一)

室名	定員(名)	半日	九時~一七時	一七時~二二時	備考
一号室	三〇	一、二〇〇円	一、八〇〇円	一、六〇〇円	食堂兼用
二号室	一五	一、〇〇〇	一、五〇〇	一、二〇〇	冷房一回毎二〇〇円
三号室	七	四〇〇	七〇〇	五〇〇	
四号室	七	一、二〇〇	一、八〇〇	一、四〇〇	冷房二号室に同じ
五号室	七	四〇〇	七〇〇	五〇〇	食堂兼用
六号室	一五	一、〇〇〇	一、五〇〇	一、二〇〇	
二階広間	一〇〇	二、六〇〇	四、一〇〇	三、〇〇〇	
テラス	二〇	一、〇〇〇	(食事、喫茶等集会の場合)		
あずまや	二〇	六〇〇	)		

昭和四十年の使用料合計 一八、二四六名 使用料 九〇〇、〇〇〇円となった。

冷房はクーラーを用い、暖房にはガスストーブを用い、他に移動用の石油ストーブを用意した。勿論倶楽部自体は色々な形で会合を持ち、常に有効適切な使用をしているのであるが、最近の重なる会合をあげれば次のようなものがある。



故名誉社員前原準一郎氏を偲ぶ会

桐生ユネスコ協会と共同主催

昭和三十九年十二月二十日

奥野信太郎氏講演会

慶応大学・桐丘短大教授

演題 交際について

昭和四十年二月の月次会

高木三郎氏講演会

桐丘短大教授 元宮内省参事官・満州国尚書府秘書官・内閣恩給局長その他

演題 満州国秘話

昭和四十年四月十五日月次会

名誉社員齊藤長平氏藍綬褒賞受賞祝賀会

昭和四十年六月二十一日

服部修（倶楽部事務員）製作スライド

「美しき倶楽部」発表会

昭和四十年十一月二十四日

その他

- ① 読書懇話会（前原理事担当）
- ② 経済懇話会（吉野理事担当）

③趣味懇話会 (斉藤理事担当)

④娯楽の会 (囲碁・将棋・マージャン等)

の諸会が常にロビーその他で行なわれた。その他の会合に就いては「会報発刊」の項で詳述する。昭和四十年四月二十日には、碁盤・碁石・碁石入一式を購入、ロビーに置いて社員の使用に供した。

会館使用に就いては内規があったが(注参照)昭和三十六年八月七日の理事会で次の事項を定めた。

① 次の場合は使用料金三割引とする。

① 使用団体の責任者、若しくは責任者に準ずる者が社員である場合。

② 社員が個人で使用する場合。(結婚式等)

③ 使用団体内社員が過半数若しくは半数近くを占むる場合。

② テラス使用料は五百円とする。

あずまやは三百円。

③ 芝生は原則として貸与しない。

止むを得ない場合は、理事長又は常務理事等の特別許可によること。

(注) 一

使用規定 抜萃

一、使用時間延長の場合には係に通し承認を得ること。

二、本館には二十二時以降在留することを得ず。

- 三、使用中紳士たるの体面を失し不徳と認むる行為ありたるときは退館を求むべし。
- 四、使用者本館の物品を汚損したる時は相当補償すべし。
- 五、社員外の者本館を使用するには社員の紹介を要するものとす。
- 六、会館使用に付き紹介をなしたる社員は使用者の行為に付一切の責任を負うものとす。
- 七、燃料其の他の需用品は実費を申受くべし。
- 八、左の目的の爲め本館を使用することを得ず。
  - 一、営利を目的とする売買の会合。
  - 一、政治上の選挙に関する集會。
  - 一、理事者に於いて不都合と認めたる時。
- 九、社員外の使用料は前納のこと。
- 十、集會者定員以上に及びたる時又は時間延長の場合は相当割増金をを申受くべし。
- 十一、原則として準備並に後始末を使用時間に加うるものとす。
  - 開扉 九時
  - 閉扉 二十二時
  - 一月一日(五礼会後は休館とす)
  - 一月二日、三日 定時休館
  - 八月十五日、十六日 定時休館
  - 十二月三十日、三十一日 定時休館

次に創立当時制定された「使用規定」全文を掲げる。

使用料金など参考資料として興味があろう。最後に玉突料金も記録されていたが、これは玉突の所に参考資料として掲げたので、ここでは省略した。

(注) 2

桐生倶楽部使用規定

第一条 本倶楽部の会館は毎日午前九時開扉し午後十時閉扉するものとす。

但時宜に依り開閉時限を伸縮することあるべし

第二条 定時休館は毎年十二月三十日・三十一日の二日間とす

但臨時休館を為すときは前以て掲示すべし

第三条 本倶楽部会館の各室を共用専用の二種に分ち共用室は談話室、球戯室、図書室、食堂とし其の他の各室を専用室とす

第四条 共用室は開扉時間中部員は何時たりとも此規定に遵い共同使用しなほ家族及知人を誘引することを  
を得

但被誘引者部員共用の妨げを為さしめざることに注意するを要す

第五条 部員及其被誘引者は閉扉時間後は書記の承諾を得ずして在留することを得ず

第六条 共用室は使用料を徴収せず専用室は本倶楽部所定の使用料を徴収するものとす

第七条 専用室を使用せんとするときは予め申込を為し承諾を得べし

但此場合に於いて先約あるときは謝絶することあるべし

第八条 本館の全部を専用せんとするときは理事長の許諾を得べし

第九条 部員の紹介ありたるるとき差支なき限りは部員外と雖も本館専用室を使用せしむることあるべし

第十条 左に掲ぐる目的を以て本館を使用することを禁ず

一、営利の目的を以て物品の売買を為す会合

一、営利的遊芸会

一、公衆に対する演説会

一、選挙其他に關する事務所

右の外集会の性質に依り使用を謝絶し及使用中と雖も之を停止謝絶することあるべし

第十一条 本館専用予約申込に対し其集会の性質又は事情に依り使用の区域人員等を予算し申込の際使用

料の前納を要求することあるべし

第十二条 本倶楽部は西洋料理及酒類を常備し来館者の求に応じ常備なき飲食食品は本倶楽部の指定し置きたる飲食店中より其請求に随い持込みしむべし 本倶楽部の承諾を得ずして飲食物を持込みしめ又は持参することを得ず

第十三条 被誘引者の諸仕払金は渾て誘引者に於て本倶楽部に対し納附の責に任すべし

第十四条 本倶楽部会館の使用料及各料金は別表に之を定む

第十五条 来館者飲食其他必要の物品を要求せらるるときは所定の用紙に記入し事務所へ申込むべし

第十六条 来館者にして他の来館者に迷惑を及し又は風紀を害する行為あるときは退館を求むべし

第十七条 来館者本倶楽部の裝飾品又は器具等を汚損したるときは相当の補償金を仕払ふべし

本倶楽部会館全部の使用料

全部を通して使用するもの

金五拾円 (第二談話室、球戯室を除く)

階下第一応接室の使用料

昼間 金五円 夜間 金七円

昼夜を通して使用するもの 拾二円

二階会場使用料

昼間 金拾円 夜間 金拾五円

昼夜を通して使用するもの 二拾五円

但し灯料は実費を請求すべし

## 土地問題

桐生倶楽部の現在所有する土地は八百九十一坪七合四勺であり、昭和四十年の桐生市評価額では四百七十二万八百円となり、建物は

① 倶楽部本館 木造モルタル塗瓦葺 百四十六坪六合

② 居宅 木造瓦葺 十七坪八合

③ 物置 木造トタン葺 七坪五合

であり前記評価額は百二十五万千六百円となっている。

この土地は、会館創設当時は

千六百五十九坪七合六勺

あったのであるが、後倶楽部の財政不如意から売渡されたもの四百八十三坪六合三勺あり、さらに道路その他のため寄附したもの二百八十四坪三合九勺あり、結局今日の坪数になったものであるがこの先人の遺産を完全な記録にとどめるべく長沢理事長は各種の調査研究を行なった。

昭和三十五年九月六日、所有土地境界線の検討をなすべく、斎藤長平三代理事長は十数年にわたる倶楽部の責任者であったので、その説明を求めため来館を請い

① 桐葉軒との貸借関係

② 夜警小屋（後に消防具置場）との関係

③ 南側トタン塀外側の土地

等に就いて明確を期することにつとめた。

昭和三十六年五月五日の理事会で、桐葉軒土地問題に就いて次のような報告がなされた。

① 昭和十一年十二月十四日附で契約した土地は百二坪六合となっている。

② 現在実際使用面積は百三十坪五合五勺であるから、その差二十九坪七合五勺が今迄無断使用されてきた事になる。

③ よって今年五月から地代として月額三千元を徴集すべきである。

これより先南側土地に就いて調査の結果、トタン塀が一米八十七センチ（六尺）も食い込んでいることが判明、これを取払って新しくブロック塀を建てることにした。又戦争当時の夜警小屋が消防具置場となり、火の見櫓もあったが、それを除去するために再三交渉の結果、取りこわしの手間を倶楽部払とし、材料は消防団側に提供する事で解決をみた。

昭和三十八年十月四日には、隣地藤井竜二郎氏宅のガス管が無断で二十六米にわたって倶楽部敷地を使用している事を発見、調査の結果何等手続のない事がわかったので、藤井氏との間に当分使用を認める事としての土地使用許可願を提出せしめた。

又北側道路に面したポンプが、直接井戸に取り付けられたものでない事がわかり、その元を探ったところ、道路スレスレの所に井戸があり、それからパイプで引いている事を発見した。道路及びその前面の土地が倶楽部のものであった事を示す資料となったのである。これらの土地売買に就いての記録は大体明確に遺されているが、最後に桐生市から寄附を求められた約一坪半の土地に就

いては判然としないが切り売りの間、その一部だけが売れのこっていたものようである。創立当時そのままを望むべくもないが、もし道路だけに寄附し、他の土地が倶楽部に現存したならば、倶楽部の今後の隆昌は想像以上のものがあつたにちがいない。外部から無収入の倶楽部の経済を救うための止む得ない手段ではあつたであろうが、多くの土地を失つた事は遺憾と言わざるを得ない。

次にその変遷を表示してみる。

桐生倶楽部敷地総坪数（昭和三十九年二月五日調）

字名	地番	坪数	権利取得年月日	備考
常木	二四〇―三	三・〇五	大正七・一〇・二二	後に地目変更及分割等により昭和二年一月四日宅地決定
高田	二四三―二	一〇七・七〇	大正七・一〇・二二	
高田	二四三―一	三四・二七	大正七・一〇・二二	
高田	二四三―四	一・〇五	大正一四・七・一〇	
阿武久田	二七〇―一	二九五・五五	大正七・一〇・二二	
阿武久田	二七〇―一四	三〇・二〇	昭和一一・一〇・三〇	
阿武久田	二七〇―一六	二五・九五	昭和一一・八・八	
阿武久田	二七一―一	三六九・五五	大正七・一〇・一〇	
高田	二四三―一五	二四・四二	昭和二三・五・三一	
合計坪数		八九一・七四		



売渡土地總坪數

字名	地番	坪數	所有移轉年月日	寄附先	備考
阿武久田	二七〇—四	七・七〇坪	昭和二年七月一日	片山久之助	
阿武久田	二七〇—五	四・五〇	昭和二年七月一日	上田信次郎	
阿武久田	二七〇—六	〇・八八	昭和二年七月一日	上田信次郎	
阿武久田	二七〇—八	二・五一	昭和二年七月一日	齊藤芳雄	
阿武久田	二七〇—五	一・五〇	昭和二年七月一日	前原卓太郎	図面不明
阿武久田	二七〇—一〇	一五・六〇	昭和二年七月一日	高田又十郎	
阿武久田	二七〇—一一	五〇・一八	昭和二年七月一日	内務省	道
阿武久田	二七〇—一六	二〇〇・三〇	昭和二年七月一日	藤井竜二郎	
阿武久田	二七〇—一七	二〇〇・三七	昭和二年七月一日		
阿武久田	二七〇—一三	四八三・六三		酒類小売商業組合	
阿武久田	二七〇—一	一・四〇	大正五年六月八日移	同	
阿武久田	二七〇—七	二三二・一二	大正三年二月三日移	同	
阿武久田	二七一一三	五二・六五坪	昭和三年二月三日	内務省	道

寄附土地總坪數

## 会 報 発 行

	阿武久田	二七〇一二			一・七〇				
	高 田	二四三一一〇		昭和 四・	一・七二		大正一五・	三・二〇	桐 生 市
	高 田	二四三一一		昭和 四・	五・八〇		一五・	六・五移	内 務 省
	合計坪数	二八四・三九		昭和 四・	九・一三		同	同	同

倶楽部の宣伝不足は色々な面で倶楽部の発展をさまたげ、あるいは誤解を招くことにもなるので会報を出すことによって社員相互の理解を深め、一般への宣伝に供しようというのは長沢理事長の長い間の念願であった。それが実を結んで昭和四十年十二月にその第一号を発刊することになったその「発刊のことば」の中で長沢理事長は

- ① 未知の人たちへのPR
  - ② 何かの用で出席出来なかった社員諸賢への連絡
  - ③ これまでの行事やこれからの行事予定
  - ④ 社員諸賢の希望や論評随想などの発表場所としての活用
  - ⑤ これによって社員相互の親睦が増し、桐生倶楽部発展の一助
- ともなればこれにこしたよろこびはないと述べているが、まさにその通りと言わざるを得ない。お

なじページに前原勝樹副理事長は「倶楽部へお出かけ下さい」と題して、PR不足や運営の在り方が外部に誤解をもたらしているとして、倶楽部を活用すべき事を求めている。

この会報の発行によって、桐生倶楽部活動の全容を知ることが出来て、誠に貴重な役割を果たしていると言えるのである。

四頁だてのB5版の会報第一号二、三頁には、倶楽部活動を詳細に報告し、しかも前原勝樹氏の名筆は読者をして飽かしめない。その中の一節を次にかがげる。

土曜懇話会報告五月（第三五回）

△矢野目源一先生を囲んで▽

矢野目源一はユーモア作家でフランス小噺なんかで知られている。御本人は生体電気学とかが専門だそうであるが、実はクスリ売りであったというお笑いの一席であった。

「私は八十一才であるが、女房は四十才で、何時でも応じてくれる臨戦態勢にある。」

又曰く「親の言うことをきかぬ倅を全学連というが、諸君は全学連の心配はありませんか。」とくる。少々この心配のある社員が多かったのか、随分クスリが売れたようである。よくみると松葉と真珠貝の粉末を練りあわせた丸薬のようであったが、お買求めの方の効果のほどは、一向に報告がないのでわからない。――

と言った調子で、この日の来会者三十五名という土曜懇話会最大のヒットであったと書いている。

土曜懇話会や月次会報告その他一切の行事はすべて会報によって社員に広告された。中でも土曜懇話会は多方面にわたって開催され、三十二回目には「期待される人間像」に就て桐生ユネスコ協会との合同討論会、三十三回は「古川柳を観賞する会」次は桐生タイムス木村社長を囲んで「ニユ

「スの裏話をきく」三十七回は「盤景を觀賞する会」、次が「森喜作氏を囲む会」さらに「桐生碑の行方」と題して桐生の名宝をたずねる会。四十回には「皇太子のライスカスレー」と、年間を通じてのたゆみない努力が続けられた。

(注) 「皇太子のライスカスレー」 皇太子殿下が桐生市を公式訪問された時の昼食がライスカスレーであったというので、その時の調理人「いざわ」の主人に申込んだところ、十八人分だけなら——という。それも一回にわけてということ、食器も皇太子御來桐の時のままというコリ方。給仕は伊沢主人自らでしかも説明つきで大好評であった。

会報第二号には遠田安蔵氏は「倶楽部と私」という題で、倶楽部の会館が建てられた当時の事を書いている。

「私が桐生東尋常高等小学校に入学した頃桐生倶楽部の建物がたてられました。濃いオレンジ色の屋根に、赤味がかかったクリーム色の壁、附近のくすんだ背の低い家屋に比べてその異国風な建物はとてもきれいでした。」

その頃小学校の正門の前に組合教会が出来、そこから左手遙かにおぼけ柳と赤い鉄橋を汽車が走るのが見えたという。特に当時の倶楽部活動の一面を語るものとして、レコード・コンサートやマンドリンの演奏会などが倶楽部にあると、音楽の教員が生徒をつれて聞きに來たと記されている。

昭和四十一年二月の土曜懇話会は北川好雄氏を囲んでの「歯医者のお話をきく会」であり、五月には「百二十才長寿法」を重田寛氏から聞き、四月の月次会は「強精薬をめぐる最新の問題」であり、妙に年令を思わせるものが重なったが、絵画同好者の会、俳句趣味の会と若さいっぱいの会も發展。七月二十二日には「美術グループ」が誕生した。

こうした記録の一切と新入社員の写真入り紹介など詳細に報告の役を果し、随想・所感等見るべきものが多い。

昭和四十一年九月二十六日の総会で、長沢理事長退陣、前原一治新理事長が誕生したのである。顧れば長沢理事長就任以来五期十年間、誠に多難というべき倶楽部の経営を完全な軌道に載せ、さらに内外設備の充実をはかったことは、倶楽部史上永久に記録さるべき大功績であった。それをさらに内にあって倶楽部活動を拡大強化したのが前原勝樹副理事長であって、内外人を得た事が、一度危期にたたされた倶楽部に活路を開かしたのであった。"ワンマン経営" "うるさ型"等の悪評をかけたが、長沢・前原の名コンビが、倶楽部の今日を築きあげる原動力となったことは否定出来ず、両氏の存在がなかったならば、あるいは今日桐生倶楽部は第三者の手に移管されていたかもしれない。しかも十年の長年月を倦むことを知らず文字通り "十年一日" の如く倶楽部のために努力を払った長沢・前原両氏の努力は、倶楽部会館の存続する限り永遠に記憶されねばならない。又両氏と行動を共にした平野会計理事外各理事諸公の協力もあわせて記録されるであらう。

(附記) 長沢理事長は昭和三十七年四月十七日「桐生市史」篇纂のため十年の歳月を、知る人ぞ知るあの図書館楼上の小部屋にたてこもって、遂にその完成を見るにいたった八木昌平翁の功績を讃える会を開いているが、今自ら編集委員長として陣頭にあり、その感や如何。

昭和四十一年一月二十五日岡田昇社員(計理士)から長沢理事長に対し次のような意見書が出ているので参考までに次に附記する。

桐生倶楽部社員総会用決算報告書に対する意見

本来桐生倶楽部の如き民法三四条にある公益法人は、商法による営利法人とは異なるので、総会用決算報

告は、損益計算書、貸借対照表を主体とした営利法人的決算報告でなく、公益法人の基本法たる民法第五一条に明示されている如く、財産目録、収支計算を主体とする公益法人的決算報告をなすべきが本来のあり方であろうと思います。

しかし近時公益法人も経済活動が活発化し、営利法人的傾向も見られるので、その会計記録は複式簿記にて整理し、参考として損益計算書、貸借対照表を作成することは必要であろうと思います。

## 前原理事長と委員会活動

昭和四十一年九月二十五日、二十六号台風襲来。倶楽部も大きな被害を受けた。そのあと九月二十六日臨時社員総会を開いて理事十五名を改選。十月四日新理事登記、同月八日の理事会で前原一治氏新理事長に就任。小池久雄氏副理事長となった。小池副理事長の出現は倶楽部人事の若返りという意味で好評であった。

前原新理事長は桐生倶楽部創立当時の功労者前原悠一郎氏の令息で、四期十六年にわたる桐生市長としてその令名がたかかっただけに、倶楽部理事長としての手腕は大いに期待された。昭和四十二年一月二十六日の社員総会では新理事長を迎えて活発な論議が展開され、

- ① 監事を設けてはどうか。
- ② 婦人社員の入会賛成。
- ③ 文化活動を活発にして、県や市から認識されるようにして欲しい。

などの意見があり、②の具体案は理事会一任という事で今後の発展に大きな期待が寄せられた。

昭和四十一年十一月七日の理事会で決定された文化、行事、管理、広報各委員会の外に四十二年二月の理事会では、倶楽部五十周年記念委員会、定款改正委員会の設置を決定、活発な行動に入った。中でも前原勝樹氏を委員長とする文化活動委員会は俳句、美術、娯楽の各部門にわかれ華やかな活動を展開した。

ここで委員会委員長と委員とを紹介しよう。

①行事委員会 委員長 平野元吉

飯山清治 塚越平人 吉田展雄  
 藤井竜二郎 遠田安蔵 大槻円次  
 米田壽穂 小林昭三 五十嵐健雄  
 福田昭吉 武藤聡文 坪野茂  
 角田定次郎

②文化活動委員会 委員長 前原勝樹

俳句 森口順四郎 岩下才一郎 小玉澄男  
 美術 斎藤喜平 古川三雄 須賀武次  
 娯楽 森島秀 岸田英作 栗本博恭  
 木村博一 大森貞夫

③広報委員会 委員長 木村貞一

小池久雄 野田友次郎 丸山正一

蓮 幸 男 青 木 次 郎

④管理委員会 委員長 長 沢 義 雄

川 村 佐 助 花 桐 逸 策 吉 野 一 郎

新旧入れまじったこの委員構成は、倶楽部活動に一脈の生気を導入したと言うべきである。クリスマスも年々盛大になって、桐生倶楽部会報第六号に木村貞一氏の雑感があり、その中で「斯く申す私など、実は二、三年前まではクリスチャンでもありませんのに「クリスマス」なんて……：といった風な冷やかな傍観者の一人だったが、今では結構、熱心な共鳴者になってしまったようだ。」と言っており、出席者数も

社員及び同伴者 百十六名

幼児 二十一名

招待その他 四十二名

計 百七十九名

と盛大を誇り、会場に入り切れない状況であった。さらに新年互礼会にも「各界代表スピーチ」として

政界 国会 長谷川 四 郎

県会 蓮 沼 治 郎

市会 遠 藤 俊 一

織 維 花 桐 逸 策

機械金属 早 川 政 雄



教 育 森 口 順四郎

医 学 山 川 忠 雄

青 年 米 田 籟 穂

の諸氏が挨拶している。参会者六十八名。創立当初の盛会を偲ぶ思いがする。  
句会も同志の結束かたく秀作も多い。

一面の枯桑畑人居らず

順四郎

石仏の頬に日脚の伸び給う

廢坑のただ松蟬を聞きしのみ

水白し滝となるとき自ら

孩 子

滝壺に再び青くなりし水

的を得し矢の音のある端居かな

転ずれば紅葉の中の一部落

吟 干

ここに又小さき流れ春の雪

街道の川辺に沿いて竹の秋

小豆干す盥と語る句碑のこと

梅松居

惣門の閉ざされてあり日脚のぶ

福寿草庵主は見えず日向像

治 作

温泉の町に続く林道雪まばら

押されつつ掌を合せけり酉の市

詩 果

娘へ便り津軽の野べも夏来しや

あきら

順四朗は森口順四郎、孩子は小玉澄男、吟干は岩下才一郎、梅松居は前原勝樹、治作は大沢治作  
詩果は北川好雄、あきらは岡田晃の各氏である。

昭和四十二年三月に行なった社員に対する「趣味アンケート」もまた興味ある一つである。これは文化活動委員会が、その会員に対して行なったもので、次の結果が出た。

A 趣味のベスト10

- ①ゴルフ 四九人 ②マーじゃん 三八人 ③ドライブ 二九人
- ④囲碁 二六人 ⑤絵画 二五人 ⑥俳句 二五人
- ⑦旅行 二四人 ⑧小唄 二二人 ⑨謡曲 二二人
- ⑩写真 二一人

B 項目別ベスト3

- ①絵画 ②俳句 ③写真
- ①小唄 ②謡曲 ③ダンス
- ①麻雀 ②囲碁 ③将棋
- ①ゴルフ ②ドライブ ③旅行
- ①歌舞伎 ②美術 ③音楽(クラシック)

C 運転歴

- 一年～一〇年 二〇名 一一年～二〇年 一〇名
- 二二年～三〇年 三名 三一年～四〇年 三名

四一年〜五〇年

なし

五〇年〜

一名

最後の一名は運転歴五十四年の春山善吉氏で、大部分が戦後の免許であり、回答社員一二五名中免許証所有者は三十七名であった。

同年三月十九日には美術グループが谷川岳に雪山写生会を行なう。参加者十名。五月二十、二十一日は第三回絵画展。名誉社員の斎藤・大川両氏に長老山川忠雄氏らの出品、落合喜一郎、田代定四郎、森正雄氏らの傑作が会場に花を添えた。ついで六月十一日には修道院写生会。

五月二十日にはガーデンパーティを開いて四月の統一選挙に当選した社員十名の祝賀会を兼ねて一夕を楽しんだ。午後五時から六時まで二階広間でユーモアクラブから来桐した長崎拔天氏の話聞き、六時から庭園に移って和やかなパーティを開いた。当選議員の中から県会蓮沼治郎、市会町田忠一、遠藤俊一、杉野昇各氏のスピーチがあり、斎藤長平名誉社員の音頭で乾盃。参加者八十名が目に見る新緑の庭園で飲を尽した。

七月二十五日。家族納涼会を開いて生ビールの飲み放題、飲まない人のためには水沢のうどんやおにぎり、アイスクリームと盛り沢山。子供のためには西瓜割りも用意したが不幸雨にたたられて参加者九十二名にとどまった。

同年七月二十九日には「囲碁の会」結成。これは前記アンケートの結果生れたもので次のような約束をきめた。

- 1 毎月原則として毎水曜日午後五時より倶楽部ロビーに於て手合せを行なう。
- 2 会員のレベル向上並びに初心者指導の為適当な指導者をお願いする。
- 3 春秋二回大手合わせを行なう。

4 部内事務処理のため、左記の世話係を設ける。

斎藤、木村、米田（記録）武藤（会計）会員数二十一名であった。

昭和四十二年七月三十一日、ガーナ大使エスピー・オー・クミ氏、姪二人を同伴して桐生市を公  
式訪問。倶楽部で少憩した。

同年九月二十二日は、今はなき南川潤理事の十三回忌をむかえ、かつての青年部員たちが集まっ  
て墓参。遺族と数々の思い出話に花を咲かせた。

桐生倶楽部会報八号に文化活動委員長として前原勝樹博士は、南川氏との関係を書いたあと、

「私の夢としては、文化活動委員会が主管して、南川潤選集の出版もしたいし、文学碑なども建  
てたいと思っている。無法者の坂口安吾に押しつぶされている南川潤の遺業を回復する事は桐生文  
化人の責任であり、その先鋒となるのが倶楽部の文化活動委員会であると思う。」  
と結んでいる。

倶楽部創立五十周年を記念するために発足した委員会は着々とその歩みを進め、九月四日、十月  
十七日、十一月二十二日と会合を開いて行事予定を定めそれを実行に移した。十二月二日から二十  
日間にはわたって記念事業の一つである暖冷房工事がまず完成。五十年史刊行委員会もしばしば会合  
を開いて協力を誓い合った。

月次会も毎月順調に開かれ、

九月 日本レィオン 平田次郎氏

ユーゴの話聞く

十月 代議士 長谷川四郎氏

政界よもやま話

十一月 桐生高工教諭 天利秀雄氏

文化財をめぐる

十二月はクリスマスなどの関係で休みとした。十二月には園田昇氏らを中心として将棋部が結成され、入会金千円、会費一か月百円とし、世話人を次の諸氏と定めた。

太田兼吉 遠藤俊一 金子節次 正田英二  
吉田展雄 武藤聡文 平野元吉 園田昇

## 前原理事長急逝

年は明けて昭和四十三年となり、ここに桐生倶楽部は一大悲報に心痛んだのである。すなわち現理事長前原一治氏の急逝である。

正月二日風邪気味で休養をとっていたよしであったが、十三日夜から腹部異常を訴え、十四日午前厚生病院入院、直ちに手術。しかし時すでにおそく十五日午前一時十六分、遂に不帰の客となられた。病名は急性腸間膜動脈栓塞症及腹膜炎ということであった。元旦の互礼会には元氣な姿で出席された理事長が旬日にして幽明境を異にせんとは。

前原理事長は、早稲田大学を終えて父業を継ぎ業界で活躍。さらに政界に入って市会議員となり市会副議長から市長選に打って出て当選。名市長の誉高く前記の如く四期十六年の長期にわたって文化市長としての令名を確保した。その間広く庶民と膝を交えて歓談し、その温顔は多くの市民に親生まれ、その退陣を惜しまれた。社会教育にも大きな関心を払い、桐生市社会教育協会を設立、青少年教育のために努力、産業文化会館を建設し、生活改善委員会の発展に寄与し、全国にその範を示しなどした市政の功績は大きい。

外遊して帰桐後「花いっぱい運動」を展開。さらに「老人福祉センター」の建設に乗り出し、外遊中見聞した企画を着々実行に移したのである。ともすれば形式的文字通りの「外遊」に終るものが多い中で、前原市長のこの業績は何といっても抜群と言わざるを得ない。

昭和二十九年桐生倶楽部理事となり、四十一年九月の改選で理事長就任、全くまだ倶楽部としては、その計画実現の緒に就いたばかりであって、特に五十周年記念を迎えるに当り大きな抱負を持って居たであろう事を思えば誠に惜しみても余りある事であった。同月二十二日桐生市最初の「市民葬」として盛大に厚く葬られたのである。

父子二代にわたっての倶楽部に対する功績は永久に讃えられるべきであろう。

前原理事長逝去により倶楽部は緊急理事会を開き、当分小池副理事長が理事長の代行をすることに決定した。

一月二十九日社員総会を開いたが、開会前に理事会を開き後任理事長問題を討議し、川村佐助氏を推したが、川村氏は固辞して受けなかった。二月九日の理事会で再び川村氏の理事長出馬を懇請し、漸くその快諾を得た。同時に現理事全員の任期を十一月の五十周年式典まで延期する事に承諾

を得た。

任期延長の方法に就いては

①現定款の一部改定説

役員任期は二年、但し場合により三カ月以内に限り延長することができる。  
とする案と

②九月改選の時全員再選の形をとり、登記して十一月の式典終了後総辞職する。  
との二案が出て討議されたが、②案に賛成多く、それに従うことに決定した。

## 川村理事長出馬

桐生市財界の大立物川村佐助氏は人も知る糸業界の大御所で、巨万の利益を得てはその幾分かを  
必らず市のために寄附し、特に貧困者や特定の事業にその使用方法を求めているという誠に珍らし  
い存在である。その郷里（岐阜県）に於ても同様の奇特な行為によって「名誉町民」の称号を与え  
られているという。

川村氏の就任はおそきに失した観もあるが、氏は己れを知ること強く、事業以外に意を注ぐこと  
をよろこばず、道徳科学の教えに従って營々と努力を続けて倦むことを知らない態度が、何処の会  
合にも出席しながらその長となり指導者となることを拒否し続けて来たのである。しかし倶楽部の

現況、即ち前原理事長の急逝と、五十周年記念の大事業の前に、さらに理事諸公の懇請もだがた  
く遂に出馬の止むなきに至ったものであった。

理事長に就任決定するや二月十四日小池副理事長を帯道して重要な役所・銀行・その他の挨拶回  
り、二月十九日には理事会を開いて五十周年記念事業に就いての募金の件を相談し、三月四日の理  
事会で重ねて同問題に就ての検討を行ない、次の件を決議した。

入会金値上げの件

来月から入会金を次のように改める。

- ①個人社員 一万円
- ②法人社員 一万五千元

三月二十六日には三月月次会として「お茶の会」を開き、川村理事長夫人を中心に日本茶道会桐  
生支部の会員の諸氏による茶会立礼を行なった。

倶楽部事務員服部修氏は愛する郷土桐生を絵画として記録にとどめる事を念願し多年研鑽を積ん  
で来たが、その第一回個展を新装なったシマ画廊に於て開いた。三月中旬の土・日曜を利用したの  
で千五百人以上の参観者があり、四月二十日にはNHKテレビがこれを取り上げて「郷土をえがく  
アマチュア画家」として放映した。服部氏の念願は「桐生百景」を描いて後生に遺すことにあるよ  
しで、桐生の美しい景色、滅び行く古きよき時代の建物などを描いている。

四月二十一日、桐生倶楽部五十年記念座談会を開いた。出席者は次の各氏である。

名譽社員 書上文左衛門（二代理事長）

同 齋藤 長平（三代理事長）



同 大川 英三（名誉社員）

司 会 長 沢 義雄（五代理事長、五十年史編集委員長）

編 集 中川 信彦

先ず第一部では創立当時の苦心談を中心に懐旧談を聞き、さらに第二部に入って、境野理事長以後の活動に就いて次の諸氏を加えて話題は展開した。

① 理事長 川村 佐助

② 副理事長 小池 久雄

③ 前副理事長 前原 勝樹

④ 会計理事 平野 元吉

⑤ 理事 齋藤 喜平

書上氏は桐生の旧家だけに話題も豊富で、江戸時代の有名な幡随院長兵衛が書上家の奉公人であったことや、その子分のデッチリ清兵衛、ネジガネの与次兵衛も桐生の人で、その子孫も桐生に居り、清兵衛の墓は浄運寺にあるなどの楽しい話が豊富にとび出した。それらすべてをテープコーダーに記録保存する事とし、上毛新聞社に依頼して速記者を招きこれを速記した。その記録を五十年史編集の一助とした。

四月月次会は四月二十三日開かれ、伊藤忠商事株式会社常務理事片桐良雄氏を招き国際経済問題について造詣深い話を聞く。氏の敵父は桐生の人。桐生に知人多く、東京税関長をつとめた。

昨年来の懸案として検討されて来た「桐生倶楽部内規」も、いよいよ決定をみたので会報第十号

に公表した。

内 規

第一章 運営規定

第一条 会計担当理事

倶楽部の会計を処理する為に理事の中より二名の会計担当理事を置く。

第二条 当番理事

各月毎に二名の当番理事を設ける。

当番理事は輪番制とし夫々その月の理事会、月例会開催の準備をし、又倶楽部の庶務を監督する

第三条 委員会

(1)本倶楽部に下記の委員会を設置する。

A 文化活動委員会

土曜懇話会、各種趣味の会、旅行等の文化、教養リクリエーション活動を担当。

B 行事委員会

クリスマスパーティー、新年互礼会、納涼会、ガーデンパーティー等の行事を担当。

C 管理委員会

会館（建物、設備）の管理。

D 会報委員会

会報の発行、倶楽部のPR。

E 特設委員会

理事長が特に必要と認めた場合に理事会の議を経て設置する。

(2) 委員は理事及び一般社員の中より理事長が委嘱する。

委員会には委員の互選により委員長一名を置く。

(3) 委員の任期は役員に準ずる。

(4) 委員会は委員長が必要と認めた場合、随時開催する。

委員会に必要とする経費は、特別のものを除き原則として倶楽部の本会計からは負担しない。

## 第二章 慶弔規定

第四条 社員の弔事、災害等に対しては下記の通りとする。

(1) 本人死亡の場合 花環一基

(2) 病氣見舞 一カ月以上にわたる病氣の場合見舞金(千円程度)

(3) 災害見舞 災害の程度により正副理事長及び会計担当理事で協議の上決定。

第五条 従業員の慶弔、災害等に対しては下記の通りとする。

(1) 結婚祝金

(2) 出産祝金

(3) 死亡弔慰金

従業員の同居家族(実父母、配偶者及び子女) 香典二千円

(4) 葬祭費 本人死亡の場合

(5) 病氣見舞金

一カ月以上にわたる病氣の場合見舞金 五千円

(6) 災害見舞金

災害の程度により正副理事長及び会計担当理事で協議の上決定。

第三章 服務規定

第六条 従業員の休日は下記の通り。

- (1) 毎月四日間（内二日は日曜、二日週日）
- (2) 八月十五・十六日
- (3) 十二月三十・三十一日

一月一日は出勤し、互礼会に支障のないように勤務する。

第七条 毎年一回四月に昇給を行う。

第八条 毎年七月及び十二月に賞与を支給する。

附則 この内規は昭和四十二年十一月より実施するものとし、その改訂は理事会に於て行うものとする。（注参照）

昭和四十三年五月二十七日には行事委員会によってガーデンパーティーが開かれ、

寿司屋（わかな）

そば屋（一茶）（第八山本）

オードブル（長尾）

枝豆、そら豆、焼とりなど

カクテルコーナー（オスカー）

飲み物 (遠田商店)

というプログラムで、恒例による飲み放題、食べ放題の会を開いた。出席者四十七名であった。

又六月月次会として六月十七日に「交通法規改正に就て」の座談会が開かれ、七月一日から実施される反則金制度に就て次の両氏を招いて懇談した。参加者五十名。

講師

桐生警察署長

多胡 勝

桐生警察署交通課長

持田 祐治

囲碁の会は五、六の二カ月にわたって毎週水、土の二日大手合を行ない、激戦の結果優勝者山根波次氏に理事長盃が贈られた。準優勝者は森口量氏。参加者十九名であった。

(注) 「内記」と称するものが色にあって、時代の変遷を物語るものとして興味がある。創立当初のもの、長沢理事長時代に手を加えたものなどを左に掲げる。

#### 桐生倶楽部内規

第一条 本倶楽部は定款第三条第一項乃至第四項の目的を遂行する為め毎月一回部員月次会を開く

但部員に限り知人を誘引することを得

第二条 月次会は理事中より常務三名を互選し之を処理する其任期は一箇年とす

第三条 月次会に出席したる会員は特に会費金一元を徴収す

但し会費は時宜により実費負担と為すことあるべし

第四条 本倶楽部は毎年一月五日部員新年宴会を開催すべし

但会費は出席会員の負担とす

第五条 部員中海外旅行者あるときは月次会に招待し送迎の意を表すべし

第六条 本倶楽部は部員に部員章を交附すべし

第七条 部員は其氏名住所に変更を生じたるときは必ず本倶楽部に通知すべし

第八条 部員は本倶楽部会館を使用するときは使用規定を遵守するものとす

第九条 部員中死亡したるときは遺族は直に本倶楽部に届出るを要す

第十条 本倶楽部の内規及使用規定管理規定の加除変更は理事会の決議を要す

（社団  
法人） 桐生倶楽部内規（現行）抜萃

第一条 毎日午前九時より午後十時まで（日曜日及祭日も同様）開館する。

第二条 一月新年互礼会終了後より三日まで、及び八月十五・六の両日、十二月三十・三十一日の両日等を休館とする。

第三条 会館使用時間延長の場合は事務職員を通じ承認を求めること。

(2) 会館使用中紳士たるの体面を失し不徳と認める行為があった場合は直ちに退館を求めることが出来る

(3) 使用者が会館の物品を汚損した場合は相当弁償すること。

(4) 社員外の者が本館を使用するには社員の紹介を要し、且つ臨時会費（借室料）を納入すること。貸室料は別に定める。

第四条 燃料其他の需用品は実費を申受ける。

第五条 次の目的のため本館を使用することは出来ない。

1 営利を目的とする売買の会合

2 営利を目的とする演芸会、講演会

3 政治上の選挙に関する集会

4 その他理事者に於いて不都合と認める集会

第六条 社員外の使用料は前納のこと。

第七条 集会者定員以上に及んだ時又は時間延長の場合は相当割増金を申し受ける。

第八条 原則として準備並に後始末を使用時間中に加える。

第九条 社員は中央ロビーを談話室として自由に使用出来る。此の場合同室の占用使用は出来ない。尚同室の定員の都合により他室を使用することは事務職員の指示により出来る。

第十条 来訪者との面接の便宜のため専用室、応接室を使用することが出来る。但し社員外の使用は禁止する。

第十一条 社員が特定の日時を予め定めて使用する場合は使用料を前納すること。使用料は別に定める規定による。社員は借室の場合の外一人に付五名以上の知友を誘引することは出来ない。

第十二条 食事を外部より注文する場合は何れの料理店を指名するも自由である。これらの指示は事務職員に命ずることが出来る。

第十三条 郵便電信電話等は受付に於いて受けける。電話は市内一 통화一〇円、市外は実費を申受ける。(2)長時間にわたる電話又は連続的電話の使用は他の社員その他の迷惑となるため禁止する。

(3)外来者の電話使用は禁止する。

(4)市外通話の節は必ず事務職員又は受付係へ氏名、先方番号、通話数、急報並報の別等を連絡すること第十四条 本倶楽部へ入会希望の場合は本社員二名の推薦及び理事会の承認を必要とする。

第十五条 社員は例会(月次会その他)への出席及び会費の納入を厳守すること。

## 五十年史編集終る

昭和四十三年七月三十日夜、桐生倶楽部に編集委員参集。最後の打合わせを行なった。長沢委員

長を初めとして小池、齋藤、丸山、野田の各委員と中川編集氏。原稿整理や、口絵写真から社員紹介、それに募集した社員各僚の「所感」の整理におそくまで仕事を続けた。どんな小さなものでも「生み出すこと」のむずかしさ、そしてそれが後年に遺るとなると、互いに責任を感じ、仲々思い切れないことなど話し合って、互いの分担を再検討した。心と心とのつながりが温かい何かをもたらずような心豊かな集りである。唯一人欠席の岸田委員は名物「夏まつり」の役員をしているのでとうとう出られなかったという。

沢山の写真と原稿が積み上げられた中で、小池委員は社員紹介の写真と原稿の配置に苦心する。丸山、野田の両委員が手伝って助言する。長沢委員長は中川氏と

「八木翁が桐生市史に二十年もの年月をかけて、当時の市会議員から色々文句が出たが、やってみると苦心の程がよくわかる」としみじみと語る。

服部、永井両事務員が、色々な用事でせわしく部屋に出入する。帳簿や書類の出し入れや調べ。これも大変な仕事だ。

そして夜は九時半をすぎて行った。

七月三十一日の委員会は「五十年記念行事」の成功を期して、次の各氏を実行委員に選任した。

桐生倶楽部五十年記念行事委員

委員長 長 沢 義 雄

委員 小 池 久 雄

川 村 佐 助



平野元吉

前原勝樹

吉野一郎

愈々「五十年史」も脱稿である。いざ脱稿となるとやはり何かと心のこりがある。何もかも未完の気がする。「五十年史」刊行の話がきまった時から色々研究を重ねていた長沢委員長は、最後に出版のすべてを「上毛新聞社」に依頼することをきめ、同社の三ツ松明営業部長、木村昭夫営業部内勤課長両氏の協力を得て、八月六日原稿を手渡したのである。今まで検討の対照として交渉のあった他の出版関係数社に対しては、決定の旨を通知して今までの労を謝した。

この稿を終るに当って、桐生倶楽部現況の総まとめとして、次の各種の表や名簿を、座談会記録・社員所感集・社員紹介・桐生倶楽部年表等と共に収めて五十年史を終ることとする。

① 桐生倶楽部現理事一覧

② 社員の入社順員数表

③ 社員年令別表

④ 歴代理事氏名及び役歴表

⑤ 歴代理事長及び功労者畧歴

⑥ 歴代事務職員氏名

⑦ 敷地、会館の変遷

桐生倶楽部現理事一覧 (昭和四三年七月現在)

氏名	任	期	社員歴(入社年)
川村佐助	理事	昭和四三・一	二一年(昭三三)
小池久雄	副理事	昭和四一・一	一九年(昭三五)
長沢義雄	理事	昭和四一・一	三五年(昭九)
平野元吉	理事	昭和四一・一	一八年(昭二六)
前原勝樹	副理事	昭和四一・一	一七年(昭二七)
花桐逸策	理事	昭和四一・一	二五年(昭一九)
斎藤喜平	理事	昭和四一・一	一九年(昭二五)
木村貞一	理事	昭和四一・一	二三年(昭二一)
森口順四郎	理事	昭和四一・一	二三年(昭二一)
吉野一郎	理事	昭和四一・一	一九年(昭二五)
塚越平人	理事	昭和四一・一	九年(昭三七)
飯山清治	理事	昭和四一・一	八年(昭三六)
森島秀	理事	昭和四一・一	一五年(昭二九)
吉田展雄	理事	昭和四一・一	四年(昭三九)

年号	人数	年号	人数
大正八年	一〇九	大正十四年	一
昭和二年	四八	昭和二年	五
昭和三年	四九	昭和三年	五
昭和四年	五〇	昭和四年	五
昭和五年	四七	昭和五年	五

桐生倶楽部現理事一覧 (昭和四三年七月現在) (カッコ内は法人)



理事 大沢福太郎  
 副理事長 前原悠一郎  
 理事 金子竹太郎  
 理事 森 宗作  
 理事 原田与左衛門  
 理事 書上文左衛門  
 理事 前原良太郎

1 大正七年九月

歴代理事氏名

平 均 五五・六歳  
 最高年齢者 八三歳 大沢治作氏(明治一八・三・七生)  
 最低年齢者 三一歳 保倉一郎氏(昭和一一・三・四生)  
 ☆参考 長沢義雄  
 森 正雄  
 二三〇 入社当時の最低年齢者  
 二五〇

年	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五
人	三	八	九	六	二	六	六	五	八	五	一
数	三	八	九	六	二	六	六	五	八	五	一
年	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四
人	四	三	二	一	三	六	七	九	九	六	五
数	四	三	二	一	三	六	七	九	九	六	五
年	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三六	三四	三三	三三	三二
人	三	二	一	八	二	四	二	二	二	二	一
数	三	二	一	八	二	四	二	二	二	二	一

理事 境野源八郎  
 理事 高村勝太郎  
 理事 齋藤正七郎  
 理事 前原準一郎  
 理事 佐々木伝吉  
 理事 福田兼吉  
 理事 小林利平  
 理事 福田常吉

2 大正九年九月二十九日（前者再選重任す）

3 大正十一年九月三十日

理事長 金子竹太郎  
 理事 前原準一郎  
 理事 藤江良作  
 理事 前原良太郎  
 理事 岩沢善助  
 理事 金谷芳次郎  
 理事 新井錠三  
 理事 福田兼吉  
 理事 神山芳次郎  
 理事 森普一郎  
 理事 松本武雄  
 理事 齋藤武助（後に長平）  
 理事 真尾源一郎  
 理事 小林克喜

4 大正十四年一月三十日

理事長 書上文左衛門  
 理事 真尾源一郎  
 理事 小林克喜  
 理事 齋藤武助  
 理事 松本武雄  
 理事 藤江良作  
 理事 新井錠三  
 理事 金谷芳次郎  
 理事 前原良太郎  
 理事 神山芳次郎

5 大正十五年九月二十八日

理事	木村偉三郎	理事	前原準一郎	理事	青木 專治
〃	金子竹太郎	〃	大川 英三		
理事長	齋藤 武助	常務理事	青木 專治	理事	金子竹太郎
常務理事	大川 英三	理事	野口 周善	〃	前原準一郎
理事	真尾源一郎	〃	須永 裁七	〃	金谷芳次郎
〃	藤江 良作	〃	書上文左衛門	〃	小林 克喜
〃	齋藤正七郎		神山芳太郎		
〃	森 宗作				

6 昭和三年九月二十八日

理事長	齋藤 武助	常務理事	大川 英三	理事	森 宗作
常務理事	青木 專治	理事	真尾源一郎	〃	渡辺 利七
理事	原勢 柳三	〃	不破 守二	〃	前原準一郎
〃	書上文左衛門	〃	藤江 良作	〃	小林 克喜
〃	青木 峰藏	〃	吉田善一郎		
〃	金子竹太郎				

7 昭和九年九月二十九日

理事長 齋藤 武助

常務理事 青木 峰蔵 常務理事 青木 專治 常務理事 大川 英三

理事 金子竹太郎 理事 森 宗作 理事 小林 利平

真尾源一郎 堀 祐平 書上文左衛門

吉田善一郎 前原悠一郎 朝倉富久寿

前原準一郎 茂木 米吉

8 昭和十一年九月二十九日

理事長 齋藤 武助

常務理事 青木 峰蔵 常務理事 青木 專治 常務理事 大川 英三

理事 書上文左衛門 理事 堀 祐平 理事 朝倉富久寿

森 宗作 小林 利平 真尾源一郎

金谷芳次郎 前原準一郎 大川 義勇

金子竹太郎 榎山 重吉

9 昭和十三年九月二十八日

理事長 齋藤 長平(武助)

常務理事 青木 峰蔵 常務理事 青木 專治 常務理事 大川 英三

理事 大川 義勇 理事 森 宗作 理事 榎山 茂吉

真尾源一郎 森 正雄 書上文左衛門

前原悠一郎 堀 祐平 飯塚 貞一

理事 朝倉富久寿  
" 吉田善一郎

10 昭和十五年九月二十八日

理事長 齋藤 長平

常務理事 青木 峰藏 常務理事 森 正雄 理事 朝倉富久寿

理事 青木 專治 理事 森 宗作 " 榎山 茂吉

" 真尾源一郎 " 前原悠一郎 " 書上文左衛門

" 飯塚 貞一 堀 祐平 " 大川 英三

" 吉田善一郎 大川 義勇

11 昭和十七年九月二十八日

理事長 齋藤 長平

常務理事 青木 峰藏 常務理事 吉田善一郎 理事 青木 專治

理事 榎山 茂吉 理事 森 宗作 " 森 正雄

" 真尾源一郎 " 前原悠一郎 " 書上文左衛門

" 飯塚 貞一 堀 祐平 " 大川 英三

" 朝倉富久寿 大川 義勇

12 昭和十九年九月二十八日

理事長 齋藤 長平



常務理事	青木 峰藏	常務理事	荻野 欽司	理事	大川 英三
理事	前原悠一郎	理事	吉田善一郎	理事	真尾源一郎
〃	青木 專治	〃	森 宗作	〃	金子竹太郎
〃	朝倉富久寿	〃	寺内 道次	〃	大川 義勇
〃	飯塚癸己三				

13 昭和二十一年九月三十日

理事長	齋藤 長平	常務理事	前原 一治	常務理事	境野 武夫
副理事長	大川 英三	〃	長沢 義雄	理事	前原悠一郎
常務理事	青木 登	理事	金子竹太郎	〃	榎山 茂吉
理事	青木 專治	〃	大川 義勇	〃	青木 峰藏
〃	荻野 欽司	〃	金子 正三		
〃	真尾源一郎				

14 昭和二十三年九月二十九日

理事長	齋藤 長平	常務理事	境野 武夫	常務理事	大川 義勇
常務理事	長沢 義雄	理事	前原 一治	理事	青木 登
理事	大川 英三	〃	真尾源一郎	〃	青木 峰藏
〃	金子 正三	〃	齋藤 源作	〃	下山観三郎
〃	青木 專治				

理事 秋山 賢止 理事 橋本 正治

15 昭和二十五年十月二十一日

理事長 境野 武夫

副理事長 長沢 義雄

理事 下山 観三郎

〃 大川 義勇

〃 岡田 守恵

〃 前原 一治

名譽理事 斎藤 長平

理事 大川 英三

〃 真尾源 一郎

〃 青木 專治

〃 小池 久雄

理事 橋本 正治

〃 秋山 賢止

〃 青木 峰蔵

〃 神谷 英司

16 昭和二十七年九月二十八日

理事長 境野 武夫

副理事長 長沢 義雄

理事 前原 一治

〃 前原 悠一郎

〃 小池 久雄

理事 下山 観三郎

〃 青木 峰蔵

〃 神谷 英司

〃 岸田 勇作

理事 斎藤 長平

〃 秋山 賢止

〃 川村 佐助

〃 小島 武次郎

17 昭和二十九年九月

理事長 境野 武夫 (昭和三十一年八月十五日死亡)

副理事長 長沢 義雄

理事 伊藤 秀一

理事 神谷 英司

理事	川村 佐助	理事	森田 勇治	理事	金子友三郎
〃	前原 勝樹	〃	平野 元吉	〃	小池 久雄
〃	増山作次郎	〃	前原 一治	〃	森 喜作
〃	南川 潤	(昭和三十年九月二十二日死亡)			
〃	吉野 一郎	(本人から辞退の申出あり除く)			

☆境界理事長死亡により次期改選まで長沢副理事長代行。

18 昭和三十一年九月二十八日

理事長	長沢 義雄	理事	平野 元吉	理事	神谷 英司
副理事長	前原 勝樹	理事	森田 勇治	理事	川村 佐助
理事	前原 一治	〃	金子友三郎	〃	花桐 逸策
〃	小池 久雄	〃	鈴木義一郎	〃	矢島 信次
〃	遠田 安蔵	〃	落合喜一郎		
〃	齋藤 喜平	〃			

19 昭和三十三年九月二十六日

改選の結果、全員再選重任

20 昭和三十五年九月二十六日

理事長 長沢 義雄

副理事長	前原 勝樹	理事	神谷 英司	理事	森田 勇治
理事	前原 一治	理事	川村 佐助	理事	金子友三郎
〃	平野 元吉	〃	花桐 逸策	〃	遠田 安藏
〃	矢島 信次	〃	小池 久雄	〃	齋藤 喜平
〃	落合喜一郎	〃	小林 秀内		

21 昭和三十七年九月二十六日

理事長	長沢 義雄	常務理事	神谷 英司	常務理事	森田 勇治
副理事長	前原 勝樹	〃	小池 久雄	理事	川村 佐助
常務理事	平野 元吉	理事	落合喜一郎	〃	花桐 逸策
理事	齋藤 喜平	〃	木村 貞一	〃	岩下才一郎
〃	森口順四郎	〃	春山 善吉		
〃	山下 正夫				

22 昭和三十九年九月二十五日

理事長	長沢 義雄	理事(会計)	平野 元吉	理事(会計)	吉野 一平
副理事長	前原 勝樹	理事	川村 佐助	理事	木村 貞一
理事	飯山 清治	〃	齋藤 喜平	〃	塚越 平人
〃	小池 久雄	〃	前原 一治	〃	森口順四郎
〃	花桐 逸策				

理事 森島 秀 理事 山下 正夫

23 昭和四十一年九月二十六日

理事長 前原 一治

副理事長 小池 久雄

理事 長沢 義雄

〃 齋藤 喜平

〃 木村 貞一

〃 吉田 展雄

理事(会計) 平野 元吉

理事 前原 勝樹

〃 森島 秀

〃 森口順四郎

理事(会計) 吉野 一郎

理事 塚越 平人

〃 飯山 清治

〃 花桐 逸策

歴代理事役歴表

氏名	理事長	副理事長	常務会計	理事	計	氏名	理事長	副理事長	常務会計	理事	計
金子竹太郎	四			一〇	一四	原田与左衛門				二	二
前原悠一郎		二		九	一一	境野源八郎				二	二
森 宗作				一	一一	小林 利平				六	六
大沢福太郎				二	一二	佐々木伝吉				二	二
前原良太郎				四	一四	齋藤正七郎				三	三
前原準一郎			一	〇	一四	福田 兼吉				三	三
高村勝太郎				二	一六	真尾源一郎				一	一
福田 常吉				二	一八	森 普一郎				五	五
書上文左衛門	一			二	二〇	金谷芳次郎				一	一
				三	二二					三	三
				二	二二					一	一
				三	二二					五	五

氏名	理事長	副理事長	常務會計	理事	計
新井 鏡三	二			二	二
藤江 良作	二			四	四
齋藤 長平				四	一六
神山 芳次郎				一	一
岩沢 善助				四	一〇
小林 克喜				一	一
松本 武雄				二	三
木村 偉三郎				四	六
青木 專治				一	八
大川 英三		一		二	二
野口 周善				六	七
須永 裁七				七	七
原勢 柳三				一	一
渡辺 利七				一	一
不破 守二				一	一
青木 峰藏				五	一
吉田 善一郎				七	四
堀 祐平				七	一
朝倉 富久寿				七	一
茂木 米吉				二	二
大川 義男				七	八
榎山 茂吉				一	一
森 正雄				六	三
平野 元吉				二	一〇
増山 作次郎				一	一

氏名	理事長	副理事長	常務會計	理事	計
飯塚 貞一				三	三
荻野 欽司				一	一
寺内 道次				一	一
飯塚 葵巳三				一	一
前原 一治	一			七	九
境野 武夫	三			一	二
青木 登				一	一
長沢 義雄	五			一	二
金子 正三				三	三
齋藤 源作				一	一
下山 鶴三郎				三	二
秋山 賢止				一	一
橋本 正治				四	三
神谷 英司				二	二
岡田 守恵				一	一
小池 久雄				七	〇
川村 佐助				七	一
岸田 勇作				一	一
小島 武次郎				一	一
森田 勇治				一	一
前原 勝樹				一	一
伊藤 秀一				三	八
金子 友三郎				一	一
小林 秀内				一	一
森口 順四郎				四	一

氏名	理事	計	氏名	理事	計
森 喜作	一	一	木村 貞一	四	四
吉野 一郎	三	三	岩下才一郎	一	一
遠田 安蔵	三	三	山下 正夫	二	二
花桐 逸策	七	七	春山 善吉	一	一
鈴木義一郎	二	二	飯山 清治	三	三
矢島 信次	三	三	塚越 平人	三	三
落合喜一郎	四	四	森島 秀	三	三
斎藤 喜平	七	七	吉田 展雄	二	二

参考

当倶楽部の風格を示すもの一つに社員推薦状がある。賛助委員はセビアの野に囲まれた半紙に、「本倶楽部定款第十条に依り、理事会の決議を以て費下を賛助員に推薦候也」

とあり、特別社員はグリーンの野で、第十三条と条文をかえただけで同文のものである。その欄外には定款の必要条文が抜きだしてある。

最近の新人社員選衡に当っては白黒の基石と黄ボタンで賛否中立の意志表示をすることにし、黒が一個でもあれば保留ということにした。

歴代理事長及び功労者略歴

- ① 生年月日 (故人は没年月日も)
- ② 出生地
- ③ 出身校
- ④ 事業歴
- ⑤ 倶楽部歴
- ⑥ 趣味
- ⑦ その他

初代理事長 金子 竹太郎（掲額）

①明治七年六月二十九日 昭和三十一年三月二十八日没八十一才

②桐生市

③藏前高等工業学校染色科

④両毛整織株式会社社長

⑤創立当初からの理事、理事長（大正七年九月から同十四年一月まで六年五カ月）

⑥書 画

⑦倶楽部庭園に氏の胸像を移して創立時代の苦心や初代理事長としての功績を偲ぶことにした  
同氏宅にあったものを長沢理事長時代に貰い受け、台座及び名標を付けたものである。東京  
専売公社病院で永眠された。辞世に曰く

郷里の機音聞かて旅路かな 翠竹

二代理事長 書上 文左衛門

①明治二十四年五月六日

②桐生市本町二丁目

③大正三年 東京高等商業学校卒業（現一橋大学）

④織物買継業

⑤先代文左衛門氏のあとを継いで懇話会時代から関係。理事、理事長（大正十四年一月から同  
十五年九月まで一年八カ月）



⑥ 古美術研究

⑦ 桐生有数の名門。その生活は大名のようであったと言われる。江戸の俠客幡随院長兵衛が書上家の小僧をしていた話や、昭和文壇の鬼才坂口安吾に邸内の一部を貸して、その晩年を共にした話は有名。若かりし頃のエピソードとして、県会議員に立候補した時の話が遺っている。その時の個人演説に「寺」を会場に貸り、開口一番「神は愛なり」と叫んでから政見を一席ブチまくったという。斎藤長平氏の談によれば「書上氏は神道、会場は寺、言うことはキリスト教。何の事はない三教チャンポン演説だ。」これに対して書上氏は八十の老齡にもかかわらず

「楽しかったね。もう一度やってみたい。自動車の屋根の上からでも演説してみたい衝動にかられるよ。」

往年の意気まさに天を衝くものがある。

三代理事長 齋藤 長平（掲額）

- ① 明治二十四年九月二十五日
- ② 桐生市本町四丁目三三二番地
- ③ 京都高等工芸学校卒業
- ④ 群馬精機株式会社 赤城社 新日本絹撚株式会社等の社長
- ⑤ 理事、理事長（大正十五年九月から昭和二十五年十月に至る二十四年二カ月）
- ⑥ 絵画 古陶器鑑賞

⑦酒脱にして明朗。よく人の和をとる。決して他人に不快な感じを持たせない。現在桐生市の長老として人権擁護委員、裁判所調停委員会々長その他の要職にある。時に孤独を感じて裏長屋に八さん熊さんを訪ねて膝を交えて語るといふ。そこに斎藤哲学の発見がある。

倶楽部理事長として最長二十四年。それも皆盟友大川英三、青木專治両氏の賜物という政界進出を試みていたならば、大物政治家として名をなしていたであろう、と惜しまれてい

る。

昭和四十年六月四日 藍綬褒章

昭和四十一年十一月三日 勲四等瑞宝章

#### 四代理事長 境 野 武 夫

①明治三十七年五月二十五日 昭和三十一年八月十五日没 五十三才

②桐生市

③早稲田大学国文科

④両毛織産株式会社々長

⑤理事、理事長（昭和二十五年十月から同三十一年八月までの五年十一月カ月）

⑥スポーツ、音楽

⑦弁舌と押しでは当時一、二を争った。出身が国文科だけに、一般事業人と違った感覚があり倶楽部経営にも南川潤氏と組んでの“文化人ライン”を構成、新しい方向へその発展を計画したが、残念ながら途中死歿した。実兄清雄氏は参議院に当選。任期後も政界の黒幕として

活躍したが、兄弟揃って桐生の偉材と言えよう。今はその宅跡も昔の面影をとどめず、往年のあのうっそうと茂った樹木に囲まれた大邸宅も、わずかに長屋門の一部をのこすのみとなった。

五代理事長 長 沢 毅 雄（掲額）

①明治三十四年二月十日

②桐生市小曾根町一丁目一二五〇番地

③東京写真専門学校

④桐丘学園長

⑤理事、理事長（昭和三十一年九月から同四十一年まで十年）

桐丘学園長として教育界に君臨しているが、教育家としてよりはその事業手腕を高く評価されている。桐丘学園も裁縫女学校から発展、今日幼稚園から短大にいたる総合学園を形成、北関東に雄飛している。

従って倶楽部経営に当たっても、その手腕は充分に発揮され、今日倶楽部経営の黒字的安ん運営と、会館五十年の「老衰」を無事健康状態で発展を続けているのは、ひとえに氏の経営手腕によるものと言えよう。特に三号室を取払って今日のロビーに改造した時の独断的英断は、氏の思い出として常に語るところであった。

昭和三十五年十一月三日 藍綬褒章

六代理事長 前原 一治

① 明治三十三年八月二日 昭和四十三年一月十五日没 六十七才

② 桐生市

③ 早稲田大学政治学部

④ 日本網燃社長

桐生市議会副議長（昭和二十二年一月）

桐生市長（昭和二十二年四月五日から三十八年四月三十日まで）

群馬県監査委員

⑤ 昭和二十一年十月十六日入社 理事、理事長（昭和四十一年九月二十六日から四十三年一月十五日まで）

⑥ 囲碁

⑦ 長い政治生活で胃病をわずらい、胃潰瘍を手術したりして病魔と斗ったが、遂に本文に述べたように急逝した。子供運に恵まれず家庭は喜美子夫人との二人暮りで淋しいものであった。長身瘦軀、面長な貴公子風の態度は多くの市民から親愛の情をもって迎えられた。

昭和三十八年十月藍綬褒章 昭和四十三年一月十五日勲五等双光旭日章

七代理事長 川村 佐助

① 明治三十一年十一月八日

② 岐阜県

③岐阜県郡上八幡尋常小学校

④織物原料糸商（昭和十一年独立開業）

⑤昭和二十三年入社 理事八期 理事長（昭和四十三年一月以降）

⑥麻雀 長唄

⑦人も知る糸商仲間の巨頭。時に数億の利を得、時にこれを失う。千変万化の人生遍歴をして今日なお業界の先頭を行く。誠に味あうべき人生である。道徳科学に入ってその道をきわめかつては語るをきらってこれを避けたが、今は堂々と人の道を説いて聴衆をして随喜の涙を流させる。巨利を獲てこれを掌中にとどめず、必ず公共の為にこれを投じる。郷里八幡町にも巨額の寄附を毎年行ない、その功によって昭和三十四年八月「名誉町民第一号」となった。桐生市に於ても同様「名誉市民」の称号が話題にのぼり、常にその候補者として話題にのぼっている。自動車を持たず、常に自転車で市中を疾走するのも、氏の特異性を示す一つである。酒豪として一家をなす。知足会を主催するのもその人格を知る一つ。すなわち「吾唯足るを知る」の生活を楽しもうというのである。

昭和四十二年十月十七日 紺綬褒章。その他自治大臣表彰等を受けている。

功労者 森 宗 作 （宗久）（掲額）

①文久三年三月十三日 昭和七年五月十二日没

②足利市井草町 篠崎家に生る。明治十六年森家入籍

④明治三十一年 四十銀行設立頭取となる。

同三十五年 模範工場桐生燃糸代表社員（後の日本絹撚）

同三十七年 群馬農工銀行取締役 森合資会社代表社員

同四十年 両毛整織株式会社代表社員

その他 桐生機械会社役員等 町会議員として活躍。多くの功績をのこす。

⑤ 創立委員 理事

⑥ 囲碁（青年時代は好んで漢詩を作る）

⑦ 明治三十九年四月 勲六等瑞宝章

同 四十四年六月 藍綬褒章

この人あつて初めて桐生倶楽部の誕生があつた。最大の恩人である。

功勞者 前原 悠一郎（掲額）

① 明治六年十月三十一日 昭和三十七年三月二十九日没 九十才

② 桐生市

③ 東京高等工業学校卒業

④ 日本絹撚株式会社経営 その他多数会社役員

⑤ 創立委員 初代副理事長

⑥ 書画 骨董

⑦ 存命中最後まで人力車を愛用していた。恐らく日本でも最後の人力車愛好者かもしれない。

記憶力抜群、よく詳細に記録し、これが資料となつて「桐生の今昔」一巻が生まれた。その

記述は明細をきわめ桐生倶楽部創立当時の人の動き、桐生の町の様子がわかって大いに救われた。晩年は桐生丘公園裏の山荘に悠々自適の日を楽しみ、令息一治氏の成長を眺めていた。一治氏は孝心深く常に嚴父を訪うて慰めることを忘れなかった。

功勞者 前原 準 一郎

①明治十二年五月九日 昭和三十九年十二月四日没 八十四才

②桐生市

③東京高等工業学校卒業（明治三十五年） 同校専攻科修了（明治三十六年） 独逸協会学校

独逸語科修業 東京外国語学校仏語学別科修業 高等エスベラント学力認定証受領

④桐生機械株式会社代表社員 その他多くの会社重役、県・市の委員

⑤設立調査委員 常任実行委員 理事 初代常任理事 名譽社員

⑥温泉研究

⑦昭和十五年十一月十日 紀元二千六百年奉祝式典に群馬県民総代（産業功勞者）として召されて記念章を受ける。

昭和十七年六月六日 紺綬褒章

昭和三十七年五月六日 長谷川文化賞

氏の履歴を見ると全くの「事業の鬼」とも言うべきで桐生機械株式会社の創立、金箴、撚糸機並びに織物準備機の製作に当り、全国にその優秀性が知られたばかりでなく、遠く海外にも輸出を続け、昭和十三年からは旋盤とタレット旋盤の製造も初め、業界に定評を得た。こ

うした社業研究のため、欧州・米國・中国と出張を重ね、昭和十六年同社を辞任、晩年は共愛・桐丘両学園の評議員、群馬県長寿会々々長、桐生市生活改善委員会常任委員、桐生郵便協力会々々長などの職にあつた。歿年には桐生機械金属工業会顧問として「桐生機械金属業界史」編集委員会編集顧問として原稿に取り組み、入院してなお且つ原稿紙を枕頭に置いたまま永眠した。その研究的態度には只々頭の下る思いで「桐生倶楽部四十年史」の編集に當つて払われた努力と、それに寄せられた好意。どんな所へでも訪問して自分の氣がすむまでは研究をやめなかつた態度、全くの感謝であつた。機械金属関係の研究も、大きなよろこびに胸ふくらませて當つて居られたことを思えば、氏を失つた事の悲しみと損失は限りないものがあつた。

功勞者 大川 英 三

① 明治二十八年十月二十八日

② 栃木県小俣町

③ 桐生織物学校

④ トーションレース製造業(現) 日本人絹工業連合統制委員長 県中小企業相談所々々長・栃

木県立足利工業試験場長 上州レース富士絹会々々長・桐生織物工業組合企画部長

⑤ 大正十一年入社 理事六期 常務理事五期 副理事長一期 名譽社員

⑥ 古陶器、謡曲、茶道華道、日本画、短歌

⑦ 多芸多能。この人ぐらい「ナンデモ屋」は珍らしい。「博学多識」という言葉はこの人のために造られているような氣がする。口を開けば滔々千言萬語。あたりを払って追隨するもの



がない。これが氏の長所でもあり短所とも言われている。かつて政界進出を試みて革新系をバックに足利市長に立って悪戦苦斗、遂に破れたが当時の奮斗ぶりは今でも話題になっている。無教会派に属する基督者で、倶楽部会館創立以来「聖書研究会」を統率して倦むことを知らない。文字通り十年一日の如く同志とともに祈り且つ語る。氏を敬慕して集るもの後をたたない。斎藤長平氏と組んで倶楽部隆昌の因を作った。当時の同志青木專治氏も基督教信者。梅田の青木家はギリシヤ正教の熱心な信者であったという。この辺一体に古くから新しい文化のいぶきが立ち籠めていたものと思われる。

親友斎藤長平氏はユーモラスに評して、「大川英三―ヒデゾウ―ではなくて、＼ひでえぞ＼だと言ったもんだ」と笑わせたことがあったが、氏の人格を示すエピソードとして、新年互礼会の＼お花＼の話がある。正月だから花をいけてくれという依頼を受けて

「いくらかかってもよいか」というので「よいよ」と軽く答えておいたが

さて出来あがってみると、まさに逸品である。素晴らしい大木を駆使して誠に見事な出来ばえであった。それまではよいが、さて請求書が来てビックリした。当日の費用の半分以上がその方に使われていたというのである。氏の面目躍如たるものがある。

#### 功勞者 清水 巖

- ① 明治二十二年十一月二十一日生 桐生倶楽部会館設計建築者
- ② 東京都新宿区南町三十三に現住
- ③ 長沢編集長宛書簡と、寄せられた手記を次に掲載して略歴に代える。

拝啓、盛夏の季節、皆様の御健康を御祈り申し上げます。

扱而、桐生倶楽部創立五十年記念式典御奉行の由、御祝甲上げます。就而、創立当時の記憶のかずかず粗末ながら申上げました。何卒御判読下さいまし。

私は近来足腰の不自由の為め御伺いも出来難く存じますので、代理として愚息清水陽之助を伺はせませす。

同人は清水建設福岡支店の主任として勤務致して居りましたが、此の程幸にも東京へ帰任致してまいったもの、代理として伺はせませす。

又本人は、故吉田熊次郎の外孫で桐生に縁故のもの、宜敷は一見願上げます。 拝具

八月十七日

清水 巖

桐生倶楽部 長沢義雄様

### 桐生倶楽部 建築の思い出

清水 巖

大正五年の春先きの或る日、畏友野間清治氏（講談社主幹）から電話があった。早速本郷団子坂下の同社に行った処、氏は私の手をとらんばかりに応接間に案内し、令室や吉田編集長ら列席のもとで次の様な話をした。

——私の故郷（くに）は桐生である。父祖は会津だが、自分は桐生で育ち山間の小学校で教鞭もとった。故に桐生に愛着を持ち恩も感じている。ところで先日桐生の金子竹太郎氏が訪れ、「実は

今度、市に桐生倶楽部建設の計画があり、その設計図案は地元業者に依頼していたのだが、どうもこれはという様なものが出来ない。いっそ東京の設計者に頼んだなら、近代的な図案が生れるものでないか、という意見が出た。就いては貴下に誰か心当りはないだろうか。」というのだ。

そこで自分は、「それならば清水某を推薦したい。彼は清水組の技師で、先年博文館の大橋新太郎邸建築の際、設計に参与し、工事半ばで技師長が病没した後、独力でこれを見事に完成している若い技師は確かである。」と述べておいた。どうか清水君、ひき受けてほしい――

私は突然の話で驚きもし、又厚意に対し恐縮したが、野間氏の信頼に答えるべく懸命に案を練り二週間後完成した設計図を携えて桐生に金子氏を訪ねた。持参の図案を見せた処、氏は至極満足の様であった。そして更に前原悠一郎、前原良太郎、前原準一郎、森宗作氏等に料亭桐生館に招かれ図案の説明を求められた。その結果は皆満足され好評をうけて、私もほっとして帰京したのである。然し、私がこの仕事に関与する事について色々と難問が持ち上った。一つは地元業者の感情を刺激した事であり、今一つは私の会社内部の問題であった。一社員である私が、個人的に外部でまともな仕事をするには、かなりの批判と圧迫があった。一時は私もこの件から手を引こうかと悩んだが、野間氏を初め他の方々の信頼を裏切ってはならぬと考え、初念を貫く事にしたのである。

丁度その頃紐育の山中商会主催で、日米共同住宅設計コンクールがあり、当時若手設計者の間では大きな話題となったものである。私も応募した処、思いがけなくも第一等に当選する事が出来た。賞金は日本建築学会を経て授与されたが、会社でも社の名誉であるというので金一封が贈られ、私の苦しい立場も一変した。尚、この時審査委員の一人、在米中の高峰讓吉博士より手紙を貰い、米國留学を勧められたが、当時私には母と幼い妹が居り、惜しくも断念せざるを得なかった。その後

地元業者とも何度か交渉をもつうちに、互いに理解も深まり、諸々の難問題も全て解消していった。

かくしているうちに工事予算も整い、準備も出来たので、従弟の牧野要を現場責任者として桐生に伴い、清水工務所という名称の下に工事に着手した。野間氏より最初の相談を受けた時からほん二年を経過していたと記憶している。

建築のスタイルは南欧風にまとめ、色彩の調和に苦心したものである。又工事中に横浜の上州屋さんから撞球台を二台寄附され、急速撞球室を作ったことを覚えていいる。

その後間もなく私は自立し、戦後迄建設業に携わっていたが、この桐生倶楽部の設計施工こそ、私に一つの転機をもたらした忘れ難い作品である。

凡そ建築家にとって、自分の生み出した建造物がいつ迄も存在し、人々の役に立っているのを知り、嬉しい事はないのである。桐生倶楽部を作った時、私は未だ二十代の若年であった。それが現在五十年を経て髪も白さを増し、間もなく齢八十を迎えんとしている。その若かりし日の思い出の作品が、今日桐生倶楽部記念式典の舞台として共に祝われる、実に感慨に堪えないものがある。長年の痼疾の為、喜びの場に自ら列席させて頂けぬのが非常に残念であるが、東京の一隅より、桐生倶楽部五十周年を心からお祝い申し上げ、尚一層の御発展御繁栄をお祈りする次第である。

物故された功労者と理事長の菩提寺と戒名

①菩提寺 ②戒名

森 宗 作

- ①大蔵院
- ②景行院泰雲宗久清居士

金子竹太郎

- ①浄運寺
- ②光徳院錦誉織成拓本居士

前原悠一郎

- ①円満寺
- ②寿量院絹誉悠然顕功居士

境野 武 夫

- ①浄運寺
- ②哲誉覚道武夫居士

前原準一郎

- ①円満寺
- ②戒名なし。墓石に「霊」の一字（大出勇治氏筆）あるのみ。

前原 一 治

- ①円満寺
- ②一乗院願誉頓覚治道居士

歴代事務職員

永井源平 創立当時より六カ年

永井嘉平次

永井アキジ 四十一年(現)

名和貞子 五年

戸井田武雄 約七年

服部修 八年(現)

敷地・会館の変遷

敷地 (「土地問題」の項に前記された数字と後に訂正された部分とがある)があるのので、見直したかに見えるが参考のため再記した。

一、総坪数

壹五八六坪壹合六勺

一、大正十四年三月八日道路として内務省へ寄附 壹坪四合

同 年三月二十日同じく桐生市へ 壹坪七合

一、大正十五年五月三十一日契約 市村卯之助に東方空地貸与

一、昭和二年六月十七日売渡

上田信太郎 五坪三合八勺

片山久之助 七坪七合

前原卓太郎 一坪五合

斎藤 芳雄 貳坪五合一勺

以上北側道路残地 計拾四坪六合三勺

一、昭和二年七月十二日契約

桐葉軒に貸地 百拾壹坪七合四勺

一、昭和三年十二月十三日寄附（内五拾坪一合八勺は売渡）

道路として内務省へ 参百二拾参坪九合五勺

一、昭和四年九月十三日内務省寄附 七坪五合二勺

一、昭和四年十二月二十一日売渡

橋本柳三郎 参拾七坪五合

高田又十郎 拾五坪六合九勺

以上東側道路残地 計五拾参坪一合九勺

一、昭和六年十二月十七日登記

桐生市より敷地中央を貫通していた不用道路を無償払下げ受ける。老畝拾参歩。

一、昭和八年三月二十六日返還

市村卯之助に貸与の土地。空地とする。

一、同 日契約

大弓弘友会へ南側土地貸与

一、昭和十一年三月三十一日登記

前記払下げ道路に沿って在った水路の払下げを受ける。式拾四坪余。単価式拾八円。

一、昭和十二年五月十七日売渡

藤井竜三郎 式〇〇坪三合

以上東方道路ぞい南側

一、昭和十三年二月十六日売渡

桐生酒類商業組合 式三〇坪四合四勺

以上東側道路ぞい南側

一、昭和四十二年八月十二日道路として桐生市へ寄附 式坪五勺

一、現在坪数 八九〇坪六合九勺

会 館

一、総坪数 式百四拾式坪五合

一、大正七年十月 着 工

同 八年一月十九日 上 棟 式

同 十二月 落 成

一、大正九年四月 正門并両袖垣着工



同 十一月 右 落成

一、大正十年八月 東方壁及屋根修繕

一、昭和四年 外部ペンキ塗工事

一、昭和六年四月 玄関、事務室外側修理

一、同 十二月十二日

理事会に於て改築の議起る。

一、昭和拾年拾月五日 修理を桐生製材会社に請負せ、外壁、玄関、屋根、瓦、樋等修理。外壁面は東部は金網を入れモルタル塗となし、他は前工事に瓦張りとなしある為、壁面をはぎ取り、モルタル塗り、シツクイとなし、前工事と同じ色及塗方も同様とする。

一、昭和十二年四月十五日

撞球場を専用室に改造、一号室とする。

一、昭和二十二年五月

外部壁及内部ペンキ塗修理。前通りの色合でふきつける。

前事務室を理事室とし、玄関入口に事務室を新設。

一、昭和二十五年六月

桐生製材請負で玄関、廊下、天井壁、便所（タイル張捲カ所増設）

商工会議所移転後の使用済の室とその隣室とを改飾し、テーブル八、椅子三十二を新調

一、昭和三十二年四月

小川建設請負で、玄関、廊下、階段、便所床をアスタイル張りとして、天井壁及横壁を塗り、

陶器洗面二個を設置。

一、昭和三十二年十月十五日

改装工事を小川建設請負にて着工。

同 十二月二十日 完成。

(1) 二階全部塗上げ床板張替。コンセント五か所、照明は六十ワット蛍光灯六基取付。

(2) 元三号室を除去して中央ロビーとし、新しく机四、椅子十六の応接セット入れる。地下ガラストープ三台、蛍光灯四基取付。

(3) 元理事室を、社員専用無料応接室とした。

(4) 各談話室は壁、天井を新装、コンセントを各二個ずつ取付。

(5) 門柱を一米開き、自動車の出入に便ならしめ、夜間はクサリを用いて扉の代りとした。

(6) 屋根瓦の修理。樋全部取換え。外壁は前通りの色合で吹きつけ。東、北側バルコニーを上面セメント塗り上げ、準備室に「流し」を新設、下水は西表通り下水まで出す。

一、昭和四十三年十月

五十周年記念事業として内外に改装を加える。

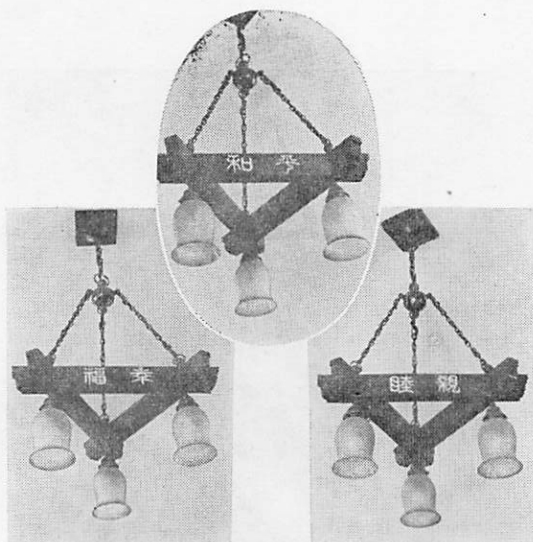
水洗便所とする。

倶楽部精神を明示したシャンデリア

写真のシャンデリアは古くから倶楽部にあったもので、三方に別れて

平和 PEACE (P)  
幸福 HAPPINESS (H)  
親睦 FRIENDSHIP (F)

と書かれ、それが一つのクサリに結ばれて天井からつられている。創立当初よりあったというが(斎藤

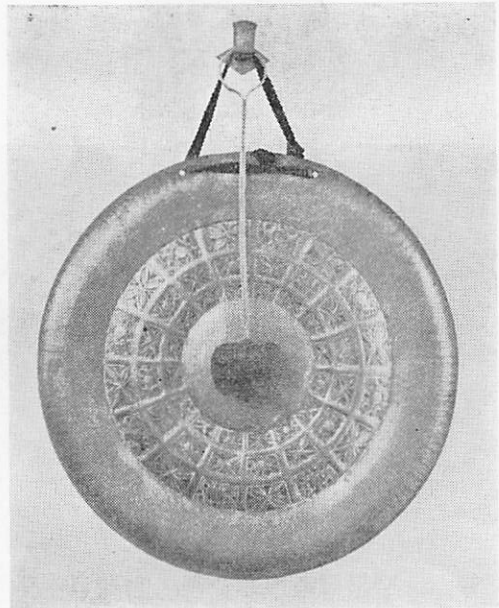


長平氏談) 倶楽部精神を明示した点で注目し、今をときめく松下幸之助氏が「PHP」の主張をしておられるが、五十年前すでにこの考えと軌を一にしていたことを思えば、改めて先人の偉大さを思わずにはいられない。

本書の出版にあたって、表紙の色を選定するため、この際「倶楽部五十年」と「明治百年」とを合わせて、その記念事業の一つとして、「倶楽部カラー」の決定をなすべきだと考えた。不幸にして長沢編集長の入院手術等のため、会議決定の機を失ったが、「クラブカラー」が選定されることを切望してやまない。もしそれがきまっていたならば、当然表紙はその色にきめられたであらう。

表紙の色の決定は、この「倶楽部精神」の表現でありたいと念願し、各方面の意見を参考にして「平和・幸福・親睦」を意味する色として選定したことを記しておく。

さらに「桐生倶楽部」の書体についても、この際選定しておくことが望ましいと思った。多くの銀行会社、その性格を明確に打出すために、その行名社名を「定められた書体」で表現しているが、わが桐生倶楽部も「書体」を決定することがよいのではあるまいか。「クラブカラー」に「クラブ書体」が桐生倶楽部のシンボルとして、多くの人たちの間に親しまれる日の一日も早からんことを切望するものである。



倶楽部のドラ

桐生倶楽部には会館新築当時からドラがあった。福田宗空氏の購入したもので、逸品であったと言われている。もちろん戦争中に供出品の対象としてその姿を永久に消したわけだが、当初は集合の合図や食事の合図にドラが使用されていたという。

写真のドラは、長沢五代理事長が外遊の

際、スイスのチューリヒで発見、購入したもので、往時を偲んだ長沢氏は一つは自分の外遊記念ともし、一つは往年のように、集合などの合図に使用されて、倶楽部風物詩の一つともなればなどと考えたのであった。

ドラには各国各種各様のものがあって、おのおのその持味を楽しませてくれるが、最初是中国の軍樂器として誕生したものである。それが仏教の法会に用いられるようになり、今は一般に船舶の出航合図に用いられて多くの人たちに「別離の泪」をさそう道具となっている。

わが国の生んだ大舞踊家石井漢は、開幕にドラを用い、ドラの音と同時に舞台上に照明が点じられた印象的演出法をとり、イギリス映画の字幕の最初に出てきた大きなドラも忘れられないものであった。

現在の桐生倶楽部では、活用されることもなく、一つのアクセサリーとして正面ホール柱で、入館の人たちを眺めている。

# 座 談 会

## 第 一 部

創立時代から斎藤理事長時代まで …………… 197

## 第 二 部

境野理事長時代から現代に至るまで …………… 219

~~~~~ この録音は桐生倶楽部に保存してある ~~~~~

座 談 会 第 一 部

~~~~~  
創立時代から斎藤理事長時代まで  
~~~~~

出席者

二代理事長  
名誉社員

書上文左衛門

三代理事長

斎藤長平

同 理事

大川英三

司会  
五代理事長

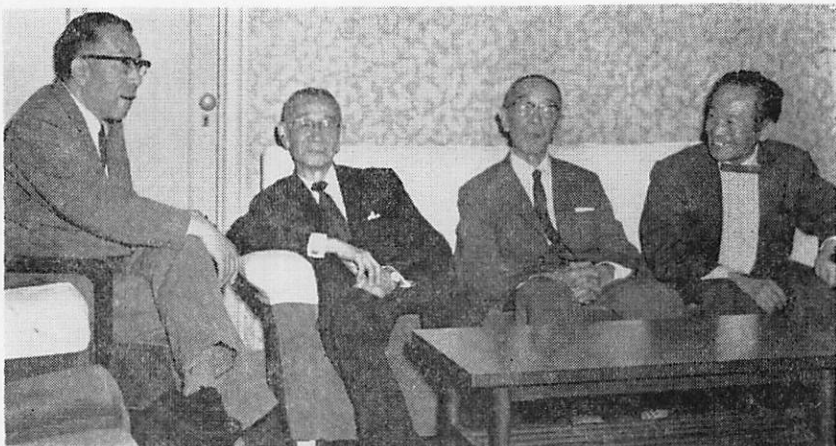
長沢義雄

編集

中川信彦

長沢

どうも、たいへん皆さんお忙しいところありがとうございました。今日の座談会は桐生倶楽部創立五十年記念式をこの秋に催すので、その記念史を作りたいのですが、資料が割合に少いので、細部にわたっては皆さんのお話を承って資料にしたいと思えます。あまり固苦しくなく、時間は一時間半を予定しておりますが、なるべく有効に、要領よくいきたいと思えます。ここにおける中川信彦君に編集を手伝って頂いております。質問があるかもしれませんがひとつよろしく。さて、桐生倶楽部は今年で創立五十年目になるわけです。大正八年に建物ができたんですから、桐生倶楽部を建てる前に桐生懇話会というのが桐生倶楽部の



左から長沢・書上・斎藤・大川の各氏

活動の前身だということを知っていますが、その点からひとつ。……………

齋藤 桐生懇話会という会があったんだが、私と書上君が出るようになってからはムメイ会と言いましたかな書上君。ムメイ会のメンバーは懇話会と同じようなメンバーだった。まあ私と書上などもそのとき若かったからな。

長沢 別だというわけですか、懇話会と。

齋藤 懇話会というのはその当時、もうほとんどやらなかった。

書上 桐生倶楽部の歴史そのものの初まりを語るには懇話会からどうしても出発しないと……………

大川 懇話会のメンバーというのが当時の事業界を代表する会社の社長のような、財界の代表人が結成していたものなんだね。

齋藤 そうなんだな。

大川 それがどうも料理屋などでばかりやっていたんではしかなかったが、買継屋なんかも芸者を入れてやるという、実業界の社交のありかたを、この際もっと文明開化になるよう導こうじゃないかそれにはコーヒーを飲み、ケーキを食べながらというわけで遅まきながら、ちょうど桐生の鹿鳴館の性格を持って計画されたと思うんです。そこで土地の経済発展をはかりながら互いの親和をはか

ろうじゃないかと、こういうふうには思っていたと思うんですね。

長沢 その動機になったのは、桐生に高等工業ができたのが、かなりの刺激になっているようですがそれでよろしいんですか。

書上 そればかりじゃないんです。桐生の相当の家庭の子弟であった金子竹太郎、前原悠一郎、前原準一郎諸氏が蔵前を出てこられたが、こういう人たちをほっておけば必ずや中央に出て行ってしまいうだろう。桐生の産業発展のためにああいう人たちの足を桐生に留めなければならぬというので、桐生の有志の諸君が両毛整織や桐生機械などを建てたんですね。これは、懇話会というものは、桐生の有力な皆さんが会員で、桐生の産業、文化、教育、各方面万端の問題について相談をし、また実施もしてきた。たまたま父に死なれて森宗作、大沢菊太郎、それらの列に私などが参画すべき年じゃなかったんだが、父が関係して皆さんと一緒にやりましたから、続いて関係せよというので絹然会社の重役になりました。絹然会社の重役会の席で桐生倶楽部の問題が起ってきたわけです。だから公私混交のようですが懇話会で万端の相談をする習慣ですから、役員会の決議としてやったのではなく、役員会が終了してから懇話会に切り



かえて万端の相談をする。町立女学校を昇格して県立にする。あるいは高等工業の誘致をやる。桐生お召鑑賞会というものを帝国ホテルでやって、そこへ当時の松本幸四郎、森律子その他芸能人並びに有力者を招いて宣伝をやりました。それからです。桐生のお召というものが東京へ非常に広まって、売れ出したのは、何のことはない、桐生の万般のことについての懇話会なんです。その鑑賞会の名譽会長に渋沢栄一さんになってもらって、お礼のため渋沢さんをご招待した。

**長沢** 記録がありますね。

**書上** そうかと思うと、清浦圭吾大臣が桐生に來られたが宿舎もない。いまの佐羽さんの裏にある家を利用してやる。日露戦争後においては東郷大将令嬢、伊東・上村両中將とその令嬢たちをご招待するということなど、みんな懇話会がやったんです。話は変わって、倶楽部の具体的な問題になりますけれども、集まって相談をする場所がないんですね。桐生には。料亭よりほかにないんです。主として桐生館だったんだが、行けば一杯飲まないわけにはいかない。相談だけして、菓子を買って、はいさようならというわけにはいかない。まあ食事を取る、酒が出る。そうなると芸者を呼ばなければならぬ。どうも高等工業の場合にして

も、女学校の問題にしても、教育問題を議するのには芸者を呼ぶような席上で相談をするということには、はなはだおもしろくない。それには社交クラブを建てたらどうかという案が、そのとき森宗作氏から出たんです。それは結構だ、というので、やろうということになりました。それで請負業者の清水巖君、その人に設計をしてもらったんです。安いのと高いのと二種類の設計が出て絵図面を見ると、どうもいまの方がいいんだな。少し金は高くて、これでやろうということの話がきまりました。当時の金で、森宗作が「わしが五千円出すから子ども続け」ということで始まったわけですね。

**長沢** 桐生懇話会は明治三十三年九月九日に何か会をやっているんですが、その頃からあったんです。

**書上** それは私の前の代だからわからない。

**長沢** 齋藤さん覚えですか。

**齋藤** 三十三年と言えば僕らこどもだもの。

**書上** 子供のころでも聞き覚えで覚えがないことはないでしょうが、この倶楽部の設立だって、私がオヤジに死なれて、二十五や六で重役会に引っぱり出されていたからいまのような話ができるようなわけです。

**中川** この建物のできたのは大正八年になっている



長沢氏

んですが、九年ではないかという前原準一郎さんのお話があったのですがその辺の覚えは。

書上 その覚えはありません。

大川 いやそれはね、ここを利用して結婚した第一

号が私なんです。それが大正九年ですから。

齋藤 八年に間違いないですよ、第一次大戦のすぐ

後かな。

長沢 亡くなった前原準一郎さんは九年という手紙

を私にくれたんです。これは記憶の間違いだという

うこともありませんが――

で、なんですかね、桐生倶楽部の創業時代に非

常にご苦心なされた、これは、先程書上さんが

おっしゃった、森さんが五千円お出しになった、

これも後で申し上げたいと思いますが、最初五千

円現金で出したというのは手紙もありますが、年

賦でくれるというわけだったんですね。ところが

仕事をするために年賦じゃまずいだらうというの

で現金でいっぺんにくれて、前原悠一郎と金子さ

んにこれをまかした。二人で上京して、いまの交

詢社それから日本橋倶楽部、大気倶楽部などを見

て歩いたというのですが、私はこの間交詢社に行

って、いろいろ資料を見せてもらった。いまの桐

生倶楽部の定款の書きぶりは交詢社のと大体似て

うんです。そんなこともありましたが前原悠一郎さんと金子さんがいれば少しはわかるんですがその辺はひとつ皆さんが記憶のあるところでお話し合いたいと思うんです。当時の苦心談からひとつ。

大川 齋藤君。資金がなくて社債を募集したのはその頃かな。その社債を抽せんで返しちゃった。

齋藤 ずっとあとですよ。

書上 毎年返していた。

長沢 現金で二万円集まったという記録があるんですよ。その償還がガンになっていつも倶楽部経済が容易でない。そこで銀行は利子が付くでしょう

社債も利子が付くけれども……という事で社債

に切り替えた。利札付きの債券が立派な印刷で残

っています。これはあとでもって写真にして出そ

うと思っています。だから桐生倶楽部は非常に経

営が苦しかったということですね。

齋藤 苦しかったと言って、営利事業じゃないんだ

から。

大川 とにかく、一番問題は、桐生倶楽部というも

のを社交の中心にしようとした先人の見識に対し

て、われわれは深い敬意を払わなければならない

と思うんですよ。だから、そういうことは倶楽部

だからむろん経営とか何とかいう経済上の問題は



書上氏

第二にしてとにかくやろうと、それで森宗作氏が率先して五千円投げ出すからこれでやれと言ったその太っ腹な決断。これにその前原や金子さんなんかがついて行った、そこなんですね。

書上 この場所を選んだ理由は、これも森さんの意見から出たんです。桐生駅を降りて人力車に乗って、いまの第一銀行のところから本町通りのところを曲って一丁目に行くんですが、あれからずっと行くくと今泉の竹藪だから、いかにも桐生が田舎町らしく見える。だから目かくしにもなるからここを選んだ。たまたまここが私どもの地所だったので話はトントン拍子に進んだ。

長沢 もう一つは、いまの吉野屋の辺に土地を前原さんが買って、もしも桐生倶楽部ができるんなら提供してもいいと言われたそうですがこちらを選んだから、当時千五百坪ですか、向うはもっと少なかったというのですが。

齋藤 吉野屋の西に新甚という料亭があった、あの地所ですよ。

大川 この土地があぶくたという名前で、非常に湿地帯だったんですね。葦の茂り合うところだったらしい。

書上 田だったんですから。

大川 地盤が非常に脆弱だったのを、やはり相当建

築の施行に心してか、今日までみるべき地盤沈下もないし、このベランダでも何でも、ろくに下がってもないというようなことを見ると、建築の設計と施工者は立派だったんですね。

中川 施工者の清水という人はまだお元気なそうですね。

長沢 ご存命です。もう八十何歳で、旅行もできないし、桐生倶楽部はどうしているんだ、昔設計したという話をもらしたというんですよ、清水という方は、第一銀行も設計しているんですね。

書上 森口君の家も設計した。

長沢 桐生には大変縁のある人で、五十年記念には是非出てもらって、いろいろそんな建築上のお話を聞きたいと思っていますが。

齋藤 非常に元気な人ですよ、その時分にはラスを使わなかった。ラスを使ってコンクリートにするんですね、そうでなくヒラガワラを使っている。

長沢 修理のとき、こわして見るとラスが出てこないで瓦が出てくる、それがためにいまの建築屋は困っているんですね。

齋藤 困っているけれども、今としては見られないしつかりしたものなんです。

長沢 瓦なんかも、もうなくなっちゃって修繕す



大川 氏

るときは、永井事務員の住んでいる住宅の瓦をはがして持って来て永井君の家は新しい瓦になっています。

**大川** その当時にレストランを併置した桐葉軒のことを少し話に入れる必要があるんじゃないか。

**書上** あれほどの料亭にまかせてもまずいというので、料理屋組合で株式会社を作ってもよければ全部の桐生の料亭がやることになるというので株式会社を作ったわけです。

**斎藤** 建物が洋館だったから、中でも洋式でやろうということになったんだが、洋食屋の気になったのがない。料理屋組合にここの土地を貸して作らせた。

**大川** その社長が金木屋の松島氏なんですよ、松島富三を社長にした。いまではどこからでも料理を取っているけれども、桐生倶楽部即ち桐葉軒、必ず桐葉軒の洋食を取るという事にしたんです。当時桐葉軒では女の給仕なんか使わんで、全部男の給仕。黒のタキシードまがいのものを着て、必ず宴会にはマネージャーが一人、何もしないで立っていて、コックをさしずする。実に整然たる運びでしたよ。だから銀のナイフ、フォーク、フィンガーボールも銀と、さわればきれいな音のする。ナプキンも桐生倶楽部の紋章入りの麻のナプキン

**斎藤** 両毛整織で織らせた。

**書上** 主として金子さんが中心で調度はそろえた。

**中川** 福田という方が一緒に行ったようにあります。

**長沢** 福田宗空さんのことですか。

**大川** 茶人だから自然食事の世話もやかましいわけです、福田君がやった。

**斎藤** いまでも洋式マナーを教えるという時代でしょう、若い者に。それがあの当時の桐生でしょう、容易じゃないんだ。

**長沢** 特にメニューがふるっていたようですね。

**書上** メニューにスリーブと書くと、そのわきに、銀のスプーンで使用するものを書く。今度はエビのフライと書くと、銀のナイフとフォークでというふうに。

**長沢** メニューにいちいち説明をつけた。

**書上** 前原準一郎さんがやりました。常務理事で、私が理事長をやって、あの人はヨーロッパを何回も回っていますから、ことさらそういう点はやかましい。それでまた、そういう必要もあつたんですね。出てくる料理はほとんど食べないでためておいてボーイがそこへ置いて行くだけで、スリーブなんかちょっとしたものでお酒を飲んで、帰ります折をくださいというような要求さえ出たんです

そうかと思うとお料理をナイフとフォークを使って切って、ナイフでつつかけて食べるんで、あぶなくて見ちゃいけないという状態なんです。だから準一郎さんと一緒で、多くはいまのエチケツトを知らん人の方が多かったんでそんなメニユーを作ったのですが、大沢菊太郎さんのような人が見れば、はなはだこっけい千万で菊太郎さんが私に、「君このメニユーは紳士を侮辱するメニユーだね」ところ言われた。いまだに記憶していますよ。

畜齋 子牛のブドー酒煮というのがありましてね、それは「子牛酒池に遊ぶ」というのだった。

長沢 それお二人で考えられたんですか、なるほどね。

大川 当時の書記をしていた永井君も、実に倶楽部のエチケツトを氣につけた方で、若い者が泥靴であがってくると、そこにブラッソがありますから靴をきれいにしてからあがってくれと、あがりなおしさせられたもんです。

長沢 その靴のことで伺いたいんですが、二つの説があるんですが、始めからぬがせてあげたという説と。

大川 ぬがせてあげたんですよ。

長沢 ああやっぱりそうですね、そうしたら青木さ

んが外国から帰ってこられて、外国では靴なんかぬがせてあげるやつはいないというようなことで靴をはかせたということは正しいんですか。

畜齋 それは私のときからです。

書上 青木さんが言われたかどうか知りませんが、みんなぬがされてあがらされたんですよ、始めのうち、相場の年月ぬがされたわけです。

畜齋 カーベツトも相当な物だったんですよ。

長沢 これは伝説だというんだけれども、袴とか羽絨が玄関に用意してあったというんですが。

畜齋 そんなことないですね。ただ前原氏がああいう人だったから、芸者を入れる場合があるでしょう、芸者の姿じゃいけない、エプロンをかけろと芸者にエプロンをかけさせた。

大川 芸者法度だったんですよ、しいてはいるならばエプロンをかけてはこれということて芸者は皆エプロンをかけた。

書上 男のボーイでしたよ、始めはね。

大川 群馬県のある町から相当の人が来た。迎えに出ると皆な靴をぬぐんですよ。僕は靴をぬがないでいるのに……、そのくらい整然としていた。当時パンのおいしいのが市内でないんです。それで何時も古河から取っていた。どうして古河にいいパン屋がありましたかね、桐生には倶楽部で食べ



齋藤氏

られるようなパンが焼けなかったんですからね。  
齋藤 ぜいたくだったんですね。

大川 ですからときには黒パンにフランスパンをのせて出したり、食パンを切ったなんて、単純なものでなく、こったパンを必ず古河から取っていたんです。

齋藤 さっき書上君の話があったんですが、あの当時の倶楽部の組織ですね、これは社団法人でしたね、これは私、記憶はよくないんですが、群馬県でもおそらく始めのようですよ。社団法人は内務省の管轄だったんですね、非常に厳格だった。

長沢 定款の変更があったのですか。

齋藤 やったことがあります。

長沢 前原準一郎さんが理事時代だったんですか、

大川 弁護士が役かっているのですが。

大川 私の兄です。

長沢 その方の作られた原稿があるんですが、いったい定款が改正になったのかならないのか記録にないのです。

齋藤 許可にならない、そのくらいむずかしかったんです。

長沢 今の定款は創立時代の定款ですか。

齋藤 大体そうだろうと思う。

大川 そういうことで骨が直らない、幸いに青木専

治、齋藤武助、大川貞三、それから私などで赤城社という、まあ社交団体みたいなものを作って、常に文化懇談会みたいなものをやっていたグループだから、その席で齋藤が定款変更をやるろう、君の兄さんが弁護士をしているから頼もうじゃないかということになったんです。

長沢 もう一人の弁護士さんがおられて、第一銀行か何かの関係の方ですが、お二人の原稿が出て大分もめて、期間が相当かかっているような記録があります。

齋藤 幾度か出したんですけれどもね。

長沢 どういうわけだったんでしょう。

齋藤 社団法人というのは非常にむずかしかったんですね。われわれの頭じゃ営利じゃないから簡単に行くんじゃないかと思うと逆なんです、非常にむずかしかった。

長沢 社債に切りかえたあの時代のお話はどうか。

大川 丁度齋藤の理事長時代だったろう、切りかえ問題は。齋藤君、一つ話してくれよ。

齋藤 営利法人ではないんだから赤字続きなわけですよ、しょうがないから借入金もするし、理事の連中も、まあ懐を出しなさいというわけで、相当補っていたんですが、どうも返せなくなってきた

そこで社債を寄付してもらおうということになって、それで毎年だったな。

大川 最初斎藤君は無利子にしたんですよ、それから次は利子を免除してもらった、しまいには全額寄付してもらった。

齋藤 帳面持って歩いたわけだ。

長沢 なかなかむずかしくて、共鳴してくれない方も出たという話を聞きましたが。

齋藤 最後にやってくれたのが前原準一郎氏さ。機械会社の社債を持っていて、なかなか寄付しない

大川 そう、機械会社が寄付しないんです。前原さんは自分が創立者同様にいて、それでいて寄付しない。あのときは前原さんは社債寄付には反対だったんだね。それで齋藤や大川などいろいろなやっつけていやるという、何か反感もあったようだよ。

中川 私は反対だったとはつきり言っておられた。

長沢 大川さんね、桐生倶楽部は土地を売っているんですよ、その辺のお話は何か。

大川 あれはそこに弓場があって、裏に宇野さんという盆栽屋があった。ここを追いつけられたんで、彼は清月園を光明寺裏へ持って行ったわけだ。非常に関東でも有名な盆栽屋で、瀟洒(しょうしゃ)な、八畳二間のいい住宅を作って、それできれいな二号か何だかを置いて、倶楽部にふさわしいよ

うな環境を作っていたんですよ、今は経営がだめになって、何かになっていますね。

書上 そのせがれですかな、テレビに出て来るブーちゃんというのは。司会なんかやっている。

大川 足利に神永という弓の先生がいて、それがここで出張教授をするので弓の道場をここへ作ったわけです。的山をこちらのはし、丁度いいところだったですよ、だんだんいくうちに、倶楽部の財政上のこともあるし、どうだ少し広過ぎるから一部売って、それで費用に当てようじゃないか、というようなことで、齋藤君や書上君なんかと相談して、これは切売りのものなんですよ。

長沢 倶楽部の財政が非常に窮屈だったわけですか

齋藤 それは借金があったりしたんですから。

大川 それは常時窮屈だった。当時は貸し間なんていうことは考えもしなかった。社員が何時でも自由に使えるために、一時は倶楽部というのは特権階級の一つの社交団体であって、一般小市民の出入りできるようなところじゃないと、こういうふうに思われていたわけですから。

書上 その点については、事実をういう状態だったというのは特権階級という言葉は言葉は言葉があるんでまあ文化人というか、特定の文化人のある少数の人は利用したけれども、社員でありながらこの

ところへ一べんも足踏みしたこともないという人があったわけですね。私に言わせれば利用するよきな能力なしということになるんだが。

大川 そうなんだ。

書上 猫に小判だ。

大川 話はいくだけだけれども、境野武夫君当時にこれを大衆の物にしようとした。開放してみても大衆には猫に小判ということを彼も悟ったんですよ。

齋藤 開放すべきもんじゃないですよ。

長沢 ところが交詢社へ来てみますと銀座の真中にあって交詢社そのものは開放していないけれども建物の倶楽部を除いた部分は貸しているんですねそれが交詢社の財源だそうです。だから倶楽部もそれが理想だろうと思うんですが。

中川 倶楽部の貸間を始めたのはどなたの時代からですか。

齋藤 われわれの時代はもう始めたんですよ、貸し間を始めたんじゃないけれども、臨時会員に貸すということですよ。

長沢 正しくいうと桐生倶楽部臨時会員つまり一日だけの会員なんです。戦後税務署がうるさい頃、「倶楽部は部屋を借して営業しているじゃないか課税するぞ」と言ったとき、私は税務署へ行って「それは社員以外の方の要望なんです、会議する

場所がないんです。そこで臨時に一日会員になってもらったのが貸し間というふうにとられていんです。」と言った。税務署もわかりまして、課税の対象にならなかった。

書上 始めは倶楽部員が紹介する人に限った。

長沢 だから貸し間というと語弊があるんです。

中川 齋藤理事長時代からでよろしいんですね、一回いくらにして。

齋藤 われわれ時代には料金をきめて貸すということとはなかったんですよ。

大川 就任して二年目ぐらいからじゃないかな。

齋藤 やかましく言われるんで、つまりそういうことになったんですよ。

長沢 倶楽部の創業時代のお話、進んできましたが書上さんが二代理事長ですね、それから三代が齋藤さん。齋藤さんのときが長かった、確か二十二年ぐらい続いた。書上さんの苦心したことはないですか。

書上 私の時代はわずかの年限に戦争関係やら、何かがあったんで、それで齋藤君に。まあ齋藤君は倶楽部の理事長としては、歴代の理事を通じて長いばかりでなく、非常に功績があった。特に軍がここを利用しようとはかったのをいよく排撃した、その苦勞というものは察するに余り



あります。

長沢 それは齋藤さんに聞きたいところだ。

書上 私の母校、一ツ橋のあの倶楽部、如水会館も接収された。これは接収ですから中もメチャクチャにされた。そこで元のように補修してじゅうたん替えたりなんかするのに、まあ戦後ですけれども二、三千万円かかったんです。だから、齋藤君の軍を排撃した功績はきわめて大なるものがあると私は考えているわけです。

長沢 あの齋藤さんね、なにか軍の命令であると同時に、当時三国人で、朝鮮とか、そういう人がやっぱり接収をするという気持ちで倶楽部に来たことがあったそうですね。

齋藤 それは戦後。

長沢 それで齋藤さんは倶楽部を取られるのはうまくないと、商工会議所を持って来たというお話をお聞かしていただけますか。

齋藤 会議所を持って来たのは戦争中なんです。戦後ではない。

大川 齋藤君、軍の接収を拒否したいいきさつをやってくれ。

齋藤 あのとときは、不急の建物は軍のほうで処理するということで、第一が図書館ですよ、あれを手初めにやった、被服廠にとられ、爆撃を恐れて全部

墨を塗ってしまった、ひどかったものですよ、こんどは倶楽部に来て、被服廠の事務所に貸してくれとこういうわけですね。それでも当時の七号室で、中尉が大尉ぐらいだったか、ここで、色々押し問答してね僕は責任者として断じてやらせないということ、最後にわかってもらいましたよ。

長沢 この前のお話では、その将校が東レか何処かの社長の婿さんになった人だとか、そういう話を承っておりますか。

書上 それは大阪の有名な旧家でおこし屋のセガレだ。

齋藤 あわおこしのセガレだ。

書上 それが桐生の支部長みたいな格で来ていて。

長沢 その方が交渉に來られたんですね。

齋藤 中尉ぐらいかな、インテリですから話がわかるわけですよ。

長沢 今の話では図書館の方が先ですか、私はこっちへ先に來て……

齋藤 ほとんど同時ぐらいだった。

大川 それから色々軍からの請求で金属供出が始まり、ドラヤハンドルまで取られた。ドラなんてのは福田宗空氏を買ったドラだからいい音だったんですが、それまでとられた。立派なシャンデリアがあった、それも手放したわけです。あれは、七

宝だったんですよ、これも福田さんの買ったものだったから実に美術的だったんですよ、これをみんなガラガラ持って行かれちゃう。僕は理事の一人として斎藤はしょうがないな、こんなドラなにかまで出してしまってると思ってた。

斎藤 軍関係の人間が連日ここに来てた、しょうがないんだ。商売みたいなものだな、この今のシャンドリア貧弱でしょう。そのかわりに自分の会社の群馬精機から持って来たんだ。

大川 ですから当時の何にしても、壁紙にしても、あれはベルギー製の壁紙だった。

斎藤 それを一円ちよつとで買えたものですよ、このじゅうたんなんかもこんなものじゃないんだ、本物を。カーテンなんかもひどくなったな。

大川 というようなわけで、随分苦労した。それとまあ斎藤の時代にやったのでは、桐生史の編纂だね。

長沢 それをお伺いしたかったです。どのくらいお作りになったんですか。ここにはたった一部しか残っていないんですが。

斎藤 ほとんど何処にもないんですよ。僕のところは一冊と図書館に二、三冊あるか、どうか。

大川 私が持っていると思うんだが。

斎藤 女学校の先生の岡部福蔵さんが非常に郷土を

研究しておられたので講演してもらったんですよ、それでそれをもとにして編纂しようじゃないかということ、あの編纂が出来たわけです。だから桐生織物史の先をなすものですよ。

長沢 あれはいいことをしましたね。

書上 二千六百年記念だったか、御大典記念事業だったかでした。

長沢 何部ぐらい刷ったんですか。

斎藤 四百か、五百、クロスは特別に両毛整織で織ってもらって染めたんです。こったわけだったんだ、あの当時は。

大川 やはりいい記念になったね。

長沢 斎藤さん時代の文化事業の一つですよ。非常にじみな仕事でしたけれどもね。

大川 ただ書き方が太平記的な書き方で、今の純粋の歴史学的に見ると、それは欠点もあるだろうけれども、その当時としてはあれより外にやりようがなかったというところでしょうね。

長沢 私も太平記的な方がよく読んでもらえると思っています。あまり何年何々じゃ、興味がありませんから。

大川 資料をナマで集合したようなものだとちょっと素人には読みにくいわけですね。

斎藤 この頃はいろんな部ができていますね。

絵だとか俳句だとか。その当時はそう言った部じやないけれども音楽などを大分たしなんでいた俱樂部員も多くて、田沼正治、坂田秀雄、小林なんかもマンドリンの俱樂部を作りましてね、それで前橋の萩原朔太郎君に来てもらった。なかなかギターがうまくて伴奏してくれて、僕はお世話して一週に一べんずつやったんですよ、あまり続かなかったけれどもね。

**大川** 桐生倶楽部の理事たる者は、音楽に対する理解がなくてはいけないというので、帝劇が出来たときに、ラ・ボエムをやるので、そのラ・ボエムを聞きに行くのに、いわゆる赤城社三名がタキシードを着て、シルクハットはかぶらないけれども、とにかくオペラを見に行くスタイルはかくあるべきだと、タキシード姿で三人で行ったわけです。我々はラ・ボエムを勉強しなくちゃならないので、太田黒の本を買って、ラ・ボエムを三回ばかり読んで、それで聞きに行ったんですよなるほどオペラというものはかくの如きものかというところで音楽の目が開けたわけです。

**長沢** それはまあ、桐生倶楽部の理事の皆さんが、東京でやったんだが、ここでクリスマスをやったそれが非常にムード的なものということで、それを一つお話し願いたいんだが。何時頃からクリスマス

マスが始まったんですか。

**齋藤** 大川が好きで熱心をやったんだが。

**大川** 当時ののは、今よりもっと純粹キリスト教的だったんですよ。クリスマスツリーもしっかりしたものを飾って、福引きというようなものはないんですが、讃美歌、聖書朗読、それから私の話というようなことをちゃんと第一部で堅くやって、それからパーティーに移るといいうりやりで、参加者も百二十人位もいたかな。

**長沢** そんなに来たんですか。

**齋藤** 大分来たんですよ。

**大川** 正式なコースで食事しまして。

**齋藤** 七面鳥を出して、そのときにまあ、この話は名前を言っちゃいけないけれども、私の前で食べる人が、「これは七面鳥という話だけれども栗の味がする」なんて、栗を食べていうんですよ。栗を食べる。

**大川** 当時は会費をきめてから、仕事にかかるとなく、正式パーティーというのはこういうものなんです。正式パーティーというのはいくらかかるといいうりやり方なんです。ホワイトのブドウ酒と赤ブドウ酒というような、その順序も正式にやっさいこうじゃないかというわけであつちやな帝国ホテルのパーティーぐらいのことはやって来たわけですよ。それを

もってわれわれ桐生のジェントルマンを作っている。そこには会費のことは言ってもしょうがない。ただ文化をリードしていくというフアイトを持っていったんです。

齋藤 私の時分には特別社員というのがあった。いまはないんですよ。桐生に永住しない銀行の支店長とか、ある期間だけいるんだから倶楽部員として加名していただかないで、それぞれ会費だけいただいた。群大の先生、桐生高専時代ですが、教授連中はみんな入れたわけです。だから大川時代だ十五、六人も入っていた。それがみな月次会には出て来たものですよ、だからやっぱりなんとなく文化的な空気があったものです。

大川 つまりインテリが集まったんですよ。

齋藤 支店長なども喜んで皆んな出て来たわけです。大川 倶楽部に来れば、雑談の合い間にも学究的新しい知識が得られるという。群大でね留学生が来るわけです。バキスタンだのインドなど、それを卒業の間際に留学生を倶楽部で招待するんですよ。そうして国際親善につくそうじゃないか、桐生に留学して、桐生倶楽部の社員に歓迎され、そしてその社員に送られて母校を去るといふ、そういう印象を持って国に帰ってもらおうというところでこれはしばらく続けたですよ。西田校長も非常に喜ん

でくれて、毎年やった。忘れていると西田さんから催促が出てね、「今年もやるんだらうね」と言った調子でね。

長沢 そうすると齋藤さん、大川さん、青木さんとか、こう言った人が理事時代は、一つは市民を引っ張っていくという気持ちが強かったんですね。齋藤 その使命感があった。

大川 理想主義。それで市民を引っ張っていくという使命を持っていた。だから桐生倶楽部は桐生文化のセンターだった。

長沢 これは、我々は教えられるね、それを持ちたいと思いますよ。大分時代が変わっています。

大川 ですから有名な地中海で船を引き上げた、あの引き上げのおやじさん呼んで来て、片岡という署名してあるでしょう、それで講演を頼むとか一般市民に呼びかけての講演会というようなもの。たとえばキリスト教講演会は、矢内原忠雄とか内村鑑三の弟子を年に二回ぐらい。二階で二百人ぐらい集めて、キリスト教講演をやった。

齋藤 救世軍の山室軍平。

大川 桐生の救世軍の教会を常盤町に作るんで、青木がばかに肩を入れて食事を一緒にしたりして、おかげで寄付を取られた。常盤町の教会には相当青木も出していったんですよ。

齋藤 あれは私と背木で出してき、ずつと援助して  
いた。そうしたら救世軍は教会ができたら金をよ  
こさなくなっちゃった。逆に救世軍のものになっ  
ただから家賃をよこせという、妙な話ですよ。

理屈はあつてるんだらうが、これはおれの方によ  
こしたんだから今度はそちらから使用料をよこせ  
というバカな話で、とにかくそう言った倶楽部と  
は関係はありませんが、さっき言ったように、何  
とか市民に何かもたらそうという努力をしていた  
大川 救世軍ができたということも、桐生の文化向  
上になるじゃないかということだったんです。

齋藤 どつちかというと、足のつかない理想ばかり  
だったかも知れないが、若かったしそこにいる小  
池君ぐらの年配だったかな。

長沢 齋藤さんいくつぐらい。

齋藤 私かね、三十四、五だったかな。

長沢 それから二十何年理事長をやってるんですね  
齋藤 私がやってたつて、大川が強心臓な男で、何  
でもやるんだつたから楽だったですよ。

大川 そんなことはないが。

齋藤 とにかくおもしろいんだが、ハンドーン・バ  
ンクボーンという人で秋田から太平洋を横断した  
人がいるんですよ、そのときには青木も大川も私  
も感激しちゃつて、科学の力で太平洋を横断した

んだ、これはインターナショナルな気持ちで飲  
しようということで、ここで一杯祝杯を上げたも  
のだ。だれも来なかつたけれどもね、実に熱烈な  
ものだったな。

長沢 そういふ点で大川、齋藤時代のように今の桐  
生倶楽部も市民を引っ張っていきたいと思っ  
すが、時代の変化でむずかしいと思っ  
か一言ありますか。

齋藤 特別社員というのは、一べんお考えになつた  
らいかがでしょうか、そうするとやはり学校の教  
授とか、銀行の支店長とか、銀行は法人として入  
つてるようだが。

長沢 特別社員というのは官庁ですよ。転任とい  
うものをあの人たちは持っていますからね。長くそ  
の土地にいられないですから。

齋藤 僕はあつたほうがいいと思っ  
長沢 そう言つたようなご意見を承つて、後世の経

営者というか、理事に残したい。

齋藤 さつきも言つたけれども、純粹な政治運動に  
は携わらなかつたけれども、政治、経済、文化、  
そう言つたものの中心になるように倶楽部が活躍  
してもらいたい。

大川 商工会議所をつくるときだつて、この部屋で  
やつたんですよ。それで我々で考へて、桐生は商

工会議所を要するといふ論文を大川書いてみろといふので、私は書いたわけだ。ここでそれを審議したわけさ。ところがあのときに政友、民政といふのがあつてね。大体倶楽部が政友会が多いんですよ。ところが境野が飯塚を呼んで来て、これを飯塚の名前で印刷しろといふので、桐生は商工会議所を要すといふパンフレットを私の原稿で、飯塚の名前で公表したんですよ。それが桐生商工会議所の発生なんです。それはこの部屋なんです。斎藤、青木、大川、それから飯塚貞一、飯塚宇麻志さんのせがね。それで斎藤の名前で出しても、桐生倶楽部の名前で出しても、大川の名前を出しても政友会といふのは少ないんですから、大衆がついて来ない。それで飯塚貞一の名前にしたわけです。それで桐生商工会議所といふものは発生したわけです。

中川 懇話会の時分から商工会議所の問題は出ているんですね。

大川 ついにもものにならなかつた。私自身が自分の原稿を何処かへなくしちゃつたんですよ。もつとも印刷屋へ行ったでしようから、書いたのを飯塚にやつたんですよ。だから何か桐生の文化のためにといふよりも、桐生のただの行政から離れた新しい試みといふものは、何かここから出たんですよ。

ね。

長沢 桐生倶楽部の社員全体にエリート意識が非常にあつた、それが当時の倶楽部の敷居が高いといふ言葉で表現されたかも知れない。

書上 高くない、低いんだが特種のある厳選された範囲の人たち、それが高過ぎちゃつたので一般的には決して高くないんだ。

中川 それでどうなんですか、エリートでないといふれないというように、厳選したんですか。

書上 それは相当選考しました。

長沢 落ちたんですか。

大川 落ちた人もありましたよ。

書上 倶楽部に入れば、こういう恩典もある。こういう便宜もあるというようにならなければウソだな。だから一般大衆を中心として物事を考えるべきじゃなくて、倶楽部員にならなければ、その恩典に浴せないとか、倶楽部といふものはこうだといふことを理解した人に入つてもらう。ここが理想じゃないんですか。今後運営していく上において重要な事だと思ふ。

長沢 ところが今は、国民全体の考え方が違ふんですよ。平等なんですよ、特権階級なんて意識はないですからね。いまの倶楽部の経営といふのはそういう点では昔と違つてゐるんですよ。

大川 これは政治団体じゃなくて、社交団体として互いに出資して互いに利用しているんだから、特権というよりも、社員のものというふうな考えで運営して行く。それで社員のものであるために社員の体面を汚すような恐れのある社員は入れないという建て前、これはやっぱり蔽として存していると思うんです。

長沢 私は理事長をやって十年ですが、その間に経験ないんですが、社員の体面を汚したために脱会を決議したという人はありませんか。

大川 ないですね。

書上 最近、ある人が経営企業も安定して桐生倶楽部の社員にもなった。倶楽部員になったというそのことがその人に箔もつくというふうな傾向が見えるんだ。これは大変いいことと思うんですよ、大川 この前僕が月次会の際には夫人も同伴するのがよいという主張をした事があるが、境野のときに婦人部というものを作りかけたんだが、青年部だけで終わってしまった。なるべく妻君を連れて来て、夫人同志の社交ができるようなチャンスを与えたらいいと思うし、婦人を社員に入れるべきだ。

長沢 家族会はあるんです。そのときには奥さんを連れて来るんですが、十年前から議論になりま

して、賛否両論あったんです。結局婦人社員の制度があつていいと、意見が一致したんです。ところがさっぱり入会する婦人社員がいらないんですね。

大川 この間お茶の会なんか森口夫人などが来ていた、やっぱりこういう所へ来るのはいいおつきあいのチャンスだということを書いていたけれども、社員の夫人は何時でも出席できる。

独身婦人は独立でいい、こういうふうにしたらと思うんだ。婦人社員として特別に募集しないで、外国なんかは大統領といえは大統領夫人がついて来るでしょう。こういうことです。

斎藤 それはいいことだな、僕はさかんに言ってるんだが。

長沢 倶楽部の発生地はイギリスで、イギリスでは倶楽部には婦人は呼ばないんだ。つまり男性の逃避場所が倶楽部だという。こういう意見はよく方もあります。

大川 だれかあつたよ逃避と言って、我々の社交を女にのぞかれたくないという考え方なんだが、それは時代錯誤だ。

斎藤 議論が出る程低級なんかね。今の理事は。

大川 婦人社長とか言ったらその婦人が社員になるべきだろうし、社員夫人は当然社員の資格があつ

て、出席し得るところいうふうにするべきだと思  
 んです。ですから、「今日は主人は出張で留守  
 ですから、私代わりに来ました」という具合で出  
 て来る。お付き合いですと、いいことだと思  
 んです。幸い理事長がいるから。

斎藤 理事長夫人というのは大いに出て来てやっ  
 てもらおう。

大川 そうすれば、奥さんも、「あなた今日は月次  
 会ではないですか、なにしているんですか、早く  
 行ってらっしゃい」と、こうなるんですよ。

長沢 大川さんがおっしゃった、主人は今日は多忙  
 で出られないから奥さんが代理に出る。これは非  
 常にいいアイデアと思うんだ。

大川 出ないんがおかしい。都合によったら二人で  
 出て来ていいじゃないですか。

長沢 名譽社員としての発言する場を与えなきゃな  
 らない。

斎藤 今日位のものだろう。こんなに意見のあるの  
 は。

大川 我々発言の場が与えられなくても、今日の発  
 言を理事も理事長もここにしているんだから、理事会  
 のときにこういう話が出たが諸君どうだと、議題  
 にして取り上げてもらえばいいと思うんですよ。  
 長沢 まあ倶楽部の理事だの、社員だのがもっと俱

楽部の創立の歴史からのみ込んでこないと、倶楽  
 部精神というものは伝わらないですね。それに  
 は社員歴の長い、つまり名譽社員の方々に意見を  
 聞くというところはいいことだと思わんです。その  
 チャンスが今までなかったわけですよ。

啓上 年齢の関係からはどんなふうです。

長沢 若い人が最近はおえて来ましたが、戦後  
 平均年齢が五十四歳位になったんです。私、統計  
 を出したんですが、私等が入ったときは三十二、  
 三歳でした。で、森正雄君が二十六歳で一番若  
 かった。最近、青年会議所で送り込んでここに  
 いる小池君が若かったんですね。十年たっても一番  
 若いという、その話があってね倶楽部社員とい  
 うのは、もっと若いのに引き継いでもらわなきゃ  
 いかんと思う。

大川 ローターリとかライオンズとかあるでしょう  
 そういうものと更にその上に乗ったブライド  
 を持った倶楽部にした。

啓上 何時かの会合に桐生は高崎、前橋に比べて県  
 下で一番文化水準が低いという意見が私書い  
 たら次にはその反論が出て、個人として文化人は相  
 当いるというのです。しかし文化団体というもの  
 はない。そこでその反論をやったんですが、  
 個人として文化人がそんなにいるんだつたら、そ



ういう人を倶楽部員にしたらいんじゃないか。そうすると自ら若い人も集まって来る。なるべく若くて文化人を集めていくべきじゃないかと思うんだな。

大川 それは書上さん、この間ユネスコの大会をやったでしょう桐生で、それでユネスコ大会の前にユネスコの新聞に「桐生には文化がない、桐生はみんな町人文化ばかりでどうしようもない」というようなひどいことが書いてあった。それで私はその編集長に手紙をやったんです。だれだこれを書いたのは、知らせろと。それは知らせられないという。白頭山人とかいうペンネームだったが編集部は大川さん反駁論書いてくれと言うんですよ。ところがユネスコというのは喧嘩がきらいなんです。だから私はやめたけれども、そういうふうな論評するやつがいるんですよ、それは確かに桐生は新興地には違いないが。

書上 論評するやつがいると言えば、ここにも一人いるがな。(笑声)

大川 そう言うようなことで、古い奈良朝時代からの文化というものはないけども。そうでない文化人はいるわけなんだ。それであまり桐生をけなすから僕は腹が立ったから、そう言ってやったんだ書上 一つは土地柄が桐生は織物産地であることと

土地柄が非常に時間的に余裕がないということが一つの大きな原因じゃないかと思うんですね。

大川 大阪の堺のように、全然商人の町であっても堺は鉄砲を製造し、刃物で戦国時代に栄えちゃって、何処からも手をつけられなかった独立都市国家だったが、そこから利休が出ている位だからねそれだからやはり堺文化というものは、忙しい商工業都市の中から生まれ出た立派な日本の文化なのだから桐生もおなじ堺的都市であって、宗教的にも新しい関東における堺であるという、そういうプライドをわれわれ持たなきゃいけないんだ。

長沢 時間もだんだんたって来ましたが、皆さんから一言ずつ最後の締めくくりを頂きたい。

大川 私としてはエリート意識を持って、そうして常に自ら文化人の先頭に立って桐生全体の文化の向上につくすという、銘々一人一人がそういう使命感に燃えてもらいたい。

書上 同んなじだ。

斎藤 特に僕が考えるのは、今の理事さんにはないかも知れないけれども、當利法人の経営でないんだから、まあ平たく申し上げれば、貸し間業に専念して決算の黒字を誇るような倶楽部でなく、一つ本当に社団法人の「登記法人」らしい経営をやってほしい。楽しくやって不足の分は皆さ

んが出せばいいんだから。

**書上** いやしくも倶楽部の会員となった以上倶楽部の文化、桐生の文化水準を高めるため、場合によっては経済問題についても論議し合うのもいいかも知れない、会費が高いとか安いとかは別問題だ

**大川** われわれの親友がお茶屋で飲んだ。ワリカンだぜ、これでいいんだ。その集会がいくらか桐生の文化のために役に立つ結論が出た。それで喜んで、よし一万円かかった、十人だから千両ずつ出そうじゃないか。その次の会合はおもしろく、安かったので五百両位出そうじゃないか、というよゆうな、たし前はお互いに出し合うよゆうな気持ちで自ら楽しく且つ市のためになると言うよゆうな考えで、社員銘々が持つてもらおうということだな。

**長沢** どうもいろいろありがとうございます。ことしの秋は創立五十年をやるのですが、まだ計画がよくまとまっておりません。一つ先輩の皆さんも大いに今後ご指導を頂きたいと思えます。どうもありがとうございます。

(了)



服部修氏筆

東側から見た会館

倶楽部をかいた絵は沢山ある。若手画家の石山アキオ氏なども、桐葉軒先から描いた会館を個展に発表していたが、事務職員服部氏は、さすがに各方面から会館を描いている。その一枚がこの「東側から見た会館」である。珍らしい角度からの絵で、知られざる会館の姿もあるので、掲げることにした。

座

談

会

第二部

境野理事長時代から現代に至るまで

出席者

- 理事長 川村佐助  
副理事長 小池久雄  
会計理事 平野元吉  
元副理事長 前原勝樹  
理事 齋藤喜平  
二代理事長 書上文左衛門  
名譽社員  
三代理事長 齋藤長平(途中退席)  
名譽社員 大川英三( )  
司会 五代理事長 長沢義雄  
編集 中川信彦

長沢(司会) ただいまから第二部の座談会を始めます。お集りの方々をご覧のとおりです。二部の座談会の中心は、第四代理事長境野武夫時代から現代までで、そのお話をざっくばらんにしていただきたい。それではひとつ前原さんあたりから口火を切って……

前原 境野さんがお亡くなりになった後の理事長ということなんですが、副理事長が昇格するのが当然だろうというように、長沢さんが昇格さ



左から長沢・齋藤・小池・前原・川村・中川の各氏



前原氏

れ、長沢さんのご指名で私が副理事長になった次第です。当時の事情を見ますと、ちょうど倶楽部のひとつの倦怠期と申しますか、月次会をしようとしても、集まる人が十人か十五人ぐらいという程度で、それも境野さんの独壇場で、誠に話はおもしろいんですが、ほかの方が余り発言がないということ、なんとなく共鳴が少なく、社員の数も百二十人ぐらいまで下がるといったところへ、長沢理事長が就任されたわけです。倶楽部は人を集めることが倶楽部だから、集める方法がなかるうかというようなご相談を受けましたのでそれには何といっても社員をふやすことだ。というので一生懸命努力して、医師会の連中などこぞって入ってもらいやつと二百名近くになりました。そして月次会にも人集めをというので、どうもこの会費を取って食事をするなんというのはかえっておっくうなんだから、食事なしで、夕方七時とか食後集まったらどうだろうと、これをやってみたら一向に人が集まらない。先輩の話をいろいろ聞いてみると飯を食わせなければ人を集めることはできないんだ。飯というものは人間食べなきゃならないんだから、その貴重な時間を何がなんでも捕まえちゃえ、というようなことで、私もその気になりました、今の飯を食う月次会になったん

です。それでもなかなか人が集まらない。ところが、おまえ酒を飲まないから酒のことを忘れてはいないか、一本つけなければ人は来ないんだということになりました、私もなんだか飯を食ったり酒を飲んだりというところに連れて来るといのは、倶楽部の社員として何となく意地ぎたないような書生気質の考えを持っていたんですが、先輩がやってみろというので、これは今度理事長に変わった川村さんなんかの説が多分にあって、当初はとにかく会費無料でお酒を出すというわけだったんです。これをしばらくやっておりましたら、だんだん集まってまいりまして、多い時には大体七十人ぐらいになり、さすがに倶楽部らしくなりました。出し物と言ってはおかしいですけども、スビーチの方もおもしろいものを考え、とにかく沢理事長の初めの二期、三期ぐらいまではかなり人の集まる月次会ができ、会員もどんどん増加したので。長沢さんと意見が違わわけじゃないんですが、長沢さんはご承知のとおり事業家でありますから、倶楽部が健全な財政でやっていかなくちゃ、赤字で銭が足らんでは長続きしないというのです。私の方とすると、倶楽部は人が集まり、親睦を中心とする会員の倶楽部だから、貸室で金を作るよりも、会費をいただいても人を集めるよ

うにするのが本筋ではなからうかと、これが長い間の私が長沢さんの副理事長でいながら意見がピツタリしなかった点であったかも知れないんですが、お互いに倶楽部の本筋をつかむという点では一応自らなぐさめているところがあるわけです。その後になりまして、また一時月次会の集まりが少なくなつて来たものですから、何とかもう少し人が来るようにしなければということから、昔、桐生懇話会というのが出発点でこの倶楽部が発生したということになると、われわれも一応そういった形で、もっと話し合える会を、月次会といったようなきまつた席で、きまつた時間でなくて、自由にしゃべれるような会を作る必要があるのではないかということで、懇話会という席でやってみることにしました。初めの計画では毎週土曜日には集まって誰かが来て話をするというようなことで、一応土曜懇話会という名前を付けて始めたわけです。人が来るといっても話題がなければ集めようもないし、徹底もしないので、何か一つ議論の題目、話し合いの題目を出そうじゃないかというようなことから、私と斎藤さん、小池さんとかもう一人どなたか、四人ぐらいでそれを運営しようということになったんです。ところが実際にやってみると人の集まりもよくないということ

から、しまいには私が一人で考えて、一人で題を出して、毎月やるようになりました。ところが多いときには十五、六名少ないときには六、七名しか来ないんだけど、私の考えとしては、ただ人が来ないでも、毎月土曜懇話会の案内が来るということは、社員の皆さんに自覚を持っていたかどうかえに、また、それがあれば、倶楽部を利用しまた会費を払うのにも幾分の張り合いがあるのではないか。一枚の葉書ではあるが、その利用価値は大きいと考え、大体四十九回、約五年間にわたつて土曜懇話会をやりました。結局このことは結果としてはあまり成功とはいえず、且つまた勝手に自分の名前で手紙を出すのは、倶楽部に党中央をなすのでけしからん、というお叱りを受けるまゝになつてしまつたのです。全く不徳の至りというやつなんです。私の名前を書いたのは、今回は私の責任ですよ、この次は小池さん、この次は斎藤さんというように、名前を出して責任を明らかにすることと名前を書き始めたんですがやはり見る人から見ると理事長の名前で葉書が来たり、前原勝樹の名前で葉書が来たというのでは倶楽部の中がおもしろくないんじゃないかというような風評も出て来まして、私とすると、あまりほめられた結果ではなかったと思つている次第で

す。

**長沢** 前原さんのお話しになったのは、大体に境野さんが亡くなった後の、私が理事長になってからのお話が非常に多かったと思うんです。そこで、一応話を元へ戻しまして、境野さんがやられたことにはいろいろと功罪があったと思うんですが非常にいい面として境野・南川コンビなどがそれだと思うのですが小池さん、斎藤さんあたりがその時代のことを……南川・境野のコンビで青年部ができたという話がありますね。順序が前後いたしますけれども、その点をひとつ如何でしょうか。

**小池** 斎藤さんから境野さんにバトンタッチされたのは何年になりますか。

**中川** 二十五年ですね。

**小池** 青年部ができたのは斎藤理事長のときだったんですよ、斎藤、大川、境野さんたちももちろん理事だったと思いますが、倶楽部の社員の子弟を中心として、その友人と青年部を作って大いに倶楽部を活用してもらいたいと言うようなご意見があり、又当時の世相ですから、若い人たちのよりどころという意味もあり、書上さんからもお話のありましたように、若い人たちが卒業すれば皆んな東京に行っちゃうというようなこともありまして、昭和二十二年一月の中旬に大川さんから「俱

楽部でこういう構想を持っている。ついては君たち若い連中で青年部を作ってくれないか」というお話があって、三月二日に創立総会をやった。倶楽部の方から世話人として出席されたのは大川、長沢、境野のお三人であつたと思うんです。青年側は私と茂木さんと大橋さんですか、三人で企画したわけです。もちろん斎藤君が当時から一緒にやってくださったわけですが、斎藤さんもお父さんの関係で……。三月二日に総会を開きました。

初めのメンバーは十五、六人だったんですが、毎週日曜日に集まろうということで、昭和二十五年いっぱい続き、その間にメンバーの交替は多少あつたけれども、三十四、五人が固定メンバーでした。その当時としては女子もまじって気楽に付き合えるような会合が非常に珍しかったんです。われわれとしても戦前の教育を受けたわけなので今の若い人から見ればなんともないんですが、異性と交際ができるということも確かに大きな一つの魅力だったんです。いろいろ倶楽部側でも、今の世話人の方々、南川さんとか私どもの先輩で斎藤正七郎さん、小島先生だとかが、いろいろ世話をやってくださって、非常に楽しい会合ができたんです。結構仕事はいろいろやって来てるんです。工場見学とか、ハイキングとか、討論会、読書会



小池 氏

経済夏期大学なんてのもやりまして、織物会館に確か三日間だと思いますが、一ツ橋の中山伊知郎さんたちの教授陣を呼びまして、夏期講座をやったわけです。倶楽部で教養講座をやりまして、南川さんだとか、劇作家の大島万世さんだとか、鳥井足先生だとか、そういう人たちを呼んで教養講座をやりまして、講演会として東大の吾妻栄さん、それから早稲田大学の経済学部の方になった杉山清先生、中国研究所の所長をしておられた尾崎庄太郎さんなどにおいでいただき、対外的にも桐生の青年層に呼びかけた活動をやって来たわけです。今になるとなかなか懐しいんですが……。

その年のクリスマスには青年部の女子メンバーの手作りのお料理。余興は青年部全員。私が南川さんと相談して脚本を書き、それを台本にして芝居をやったというような記憶があります。当時はイモを食いながらの生活だったので、その中でわれわれの青春にとって貴重なときを持たせていただいたということは、何時までも非常に感謝しているわけです。

**長沢** どうもありがとうございます。それに斎藤さんの方から補足がありましたら。

**斎藤(喜)** 当時の話という、今小池君がまとめられたようなことなんですが、ちょうど二十二年

から二十五年ぐらいの間で、非常な戦後の混乱期だったものですから、第一回に集まったわれわれの服装を考えてみましても、復員姿の軍服、これは男性ですが、これが大部分、それにカーキ色の学生服と、それから女子の方は、それでもさすがにモンペははいておりませんでした、みな地味な服装で、そういう中で始まった会合だったので。倶楽部側の理事の方々のご指導、またその中に先程名前が出ました南川さんとか、小島先生とか、いろいろまあ異色な方がおられたせいか、非常に会合としては幅の広いもので、経済的に、物質的に恵まれてはおりませんでした、私たち戦中派にとっては、今考えてみますと唯一の青春時代の思い出になっておるわけです。その会合自体も、単に指導していただいたというだけでなく、まあお互いにフリーに組み合わせをしまして、毎週当番が企画をする。そしてまた司会、進行一切の準備をしまして、当日の報告を当時の葉書だったので、自分たちでガリ版に刷りまして、次の当番にバトンタッチしてくと、立派な倶楽部活動としての本質を守っていたと思っております。解散してから桐生に残っている人は、ほとんど正式な社員として当倶楽部に残っているわけですが、いま時代が変わって来ましてそういう機会は外に



たくさんあるんだろうと思いますが、倶楽部として考えて行っていくことじゃないかと思っています。

長沢 斎藤さんと小池さんにお尋ねしたいんですが婦人はその当時何人ぐらいたったんですか。

小池 大体半々ぐらいました。

長沢 十四、五人から三十五、六人になったと言っておりますね。

小池 創立総会のときは、女子は二名だったんです。だんだん女子が増えまして、半々ぐらいのメンバーになりました。女子と言えば、これは笑い話なんです。その当時ある女子メンバーの一人に縁談があったんです。先方の興信所へ頼んで素行調査してもらったら、桐生倶楽部の青年部に入っていて、ボーイフレンドがたくさんいる。これは発展家だということで、大分支障があったという話を聞いたんです。われわれも弱ったわけです。

長沢 その後発展的解散をしたんですか。

小池 当時、学生が多かったので、卒業すると東京へ就職された方もたくさんおられますし、書上さんところの文爾さんもそうですが、女子の方は結婚される方が増える、それと入れかわりに新しいメンバーが入って来て、新陳代謝をしていけばよかったです。当初のメンバーそのまま、時を過ぎてしまったんでメンバーも減って来るし、

会合も少なくなったし、マンネリにはなるしで魅力もなくなってしまうって、倶楽部の方からも、

「どうだろうか、いまの程度のメンバーだったら倶楽部の正式な社員として、倶楽部の中で活動してもらってもいいんじゃないか」というような話も出まして、約三年で、一応まあ発展的解消を上げたというようになったわけです。

長沢 これは全部じゃないしここで申し上げてどうかと思うんですが、女子部員と結婚までゴールインしたのが数組あるんです。これは非常によかったと思うんですよ。

川村 発表してもらったらどうですか。

長沢 ここにいる小池夫妻、斎藤夫妻、？のほか……。

斎藤(長) おれの知らないうちにちゃんともう(笑声)

小池 戦後すぐ、青年部のできる前に、松島寛一さんや青木昇さんとか、川島先生ですか、皆さんで倶楽部を非常ににぎやかにされたことがあったんじゃないかったですか。

斎藤(長) 劇なんかやって。

小池 劇やったり、東京から呼んだり、そんなことをやっていたこともありましたね。その当時、私倶楽部の社員じゃなかったんですが。

長沢 南川、境野構想が非常によかったと思うんです。特に南川という存在が非常に影響しているんだな。

小池 非常に貴重な存在だった。

斎藤(長) 書上さんのところにいた安吾。坂口安吾ね……。

小池 南川さんの縁で坂口さんが桐生に来たわけですからね。南川さんが倶楽部の新しい経営に苦心をされた。とにかく倶楽部で飲食も出来ないようではしょうがないということで、一号室で食事出来るようにしたんですね。食器も揃えて……。

斎藤(長) 今のコーナーは、南川さんのとき出来たんじゃないか。

長沢 それは、南川さんの構想も大分あったんです。いまの湯わかし場、あれが、なんかバーみたいな……これは改造しちゃったんですが、せいが高くて腰かけると足がつかないような腰かけを持って来たんですね。

小池 南川さんという方は、非常な社交家で社交に對して純粹な考え方を持っておられて、とにかく人格を築く上で社交ということが一番必要なんだそれが出来なくてはいかんということをしきりに説かれていた人ですね。倶楽部は南川さん自身も好きだし、一生懸命努力された甲斐もあったわ

けなんです。坂口さんはああいう性格の人だからあまり倶楽部に引つ張り込んでも無理だったわけですが、それでも何回かジンのびんなんかひっさげてお出でになったことを覚えていきますよ。

中川 社員にはならなかったんですね。

長沢 ならなかった。付け加えた方がおもしろいと思うので一寸つけたいですが、坂口安吾が桐生に来る前に南川さんと境野さんと僕とが同席した時「友人に坂口安吾というのがいて、伊東にいたんだがいずらくなっちゃったんで、桐生でどっか貸してくれる家はないだろうか」というんで多分斎藤さんに相談したと思うんです。部屋数があって大きな家というなら書上さんの家なら大丈夫だということの話が決まったように聞いてるんですが書上 そのとおり。

長沢 坂口安吾が桐生に来たというのは、南川さんの人格を物語るものですね。晩年飲んで暴れたという事件が新聞にも載りましてね、ずいぶん乱暴はされたようですね。

書上 いや、あれは……、未亡人が文芸春秋社の横町を入った突当りに「ククラクラ」というバーを始めて、もう十年ぐらいになるでしょう、最近『ククラ日記』というのを出版してそれがテレビ化されて、今週で最後ですが、それに、桐生も出

て来ますね、私も二、三回ぐらい出たでしょう、九郎右衛門が私の役です。

長沢 安吾の話はいろいろあるんですが、まあこれは倶楽部の話を中心なんですから、書上さんもしろいろと裏話を知って居られるはずですが、また後日という事にして……。

小池 境野さんの理事長当時、南川さんという存在があつて、非常に倶楽部の本質的な行き方をしておられたと思うんですが、いわゆる一般社員層とちよつと遊離しちゃつたと思うんです。倶楽部の中に一つの別なグループができたような形になつて、それが一つの経済的破綻にもつながつたと思ふのですが、あの当時の改造費用を境野さんから借り入れたりして、会員は百名ちよつとで、しかも会費が順調に集まらないといふことだったので理事だけでやむを得ずたらぬ分を補填する始末だつたのです。

斎藤(喜) 理事が社員よりよけい出していたんですよ、倍以上出してましたね。社員が二百円で理事が五百円だつたかな。

長沢 その頃は非常に経営が苦しかったわけですね。当時会計をやっていた平野さんがここにおられますから、当時の説明をしていただきましょか。

平野 私が倶楽部の理事になつたのは昭和二十五年

頃だつたと思います。境野さんの時代に理事になれといふことで、なんとなくなつたんですが、当時の理事会と言つてもせいぜい三名か五名ぐらいしか集まらないんです。誠に寂しい理事会でしてね。長沢理事長の時代になつて、長沢理事長はやり手だからいろんな計画を持つてやっておられるその時は私はまだ会計をして居りませんでした。神谷さんが東京へお出でになるので、私に突然会計をやれといふことで非常に倶楽部が苦しくて、何ともしかたがない時に神谷さんの後を受けて、この経理を担当するのがいやで、随分お断りしたんですが、長沢理事長からどうしてもやれといふことで、やむを得ずお引き受けしたわけなんです。引き受けてみた所が、まことに倶楽部には借金があり、酒代の借金、桐葉軒の借金だけでも五万幾らある。その他小さい借金がたくさんあるわけですね。いったいこれをどうしたら解決出来るだろうかと心配したんですが、先ず帳面をみんな調べてみたんです。ところが、支出の面、収入の面もまことにはつきりしないんですね。収入の帳面が途中で破けちゃつたりなんかしてらるんですね。先ずここから訂正して行こうといふことで、複写にしまして、収入の金額は絶対に伝票を破れないように直して、まず収入の面を押さえる。支出の面



平野氏

はそれから考えていこうということになったわけなんです。そのうちに長沢理事長もなかなか積極的にお考えになって、倶楽部の会員を増強しようということ、骨を折られたし、私も仕事をやるためには経理がしっかりしていなければなりませんので、十分に経理の面とにらみ合わせていうことにしまして、そのうちだんだん社員もふえて来たものですから、多少経理の方も楽になってくる。今迄は倶楽部へ何を持って来てくれと言ってもまことにいい返事がなくて、持って来てくれない。そんな事では困るので、先ず第一に借金をきれいにしちゃおうということで、収入の中から少しずつ借金を返して先ずこれをきれいにしました。長沢理事長から庭を直すようにとの話があった。結局信用金庫から百万円をお借りして、この庭園を修理した。それから後は、倶楽部の中が非常にひどくなっているものですから、この手入れをしなければならぬ。それには大体百万円かかる。そんな金もないんだが、つとめて会員をふやすようにして、これまた信用金庫からお借りしてこれを毎月僅かずつ月賦でなくしていく。第三はいろいろな調度品が非常に悪くなっている。これを直さなければいけない。それに大体百万円かかる、結局また信用金庫から借り入れをしまし

て、これも漸次返済する。ほか床板が非常にひどくなっていますから、これも直さなければならぬので神谷君のところをお願いしてじゅうたんを買った。それから六号室の雨もりで柱が二寸も下がって、戸があかないということで、これを直すのに二十万円。といった具合で大体修理をするのに四十万円ぐらいかかったと思うんです。会員から会費を集めるのにどうしたらいいかということ、非常に心配したわけですが、倶楽部の理事が集めるわけにもいきませんので、信用金庫の荻原さんに頼んで集金をしてもらおう。何かずつお礼をするということにしたわけですが、お礼も出来なかつたんですが、なかなか信用金庫も忙がしいし、会費を集めに行っても集まらない、五回ぐらい行かなくちゃならない家も出て来て、結局これはだめだということへ、服部君が事務員として入って来たので、服部君にお願いして会費の徴収をすることにしましたわけです。その後非常に内容もよくなりまして、会費の方も服部君がよく廻ってくれるものですから、いろいろな面ですっかり好転して来た。それが今日の非常な隆盛になって来た原因だろうと思います。結局よく考えてみますと、長沢理事長の功績はまことに偉大なものがあつたと私は考えるのでございます。そうやってるうち

にも、長沢と平野のコンビで勝手にかきまわしているんじゃないかという風評もされたり、かげ口も叩かれたということもありましたが、先輩の残してくれたこの偉大な遺産をどうして保存するかということに熱中しておりましたから、そんなうわさを聞いても意に介せずやって来たわけです。

その後改選になって川村理事長さんになられたわけですが、なかなかこの川村さんが積極的に動かれるものですから、まず第一に二十万円も奮発してもらいました暖冷房装置が二百二十万円かかったんですが、これもすっかり返済をいたしました創立五十年ということで、その記念に内外装の修理をしようとしてそれを計画しているわけですが、こんなことを考えると倶楽部も隔世の感がするのです。

**長沢** そうですね。倶楽部の経営のむずかしさの一端がおわかり願えたと思います。一部の座談会の中に、斎藤、書上のご両人が理事長時代には、理想に向けて突進され、倶楽部員を引っばってこういう理想があったんですが、今ではそういう理想を振り回わして、引力をかけるとう倶楽部員が脱落するんです。だからやっぱり倶楽部員を獲得するためにも、多少新しい社員の気持に迎合しなきゃならん。会費の値上げはなかなかむずかしい

そうすると結局は倶楽部の理想とする事業よりもまず社員に受けるにはどんな事業があるかということが先決するわけなんです。そこに倶楽部の経営のむずかしさがあると思うんです。まあ一時は非常に借金もふえまして、暗いものがあつたんですが、それを克服してようやく今日に来たわけです。

**前原** 長沢理事長並びに平野会計理事とには物的の面について非常にお骨折りをいただいて、この地方にまれに見るばかりでなく、大正の建築としてもおそらく将来桐生市でも保存しなきゃならない建物になると思うこの先輩の遺産を、非常に愛着を持って守っていただいた。私自身は理財的にはまことに不得手なんですが、倶楽部というのは社員のもので、従って社員がここへ来てこの部屋を利用して、これを楽しむ、いわゆる社交倶楽部、メンズ倶楽部、男の逃げ場所であるという立場を堅持しておるわけです。従って部屋のよくなることは大いに歓迎しております。またこれを利用しなければいけない。その理由はひと様に部屋を貸すということとは二の次で、社員がみな金を払っておるんだから、これが自分たちの客間であり、応接間であり、奥座敷であるというようなことで、来客はここに連れて来る、何事かあった場合には

同行する、とそういうようなことで、そのほか普段もここに来れば誰か話し相手がいる、何かおもしろい行事がある、われわれ紳士と言っちゃおかしいですが、バーばかり行ってもいられないし、映画へ行っても顔を見られるようだしということ、何処かへ顔の知った連中が安心して集まって楽しめるところがなくなっちゃならないこれが倶楽部だ。それについては、どうも今長沢さんがおっしゃるように、いろいろな人を引っ張って来ようと言っても、なかなか理屈では引っぱれないので、何か催し事ということで前原一治理事長になってから文化活動委員会というものが出来たんです。第一に絵の展覧会をやるうというのの洋画、日本画、あるいは美術の鑑賞等に興味のある方が何人か集まって絵画グループというものを作って実際の執務は斎藤さんをお願いし、集まって絵を描いたこともあるし、桐生倶楽部の展覧会というものも三回ばかり催したわけです。やってみると皆んな程度が高く、実際は市の展覧会なんかは玉石混交であるけれども、ここの中ぐらいの粒ぞろいだというように、一つの信用を得まして、さすがに倶楽部だというわけで遂には服部君が絵の展覧会をやってテレビに出るまでの派生的な結構な話になったんです。数名集まって

水上に大風の吹く寒い日に谷川岳を描きに行ったことも、それからまた足尾に紅葉を描きに行ったこともある、と言ったことで、かなりクラブ活動が出来た。一方俳句の会をやるうと言うので、たまたま俳句の方には森口さんなど俳句の大家ですから、それに小玉さん等いましてこの会も大体十回ばかりやって実は昨晚もあつたんですが、私これまで俳句なんて全然知らなかったけれども、一応なんとかおつつけるようになった。最近是小池副理事長も俳句に入ってきて、この間あなた欠席だったけれども最近最高点だった。

小池 いやーどうも。

前原 これなんかも、今度大いに宣伝してみんなここで俳句を楽しむといいいんじゃないか。一方また碁ですね、毎週水曜日には碁の会があつて、これが非常に盛況をきわめて、いっぱいロビーに碁が並んでる。交詢社とか学士会館等のクラブに行つたことがあります、主に集まってるのは碁なんです、ですから当桐生倶楽部もようやく倶楽部の本筋に乗って来たのではないかと、この感を深くしている。最近是将棋の方もやりたいということですが、こういうムード、共に楽しむ部屋、即ち倶楽部という信念を持って、今後ともやっていただきたいと私は考えているわけです。



齋藤 氏

齋藤(喜)

今お話のあったように、私も前原先生

のあとにつきまして絵の方、囲碁の方、お世話させていたで居るんですが、今後の倶楽部、一つには計数的な経営ということ、これは大事なことでありますけれども、やはり本来の目的から言えば、社員が常に倶楽部を利用して楽しむ、また集まってくるということが大切だと思うんです。

現在はまだ各委員会の活動も目をきめたり曜日をきめてやっています、毎日何か倶楽部の一つのグループがここで集まるとか、あるいは何時でも誰か倶楽部員がいて、話ができる、そういう倶楽部にできるだけ早くしていきたいと考えているわけです。

小池 今の文化活動委員会の活躍ぶりが話に出たんですが、委員会制度というのが一昨年の十一月に発足しまして、文化活動委員会、行事委員会、管理委員会、広報委員会などがそれぞれですが、これは倶楽部とすればこういう組織ができたということは、画期的なことなんです。こういうふうな社員が、皆んな自分たちの手で楽しくしようという空気ができたということは非常にいいことだと思うんです。特に色々な趣味の会がこれからもまだまだたくさんできると思っています。名前だけは入っているけれども、例会にも出られないという方がたま

たま俳句の会を通して初めて倶楽部のいろんな面を知って、非常に親しみを持つようになられたというように、これは非常に倶楽部の本質的な行き方の上にも大事なことだろうと思うんです。最近の雰囲気は非常にいいと思いますね。

齋藤(喜) 倶楽部の活動というものは、何かのグループに出てるもの一番とけ込むのに早いんです。活動の様子を知らせるために、今小池さんと丸山君たちが中心になって会報の委員会ができてるのですが、これなども非常に骨の折れる仕事だと思えます。お忙しい中をよく出してもらって、私たち何時も感謝しているんです。今回の座談会も五十周年史編纂を機にして催されたわけですが記録の上から言っても非常に大切なことと思うんです。

書上 何の委員会です。

齋藤 広報委員会と言って、倶楽部ニュースを出しています。それから名簿など、これも各種の実質的なクラブ活動がその時だけで終わらないで、外の会員にも周知されますし、記録に残すためにやっているわけです。一昨年からです。

小池 それから行事委員会というのがありまして、これがクリスマスパーティー、新年互礼会とか、納涼会、ガーデンパーティーというときの世話役

で、企画から一切の運営をやり、そっちの方は平野さんが委員長になっておられるのです。管理委員会というのは建物の保管、修理というようなものを受け持っています。

**書上** 斎藤君からの意見のうちに倶楽部に来ると誰かいる、それで会って話もできるし、意見の交換もできるという一言があったですね、僕は倶楽部というものは、そこが終局の目的じゃないかと思うんだな。

**川村** 是非そうなるようにしむけていきたいのですが、その方法がなかなか理解をしてもらうという事がむずかしかったんですね。

**書上** 面会を求められるでしょう電話で。倶楽部でお会いしましょうと、必ず言うんですね、自宅で会わないで、自宅で会わなくちゃならない問題もあります。おいでいただく人の関係で。ほかの問題はなるべく倶楽部でお会いしましょうということを書いて来ました。

**斎藤(喜)** 私の父なんかも、倶楽部でということを書いておりましたし、ご承知のように倶楽部はわれわれの応接間だと、また桐生市の応接間でもあるというようなことで、そういう倶楽部員自身が身に付けた使い方をしなければいけないと思うんです。

**書上** 私の家内の兄の森順治郎氏は、東大を出て九州大学の経済学部の開設を文部省から命ぜられて英仏へ留学して、フランスで得たヒントによって

フランスに戻って、七年以上もフランスにひっかかっちゃったんですね。と言うのは、だんだん聞いてみると、学者仲間が晩餐に呼ばれて行く、ご飯の済んだ後ではサロンに集まって座談をする、そういう場合には、各々の専門の話は避けて、いわゆる劇とか、或いは文化、音楽、そういうようなお話をするのがエチケット。居並ぶ者はお医者さんもいれば、経済学者もいる。専門が皆んな違うというんですね。たまたまポケットの中からペルギーの硬貨を出すと、よく大統領の顔などを彫刻したのがありますね、そうすると彫刻の話になる。居並ぶ者が実に造詣が深いんです。日本の彫刻というものはペルシャの影響を受けている。或いはシナからこうで、正倉院の御物はこういうものがあってこうだということです。しかもその人は一べんも日本に来たことがないというんですからね。フランスじゃ、僅か百円ぐらいのコーヒー一杯で夜中の二時、三時までいろいろな話をする。それでもそのマスターは平気だというんです。フランス人はよけい本を書かない。ドイツ人は本を書く。本を書いて世間へ出しても反響はあるん



です。ある程度の。けれども話し合うということ  
は、即座の結論が出ちゃうんだ。日本の専門家と  
いうものは、医学は医学、経済学は経済学だと思  
っていたところが、とんでもない話だというので  
ネチャペンをして七年もいたわけです。だから彼  
氏に会って劇の話なんかしようものなら五時間ぐ  
らいたて続けですよ、シェークスピアの劇一つを  
批判するのに、二丁目の前だけども十べんや二  
十べん見て批判はできるものじゃない。五十回以  
上見なければ本当の批判はできるものじゃない。  
ソ連の映画論に至っては実に造詣が深いですから  
ね。そういうんでいろんな話をしている間に、自  
分の持っていないものを人から聞きますね。川村  
さんとお会いするとします。川村さんからは現在  
のいろいろな繊維界の状況を聞く、何も知らない  
ところへ、いろいろなものを聞いて家へ帰るとき  
はポケットがいっぱいになって帰る、そういうと  
ころの倶楽部にするが、これは本当の終局の理想  
でしょうな。手段方法としては小池さんもさっき  
言われたように、俳句の会を作り、歌の会でも作  
って……。

小池 顔なじみになつてくると、どなたかここにい  
れば、ここに来てお茶を飲みながら話し合いがで  
きるということになります。今迄のように社員の

名前だけじゃね。やつてもらおうとしても無理で  
すから。

斎藤(喜) 現在、この倶楽部がこういう立派な  
社屋があるために、桐生ロータリーがここをしょ  
つちゅうお使いになっている。青年会議所もしょ  
つちゅう使っている。私は結構なことではないか  
と思うんです。ロータリーは、ほとんど全員が桐  
生倶楽部の社員じゃないかと思うんですが、青年  
会議所の方は、まだ年令的な問題がございますの  
で、OBは必ず入れてもらうようにしています。

だからいろいろな会は桐生倶楽部の分派的な存在  
だと考えていいんじゃないか。そういう気持ちで  
協調していけば、この倶楽部の内容というものが  
豊富になってくるんじゃないかと思うんです。

長沢 それは斎藤さんの考え方と、僕は違うんです  
倶楽部の中にある会には、倶楽部員が希望すれば  
誰でも入れるでしょう。ところがロータリーに入  
ろうたつて入れない。これはちょっとそのへんは  
どうかと思うんですね。

書上 ロータリーには入れないが、ロータリーはこ  
こでやってるんでしよう、ロータリーのメンバー  
でこのメンバーでない人もいるんでしよう、自  
然このメンバーになってきやしませんか。

斎藤(喜) なるものはなつちやっつたんです。



川村氏

小池 ほとんど入っておられるようです。

川村 大部分入っておられますね。

平野 未入会者は四、五人ぐらいでしょうか、あとは大部分。

川村 先程の計画が、前原さんが理事長になられるとすぐに、この計画が行なわれたわけなんです。小池副理事長と共に非常に文化的な交流が激しくなり、会合も大きくなっていいと思うんです。境野さん時代に提案しておられたと思うんですが、境野さんは文化人で考古学会とか好日会とかいうのを作って書画を持ち寄って、集まるようなことをやっていた。当時いろんな人も寄ったんですけど、けれども境野さん当人がちょっと頭のすぐれた人で、先程あなたが話したように、片寄ったところがあつて経済面での経営が合理化を欠いてたんじゃないか。これがいま言われた会計に苦しんだ原因になっているんじゃないか。境野さんが亡くなられて、長沢さんが理事長になられ、内容の改革ロボーの改革、部屋の改造、このままの建物で新しい改造を先程の基準を作ってやられた。その文化設備にも協力するが、直接文化設備でないものに前理事長はうんと発展させた。容器がよくなたところで文化人の前理事長が座わられた。ちようどタイミグがよかつた。何もかも一緒には

できないでしょう。長沢理事長は、これをぶっこわして八階建ぐらいにしちやえという構想もあつたんで、これは僕は大反対だった。これをこわしてはゼロになる。五十年前にはこの建物を作られたという先人は、せいぜい四十歳か四十四、五歳じやなかつたかと思うんです。今それだけの年の人で、これだけのものを社会的に建設する人がいるかどうか、随分金回りがよくなつて、贅沢はしてレジャー景気だと言つておるけれども、こういう奉仕的なものを建てる昔の人は余裕があつたし、精神的に随分進歩しておつたんです。これを永久に保存維持する責任が市民にあると、こういうことを私は理事長に随分やかましく言つて反対したんですけれども幸いに同意の方もあつて残されてまあまあ、あなたの時代を過ぎてよかつた。あなたがもうちよつとやっているとぶっこわしてしまつたかも知れない。なんにしても構想が大きいです。私は桐丘学園の評議員の末席をけがしているんですが、まだ幼稚園もなかつたし、大学もなかつた。ただ高等学校と中学校だけ経営されていた。いよいよ幼稚園を作ると、高等学校も拡張したい、或いは大学までもつていきたい。何を夢みたいなことを言つてと私は実はヘソで笑つていった。それがとうとう今日自分の代で大学までやつ

た。非常に経営能力が大きいんですよ。そんぶりの悪いところもありますけれども頭が高いのが玉にキズ。もうちっと人さまに愛嬌をふりまくといんだが、どうもそのへんがそんぶりが悪いからあなたのしたこと程、ひとは買ってくれないんじゃないか。とにかくこの内容の改造に対しての努力は大変なものですよ。皆さんの大きな犠牲によってここまで伸ばしてきた。そこへ文化的な前原前理事長が就任されて今度は内容がよくなった。時期を得た二代の理事長が今日を完成しているんじゃないかと思っています。今後は小池さんとい、斎藤さんといいい前途有為の人がいらっしやるから、曲がりなりにも任期だけは勤めさせていただかなくちゃと思ってるんです。前原さんがもうちょっと長命であるとうかつたと思うんです。とてもあんな年配で前原一治さんが亡くなるなんて夢にも思っていなかった。これは残念だと思ってる。桐生にとっても非常に損失です。この点は一ツ平野さんなど、われわれより年が若いんだから十分後継者としての重大な責任、任務をもってこの倶楽部を将来永久に守って先祖に対する敬意を表したり、責任を感じていくこと、これが私たちの倶楽部に対する使命であり桐生市民の使命ではないかと思っている。この建物があれば何時で

も話題にのぼって先輩のことを思い出す。これが新しいものになってしまえば忘れちゃいますよ。先人はこんな進歩した人があったんだ、犠牲者があったんだと省りみて、わが身を反省せんならんことが何時もおきてくると思うんですよ。

**平野** いま心配されることは、会員が二百六、七十名にもなつて例えばクリスマスやっても入りきれないとなつたら倶楽部はどうしたらいいかということなんです、現理事長に一つ考えてもらわなきゃならない。

**長沢** そこで川村さんね、川村さんはこの建物に非常に執着、愛着を持っておられるけれども、これでは今後桐生倶楽部の機能が発揮できないんですよ。そこで僕の場合は昭和三十七、八年頃夢のようなものを出しましたけれども、やっぱりここを七、八階のビルに改造しなければということになると思うんです。創立時代に四万六千円ぐらいで出来たんです。土地買取と建物で。今から逆算していきますと、大体千倍とみて四千万円ですね、それだけのものを倶楽部員が出し合つて、また借金もしましたけれども、やってのけたのですが、四千六百万円の金をいまの社員で出す、その気持ちがあるか、出来るか。能力的にそれが問題ですね。**川村** だから当時の人は偉かつたと思うんですよ。

長沢

私の考えでは、鉄筋七、八階のビルということになると何億という金になりますのでそれだけでも出せませんから、この土地は九百坪でしよう。そして今の前の道路が整備されますと、第一銀行の前が一等地ですから当然これも一等地になると思うんです。交通量はあそこよりも少ないかも知れませんが、あそこから歩いてわずか二、三分で来られるんですから。ここに七、八階のビルを建てるのに桐生倶楽部は一銭の金も出さないでもできる方法を考えたんです。と言うのは七、八階のうち一階から五階ぐらいまでどこかの商社なり団体に投資してもらって、坪当り仮りに二十万円かかるとすれば三十万円出してもらうというようにすれば、ただで出来ちゃうんですよ。ところが皆さんのご理解を得られなかったんですね、僕の夢が必ず実現する時期が来ると思うんですが。

川村 これは時代によって継続していけばこわされるんだから、必ずしも永久というわけにはいかん

かしらんが、許される限り新期に加入される社員には入会金をうんと上げて入らないように防御するんではないけれども戸を閉めないとい入れなくなくちゃうということも出て来るんで、この姿はこの姿として守っていくということ、やはり文化財保護の立場から桐生市としてそのくらい尊重して

もいい私はそう思う。新時代ということはまだ考えなきゃならないと思います。

斎藤(喜)

私もも会合で桐生市に友人たちが来ると、先程の書上さんのお話じゃないんですが応

接間がわりに使うわけです。皆さんが「桐生にこういうセンスのある建物があったのか」と言ってるんです。結局この建物から桐生の文化的な内容まで認識を改める。われわれとしては非常に面目をほどこすわけです。建物というものは、結局建物に象徴された先人の理想というもので、私たちはこれは桐生の文化といえますかそういうものの、大きなモニュメントというか、記念碑だと思ってるんです。そういう意味で私たちは今理事長のお話のように是非とも後世に伝えていくべき、守っていかなきゃならないものと信じているわけです。元理事長の長沢先生のお話も非常にノロパンの上で確かに立派な計画なんです、まだ当倶楽部にはいまお話のあった九百坪の土地ということからも余裕もありますし、別な構想が出来るんではないかと思っておりますし、この建物はあくまでローカルのクラブとしてユニークな歴史を歩んで来た記念碑として残していきたいともそう思います。

長沢 それは僕も同感です。

書上 たいがいあなたの言われたような感想を言います。

川村 桐生に五十年前に出来たんですから。

書上 その時代にあったんですよと言いますと、たいがいびっくりします。

川村 桐生町と言った時分でしょう。五十年祭は桐生市はまだやってないんだから。その当時の先人は、やっぱりずい分立派な人があったんだと言えるんですよ、精神面で。私は他に大きなものを作ればいいんじゃないか思っているんです。

平野 川村さんね、道路は広がって来てるでしょう。そう長いこと待って居られなくなるんですよ、永井君の家を取りこわさなければならぬ、これはもう今から準備しておきませんか、その場ですぐに出来ませんか。

小池 とりあえず管理人室をどうしてもいるということですね。

平野 だから、出来るならば今の長沢先生のお話ではないが、恒久的の考えを持ったところの一つの拠点をこしらえていかなければならない。仮りに増築するとしても、いよいよもたなくなつて、つぶれた時のことも考えに入れて計画を取っておかないと具合悪いじゃないかというような気がするんですが。ですからこれから先、經理担当者とする

るとそういった恒久的の考えを持った準備をしなくちゃならないと思うのです。

長沢 現在だけを見てるのではなくて、未来の桐生倶楽部を構想の中に入れて、毎日の経営をやるべきだという事ですね。

斎藤(喜) だから、その未来の姿が現実の姿から出るんだから、経済面というのにも必要なんだけど、それだけがすべてでなく、やっぱりこの倶楽部を創立した先輩の理想というものはそこに反映しているかどうかということ、これを考えなければならぬ。内容の問題だ。むしろ先輩はこの倶楽部の建物によって生み出されてくる内容の方に期待しておつたんだろうと思うんです。それでそういう面では日本の敗戦によって全般的に変化があったかも知れませんが、創立当時の理想を非常に純粹に追求したクラブ活動からみるとむしろ現在のは水増しされた大衆文化的なクラブ活動になっていっていると思うんです。しかしこれも時代の趨勢で一つの必然で、しょうがないと思うんですが、やはり最終的にはその目的に努力していかなくちゃいけないと思うんです。

川村 私は結局ここが小さくて困れば、新しいものは別に出来ていくと思つている。産文会館が小さすぎて、四千人も入るものを作ろうとしている。

だから小さいものは小さいものでいいんだという考えを私は持つておる、これを大きくしてここを発展させていくということが、はたして先祖の考えていた目的であったかどうかを考えないといけない。ロータリーなどもこれ以上会員をふやさないでこの会館を使いと言っている。どうしても会員をふやす必要があれば、もう一つクラブを作ると言っている。なぜかというところ、ここが非常に利用度が高いからだ。だから会員がふえるんだけれども、と言うて移転はしたくない。結局いわれる桐生が一番古いロータリークラブはここでお世話になりたいということで落着いちゃったんですよ。ここにロータリーの会長も見えています。が人数をこれ以上ふやさないというのにもここに愛着心があるからだと思う。維持が出来なくなったから会員に出してもらって、理事にでもなった人は余計出さなければいかんと思うんだ。そうして守らしてもらおう。

**斎藤(喜)** 社員のクラブということですね。創立された当時は、桐生に公会堂もないし、あらゆるそういう公共的なものにも一つの役目をはたして来たわけです。こういうものが必要なんだと先輩が示してくれた一つの示唆が後に産文会館をつくり、織物組合や、図書館も出来、レストランのい

いのも出来て来るということになったんで、考えて見ると純粹にクラブ活動をやっていくことが先輩に対するわれわれの勤めじゃないかと思うんです。設立当時桐生倶楽部と桐葉軒というものが非常に密接な関係で運営されていたんですが、完全に切れちゃいまして、倶楽部会合に伴う食べたり飲んだりということが、ちょっとおっくうなんです。改造やら増築などがいろいろ考えられているんですが、また或いは別館というものが計画されるような場合には、是非この飲食というのを考えてやっていただければ、なおこの倶楽部が使いやすい、また使われるようなものになってくると思います。

**書上** 飲食というのは大切な意見だと思うんだ。すぐにもここで話して、めしが食えるということは大事な事だ。

**斎藤(喜)** 例えば一杯友人と飲もうという場合でも、今の若い人を対象とした騒々しいバーとか、それからお座敷とかいうものでは繁雑だし、もっと純粹に会話を楽しみなながら、飲めたり食べたりする場所が欲しくなるわけです。そういう場合にこの倶楽部の設備があると非常にいいんじゃないかと思うんです。

**書上** 設立当初はあったんだがね。

斎藤【喜】 先程のお話の銀の食器ですね。スプーンなんか残っていますね。ライスカレーなんか食べますと、たまにできの軽いスプーンと銀のスプーンとチャンボンで出てくるんですよ、この間も中村君にこれは、あんた銀製だから少し大切にしたい方がいいぞと言ったんですよ。たまには出てまいります。それだけは本人も知らなかったらしいですよ、ただやけに重いスプーンということでは中川 ちよつと伺いたいんですが、ゴルフの話が出てくるんですが。境野さんの時代にインドアゴルフがあつて坂口安吾が読売新聞に話して、一躍有名になつたというんですが、桐生倶楽部の中に設備されたんですか。しかもそれが百円でやつたんで有名になつたのは安いのが原因だったということですが――。

小池 桐生のゴルフは、朝倉さんとか、松岡商店専務になられた宮島さん、私の父の柘植とが非常に桐生は早くからゴルフをやった人が多かつたんですね、勿論戦争中は全部ゴルフ場は使えなくなつて。

書上 ゴルフの話が始まつたのは私なんです。東京の同期に出た連中がおまえはゴルフでもやらなければ長生きはできんからやれと言われたんです。何と言われても田舎住いをしていましたから、そ

の頃はゴルフ場がありませんからね、そこまで行くのがやつかいでならなかつた、ところが友人が自分の自動車に私を乗せて行ってワンセット買わされてしまった。これを桐生の書上のところを送つてくれろということ。それは高いんですよ。高い道具を持たせればやつが始めるだろうと思つたらしいんです。ところがそれでも始まらない、あまりすすめられるんで私共に物置きに空いたんがあつたのでインドアの練習場をこさえた。ポツリポツリやつたんですけれども、中絶してしまふそのうちに柘植君が商売で神戸へ行つたりして、向うではゴルフでもやらなければ相手にされない。聞けば書上に練習場が出来てるそうだ。それを一つ利用させてくれという話で、朝倉富久寿、私、柘植、服部兄弟などほんの五、六人で私共のレッスン場でおけいこを始めた。それにはプロを呼ばなくちゃならないというので、川崎から呼んだんです。が来る方も来る方だし、呼ぶ方も呼ぶほうで毎週金曜日にレッスンに来た。それが始まりなんです。それから坂口安吾なんか来たんですよ。あの人が寝ずにいてウイスキーをあおる。体がたまらないから裏に簡単なゴルフの練習場があるからそこでおやりなさいと言つて坂口さんにすすめたのでそこで練習をやり、奥さんも参加する。毎日

のようにやっただんです。そこで私が皆んなはゴルフへ行つてスコアがこうだあだ言うけれども私はスコアなんかかわない。ゴルフのだいご味はあの白いボールが青空にズーツと飛んで行くそのドライバーのショットのだいご味にあるんだということをしゃべったことがあるんだ。そのとき安吾さんが言ったんだ、あなたのゴルフは、スコア一屋にあらざるゴルフアードというので、その題でゴルフを書いた。それも全国版へです。斎藤君がそれを見つけたんだね。持って来たのをみたら私のゴルフのことを盛んに書いてある。私がたまたま太田のゴルフ場に行くと、それだけの理論家でありながらへボなんだ。全国版に出たから東京で相当知ってる人がいる。東京に行くとしょっちゅうひやかされていた。その後ですよ、ここにこしらえたのは。坂口安吾さんがすすめたんです。

小池 最初太田のゴルフ場はメンバーシステムでバスポーツを持つ特定のメンバーだけがやれるという形でやっていたんですが、たまたま桐生が近かったんで、桐生は比較的早くゴルフが始まったわけです。書上さんもメンバーだったんですが、桐生ゴルフクラブが誕生して拓植が会長をやったわけです。藤井さんが事務をやっておりますね。どうしてもゴルフを一生懸命やりだすと練習場が

欲しい。インドアが欲しい。インドアと言ってもなかなか簡単にはできませんよ。クラブのようなどころに練習場があれば非常に便利だ。また倶楽部にそういうことで人がたくさん集まればいいじゃないかと言うような話で、境野さんはやらなかったけれども、境野理事長に頼んでここに作っただんです。その当時は倶楽部の社員以外の人がほとんど利用していたわけです。そのためにいろいろ問題が起きて、長沢さんがあればどうしても撤去しろということになって、取りはずしてもらったわけです。

長沢 ほとんど社員以外が使うようになっていたんです。

斎藤(喜) 今のうちに文化サークルが出来て、ゴルフ部というのが出来て作ったんなら今でも続いていたんでしょ。極端に言うると、桐生倶楽部の中にあつて、桐生倶楽部のメンバーで自由に使えるというものがあつたわけです。利用して居た社員外の人が道具を置いていくんですよ。それで不便が出来ちゃつて。

長沢 前原君が境野へ練習場を作つたでしょう、それであつちへ移つてもらつた。それから弓場も同様なんです、弓場がここにあつて、ほとんど弓なんかひくものがない、それで出てもらつたんで



て、三日間の立会停止となった。大正十年に入ると九月二十八日に銀行界の巨星安田善五郎が、大磯の別邸で暴漢朝日某のバットで殺害され、八十四才の一生を終り、十一月四日には日本最初の平民宰相原敬が東京駅頭で暗殺。六十六年の多彩な生涯を閉じた。

変転きわまりない多事多難な年を送って翌十一年遂にこの年の末期には不況も全く慢性化し、銀行の破たんするものが多かった。

こうした中で経営であったのだから、倶楽部も苦しかったにちがいない。そこで社債の発行となりその寄付を要請するのやむなきにいたった事情も、よくわからうというものである。

#### C 四十銀行の変遷と銀行界

森宗作らの作った桐生の銀行はその後どうなったか、その足あとを辿ってみよう。

①大正七年六月一日

四十一銀行と合併 八十一銀行となる。

県内に桐生外二店

②大正十年七月一日

東海銀行に合併

③昭和二年四月三十日

東海銀行 第一銀行に合併

④昭和二年五月一日

東海銀行桐生支店 第一銀行桐生支店となる  
ついでに銀行界の当時の動きを見てみよう。

前記大正十一年の不況に続いて、大正十二年九月四日から関東大震災火災のあとを受けて、一週間の県内各銀行の休業。

大正十三年二月十一日 生糸大暴落。

昭和二年三月十五日の東京渡辺銀行外数行の休業で、金融恐慌が初まった。四月十八日には台湾・十五・近江の各銀行が休業。四月二十二日には遂に全国の銀行、信託がいっせいに二十日間の休業に入り三週間のモラトリアム実施。そこで日本銀行は四月二十四日、非常貸出しを声明して収拾に乗り出した。さらに昭和四年十月二十四日のニューヨーク株式大暴落によって世界恐慌となり、同年三月三日には横浜、神戸の生糸市場が恐慌状態となり、三月十一日には「糸価安定融資補償法」の発動を決定するにいたった。ついで五月十七日には輸出補償法公布、八月一日施行。

同年六月二十六日には生糸市場、大正三年以来の安値となる。

十月三日には米価暴落して東京、大阪の取引は立会を停止した。

十一月十四日、浜口首相ソ撃。

という有様で、「昭和の恐慌」と呼ばれる時代に入

るのである。

#### D 桐生人 気質

昭和四十三年六月上毛新聞社発行の「年表ぐんま」六十九頁に、「幕末期桐生地方民衆騒動の実態一覽表」なるものがあって、それには天明七年（一七八七）から慶応四年にいたる約八十年間に起った十一回にわたる騒動が表記されている。今ここに再録する紙面を持たないが、同六十七頁の「桐生織物」の項に見える。

△幕末開港にともない、生糸の国外輸出から原料糸の不足、価格の急騰などにより大打撃をうけ、井伊大老への直訴事件、生糸輸出商への打こわし計画など不穏な事態も起った。▽

とある所などから、桐生人氣質は「上州人氣質」そのものズバリであったようだ。生活擁護のために堂々と立ちあがって争ったのであるが、時として「身分不明人の煽動」に乗せられたこともあったようだが、後年こうした「反骨精神」は桐生から漸次姿を消し、その晩年を飾ったものが、実にこの桐生倶楽部の創設にあったといえるようである。

この「桐生人氣質」は近年になって、毛里田、強戸の二村に「農民運動」となってあらわれたようにも思われる。すなわち須永好を指導者とする強戸村の動き、坂本利一をリーダーとした毛里田村の小作

争議は、日本の歴史の一頁に記録されるものである。

桐生倶楽部創設時代からの小作争議件数は、大正八年以来昭和十六年迄に一六三三件の多きに達し、その指導者須永好は昭和十二年の総選挙で社会大衆党から立って遂に代議士に当選した。

倶楽部創立当時の先覚者で故人となられた前原悠一郎、前原準一郎両翁に接し、その気骨と眼光の鋭さに驚ろいたのは、恐らく筆者だけではないまい。

準一郎翁は小身瘦軀、決して他を圧するものでなくむしろ常に温顔に終始してその晩年をすごした人であるが、時としてその気概に驚ろかされたのである。明治百年、文字通り明治は遠くなりはてだが、明治人士の築いた桐生の牙城は永遠に遺され、記憶されるものである。明治百年の記念事業の一端としてこの「倶楽部五十年史」あり、さらに桐生の先人先覚者の遺産を記念するために、まだ明確さを失っていない現在の現在

#### 桐生市史跡

を指定し保存する運動がなされてよいのではなからうか。

幸にして今日の桐生倶楽部社員の努力の結晶が、この事業の実現に力をかすならば、これ以上のよろこびはないであろう。

社  
員  
寄  
稿

所  
感  
集

所感集寄稿者一覽 (五十音順)

|        |     |       |     |
|--------|-----|-------|-----|
| 新井幸長   | 二四七 | 斎藤長平  | 二六六 |
| 飯山清治   | 二四八 | 設楽仁   | 二六七 |
| 伊藤次郎   | 二四九 | 下山觀三郎 | 二六八 |
| 岩下才一郎  | 二五〇 | 長沢義雄  | 二七三 |
| 梅沢武男   | 二五一 | 進沼治郎  | 二七六 |
| 大川英三   | 二五二 | 早川政雄  | 二七七 |
| 大沢治作   | 二五三 | 平野元吉  | 二七八 |
| 大槻円次   | 二五四 | 藤江敏雄  | 二八〇 |
| 加賀山猪三郎 | 二五五 | 古川三雄  | 二八〇 |
| 書上文左衛門 | 二五七 | 町田忠一  | 二八二 |
| 梶井海一   | 二五八 | 豆生田邦平 | 二八三 |
| 北川好雄   | 二五九 | 丸山貞夫  | 二八三 |
| 木村貞一   | 二六〇 | 村田貞治  | 二八五 |
| 小池久雄   | 二六二 | 吉田展雄  | 二八六 |
| 小玉澄男   | 二六四 | 山口茂   | 二八七 |
| 近藤吉次郎  | 二六五 | 渡辺輝己  | 二八八 |

すが、留守番を出すのに非常に苦労しましたよ。

名刺まで倶楽部の電話番号を刷り込んでいたので、夜はマージャン屋、昼は弓屋ということで倶楽部現在の正門が、桐葉軒のお勝手口になってしまふといった有様で、前市長の前原君に頼んで、建物を向うに持って貰って、桐生市の道場になったんですよ。ところが留守番が立退料をよこせというんだ。二十万円よこせと言うんだ。

桐生市の弓道クラブと桐生倶楽部が五万円ばかり出しました。それから今度は引越料をよこせと言うんですね。しょうがないというので、トラック一台とアパート一間を提供してようやく出してもらったんです。弓場がそれでいまの庭になったんです。その当時非常に苦労しました。

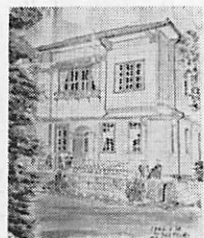
**川村** 庭の改造は全くよく出来た。設備改造には、長沢理事長の手がらを考えないわけにはいかない小池 面目を一新しましたからね。

**長沢** 今後も苦労が続くと思いますが、今後共世にぜひご協力お願いしたいと思うんです。もう時間が来ましたから、この辺で二部の座談会を終わりたいと思います。どうもありがとうございます

(了)

### 会館のテラス

長沢理事長改造事業の一つに庭園のあづまやと芝生、そしてテラス。あづまやの前には小川建設寄贈の火石を移転。火石は桐生川上流彦の名石である。テラスで語りあうのも、又よき哉である。



### P H F

友愛と平和——を標榜するロータリーは、故ポール・ハリスが一九〇五年に創始したものである。それが日本に設立されたのが一九二〇年であるから、桐生倶楽部の創立より二年ばかり新しい。その当時に私たちの先輩が、一九三頁に述べたように

平和・幸福・親睦  
Peace Happiness Friendship

をモットーとして、シャンデリアに刻んで掲げたという先覚に対しては、全く驚くの外ないものである。これが倶楽部マークの下にPHFの三文字を入れた理由である。ここに敢えて重ねて記録した次第である。

【参 考】

桐生倶楽部創立当時の

群馬県と日本の動き

A 当時の五千円のネウチ

森宗作の寄付によって「倶楽部会館」の建築が出来たという当時の五千円が、どの程度価値のあるものであったかを、参考までに調べてみた。先ず米価格であたってみる。

①大正四年 前橋での米価 一升十四銭

☆九月二十二日には大暴落。

②大正七年 前橋市内で白米一等一升が四十一

銭余。

これが六月一日の価格で、七月三十一日には米価大暴騰、三日間立会停止となり、八月三日には米騒動が各地にボツ発。八月五日以後県内各地に米の廉売が開始された。

八月十六日には「穀類収用令」公布。同日施行。

八月二十七日に「米収用価格」が発表され、全国期米の暴落を見た。

倶楽部会館の建築が始まったのは、この直後である。米一升四十銭内外として、五千円では千石以上を買うことができた。如何に巨大であったかが想像される。

最初この五千円を分割で抛出することにしていたそうであったが、それも「五千円」という大金であれば当然のことと、一応うなづけるのであるが、この点書上氏は言下に否定して、

「話があつた直後、すぐ小切手でとどけてよこさ」と強調している。

森宗作の熱意と誠意。全く驚くべきものがある。

B 当時の織物業界と株式

大正六年に上毛モスリン製織部女工のストライキがあり、前記米騒動を経て（大正七年）大正八年には鈴木文治によって指導された友愛会が大日本労働総同盟友愛会と改称、発展の段階に入った。県下でも群馬紡績会社に県下初の労働組合が生れた。

当時の白米、前橋で一升六十四銭、館林で五十九銭余。木炭一俵前橋で四円三十銭であった。それが大正九年に入って大々的不況となり、四月十七日には遂に桐生織物市場は休止断行を決議、ついで十八日には伊勢崎織物市場も休止となった。

五月二十四日に七十四銀行高崎支店、上州銀行が休業。このさなかを高崎連隊は、シベリア守備隊交代として出発して行った。四月二十二日であった。

株式は大正三年八月三日の暴落で恐慌相場を現出大正四年十一月三十日にも東京株式の大暴落があつ

## 桐生クラブこれからの五十年

新 井 幸 長

創設者たち初代の理想と御苦労、桐生の文化活動の一方の軸として、第二代へと五十年の歩み、社員の団結をリードして今日まで維持に尽された方々の御骨折、町から市へ発展した市史に対し誠に輝やかしい陰の力であった。今や第三代が之をうけついでこれからの五十年、第四代に何を引継ぐであらうか。

郷土桐生の経済的發展がすべての根幹をなすことは言うまでもないがこれを支持するものは文化活動であり、更に桐生のバックボーンとして市民の心の交流や精神的活動の殿堂として古い建築の上にはさびを加え、新しい理想を建立して行きたいものである。計画は綿にして密、深にして遠、今にして五十年後のクラブのある姿を想起して、楽しい美しい殿堂を如何にして求めるか。社員の団結の上に、幹部のよきリードを乞う切なるものがある。

(桐丘短大教授教務部長)

## 五十周年に当りて

飯 山 清 治

凡そ一つの会合を作ると云う事は、誰れでもが経験されます様に並大抵の努力では出来上りません。まして五十年と云う年輪は口にするは易く私共桐生人の最も誇り得る文化的遺産と存じます。諸所方々へ旅をして樹齡數百年の大木に接し、風雪に耐え、内に秘めたつまましい佇いを見るにつけ、現実に長い時の経過を考えざるを得ないと思ひます。其の様に物のなり合ひは、創意と其に伴う努力と何物にも換え難い時の経過の積み重ねの上に推量想像を超越した飛躍が形成される訳で御座居ます。今後時流はめまぐるしく、科学偏重と思われる世の変貌が二十一世紀へと運び去ると考へられますが、其の文化的背景は時々依り当然異なる事は勿論ですが、宿命論的に人間としての当面し考え続ける問題は常に共通点を持ち合せて居りますので、限り無く此の倶楽部を継続して行く事が、何時か私共に老木に接して考える様な、枯淡と云うか、心の抛り所の一助となればと偶々感じます。屁理窟は何処にもつけられませんが自分の行動に何か理由づけをしたがる一人の人間がこう考へて、桐生倶楽部の為に自分の終生をかけて愛し続けて行き度いと存じます。

(飯山商店代表取締役)



## 創立者に敬意と感謝

伊藤次郎

先ず以て五十年前の倶楽部創設者である先輩の方々に敬意と感謝の意を表するものです。更に又時流れ人変り乍らも長い五十年の間、倶楽部の目的を受継いで弛まぬ御努力をなされこれを維持して来られた各役員の労苦も計り知れないものがあつたらうと推察致し、感謝を申し上げ次第です。数多くの方々が倶楽部を利用し、多くの知識を吸収し、良識ある社会人として今日迄歩んで来られたことと思えます。これから後に続く人々のため、倶楽部を愛しこれを有効に利用させるため社員資格を更に広げ、若い男女の方々にも良き社交場として多くの人々が挙つて利用されれば、どんなにか素晴らしいものになるのでしょうか？五十年前の創設者の方々にも喜んで頂けるものと思ふ次第ですが、如何なものでありましょうか？

何れにしても歴史ある倶楽部の伝統を、私共社員として益々隆盛ならしむる様、此処に五十周年を記念し、先駆者の御努力を謝し乍ら、新たなる考えを持って由緒ある倶楽部の会館に今後通い続け度いものと心に誓ふ次第であります。

(日本相互銀行桐生支店長)

## 桐生倶楽部懐古

岩下才一郎

もう随分古いことになります。それは私が東都に遊学していた青年時代の夏の暑い日でありました。偶々祖父の許に帰省していた或る日、今は亡き前原一治、堀亀雄（当時小児科開業医堀林荘氏長男）両君の訪れを受けて市内を散策した折、今度桐生倶楽部と云う気のきいた桐生には珍らしい社交場が出来たから見に行こうということになって、三人で完成して間もない瀟洒（しゃうしゃ）な洋風建物にひかれて訪れた頃の思い出であります。

今でこそ当市には鉄筋建物も目を逐って増え、近代都市の風格を備えて参りましたが、当時はホンの田舎町で、現在の倶楽部の周辺は人家は疎らで青き水田を隔てて東小学校が見えておりました三人で恐る／＼倶楽部の館内を見学致しましたが、当時流行の撞球施設があつて下手な球ころがしを楽しんだことを記憶して居ります。館内には食事の出来る施設もあつて、洋食を喫したことも懐かしい思い出となりましたが、これが現在の桐葉軒であつたと思ひます。所謂女給を置かない本格的な食堂であつた様に記憶して居ります。

今にして思えば県内は勿論のこと近県にも例を見ない近代的な社交倶楽部を設立せられた当時の先覚者各位の進歩的な卓見には頭が下ります。斯くして春風秋雨五十星霜を送り、倶楽部としての

使命達成に努めている姿は、当市の誇りの一つであり、見事な金字塔を建てた偉業に対して極りなき尊敬の念を禁じ得ず秃筆を撫して祝福の言葉といたします。  
 (医師)

## ク ラ ブ の 庭

梅 沢 武 男

昨年の五月、私の次男が桐生倶楽部で結婚式の披露宴をやった。実は東京でやるか、勤先の仙台にするか当人達も迷ったらしいが、私は強く桐生倶楽部を主張した。身内だけのささやかな会合であつたが、開宴前の一ときを、庭で休憩してもらつた。固苦しい挙式のあとの解放感を初夏のみどりの草木に味わつて、両方の親戚の人々ものんびり交歓でき、子供達は喜々として庭を飛び廻つて大変好評だつた。当人達も余り時間に制限されず、矢張り倶楽部でよかつた等と私に感謝していた。毎日騒音や四季のない街に住み、道路拡張によつて庭も潰されてしまつた我々町人にとって、倶楽部のテラスで草木を眺め乍らの語らいや、食事は楽しいものである。又現在の建物と庭はよくマッチして心をやわらげてくれる。この前も会報で述べたが、庭のない無味な四角のコンクリート許りの建物にしない様に理事諸兄にお願いいたします。

みどり濃きクラブの庭にたよづめり

余りに早き月日思いて（次男の結婚一周年に）

（梅沢薬局代表社員）

## 倶楽部結婚式第一号

大 川 英 三

内村鑑三の無教会主義のキリスト教を信ずるわれわれは個人の家集合会からこの倶楽部の一室（旧図書室）に移ったのが建築完成後間も無い時だった。日曜日毎に集まるもの十名内外、讚美歌を歌い、祈りをささげ聖書の勉強をし、一年に数回は内村先生の高弟矢内原忠雄、畔上賢三、住谷天来などの大先輩を講師として市民に伝導集会をして、いまでも続いて居る。おそらく倶楽部建設以年五十年この建物の中でキリスト教の集会をつづけて来たというものはわが桐生聖書研究会独りあるのみと思う（代表大川英三）。

そんな関係で私の結婚式は教会は使えないのでこの会館を使った。桐葉軒の洋食で披露会までやった。これがこの倶楽部に於ける結婚式第一号であった。以来私の同信の友は勿論、親戚などの結婚式にはよく利用して来た。

クラブはその当時の近代的紳士道の養成所的存在であつたらう、金には不足無い先々代森宗作や欧米風の教養を身につけた金子竹太郎、前原悠一郎、前原準一郎などの運営は正に桐生の文化、教養を代表するような運営振りだった。われわれはそのきびについて行ったのだが齋藤長平君などと

運営に当るについて更らに文化教養の面に主体を置き財政面に於ても著しき更新を計り、クリスマス祝会などをやるようになったのもこの時である。群大が高等工業時代にはその教授は全部特別会員として入会され、月次会に集るものは、この教授、校長、中学校長、弁護士、医師、銀行の支店長などが大半を占めて居て、それに会社の社長級が混るといふ具合で、従つて話題も可なり程度の高いものであつた。当時相当数の海外留學生が高工に入学、卒業があつてその都度飲送迎会を催して来た。

いまでも僅に名残りを留めて居るマントルピースに本物の石炭を炊き、赤い炎を囲んで桐生市の動向をなげき、産業振興の夢を語り、時には宗教、文芸、教育に談論風発、閉館の時間も忘れた事は毎週のことであつた。いまは用なく閉された壁際のすすけたストーブのみが知つて居る。

(名譽社員、大川レース会長)

## 倶楽部の運営

大 沢 治 作

会館などの運営が、とかく形式的、事務的方面に偏しがちであるのに、わが桐生倶楽部が市民生活に文化的の潤いを供給したり、若い人たちに各種の趣味娯楽をエンジョイできる清潔で健康的な場を提供したり、というような方面に重点をおいて運営されているのが、うれしいと思いま

す。

(桐丘短大教授)

## より素晴らしい倶楽部を

大 槻 円 次

半世紀の永い間、先輩から受けついでこの倶楽部を益々発展させることは現在の会員の大きな責任であります。地方都市はむろんのこと、どこかの由緒ある立派な都市にも仲々見ることの出来ないこんな素晴らしい倶楽部をより素晴らしく維持する為には、現在の建物を保存するだけでなく、全く新しい機能と美観をもった建物に作りかえてもよい様にさえ思います。

お互いの仕事がますます忙がしく、仕事を追うよりは追われる様な今日この頃の時勢に、忙中閑のより所として、サロンを活用し、又友人相より将来の桐生を語る絶好の集会所としてもこの倶楽部を我々会員の手でより美しくより素晴らしく維持したいものです。

(大槻商事社長)

## 私の意見

加賀山猪三郎

は し が き

私は大正五年現在の群大工学部の前身桐生高等染織学校に第一回入学生として入学を許可され、桐生に参ったのであるが、今から約半世紀前の桐生の駅頭に降り立った感想は卒直に云ってガツカリしたのである。何んでこんな淋しい貧弱な町に官立の堂々たる学校が出来たものだろうと不思議に思い、見当はずれた感じであった。当時は人口三万たらずの桐生町で、天神様から盛運橋まで巾の狭いただ一本の本町通りだけの街で、学校の前から本町通りにかけて水車がクルクル廻って居た。新宿通りなど軒並に水車が並んで、丁度田舎に行ったような情景であった。丁度其年は十年に一度行なわれる天神様の御開帳の年で、各町目毎に飾りものが設けられ、近郷近在からの見物人で町は賑わって居た。町には適当な下宿がないので、入学生は全部寮に入れられ、所謂全寮制度の厳格な寮生活であったが、その直ぐ隣りの現在の工業高校のある田圃たんぼ中にお祭のサーカスが小屋掛して夜の九時頃までブードンドンとやられ、それが一ヶ月もつづいたので、寮生は忽皆参ってしまい、お陰で勉強など手につかず、中にはノイローゼになってとうとう退学して郷里に帰った者もあった。私はどうやら歯を食いしばってかじりつき、三年間を過して卒業はしたものゝ、誠に当

時の桐生は殺風景な、耐え難い桐生の学生々活であつた。

### 現在の桐生

卒業して東京を振り出しに処々方々をかけ廻つて、十五年後の昭和九年に再び桐生に舞いもどつたが、十五年前の桐生は学生時代とは打つて代つて立派な街となつて居た。人口も倍加し、町は市に発展し、バツタン織機は自動織機に代り、水車は消えて僅かに小俣あたりに見られるに過ぎなかつた。水道も完成し、モダンな桐生クラブが市の中央にデント建立され、インテリ階級紳士の社交機関として、相当活発に運営され、桐生名物の一つに数えられて今日に及んで居る。其後歴代の市長、市当局の尽力により追々と発展を遂げ、従來の織維産業の外に鉄工業其他の産業も誘致され、一時は産業都市として名声を博し、桐生は関東の上海だなどと、称えらるゝに至つた。大東亜戦争の勃発にて日本は破滅の状態に陥り、桐生の織維産業も氣息奄々（えんえん）として僅かに其の命脈を保つて居たのである。幸にも戦災は免れたが、街の状態は旧態依然として、戦後二〇年間放置されて居た。然し設備は漸次改善され新川の改修、遊園地の設置、産業文化会館の設立、病院、学校の改築等着々市の体面を保つように努力された、ついで近接町村合併により一躍人口も十万を突破して、県下第三位の都市にのし上つた。然し街の体裁は一向に進歩せず、歩道車道の別なき本町通りは、急激に発達した交通ラッシュに歩行者は命がけの歩行を続ける有様に追い込まれた。市も最後のドタン場になつて漸く都市計画に乗り出し、本町東通りを皮切りに、現在四―五町目に中央ビル街が出来上り、目下着々進行中ではあるが、戦後二十数年にして大桐生の体面を保つことが出来つゝあるとは情けない状態である。

### 将来のピジョン



大桐生の都市計画を一日も早く完成して、交通ラッシュの市民の恐怖から一刻も早く免がるゝことが第一条件である。次は下水道の早期完成、産業の誘致、市民の娯楽施設、青少年の善導設備、アパートの建設、デパートの増設など市民をして何不自由なく、住みよい環境の都市たらしむることを要望する。人口の増加に伴う教育施設の完備、最低の経費にて最高の教育を受け得らるゝよう市民教育に対し百年の大計を樹立することが肝要である。更に年々スピード化する交通機関をして他市に劣らざるよう速やかに民間飛行会社とタイアップして、無用のヘリポートに代る、最も進歩的な飛行場を設備して少くとも桐生東京間を一時間位で往復出来るようにしたいものである。最後に五十周年を迎える桐生クラブの目的はあくまでも設立当初の趣旨を尊重し、他市に見られない本市独自の社交場として永久に存置し、その特色を發揮しなければならぬが、現在の状態では余りにマンネリズムで進歩がなく、古色蒼然たる文化財的社屋の改築もさることながら、社交機関として五十周年を契機に一大飛躍することを期待して止まない。

(群馬女子短大教授)

### 適正な倶楽部活動を望む

書上文左衛門

桐生倶楽部は桐生に於ける志を同じくする人々の社交団体にして、倶楽部の建物は会員の集りの場所に過ぎないのであります。桐生倶楽部の起源と今日に至る迄の歴史的経過は倶楽部史に詳述さ

れて居ります。私は設立当時の発起人でもあり又理事長も或る年数勤めました。先輩が倶楽部を設立した理由目的は、桐生の産業、教育、文化等の向上の為めの研究と推進の協議の為めの話し合いと、同時に会員の親睦社交を目的としての場所として建設したのであります。五十年を経過した今日迄、歴代の理事長及理事並に会員諸君の努力により、時代の変化に順応して活動もされ、建物も今日迄保存されたのであります。日本は今後東洋の先進国として益々発展的变化が進行するものと思ひます。此の時代の変化に應じて、適正な倶楽部活動の行われん事を切実に念願致して居ります。会員諸君が、出来得る限り倶楽部を利用され、又各種の集會も催され、談合の機会をより多くすることにより、其の中から何ものかが生まれ出で、桐生に於ける万般の発展の為め貢献する結果を生ずるものと確信致します。

(名譽社員・二代理事長)

## 最高の社交の場

梶 井 海 一

桐生倶楽部創立五十周年を迎えたことを心から喜び感慨無量のものがあります。青年の頃よりなじんだ英国風のクリーム色の建物。ほどよく落着いた部屋部屋。なつかしい先輩の方々の話し声、静かに歩く姿が想い出されます。

代々の理事長の持ち味が生かされて、素晴らしい雰囲気が出来上り、地方都市として最高の社交の場であり、会員相互の研修の場として現在の桐生倶楽部のあることを誇りとしております。

最近の仕事の関係でクラブの会合への出席が少くなっております。時代の波は私の人生を幾度か変えました。再び胸を張って、社員の皆様と親しく話し合える日を楽しみに、事業に励んでいる此の頃です。

新しい知識を得、旧友との団欒、知人を得る場として気軽に使えるクラブの発展をのぞんでやみません。

(大和物産)

## 明治百年・倶楽部五十年

北川好雄

明治百年が本倶楽部五十年に当るわけで、丁度二分の一の年月に相当するのは、本市発展進歩と関係があるように思えて妙である。

創立当時と現在の倶楽部のあり方は『桐生倶楽部定款』第二条目的の章に記載されているものに相違ない。

近年社員数も頓に増加し、社屋内外の改装も施され、将来への躍進の年を迎える一区切りの五十

年である。

その事業の内容に至っては、戦後変遷の激しい時期を経て、明和元禄の現時点に立ってより以上に進歩的、活動的であることが望ましい。

創立当初の先輩の意を体し、半世紀に及ぶ歴史の教導を受けて、本倶楽部と地域社会の発展に寄与したいものである。  
(歯科医師)

## 更に五十年後への夢

木村貞一

桐生倶楽部が出来た時分のことを記憶しているが完成した建物を見ると、田舎には珍らしい実にスマートな洒落な建築なのに先ず驚いたものである。

五十年といえは半世紀。

この当時に既にこれだけのものを造ったんだから当地の桐生の指導層の人達のセンスと郷土愛が並々ならぬものだったことが判る。その時分、私のおやぢ（もうとつくに故人になったが）が面白いこと言ったのを覚えている。

町のやつら（これは倶楽部建設委員達のことだろう）俺んとこの竹藪が目ざわりだもんだから衝立（ついたて）の代りにあんものを建てたんさ……。事実、その当時は私の家の竹藪が約千坪許り

丁度停車場通り（今の末広町のこと）から突き当りの田んぼの先き東の方に嫌でも見える格好になっていたのである。

倶楽部建築敷地を選定する過程では確かに“ポロ隠しの衝立”の点は考慮に入っていたかも知れない。五十年も経った現在でさえ、そのスマートさ、その近代性はこの儘東京の山の手辺りへ移築してもそう見劣りのするものではない。

どこか西欧の在日公館、大使館、とまでいかなくとも公使館や総領事館ぐらいには見える。

流石に寄る年波、とでも言うか建物のあちこちに若干の破損は出来てきたがそれでも近ごろ流行の鉄骨コンクリートのビルの倉庫に窓を取りつけたような建築に比べたら実に風格があって且実用的な建物である。

これから先き何十年も後、これが大修繕を必要とするような事態でも起ったとしたらその時は少し費用はかかるとしても、“現形その儘”を鉄筋コンクリートの永久建築として“復元”したいものである。

これなら百年二百年の後世にまで桐生市の立派な文化遺産として残すことが出来るだろう。

この倶楽部が過去半世紀に涉って郷土の発展振興に寄与してきた文化的功績は実に大きい。

慾を云わして貰えばどんな理由だったか知らないが庭園の一部を売却してしまったのは惜しかった。倶楽部の社員で例会にも総会にも余り顔を見せないが会費だけはキチンと払っているという人が相当数に有るがこの人達は倶楽部の存在価値を理解しているのと同時にこのスマートな桐生倶楽部の建物にも案外と魅力を感じているからではないだろうか？

桐生市の文化のシンボル、桐生市の応接間として社団法人桐生倶楽部の果す役割りは重い。

そして、これから五十年、誰かの手で「創立百年記念」の祝典が盛大に催される日のことを夢に  
画きながらこの小文を結びたい。  
(桐生タイムス社長)

## 南川さんと倶楽部

小 池 久 雄

倶楽部の五十年史に故南川さんの名前だけは何らかの形で残して欲しいと思うのは私だけではないであらう。

南川潤(本名、秋山賢止)さんは、慶応在学中に三田文学賞を受けられ、非常に若くして文壇にデビューされた作家で、昭和十九年に奥さんが桐生の方だった関係で当市に疎開され、戦後の一期はジャーナリズムに引張りだこであった事は御存知の方が多くであらう。

私の倶楽部との縁は、昭和二十二年三月に発足した青年部に関係した事に始まるが、それ以前から南川さんは、しきりに「楽しく遊べる若い人達だけの社交クラブを作ってはどうか」と、私達南川さんの所へ集まる青年達に熱心にすすめられていた。

社交という言葉に、私は先ず「くだらない饒舌」「おべんちゃら」「見栄」「軽薄」などという連想が伴い、素直に其のすすめを聞けなかったが、南川さんは「それは偏見だ。正しい意味の社交とは……」と、諄々と説いて下さった。「人間は我一人あることは出来ない。君と僕に於てあるの

であり、あなたと私に於てある。という事は私は社会に於て存在する。社交は此処から出発する」  
「社交は最も能率的な人的修行の場なのだ」と云われた。こうした南川さんの言葉が、私や斎藤喜平君、吉成君などに影響して桐生倶楽部青年部に参加するようになったわけである。

青年部が発足すると私達はゲストのような形で、毎回南川さんを引張り出した。南川さんとしては私達に社交クラブの設置をすすめた手前もあったのかも知れぬが、又、真実、私達と人生を論じ芸術を語り、ゲームに興じたりするのが楽しそうであった。その青年部に出ていたのが契機で、其の年五月桐生倶楽部に入会され、翌二十三年九月には理事になられた。

南川さんは、私達に説かれた如く「本当の社交クラブとは、かくあるべきだ」と、明確な倶楽部の理想像をえがいて理事になられたものと思う。

今、手許にあるアルバムに、病身を細身のステッキに托して、眼鏡をキラッと光らせた南川さんが私達と一緒に倶楽部の玄関を背景に撮された写真があるが、南川さん程、其の風貌も、感覚も、思考も、話術も、身ぶりも、あらゆるものが社交クラブにピッタリである人は居ないようにさえ思える。

境野理事長、南川理事の当時の倶楽部は、決して盛大ではなかったが、文化的には香り高いものがあった。食堂（今の一号室）、食器を整備したり、マネージャーが必要だとして小島市造先生を迎えたり、夏期大学を開いたり、一時は北川義一郎さんが経営されていた桐生文化学院（これも戦後の桐生を語る上で忘れられない存在）を桐生倶楽部に移し、倶楽部で経営しようと考えたり、色ユニークな動きがあった。

それが長沢次期理事長の経営の苦心につながるのであるが、とも角、南川さんという桐生の誇り

得る文化人が居られ、理事として桐生倶楽部に貢献された記録は、倶楽部五十年史に逸せない事項であろう。

(副理事長・共立織物常務)

## 五十周年に当って希望する

小 玉 澄 男

大先輩、先輩、知友と、クラブの人達はみんな良い人達ばかりだが、気軽に、誰れにでも話しかけて、期待通りの応接を受けられるとは限らない。お互に知り合うことが少ないせいでもあるが、排他的とも思えるふしがある。生活環境の相異が話を合わなくさせるのはやむを得ないが、大人のだから、お互いに共通の話題を見付け合う様に努めたら、もっと面白いクラブになる様に思える。

クラブの催しには、欠かさず出る様にしているが、まだ、忘れられない程の印象を受けたことはない。尤も、クラブ員の片隅に控えている存在だからそれでよいのかも知れないが、慾を言えば「クラブで肩をほぐして来る」と云った、気軽な暖かさに欠ける様に思う。

こんな風に思っているのは、屹度私一人だけではないと思うので、五十周年をきっかけに、何か名案をお願してやまない。

現会員が、何時も、喜んで集る様でなければ、先人の遺志にも合うまいと思うので、時代に即応



した施策こそ、大切と思う次第です。

(小玉製作所長)

## 倶楽部に対する希望

近藤吉次郎

職業には職業の世界がある。

以前は自分の専門の職業だけにとじこもって世間に生きることが出来たが、科学の進歩した複雑な機構の現代ではそうはゆかない。自分の職業だけにとじこもっては、発展性もないし第一生きてゆく事が困難だ。ここに桐生クラブの存在価値がある。各業界の人々(家族をも含めて)の横の交流のよき場所である事である。ここには義務や責任はない自由な思いの儘の憩いの場所であるべきだ。クラブの時間は空費してゐるのではない。各種の人々と交流する中で、他の職業の人々の心を知る事が出来、友情と協力と愛情が湧いて来る貴重な時間である。

我々はクラブを創立した当時の人々の精神をいつ迄も生かし、尚且つ時代に即応した運営をし、我々クラブ員のよき交流の場所、憩いの場所としてロータリーやライオンズとは、又違ったよきニユアンスを育成してゆくべきであろう。

(医師・両毛整肢療護園長)

## 長い理事長時代

齋藤長平

私の人生の三分の二が倶楽部と共にあり、その又半分が理事長としてであった。だから倶楽部の歴史は私の歴史でもあったと言える。しかし当時の倶楽部は今とちがって、非常にエリート意識の発達したものであり、その中でかなり大きな抱負が描き出され、それが実現されて脚光を浴びたものであった。今考えれば「遠くなった」という感慨に尽きるが、大川英三、青木專治の両君に支えられて、思う存分の活躍をしたと思っている。不幸第二次世界大戦の結果、日本に大きな変化が起り、その為に倶楽部にも幾多の苦難が強要され、その時代を私が、幸か不幸か背負わされて毀誉褒貶、さまざまな批判を受けたが、無事桐生倶楽部をして今日あらしめた。

私のあと境野理事長時代、倶楽部は末期的と云いたい症状を呈したが、そこへ長沢理事長があらわれて危機を脱した。私と長沢君とはその経営方針で相容れない所はあるが、何ととっても長沢君の功績を認めないわけにはいかない。特に今回五十年記念に当っての、この五十年史の刊行なども長沢君がいなかったならば、或いは実現を見ないでしまったかも知れない。そう思うと長沢君の存在は偉大である。彼の倶楽部に対する情熱は高く評価されねばならない。

これからの倶楽部は時代とともに幾多の変遷を経て行くことだろうが、諸君の協力によって益々

隆昌の道を辿る事を念願してやまない。

最後に川村理事長が、その事業に発揮された偉大な手腕を、倶楽部経営にも発揮して頂く事を特にお願して擱筆する。  
(名譽社員・三代理事長)

## 倶楽部の思い出

設 楽 仁

願みますと、私が山田郡で教育社寺の行政に携っていたのは大正九年初夏——桐生が町の時から同十五年晩春までの間で、倶楽部の創業時代でありました。

それは初代の金子竹太郎氏と二代の書上文左衛門氏の理事長の頃で、この建物が竣工して間もない時分から、郡教育界の行事集会やら郡女教員会の発会式等に利用させて貰いました。

大正十五年初夏に県庁学務部入りをしてから公益法人行政を担当しているとき三代理事長の齋藤長平氏が来られて定款改正問題を任されたのでこれを処理したことがありました。

越えて昭和十三年初冬に国営職紹所長となり傍ら特別会員として倶楽部に参加して居りました。

退官後暫くにして各種学校を創立して経営の任に当って居りました処偶々教育関係から五代理事長の長沢義雄氏から屢々奨めを受けて昭和四十年十月に正会員に列し今日に至ったのであります。

私の倶楽部との関係と思い出は叙上のような次第で、今日五十周年を迎えるに際し転た感慨に堪

えないものがあります。これから将来この倶楽部が健全に発展致しますよう祈つて息みません。

(桐生ドレスメーカー女学院院长)

## 桐生倶楽部の本質を探る

下山 鏡三郎

この昭和四十三年は明治百年に当り、この百年間に、日本が近代国家として、飛躍的な成長を遂げてきたことに対し、我々国民に大きな関心と呼び起こしたが、又一方、我々に身近かなこととしては、桐生倶楽部が、正にこの百年の半分に当る五十年という歴史の価値を、確立してきたことを思うとき、我々は桐生市民として、倶楽部存在の意義に、深い関心を寄せてよいのではないかと思う。

桐生倶楽部の詳しい沿革については、五十年史編纂委員の記述に俟つこととし、私は先ず茲に、倶楽部を創立された先覚者の高邁なる精神に対して、深く敬意を表すると共に、この精神が今後一層、倶楽部の全社員に滲透し、常に尊重され、そして永遠に継承されてゆくことを希うものである。

近代桐生の先覚者である森宗作氏(森正雄先生及び同喜作博士の祖父君)、大沢福太郎氏(故菊太郎氏の父君)、書上文左衛門氏(先代)等の方々は、当時、郷土の産業を始めとし各面の開発を

目指して、旺盛なる精神活動を展開し、明治三十一年、四十銀行の本店を館林町から桐生町に移し森宗作氏がその頭取となった。これを契機として、有志の親睦を図り、併せて桐生の発展につき話し合うために、桐生懇話会なるものが生れ、更にこの懇話会が社団法人桐生倶楽部の設立を決定し大正七年にその発足をみて、金子竹太郎氏が初代の理事長に推された。これらの間の消息については、前原悠一郎翁の著「桐生の今昔」に明らかにされている。

私は先に、先覚者の高邁なる精神ということにふれたが、その真髓は実に、人間愛であると考える。郷土愛も市民愛もここから発する。この人間愛なるものが、先覚者の方々の考え方や行動の基底をなしていたように思われる。それは先ず後進を引き立てるといふ形で現われてくる。例えば、模範工場桐生撚糸会社（後の日本絹撚糸会社）に於ける前原悠一郎氏の如き、或は両毛整織会社に於ける金子竹太郎氏の如き有為の人材が夫々三十才台の若さで、当時桐生で公共的な性格をもつ代表的な会社の社長となったが、これは先覚者の引き立てに依ったこと勿論である。当時先覚者の方々自身としても、前原、金子の両氏よりも十年位の年長で、働き盛りであったにも拘らず、己れに求めるよりも、後進に与えたというところに、先覚者の偉大さが窺われるのであって、その何処にもエリート意識の臭みなどない謙虚な人々であったようである。また私は、前原、金子の両先輩には親しく接した期間があったので、先覚者の衣鉢を継いでいると思われる立派な風格を感じていたし、やはり桐生発展のための大先輩として尊敬していた。

桐生倶楽部は、かように、先覚者の気高い伝統精神の下、本来の使命として、桐生市の産業、文化、市政などの向上発展について、話し合う場として活用され、常にリーダーシップを執りつつ、地域社会に於ける貴重な存在として、今日創立五十周年を迎えるに至ったことは、倶楽部自体のみ

ならず、桐生市のためにも洵に慶賀に堪えない。

私の話しはここで、再び先覚者の人間愛なるものに戻るが、これは現代にピントを合わせて、考察を試みたためである。つまりこの人間愛とは、単に純粹な愛とか、無償の愛とかいう語のイメージではなく、その本質はむしろ、自己と同じように、他人の利益をも図るといふ意味に理解したのである。これは中国古典の墨子に所謂「兼愛交利」の思想に通ずる。といえ大へん古臭いようだが、実は二千三百年もの昔から今なお、新しさが生き続けている思想といえよう。これを今日でいえば、ギブ・アンド・テイクである。この考え方に対しては純粹なヒューマニストからは、多少の抵抗があるかも知れない。然し、儲けることは言うに及ばず、社会的な地位や名譽などを得ることに於てさえ巧妙に或はあらわに、他人よりも自己を第一となしがちな今日の社会に於ては、先ずギブを、それからテイクという風にあるべきものである。勿論、先覚者の人びとと雖も報いられてきた事はテイクしたであろうが、然しその前に必ずギブをしていたに違いない。そしてギブになりつ放しに終つても、それを後悔などはしなかつたことは想像に難くない。

兎もあれ、このギブ・アンド・テイクを、少なくとも、我々社員の最底のモラルとしたいものである。先ず与えること、これこそ今日我々が、先覚者の心を心とするに近い所以であり、また倶楽部運営の基底でもあると考える。ここから出発する倶楽部社員の活動にして、初めて郷土に良き反映をもたらすものと思う。

戦後の桐生も、今日一応安定の形を整えてきたとはいふものの、時代の進運に伴い、今後益々、産業、文化、市政などの面に於て、良き町造りと発展のための問題が山積していることを思えば、ロータリークラブ、ライオンズクラブ、或はユネスコなど、いずれも社会を善くする活動が盛んで

喜ばしいことであるが、これらとは自らその性格を異にした桐生のための、桐生倶楽部としての、大きな寄与が期待されてよいのではないかと思うので、此点我々社員として一段の自覚が必要であろう。

最近倶楽部内に、色々娯楽親睦のための部会ができてきたことは、まことに愉しいことで、時には世間の煩瑣を忘れ、或は仕事の緊張をほぐして、明日への生気を養うこの会合のうちにも、倶楽部が社会に寄与すべき色々の話題が出ると思う。これらを夫々の形体にまとめて、時折、理事会の検討を経て月次会に議題の一つとして提案し、倶楽部の良識と認められたら、これを倶楽部会報に発表して、地域社会の啓蒙又は参考に資し、或は好意的な助言をすることなどは、過去五十年の歴史を持ち、そして確固たる未来を持つ我桐生倶楽部にして、初めてなし得ることであり、また倶楽部としての社会的な義務でもあると思う。例えば、市政への助言などは、最も貴重なものであり、これが政党や選挙に関係ないならば、市当局はこれを歓迎しない筈はないのである。倶楽部会報も単に社員のみへの配布に止まらず、社会啓蒙の如き倶楽部の良識を掲載した場合は、これを各方面の公私団体にまで送付すれば、世間の参考となり、会報自体の意義も亦一段と高いものになると思う。

兎に角、以上の如き社会寄与の活動なくしては、倶楽部は単に一部有閑人の娯乐的団体に過ぎないことになる。勿論社会の夫々の職域に於て活動している我々の、憩いの場、社交の場としての意味と良さは、大いに認むべきであるが、然しこれだけでは、倶楽部を創立された先覚者の高邁なる精神を忘れていくことになるので、まことに申し訳ないことであると思う。

飲菜の催し、時には結構であるのに、パーティ屋と言われたり、社屋の維持、甚だ重要であるの

に、貸間業と思われたりする。倶楽部の品位にかかわるような、こんな声を世間から、幾度か耳にしたことがある。これは倶楽部の社会的或は文化的な精神活動に、もつとウエイトが、かかつてよいことを示唆しているようである。レジャーを楽しむのも結構であるが、倶楽部本来の姿は、むしろ、桐生の産業、文化、市政などの推進に在るといふ自覚を失ってはなるまい。

兎もあれ、如何にして倶楽部としての良識を、権威あるものとして、桐生の各方面に反映させ、具現させるかということは、最も肝要な問題であり、倶楽部の財政運営の問題と併せて、倶楽部存在上の今後の二大課題であると考へる。

この課題の解決は、倶楽部の運営に当られる役員、殊に次代を荷なう若くして有能なる社員諸君の、良識と力量と勇氣とに負うところが甚だ大であると信ずる。願わくは、倶楽部創立の精神を十分に理解し、身につけられ、常に広いビジョンをもつて、倶楽部の運営に志されんことを切望して止まない次第である。

終りに、倶楽部の財政や社屋の維持という難しい事柄の適切なる取扱いを始めとし、運営と発展のために、倶楽部の伝統を重んじつつ、今日まで力を致されてきた現役員をも含めての、歴代の理事長並に理事諸賢に対し、深く敬意を表する次第である。尚又、倶楽部として、エポックメーカーキングであるこの創立五十周年に当り、益々倶楽部の精神と使命を高揚し、これを後代に伝えんとする記念の、諸行事企画並に五十年史編纂に於ける理事及び委員の多大なる労に対しても感謝に堪えないところである。

ここに、桐生倶楽部創立五十周年の慶事に当り、倶楽部の将来が、益々盛況を加え、桐生市民の燈として、親しまれてゆくことを祈念しつつ、所懐の一端を披歴した次第である。その述べるところ



ろ、或は多少抽象的に見えるかも知れないが、現実から離れたものではなく、私は抽象事実の一如という考えでこの拙文を試みた次第である。多少でも桐生人士の参考に資するところがあれば、幸せである。(昭和四十三年六月記)

(桐生外語学院長)

## 永 遠 の 遺 産

長 沢 義 雄

私が桐生倶楽部に入社したのは、昭和九年のことだから随分古く三十二年になる。それから今までに理事五期、専務理事一期、理事長五期をつとめ、役員歴、計二十二年、その間思えば色々な事をして来たものである。端から見れば物好き——の一語に尽きるかも知れない。事務員も度々叱りつけた。文句も言った。しかしそうしなければ倶楽部の美しさは保たれなかったからである。経済的にすっきり行きづまった倶楽部を再建するために、散々憎まれたり悪口を言われたりしながらも努力を続けて来た。やっと黒字になって理事長の職を退ぞいたが、

「倶楽部は、経済を考えてやるところではない。赤字になったら皆で出し合って楽しめばよい。」という人もいた。しかし私の今までの経験で、「それでは赤字になったから出してくれるか」と言えば、仲々簡単に出してはくれないのである。赤字の財政を救う道は結局上手に収入をはかるより他に方法はないのだ。赤字赤字と赤字が続けば、何時かは倶楽部の存在は薄れて、この偉大なわれ

らの先輩の遺産は、何時の間にか何処かに消え去って行くのである。

特に倶楽部の利用価値を知らない人たちにとって、倶楽部は一見無用の長物にも見えよう。しかしそれは不幸にしてその「利用法」を知らないからなのであって、われわれの先輩が五十年前にも前に倶楽部の利用価値を知ってこれを造りこれを活用した事を思えば、私たちは今は故人となられた先輩たちの前に、それこそ「何の顔（カンバセ）あつてまみえんや」である。

私はヒットラーの如くムツソリーニの如く独裁者としての理事長であつたと言われた。しかし私はこの尊い先輩の遺産を

#### 永遠の遺産

として、私たちの郷土桐生に遺すために、理事長となつた以上は万全の手を打たねばならないと考えた。幸にして多数理事、社員諸君の支援を得て、今日倶楽部は隆昌の道を辿っているが、すでに老朽化した会館は、余程の保護を加えない限り「百年の齡」を保たせる事は至難かも知れない。

幸に川村佐助氏のような、先人の靈に対する尊敬を、人間生活の根本と考える思想の持主が現理事長になられたのであるから、恐らく今後の發展は期して待つべきものがあるう事を信じてうたがわぬ。

赤字財政を黒字にするための苦勞のかたわら、先ず土地問題と取り組んだ。周囲の塀を調べてみると六尺も喰い込んでいる。その処理をすませると次は消防器具置場と火の見櫓の撤去。次は市からの要求で正門前の土地約一坪半の寄附問題、桐葉軒との地代交渉。庭園裏の隣地宅のガス管が無断で庭園内を通っているそれに対する話しあい。数えれば限りなかつた。そして四十年式典。古文書の整理。

ここで先輩たちがこの倶楽部を創立した当時の、倶楽部に対する考え方を再認識する必要を痛感した。金子初代理事長の胸像を庭園内に移したのも、輝かしい諸先輩の初志を永久に忘れることのないようにしたいとの念願からに他ならなかった。弓道場の移転や税金滞納問題から、社屋の差押事件、事務員の使い込み等更に社員のために使い易い会館とするための大改装にも苦勞した。

時代は流れて半世紀を経たのであるから、昔のように倶楽部の幹部が桐生を指導して行けるなどとは考えもしない。しかし私たちの先輩が郷土の発展のために、大きな犠牲を払って、それも物心両面にわたって努力を続けたことに対しては、私は無条件でこれに敬意を表さずには居られない。時代は進歩したという。しかし精神面では大きな後退をしているとも考えられない事もない。即ち「利己」的なそして「小市民」的な、自己中心的な考え方が、結局は自分たちの生活を貧しいものに追い込んで行くことに気がつかない。私たちの先輩は「自己犠牲を払うことが、自分たちの生活を豊かにする事だ」という大きな自覚の下に、この倶楽部を結成し会館を建てた事に、ひたすらな感激を覚えるのである。

これからの倶楽部の経営に対しても、何処からも財政的援助はないであろうし、昔のように土地の切り売りも、これ以上は許されない。つまりは内外両立の対策を講じない限り倶楽部の存在は不能となるであろう事を、深く肝に銘じ、ただ夢を追うような気持で倶楽部の経営に当る事のないように切望したのである。倶楽部の社員である事に誇りを持ち、倶楽部を活用する事によって、そこから政治に経済に新天地を開く機運を導き出す何かが見出されるようになる事を念願して止まない。それがこの会館建設に当った先輩諸氏への報恩の道でもあると考えるのである。

## 創立者の見識と気概

蓮 沼 治 郎

桐生倶楽部は桐生発展の歴史を秘めている。創立五十周年を迎えて、今尚倶楽部に流れている見識が私達の胸に迫るものを感じます。

明治の末年より大正を経て昭和初年までの桐生織物の隆盛期と共に桐生市勢がぐんぐん伸びたわけですが、当時の桐生の先輩達の見識と気概がこの倶楽部の建物を通して私達後輩に何かと囁いて居るように感じられてなりません。往年の桐生の隆盛期が今は昔の語り草になろうとして居るが、あとを継ぐ我々には再び桐生の隆盛を期して各人奮斗をして居るわけです。しかし何か思うようにならない焦りを感じて居るのが現状ではないでしょうか。桐生倶楽部五十周年を迎えて、今こそ我々には先人の奮斗と苦難を乗り越えた見識とを謙虚に振りかえって見る必要があるかと思うのです。都市の発展には必然的な要因があります。所謂時運と云うやつです。都市の生産活動が時運に合うかどうかはその決め手になるわけですが唯それだけではありません。時運に合った経済活動とそれに携わる各人の気概と見識とそこから生れる対外的信用が伴ってこそ発展生長が見られるものと確信致します。先人の囁きは私にはそんな風に聞こえてなりません。

桐生は今や大きな変革を迎えようとして居ります。情勢だけではなりません。新しい活力源を何

処かに見つけなければならぬ時と云えましょう。今一度五十年前の精神に戻り、そこから何かを  
探し出すことも強ち無益ではないように思われます。  
(県議會議員)

## 権威と魅力ある団体に

早 川 政 雄

桐生クラブの創立の詳細は知らないが、兎に角当時の桐生の代表者は素晴らしいバイタリティーと桐  
生発展の為に大局的な言動をして居り、おそらく日本に於ても当時のクラブの組織と性格は傑出し  
て居ったように思います。

クラブの風格ある建物は今も創立当時の思想を表現して居り、小人物がウロチョロして居る現代  
の世相を嘆きながら、じっと見まもり乍ら立って居るようであります。

こうした観点から現在のクラブを一寸語ってみたいと思います。現代と当時とでは政治、経済、  
社会機構や人心の大きな変化は認めざるを得ないし、創立当時に戻ることは不可能であり、過ぎ去  
った歴史はいかなる力をもってしても引戻せないのです。

特に現代は商工会議所、ライオンズ、ロータリー等各種団体が結成され、地域の有識者(?)は  
いずれかに参加して居り、特にロータリー、ライオンズの人達は奇妙なエリート意識の下に、それ  
らの会合には萬難を排して出席するが、それ以外の社会的な責任ある会合を等閑視する傾向があり

それがクラブの会合にも現われ、クラブの力が弱く權威がなくなり、何とはなし参加して居る人が多くなつてしまつたやうでないかと推察されます。それではどうするか、このままでささやかな懇談会や社交場として残つて行くか、創立当時のように政治経済をリードする權威と魅力ある団体とするかのどちらかでしょうが、一般の人達は後者にかえる事は不可能と思うでしょう。しかし各種団体が簇出して居るからこそ反つて可能性があるのではないかと思うのです。桐生の心ある有識者は「力」ある団体の現われる事をクラブの建物を眺めながら心ひそかに待つて居るのではないかと信じます。

(早川製作所社長)

## これからの倶楽部に期待

平野元吉

私が倶楽部の理事に就任したのは昭和二十四年頃と思いますが、当時の理事長は境野武夫氏で終戦後の経済不安も有つて理事会には常に三、四名位の出席で、その運営には非常に苦勞せられて居りました。境野氏に就いて数々の思い出が有りますが他に譲りまして、境野氏が御他界の後長沢義雄氏が新理事長に就任せられました。氏は学校長と言うより寧ろ事業家と言つた風格でその施策は積極的で有り綿密で大きく、理事長在任中は殆んど日勤に近く、倶楽部再建の為に非常な努力をせられました。今日倶楽部が洋々として発展途上に在る事は、一に長沢氏の献身的努力の賜物と言つ

ても過言では無いと確信して居ります。私が経理担当を命ぜられたのは昭和三十七年頃で、神谷氏の後を継ぎましたが、正直の処余り嬉しくは有りませんでした。何故ならば倶楽部の運営は大変な事だと思つて居たからです。然し経理担当者として段々研究して見た処、一部職員の非行も有り永年未決済の借財等も有つて、神谷氏の御苦勞も察せられ、又これは抜本的な対策を建て、改善しなければ大変な事になると痛感致しまして、長沢理事長と共にこれが解決に鋭意努力を致しました。

先ず第一に倶楽部の基本的収入を得る為に嚴重なる会員の餘衡を行ない、約二百名に増員し、貸室料の増収を計り、帳簿伝票の管理を正しく、職員の入替いを断行し、借財の返済を行ないまして一応すっきりした姿に致した訳です。この間倶楽部の財政を見ては庭園の改修、計器備品の買入れ室内修理等を行ないまして、約三百有余万円の資金を使いました。続いて本年五十周年を迎えるに当り、約二百式拾萬円の資金を集めて暖冷房の設備をし、尚今後式百萬円の子算を以つて内装外装の大修理を行なう予定で居ります。

長沢氏は昨年九月の役員改選に依つて長年数々の功績を残して退任され、後任理事長として川村佐助氏が就任致しました。川村氏も又日本の川村として有名人であり、手腕家でもありますので恐らく今後の打つ手も期して待つ可きものが有ると信じて疑いません。

最後に吾等の願う処は、速かに倶楽部を拡張して二百名位会員を収容出来る様な施設が欲しいものであるという事、そしてその実現を念願して止まないという事を述べて、社員各位と協力して今後の発展に努力したいと思つて居ります。

(平野織物社長)

色々な思い出

藤江敏雄

最近すっかり御無沙汰して居りますけれど桐生クラブは私にとって思い出の処です。

小学生の頃よく父に連れられて夕食を食べに（桐葉軒から運ばせる）来た事を思い出します。大學生の頃となり友人と「玉突き」をしに夏冬休み等に日参したものでした。そして終戦直後に今はサロンになっている処にあった部屋で一生一度の結婚式を新方式で挙行了したのでした。

クラブと云えば永井さんと云う程有名だった管理人の人懐かしい姿を思い出します。

今後少し仕事に暇が出来たら父子三代お世話になっているクラブの月次会にも出席するつもりです。  
(桐生医師会々長)

倶楽部員の任務

古川三雄

昔は「人生五十年」と謂われ、五十年生きれば宜しいとされていたが、此の頃は、寿命が伸びて



凡そ七十年位が平均寿命とされるに至った。誠に悦ばしい限りである。

桐生倶楽部も創立以来、五十年を数えることになった由であるが、我々もようやくその年になんなんとし、感慨ひとしおである。昔であれば、「人生五十年」であったから我々も正に長老の部類であったと思う。

今では「五十六鼻たれ小僧」で、倶楽部社員の大半は若者のうちに入るのである。即ち、大部分が、鼻たれ、小便たれ、糞たれ小僧であると思う。

したがって、本当に偉いというか、人生に於て、功成り名を遂げたという人は極く少ないのであって、大部分の人は、唯今人生勉強の真最中というところではなからうか。

それ故に、出来得る限り、倶楽部の会に出席して、時には長老の話に耳を傾けることも亦楽しからずやで、必らずや日常生活に或は社会活動に有益であることを信じて疑わない。

また郷士の歴史を聞くことにより、真に郷土を理解し、郷土を愛し、子孫に対しても、伝統ある文化を継承していくことは、我々倶楽部員の任務であらねばならないと思う。

こんなことは誰でも判りきったことで今更と上げて云々すべき性質のものではないが聊か社員  
の自覚を促したいと思ひ、不肖をも省みず、暴言を呈した次第である。御寛恕を願うや切。

(医 師)

## 老人の所感

町田 忠一

桐生倶楽部と云えばみんな立派な智者学者の集りのところの様に思えます。又たしかに、その通りです。みんな老人も若者も、互に市のため産業のため、社会のために、色々と働くことに対し話合うことのための場でもあると存じます。戦後国家のすばらしい発展のために、暮しは豊となり、更に高度社会発達伸展時、何か学問ばかり先に行つて、道徳の道が不安に思われます。

若い人も小学生時代からの教育を建直す必要もあるかと思ひます。現在の子や孫がみんな社会が倶楽部の人達の家庭の様であつたら、社会はどんなにか、先々楽しいことかと想ひます。私は老人で指導的なことは心にも何等理想等ありませんが、倶楽部の若い人達が、大にこれから川村佐助氏を学んで、大桐生市のため、教育に産業に、研鑽して下さい。桐生市で唯一人私の崇拜する川村氏を学んで頂きたい。生きた教訓があることは何よりの桐生人の幸福です。

(市議會議員)

## 五十年史の刊行を期待

豆生 田 邦 平

先代に引継ぎ社員となつてはや七年、早いものである。其の間社員の皆様との交流に於て、社会人としての教養を積む機会を与えられた事に感謝して居る。業務多忙のため稍々もすると疎遠勝ちの昨今ではあるが、出来得る限り諸会合に出席し、先輩諸氏との交流を計ると共に、倶楽部運営に御手伝い出来得れば幸甚である。

倶楽部五十年史の刊行は、桐生の歴史でもあり諸先輩の御活躍御人格を偲ぶ良い資料でもあり、今後の私共の良い道標でもある事でしょう。  
(豆生田織物代表社員)

## 所 感

丸 山 貞 夫

桐生倶楽部創立の精神をよく究めて見ると、先学者の方々の、勇気と英知と結束があつた事が判

る。金子竹太郎、前原悠一郎、森宗作氏などの苦心奔走が実って、大正八年十二月に土地、建物の工事が出来た由である。現在の価額にすると一億数千万円の出費である。森宗作、書上文左衛門、大沢福太郎、前原悠一郎氏等多額の出資者の記録がある。

設計、施工共当時としては、最新の建築であり、現在少々傷んではいるが、紳士の社交場としては、東京以外全国に数少ない施設であったと思われる。

前原悠一郎翁伝を開いて見ると、当時のクラブ設立の記録が記されており、更に模範工場桐生燃糸合資会社設立の烈々たる創立精神が刻明に、述べられて居る。初代理事長金子竹太郎、前原副理長両氏で発足したこの桐生倶楽部は、六代目に悠一郎氏長男前原一治氏が理事長になられたが、不幸にして今春物故した事は、返す返すも残念至極と云うべきである。

七代目、現川村佐助氏は創立者の精神を生かして、活躍される事と期待されるが、現在の桐生市の産業界は、明治末期の状況と違わぬ位、恐るべき不振を呈して居るのではあるまいか。織物業界の不振は、将来の桐生発展のヴィジョンに暗いかげを投げて居る。

クラブ創立精神に帰って、産業発展策に一大勇猛心を以て、対処せねばならぬと思う。五十年前の当時の先輩諸氏の事蹟を追慕し、今後の桐生市の在り方を、真剣に考えるときと思う次第。

(大豊建設前橋出張所長)

## 偶感飯と人生

村田貞治

人生とは飯を食うことだと云った人がある。まさにその通りだと思う。飯のために働き、働くために飯を食う。又飯を食う楽しみが人生の最大のものでもあろう。

飯を食う楽しみがあつて料理が発達し味覚感を満足させ味覚感を満たしながら社交に宴会がくりひろげられるが、逆にその飯が食えぬためにいろいろな犯罪も行われ、又は一家心中などの悲惨事さえおこるのである。なを大きくは食糧問題が原因で戦争になることもある。食うか食われるかがこの世の生存競争の実態であらう。一杯の飯はこういう意味で人間の喜びと悲しみの根源を象徴するものだ。生きるとゆうことは最底飯を食うにある。だが世界三十数億の人間中で約二十億の人々は飯が満足に食えないときく。文明がどんなに向上しようが。人類の歴史が始まって以来今日までこの世の中から飢餓と云う文字は消えないであらう。社会文明は次々にぜいたくなものを生産し消費されているのに、すぐ裏側の社会には一切のパンにこと欠き、人類の約三分二が生きること苦しみつつ死んでゆく。私たちの想像に絶した世界が二十世紀それも後半の文明の裏側に存在していることを想うと、悲しいことである。

昔話にある齡七十才になると生きながら山中に捨てられると云う姥捨山の風習が、今なお東南ア

ジアの奥地には日常茶飯事として、一種の美風として行われているともきくとき、今の日本に色々な不満もあるが、日本に生れた喜びをしみじみとかみしめて余りある。こうした気持で倶楽部の姿を思えば、何もかもすべてが幸福であったよう、皆で手を取りあって努力して行きたいものと考えるのである。

(村田商工社長)

## 私と桐生クラブ

吉 田 展 雄

私がまだ桐生中学校へ通っているころ、学校の帰りに父の会社へ、時々寄ったのですが、その途中第一銀行を東へ入って来ると、赤い屋根のいかにも荘厳な建物があり、どの様な人が使用しているのか、そしてどんな建物なのかと興味を覚えたものでした。それから十二、三年を過ぎて、桐生青年会議所が誕生し、当桐生倶楽部の門をくぐる回数も年々多くなり、昭和三十六年には、青年会議所の理事長となり、それこそ、当クラブに一方ならぬ御世話になりました。そしてその頃、借室料の問題等、色々と御世話頂いたわけですが、その折衝等を通じ倶楽部の内容を多少なりとも知ることが出来、三年前父の代りに名士の集まる、この倶楽部の正会員として御仲間にして頂き、今日を迎えたわけですが、非常に巾広いメンバーとの交流が出来入会させて頂いたことを喜んでいる次第です。

今後は五十周年を期に裏の空地を利用して、二階大広間の拡張を行い、より多くの会員が月次会に参集し活発な会員同志の交流が出来ましたならば、桐生市の発展の一助にもなるのではないかと思います、その実現を念願している次第です。

(理事・吉光商店社長)

## 桐生倶楽部について

山口 茂

明治百年で桐生倶楽部が五十周年とは又意味深いものがあります。桐生は昔から織物の生産地として、縦糸横糸を織りなして立派な織物を作ってきましたが、それは恰も人の和の如く、大勢の人々が縦と横との糸の如く、正しく睦み合いつつ堅く堅く心と心の触れ合いがあつてこそ出来るものであると思います。このような環境の中にあつて桐生の発展を考え、桐生人のお互いの睦み合いを考えたのがこの桐生倶楽部でしょう。設置当時の方々があの立派な建物をよくぞ建てられたものと全く今更ながら驚き敬服するものであります。桐生にのみ有り、桐生を思い起させる心の糧となる建物は常に生き生きとして居るこの桐生倶楽部でしょう。

桐生倶楽部の創立当時の先登各位の物心共々の大きな御苦労が有つてこそ、只今の昔ながらのこの倶楽部が立派に存在するのであります。そしてこの倶楽部が桐生の生産、文化その他あらゆる善意が、そして歓待が生み出される所の一つであることを願うものであります。

社員お互いが健康でそして助け合い信じ合い桐生倶楽部精神を立派に育て、桐生の発展と社員の幸福とを祈り桐生倶楽部五十周年の所感と致します。  
(医師)

桐 生 ツ 子

渡 辺 輝 己

生をうけたのは東京、戦争のため御当地に疎開してからの桐生ツ子。幼なじみも学友も全くなくまた親類縁者も結婚したので出来た始末。

しかし二十年以上後の今日では純桐生ツ子と同じかそれ以上(?)に友人知人も殖えました。名門桐生倶楽部の社員に認められたことは以上のことから身に余る光栄と心得、ただただ先輩諸氏の御指導を仰ぐのみで、所感や希望などはとても述べる資格がございませんので、これで失礼させていただきますいと存じます。  
(獣医師)



社  
員  
紹  
介



江原庄兵衛

①明26.12.22 ②(資)江原精練工場会長  
三吉町180 (電)5-0556 ③同上 (電)4  
-2769 ④骨董 ⑤大8.12.20



斎藤 長平

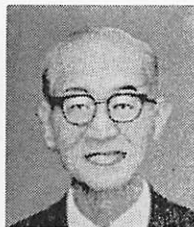
①明24.9.25 ②ナン ③本町4-322 (電)  
2-2412 ④群馬県人権擁護委員会会長 ⑤  
読書・日本画 ⑥ナン ⑦大9.5.26

個人 の 部

(入 社 順)

簡便を期 ため、掲載順序を次  
の通りに した。

- ①生年
- ②勤務先の社名
- ③役職・在り地・電話番号
- ④自宅の在り地・電話番号
- ⑤所属団体及びその役職・公職
- ⑥趣味・特技
- ⑦桐生倶楽部の所属委員会
- ⑧入社年月日
- ⑧倶楽部に対して一言



柘植 憲邦

①明22.3.5 ②共立織物(株)代表取締役  
東5丁目5-13 (電)5-1231 ③東7丁目3  
-35 (電)5-0644 ④桐生織物(協)顧問  
桐生ロータリークラブ ⑤ゴルフ ⑦大14  
⑧出来る丈多く青年会員を増したい。又或  
る条件をつけて婦人会員を設ける事も考え  
たい。



書上文左衛門

①明24.5.6 ③本町2-266 (電)2-2010  
⑦大10.5.16



田沼 米蔵

①明31.9.9 ②前橋塩業(株)取締役社長  
前橋市表町2-4-7 (電)21-2082 ③本  
町4-81 (電)5-2102 ⑦昭7.9.



大川 英三

①明28.10.28 ②大川レース(株)会長  
(電)足利62-1531 ③同上 ④全日本ト  
ーションレース工業会々長・両毛ト  
ーションレース工業会々長 ⑤短歌・謡曲・茶道・  
花道・読書・古陶器・書画 ⑥文化活動委  
員会(美術) ⑦大11.2.15 ⑧クラブに会  
合することによって互いに一層理解し合い  
且教養が高まって行き良き紳士となること  
を運営の眼目にしてもらいたい。

矢野久左衛門

①明38.1.16 ②(株)矢野本店・(株)矢野商店取締役社長 本町2-126 (電)5-2008  
④群馬県卸酒販組合理事・群馬県醬油味噌工業協同組合理事 ⑤読書 ⑦昭9.12.25



長沢 義雄

①明34.2.10 ②桐丘学園 学園長 小曾根町1丁目 (電)2-8131 ③同上 ④全国大学協会・高校協会・県内協会常任理事  
⑤美術観賞 ⑥管理委員会⑦昭9.1.22



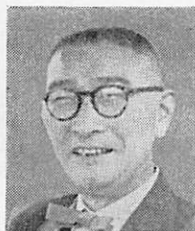
森 正雄

①明39.12.16 ②森合資会社代表社員 本町1-206 (電)2-2001 ③同上 ⑤絵画・書道 ⑥文化活動委員会(美術) ⑦昭9.



加賀山猪三郎

①明27.4.14 ②桐生工業会・群馬女子短期大学 ③小曾根町3-1723 (電)2-2390  
④桐生工業会顧問 ⑤旅行・読書・謡曲・茶道 ⑥文化活動委員会(俳句) ⑦昭9.7.1 ⑧クラブの使命達成に、もっと活発なる活動を望む。



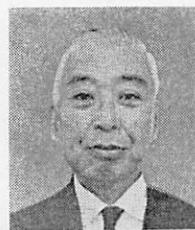
佐々木元吉

①明28.1.30 ②佐々木織物精工(株)社長  
新宿通り2-552 (電)4-3188 ③同上  
(電)4-3758 ④桐生市消防長・群馬電気  
協会々長 ⑤囲碁 ⑥ナシ ⑦昭14.11.



金子正二郎

①明27.1.15 ②金子織物(株)会長 東久  
方町2 (電)5-2166 ③同上 ④桐生市固  
定資産審査員 ⑤盆栽 ⑦昭10.9.20 ⑧文  
化・科学の進歩につれて思想・経綸等が安  
定せず今後も当分世相の変遷が続くと思わ  
れますので名士の講演等を度数も多く催さ  
れる事を望みます。皆集まりも良い事と存  
じます。



森田 勇治

①明34.4.15 ②群馬大学名誉教授 ③東4  
丁目3-40 (電)4-4811 ⑦昭15.12.16



飯塚癸己三

①明26.7.11 ②飯塚機業(株)取締役社長・  
広沢町6-927 (電)4-3126 ③広沢町6-  
836 (電)4-1056 ④桐生ロータリークラ  
ブ ⑤読書・旅行 ⑦昭13.



笠木 茂

①大2.9.7 ②自宅に於て音楽(ヴァイオリン)指導 ③本町5-370 (電)2-2139 ④社団法人才能教育研究会桐生支部長 ⑤旅行・ドライブ(大型運転免許) ⑦昭18.1.18



角田定次郎

①明42.8.23 ②角定織物(資) 代表社員 本町6-382 (電)5-2225 ③同上 ④桐生ロータリークラブ会員・桐生内地織協総代 ⑤謡曲・小唄・庭園 ⑥行事委員会 ⑦昭15.9.21



花桐 逸策

①明26.10.28 ②大東(株) 会長 相生町1-24 (電)4-8121 ③宮本町1685 (電)2-2257 ④桐生市公平委員長・群馬県社会協会々長・桐生織物(協)理事 ⑤囲碁・麻雀・散歩 ⑥管理委員会 ⑦昭19.9.17 ⑧[1] クラブは其成立の主旨を守り桐生在住の信用ある人士の会合所としての使命を果たすこと。[2] 伝統ある建物の風格保存に心掛けること。[3] 時に知名有識者を招き会員の素質の向上と親睦を図ること。



森 喜作

①明41.10.4 ②森産業(株)取締役社長 新宿通1-120 (電)4-3769 ③西久方町1-755 (電)2-2421 ④日本椎茸農業協同組合連合会・群馬県公安委員会委員・群馬銀行監査役・社団法人発明協会理事・林業信用基金理事 ⑤絵画・音楽・ゴルフ ⑥文化活動委員会(美術) ⑦昭17.9.25



堀 信光

①明43.8.26 ②堀織物(株)取締役社長 元宿町2120 (電)5-2725 ③同上 (電)5-2727 ④桐生市選挙管理委員 ⑤囲碁・将棋・油絵 ⑦昭21.9.15



下山 観三郎

①明30.7.11 ②桐生外語学院々長 天神町3-837 (電)2-3759 ③同上 (電)2-8522 ⑤書画・骨董・詩歌 ⑥文化活動委員会 ⑦昭21.6.3



泉 誠一

①明40.2.13 ②泉織物(有) 代表取締役 東5-5 (電)5-2449 ③同上 ④桐生内地織物協同組合顧問 ⑤スポーツ・ゴルフ ⑦昭21.9.15



松島 貫一

①明42.9.10 ②(株)金木屋旅館専務 本町5-358 (電)2-2045 ③同上 ④群馬県旅館環境衛生協会副理事長・桐生ロータリークラブ副会長・桐生食品衛生協会会長・全国旅館環境衛生同業組合連合会理事 ⑤スポーツ ⑦昭21.9.15



田代定四郎

①明34.11.23 ②(有)田代商店 取締役社長 本町3-113 (電)5-2511 ③同上(電)5-2526 ⑤日本画 ⑥文化活動委員会(美術グループ) ⑦昭21.11.21



木村 貞一

①明30.11.15 ②(株)桐生タイムス社 社長 東町4-9 (電)4-4946 ③同上 (電)5-3123 ④桐生市社会教育協会理事・桐生ユネスコ協会副会長 ⑤読書・旅行 ⑥広報委員会 ⑦昭21.9.15 ⑧改って「一寸一言」…ということになると仲々面倒になるが桐生倶楽部というところは何と云っても桐生市民の中の或る限定された人達のグループなのだから会費収入の増加も必要だが社員のレベルアップも肝要。量より質…という方針を貫きたいものである。



森口順四郎

①明34.10.7 ②森口繊維(有)宮本町1373 (電)2-2516 ③同上 ④桐生市教育委員会委員長 ⑤俳句 ⑥文化活動委員会(俳句) ⑦昭21.11.11



矢島 信次

①明27.7.19 ②矢島医院々長 本町5-43 (電)4-3060 ③同上 ④桐生医師会顧問 ⑤読書・旅行⑦昭21.11.11





荒木 敏一郎

①明35.9.7 ②桐生市長、織姫町1041  
(電)5-1111 ③宮前町3-1915 (電)2-  
4773 ⑤読書 ⑦昭22.8.18

服部 正治

①明43.8.11 ②服部繊維工業(株)取締役  
社長 東久方町2-67 (電)4-3585 ③同  
上 ④桐生内地織物(協)部会会計委員・取  
引副委員長・桐生服地共栄会幹事 ⑤ゴル  
フ ⑦昭21.12.26



梶井 海一

①大5.8.29 ②大和物産 東4-11 (電)4  
-5454 ③同上 ⑤ゴルフ・旅行 ⑦昭22  
12.5



近藤 吉次郎

①明37.8.27 ②両毛整肢療護園長 広沢  
町1 (電)4-1182・近藤整形外科医院長  
仲町2-11-6 (電)4-5066 ⑤仲町2-11  
6 (電)4-5066 ④ナシ ⑤ゴルフ・写真  
水泳・乗馬 ⑥ナシ ⑦昭21.12.26 ⑧俱  
楽部は会員出席を余りにしないこと、今  
の状態ではこれ以上の出席は無理でし  
ょう  
区画整理で側面道路が拡張になりますが、  
風致を害さないようお願いしたいもの  
です。



野口 善雄

①大9.1.2 ②浄蓮寺住職・樹徳幼稚園・  
明照保育園々長 本町6—398 (電)5—2962  
③同上 ④群馬県仏教連合会理事・群馬県  
私立幼稚園協会理事・桐生私立保育園園長  
会々長・学校法人明照学園理事⑤書道・俳  
句 ⑦昭24.6.10



川村 佐助

①明31.11.8 ②川村(株)社長 仲町3  
(電)4—4171 ③小曾根町3—1743 (電)2—  
2690 ④桐生糸商組合理事長 ⑤長唄・麻  
雀 ⑦昭23.12.10 ⑧明るい倶楽部にする  
為に会員増加も必要ですが婦人部の設置も  
一策でしょう。



神谷 英司

①大11.3.11 ②中興電機(株)専務取締役・  
埼玉県川口市栄町2—22 (電)0482—51—  
7610 ③東京都渋谷区代々木3—57 (電)  
370—2838 ④日本キリスト教霊南坂教会  
責任役員 ⑤洋楽鑑賞・園芸・ゴルフ・麻  
雀 ⑦昭24.10.10 ⑧常に会員のための倶  
楽部であることを望みます。



遠田 安蔵

①明44.9.28 ②(有)遠田商店代表取締役  
本町5—348 (電)2—2123 ③同上 ④桐  
生小売酒販組合監事 ⑤旅行 ⑥行事委員  
会 ⑦昭24.2.11



斎藤 喜平

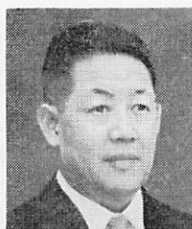
①大13.4.10 ②升長合資会社代表社員・本町4—322 (電)2—2412 ③宮本町1286 (電)2—5991 ④桐生糸商組合理事 ⑤油彩・囲碁・麻雀 ⑥文化委員会 ⑦昭25.12.8 ⑧倶楽部が桐生の客間であり、茶の間として真に政治・文化・経済の中心となる事。

会館を先人の記念碑として永久に保存する事。



金子友三郎

①明34.5.1 ②金友(株) 取締役社長・宮前町2—1920 (電)2—0511 ③山田郡大間々町大字浅原1426 (電)2—2125 ④桐生織物協同組合顧問・桐生ロータリークラブ ⑦昭25.7.10



吉野 一郎

①大11.4.1 ②桐生建設(株)社長・宮前町2—1911 (電)2—5112 ③巴町1—1162 (電)2—3297 ④桐生ロータリークラブ ⑤囲碁・麻雀 ⑥管理委員会 ⑦昭25.12.8



小池 久雄

①大13.1.1 ②共立織物(株)常務・東町5—5—13 (電)5—1231 ③東町7—3—44 (電)4—0674 ④桐生織物協同組合副理事長 ⑤文学・囲碁・麻雀 ⑥広報委員会・文化活動委員会(俳句・囲碁) ⑦昭25.12.8 ⑧いつ出かけて行っても、いつでも誰か他の社員が来ていて、数人で楽しくおしゃべりが出来たり、食事が出来たり、碁や将棋で遊びも出来る。ちょっと時間の余裕があるとひとりでに足が倶楽部の方へ向いてしまう。そんな桐生倶楽部であってほしい。



赤堀 貞治

①明45.1.30 ②公認会計士赤堀貞治事務所・本町5-353 (電)2-6513 ③小曾根町1-1229 (電)2-3911 ④日本公認会計士協会・関東信越税理士会・中小企業診断協会 ⑤ゴルフ・スキー ⑦昭26.4.13



吉成 敏郎

①大11.8.24 ②(株)両毛倉庫・巴町2-1820 (電)4-6416 ③小曾根町3-2816 ⑤ゴルフ・麻雀・囲碁 ⑦昭25.12.8



平野 元吉

①明37.4.11 ②(資)平野織物工場 代表取締役 小梅町227 (電)4-3001 ③同上 ④桐生内地織物(協)副理事長 桐生ロータリークラブ前会長 ⑤尺八・小唄 ⑥行事委員長 ⑦昭26.6.15 ⑧倶楽部の建物を現在の2倍に拡張して2階の広間に200名位階下に結婚式場和室をつくりたい。



日野 貞夫

①明41.3.30 ②(株)三ツ葉電機製作所・社長 広沢町1-2681 (電)5-0111 ③西堤町2674-10 (電)2-5616 ④桐生商工会議所会頭 ⑤散歩・読書 ⑦昭26.2.9



辻 勇蔵

①大7.4.16 ②両毛自動車販売(株) 代表取締役・三吉町155 (電)4-0081 ③同上 (電)4-3816 ⑤歴史・考古学研究・ソシヤルダンス ⑥文化活動委員会(囲碁) ⑦昭27.6.13 ⑧社員間趣味の同人会活動をもっともっと盛んにしてほしい。



齋藤正七郎

①大5.8.6 ③本町4-323 (電)2-2413 ⑤読書・ゴルフ ⑦昭26.



栗原 義夫

①明37.8.5 ②富士工業(有)社長・仲町1-1-10 (電)5-2941 ③同上 ④桐生市議会議員・産業経済委員長・桐生織物協同組合理事・桐生給食センター理事 ⑤果樹栽培(梅) ⑦昭27.11.10



正田 英二

①明38.7.1 ②(株)正田商店代表・稲荷町995 (電)5-3181 ③同上 ④桐生南ロータリー倶楽部会長 ⑤ゴルフ・小唄 ⑥ナシ ⑦昭27.6.13



伊藤 秀一

①明39.3.9 ②(株)伊藤商店社長・仲町2-7-24 (電)4-3184 ③仲町2-7-22 (電)5-2581 ④桐生ゴルフクラブ会長・体協理事 ⑤ゴルフ ⑦昭28.1.20



山口 茂

①明35.11.26 ②山口病院々長・末広町1-1162 (電)2-5031 ③同上 (電)2-8545 ④桐生市医師会・桐生ユネスコ協会 ⑤写真・スポーツ・謡・俳句 ⑦昭27.12.20 ⑧人の和は桐生倶楽部から、桐生の発展も桐生倶楽部からといいたいですね。



増山作次郎

①大12.1.1 ②桐生信用金庫理事長・錦町2-1342 (電)4-8181 ③東1-6-2 (電)5-2303 ④桐生商工会議所理財部長・桐生ロータリークラブ会員・前橋地方裁判所調停委員・関東信用金庫協会監事・群馬県信用金庫協会副会長 ⑤ゴルフ・釣 ⑦昭28.2.28



前原 勝樹

①明37.1.4 ②前原内科医院々長・天神町1-217 (電)2-2417 ③同上 (電)2-5088 ④国際ロータリー355地区ガバナー・群馬県ユネスコ会長 ⑤洋画・長唄・俳句・随筆 ⑥文化活動委員会 ⑦昭27.12.26 ⑧倶楽部は社員のクラブでありたい。早く貸室業から脱したい。



新見 弥平

①明29.3.18 ②新見化学工業(株)社長・横山町238 (電)2-2254 ③同上 ④日本歯科材料(協)・桐生ロータリークラブ ⑤ゴルフ ⑦昭29.12



村田 貞治

①明37.12.5 ②(有)村田商工社々長・西堤町2626 (電)2-3195・モーリス工業(株)・浜松町1-824 (電)5-0521 ③宮本町1671 (電)2-6341 ④桐生商工会議所議員・桐生機械金属工業協同組合理事 ⑦昭29.2



清水 一二

①大12.6.29 ②ソフィア(有)会長・境野201 (電)5-0301 ⑦昭29.12



野間 仁一

①明33.1.24 ②(株)野間商店取締役社長・新宿通2-561 (電)5-0316 ③同上 (電)4-3750 ④桐生商工会議所議員・群馬県モーターボート競走会専務理事 ⑤読書・小唄・庭球 ⑦昭29.12 ⑧いかに文化が進んでも世の中が変貌しても倶楽部の建物は外観内容といい明治の先輩が先見の明をもって造られた尊い文化財の建物であってそのままの姿で市民の追憶の倶楽部として保存活用する事を望む。



大島 宗作

①明44.11.6 ②大島公認会計事務所(公認会計士)・本町1-221 (電)2-7161 ③同上 (電)2-2530 ④日本公認会計士協会群馬部会副会長・桐生中央ライオンズクラブ会長 ⑤ゴルフ ⑦昭31.6.11



森島 秀

①大12.12.22 ②森秀織物(株)取締役社長 東4-2-24 (電)5-3111 ③同上 (電)5-2305 ④桐生内地織物協同組合常務理事 桐生市教育委員会委員 ⑤読書 ⑥文化活動委員会 ⑦昭29.12 ⑧もつともつと会員が利用して下さる倶楽部にしたい。気楽に遊びに行ける所にしたい。



山川 忠雄

①明20.5.15 ②山川医院・永楽町1-1285 (電)2-2256 ③同上 ④桐生市第9区老人会(長春会)会長 ⑤日本画・謡曲 ⑥文化活動委員会(美術) ⑦昭31.6.18



河野 博宣

①大5.10.15 ②(株)三ツ葉電機製作所専務・広沢町1-2681 (電)5-0111(代) ③宮本町1369 (電)2-6594 ⑤読書・散策 ⑦昭31.5





北川 好雄

①明44.1.17 ②北川歯科医院長・巴町2-1821-9 (電)5-2085 ③同上 ④桐生学校歯科医会々長 ⑤長唄・小唄 ⑥文化活動委員会(俳句) ⑦昭31.6.20 ⑧創立以来の先人の意を継承し、人間性あふれる社交の殿堂とし、健全で、建設的なクラブ活動をのぞむ。



佐藤辰七郎

①明37.11.21 ②佐藤(株)社長・巴町2-1832 (電)4-3135(代) ③仲町1-7-11号 (電)4-3018 ④日本綿糸商業組合・日本人絹糸商業組合・桐生糸商組合・日本毛糸商業組合・桐生燃糸工業組合・輸出織物商業組合・桐生内地織物協同組合 ⑤麻雀 ⑦昭31.6.18



山本 新作

①明42.6.12 ②山本耳鼻咽喉科医院長・錦町1-991 (電)4-3728 ③同上 ④桐生市医師会・群馬県国保審査委員 ⑦昭31.6.20



疋田 敏雄

①明39.8.16 ②疋田小児科医院・院長・仲町2-7-20 (電)4-3040 ③同上 ④桐生ロータリークラブ ⑤写真 ⑦昭31.6.18



巴山栄三郎

①明42.12.16 ②巴山織物(株)取締役社長  
東4丁目11-21 (電)5-2082 ③同上 ④  
桐生織物(協)委員 ⑤囲碁・ゴルフ・麻雀  
読書 ⑥文化活動委員会(囲碁) ⑦昭31.7  
14



平野悠紀夫

①大5.2.25 ②(株)三ツ葉電気製作所・常  
務取締役・広沢町1-2681 (電)5-0111  
③小曾根町3-1740 (電)2-4774 ⑤自家  
用飛行機操縦免許所有 ⑦昭31.6.28



新井 幸長

①明30.1.8 ②桐丘女子短大教授・教務部  
長・小曾根町2-1233 (電)2-2400 ③本  
町4-88 (電)4-6847 ④群馬大学内桐生  
工業会理事長 ⑤読書・旅行・織物研究  
⑦昭31.7.18 ⑧会員の利用度を更に高め  
得るように資料室でも設けて、市・県・国  
其の他の団体についての資料や動きなどが  
わかるような材料を皆さんに提供したら如  
何でしょうか。



落合喜一郎

①明37.5.7 ②(株)前三百貨店参事兼呉服  
部長・前橋市千代田町2-5 (電)31-6111  
③本町1-191 (電)5-2315 ④ゆうもあく  
らぶ特別会員 ⑤絵画・音楽鑑賞 ⑥文化  
活動委員会 ⑦昭31.6.30 ⑧会員諸賢の俱  
楽部を一層良きものにしようとする努力に  
対して満腔の敬意をはいります。



小林虎太郎

①大3.1.25 ②(株)小林虎太郎商店社長・  
本町5-38 (電)4-8156 ③同上 ⑦昭31  
8.5



細井嘉一郎

①明39.1.29 ②細井医院 院長・本町6-  
30 (電)4-3818 ③同上 ⑦昭31.7.28



森田 丈夫

①大3.6.21 ②森田内科医院・本町4-327  
(電)2-4067 ③同上 ⑦昭31.8.6



前田 勝利

①明38.3.8 ②前田撚織(株)取締役社長・  
新宿通2-358 (電)4-4177 ③新宿通1-  
433 (電)5-2288 ④桐生織物協同組合理  
事長・桐生商工会議所副会頭・桐生ロータ  
リークラブ会長 ⑤宝生流謡曲 ⑦昭31.8  
4



柿沼 文吉

①大2.6.30 ②柿文織物(資)代表社員・相生町2-828 (電)5-2091 ③同上 ④桐生織物協同組合副理事長 ⑤ゴルフ ⑦昭31.8.5



金谷 善介

①大3.10.7 ②金谷レース工業(株)・東久方町1-96 (電)5-2104 ③同上 (5)ゴルフ・謡曲・写真 ⑦昭31.8.11



永田泰之助

①大8.8.13 ②医療法人永済会永田医院 代表理事兼院長・末広町3-1150 (電)2-3664 ③同上 (電)2-6702 ④桐生ロータリークラブ ⑤ゴルフ・写真・謡曲 ⑦昭31.8.17



吉田 亀雄

①明31.5.15 ②(株)吉田組取締役社長・宮本町1348 (電)2-2159 ③同上 ④商工会議所議員・群馬県建設業協会役員 ⑤ゴルフ ⑦昭31.8.14



阿部登太郎

①明42.1.4 ②阿部登繊維(株)代表取締役  
織姫町1280-4 (電)4-2426 ③同上 ④  
桐生織物協同組合理事・労務対策委員長  
⑤ゴルフ ⑦昭31.9.20



前原 貞勝

①大9.3.6 ②桐生天満宮宮司・天神町1-  
217 (電)2-3628 ③同上 ④桐生ロータ  
リークラブ・桐生ユネスコ協会⑤読書⑦昭  
31.8.17



小島 貢

①明37.3.24 ②小島養蜂園 園長・仲町3  
-16-9 (電)4-4658 ③同上 ④水明会  
会長(桐生市退職校長会) ⑤囲碁・郷土史  
研究 ⑥文化活動委員会(囲碁) ⑦昭31.9.  
19



田中 愛雄

①大4.6.26 ②内科・小児科医院自営・広  
沢町2-3146 (電)4-5012 ③同上 ④桐  
生市医師会副会長・群馬県医師会代議員  
⑦昭31.9.19



町田 忠一

①明33.2.1 ②町田織物(有)代表社員・境野町788-2 (電)4-5020 ③同上 ④桐生市議会議員・桐生市公民館運営委員・留守家庭学級・青少年愛育協議会・図書館運営委員・桐生市遺族会 ⑤日本画(但今は描く暇がない) ⑥文化活動委員会(美術) ⑦昭32.1.10 ⑧倶楽部社員として10年位になりますが、年をとって皆さんの世話になるばかり、市会に私は公選されて出た以上唯市の為に現在はノンプロ位の議員の立場で浅学ですが働いております。



梅沢 武男

①明38.12.6 ②(資)梅沢薬局代表社員・本町5-54 (電)4-5007 ③同上 ④文芸・推理小説の読書 ⑦昭31.10.12 ⑧庭は非常に心を楽しませる。クラブの庭をつぶさないように!



村田 兵作

①大8.10.6 ②(資)村田機械製作所代表社員・永楽町2-1279 (電)2-2507 ③新田郡笠懸村阿佐美983 (電)02776-2255 ④商工会議所常議員・桐生ロータリークラブ会員 ⑤玉突・ドライブ・ダンス ⑦昭32.1.21



遠藤 俊一

①大4.5.13 ②(株)遠藤経理事務所代表取締役・仲町1-11-21 (電)4-4900 ③同上 ④調停委員・市議会議員 ⑤旅行・麻雀・碁 ⑥文化活動委員会(碁) ⑦昭31.11.9



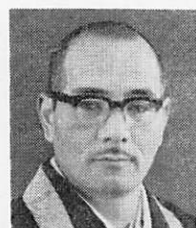
大沢徳三郎

①明31.2.11 ②大沢繊維(株)取締役社長・本町5—350 (電)2—4021 ③同上 ④桐生市第二区々長・桐生捻糸工業組合副理事長 社団法人五桐倶楽部理事・交通安全協会常任理事 ⑤囲碁・スポーツ ⑥文化活動委員会(囲碁) ⑦昭32.3.10



長沢 利脇

①明30.11.2 ②長利織物(株)社長・(電)4—3305 ③同上 ⑦昭32.1.21



野口 健策

①大12.3.9 ②明照学園理事長・樹徳高等学校校長・稲荷町999 (電)5—2258 ③相生町2—804 (電)4—3071 ④私学厚生協会監事・桐生南ロータリークラブ・人権擁護委員・調停委員・青少年センター運営委員 ⑤園芸・音楽・スポーツ(ヨット・スカール・カッター) 読書・柔道(五段) ⑦昭32.3.9



長谷川四郎

①明38.1.7 ②衆議員議員・東京都千代田区永田町2—2—1 (電)581—4762 ③末広町3—1792 (電)2—6151 ④自由民主党国会対策委員長 ⑤観葉植物・鈴虫飼育・ゴルフ ⑦昭32.1 ⑧現在と将来にかけて一層クラブ活動の高度利用を通じ、桐生の市民性に及ぼしている団体の欠陥を是正してほしい。



岩下才一郎

①明32.6.16 ②岩下病院々長・本町4—320 (電)2—0151 ③同上 (電)2—4089 ④桐生市医師会々員 ⑤俳句 ⑥文化活動委員会(俳句) ⑦昭32.4.15 ⑧名実共に文字通り倶楽部として健全な成長を見せてまいりましたことは此上ない「よろこび」と存じます。倶楽部は桐生市の上下をぬいた「サロン」であり「茶の間」であってほしいと思います。



曾我喜一郎

①明36.1.16 ②曾我テキスタイル(株)会長 本町2—261 (電)2—0128(代) ③同上 ④桐生ライオンズクラブ元会長・吾妻公園愛好会会長 ⑤写真・俳句 ⑥文化活動委員会(俳句) ⑦昭32.4.15



氏家 滉二

①大2.10.23 ②医師・小曾根町3—1769 (電)2—0643 ③同上 ④読書・盆栽・ゴルフ ⑦昭32.4.15



若林佐二郎

①明35.6.28 ②(株)矢野商店専務取締役・本町2—122 (電)4—7121 ③宮本町1380 (電)2—3209 ④桐生ロータリークラブ ⑤写真・旅行 ⑦昭32.4.15





下山 国男

①大1.9.3 ②下山製材(株)社長・天神町3-494 (電)2-2940 ③同上 ④群馬県木材組合連合会常任理事・桐生木材組合長・東群製材業協同組合理事長 ⑤釣り・写真 ⑥ナン ⑦昭32.5.17



橋本 駒吉

①明22.6.1 ②(有)橋織織物工場取締役・仲町2-3-21 (電)4-3030 ③同上 ④桐生内地織物(協)・老人会6区会長 ⑤盆栽 菊造り・はにわ造り ⑦昭32.5.10



園田 昇

①大10.5.11 ②公認会計士園田昇事務所代表・仲町1-12-41号 (電)4-3854 ③同上 ④桐生市監査委員・桐生商工会議所監事・関東信越税理士会理事 ⑤小唄等邦楽・将棋 ⑥文化活動委員会(将棋) ⑦昭32.7.12



阿部 文雄

①明44.2.25 ②桐生整染商事(株)取締役社長・永楽町4-1192 (電)2-0541 ③巴町1-甲1123 (電)4-3668 ④桐生輸出織物商業協同組合理事長・商工会議所議員・桐生ロータリークラブ ⑤小唄・長唄・麻雀 ゴルフ・観劇 ⑦昭32.5.10



藤江 敏雄

- ①大4.9.20 ②藤江医院 院長・本町4—314  
(電)2—2013 ③同上 ④桐生市医師会々長  
⑤長唄・清元・スキー・ボーリング・麻雀  
⑦昭32.12



石井 省三

- ①大15.2.25 ②石井経理事務所・公認会計士・永楽町1—1172 (電)2—4188 ③同上  
④日本公認会計士群馬支部幹事・桐生税理士会(元会長)・桐生ロータリークラブ ⑤麻雀 ⑦昭32.7.13



山下 正夫

- 岡崎 弘  
①大5.2.24 ②岡崎醸造(株)取締役社長・新田郡藪塚本町 (電)027778—2411 ③宮本町1326 (電)2—2582 ⑤囲碁 ⑦昭33.6.20

- ①明35.10.25 ②弁護士・山下法律事務所宮本町1688 (電)2—4397 ③同上 ④群馬県弁護士会・県刀剣登録審査員・法務省人権擁護委員・日本画同好会・茶道会・群馬陶芸会 ⑤読書・陶芸・刀剣・文房四宝 ⑦昭32.12.13



杉野 昇

①大13.4.1 ②杉野産婦人科医院院長・本町1—171 (電)5—3515(代) ③同上 ④桐生ロータリークラブ・桐生市会議員 ⑤ナシ ⑥ナシ ⑦昭33.11.24



菊地 暁

①大11.4.1 ②菊地医院院長・小梅町248 (電)5—2883 ③琴平町253 (電)5—2884 ④桐生南ロータリークラブ会長・桐生市医師会理事・桐生写真連盟副会長・桐生市他六町村医療事務組合公平委員長・シルヴァーフォトクラブ会長 ⑤写真・油絵・俳句 ⑥文化活動委員会(美術) ⑦昭33.11.10



木村 勇

①明42.11.7 ②前桐生市教育長・(電)5—1111(代) ③前橋市幸塚町5—1(電)前橋局(0272)31—6831 ⑤碁・庭木・スポーツ ⑦昭33.12.8 ⑧桐生市とともにいつまでもいつまでもクラブの榮えますことを祈ります。男性だけのクラブなので一寸淋しいと思うこともあります。

小暮 敏勝

①大3.6.11 ②小暮医院院長・本町6—374 (電)5—2521 ③同上 ④ナシ ⑤ナシ ⑥ナシ ⑦昭33.11.24



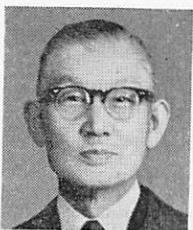
森 敏也

①大4.3.21 ②森内科医院々長・本町1-202  
(電)2-2285 ③同上 ⑤読書 ⑦昭35.2.  
8



春山 善吉

①明25.8.20 ②春山自動車工業(株)社長・  
新宿通3-588 (電)4-8082 ③新宿通3-  
629 (電)4-5067 ⑤旅行・釣・長唄 ⑦  
昭34.3.12



小林 茂一

①明34.4.17 ②小林歯科医院々長・仲町2  
-6-17 (電)4-3916 ③同上 ④社団法人・  
桐生歯科医師倶楽部理事長 ⑤古社寺  
めぐり・古い木石建造物・遺跡めぐり等  
⑦昭35.3.1



須江儀三郎

①大11.3.20 ②(株)須江薬品社長・菱町黒  
川2245 (電)4-2211 ③菱町黒川2296  
(電)4-2211 ④桐生ライオンズ・公民愛国  
委員会副委員長 ⑤野球 ⑦昭34.12.20  
⑧お集まりの方々は皆さん立派な人である  
にも拘らず、非常につき合い易い感じがす  
ると言う事はクラブのふんいきの良さから  
出ると思う。



米田亀一郎

①明31.10.22 ②米田林業(株)代表取締役  
宮本町1687 (電)2-5765 ③同上 ④桐生  
ロータリークラブ会員・調停委員 ⑤囲碁  
⑦昭35.9.15



大森 繁

①大11.10.23 大森染工(資) 代表社員・  
東1-1-10 (電)5-3551 ③東6-5-27  
(電)4-3773 ④桐生染色協同組合常務理  
事・桐生ロータリークラブ会員 ⑤ゴルフ  
長唄 ⑦昭35.4.15



加藤 進康

①大14.1.6 ②(有)ライオン薬局代表取締  
役・本町3-259 (電)2-2947 ③同上 ④  
桐生学校薬剤師会長・本町3丁目商光会長・  
桐生ロータリークラブ ⑤読書・写真 ⑦  
昭35.12.15



小林 松

①大6.3.11 ②小林当織物(株)社長・仲町  
1-4-29 (電)4-7135 ③同上 (電)5-  
0795 ④桐生内地織物協同組合常務理事・  
桐生ロータリークラブ ⑤ゴルフ ⑦昭35  
7.15



東郷 利夫

①大7.1.29 ②東郷医院 院長・本町3—301  
(電)2—4068・2—9048 ③同上 ④ゴルフ  
⑦昭36.4.1



大和 谷航

①大14.10.9 ②大和病院々長・稲荷町5—  
1551 ③同上 ④桐生医師会・昭和小学校  
校医 ⑤刀剣・ゴルフ ⑦昭35.12.15



小島 三郎

①大1.8.6 ②(有)末広堂代表・末広町2—  
1155 (電)2—5018 ③末広町2—1159(電)  
2—8945 ④桐生商工会議所商業部常議員・  
桐生商店連盟副理事長 ⑦昭36.5.5



丹羽 一郎

①明40.10.17 ②丹羽医院院長・永楽町1—  
1169 (電)2—5955 ③宮本町1451 (電)2  
—7806 ⑦昭36.4.1



野田友治郎

①大15.1.12 ②野田染工(株)専務・新宿通2—520 (電)4—2702 ③三吉町519 (電)4—5167 ④桐生南ロータリークラブ幹事 ⑤釣・ゴルフ ⑥広報・五十年史刊行委員会 ⑦昭36.7.7



清水 信次

①明45.1.18 ②(有)清水時計店代表・本町5—364 (電)2—2464 ③同上 ④群馬県時計連合会副会長・商工会議所議員・商店連盟理事 ⑤柔道4段 ⑥文化活動委員会(俳句) ⑦昭36.5.5 ⑧意義ある50年の伝統を生き、郷土桐生に於けるエリート・クラブのスタイルを存続したい。但し会員相互には、民主的に、ラフなスタイルで誰彼なく。



飯山 清治

①大14.3.26 ②(株)飯山商店代表取締役・仲町1—9—20 (電)4—5601 ③同上 (電)4—5602 ④桐生ロータリークラブ ⑤長唄麻雀・旅行 ⑥行事委員会 ⑦昭36.7.7 ⑧桐生倶楽部が今後もこよなく桐生を愛する人々にとって楽しい会合場所でありませうように。



寺田 弘之

①大8.6.2 ②寺田医院 院長・本町3—313 (電)2—3871 ③同上 ④桐生市医師会 ⑤音楽・スポーツ ⑦昭36.6.16



小林 祥兵

①昭3.11.24 ②(株)両毛冷蔵庫・小林商店  
末広町2-1158 (電)2-2331 ③同上 ④  
桐生青年会議所 ⑤ゴルフ・麻雀・撞球  
⑥行事委員会 ⑦昭36.11.1



坪野 茂

①昭5.7.24 ②ツボノ印刷(資)代表社員・  
織姫町1043 (電)4-3053 ③永楽町3-11  
78 (電)2-4738 ④桐生青年会議所・桐生  
ライオンズクラブ ⑤長唄・スキー・バス  
ケット ⑥行事委員会 ⑦昭36.7.7



木村 博一

①大15.7.14 ②木村洋服店・本町4-334  
(電)2-6554 ③同上 ④桐生青年会議所  
OB ⑤囲碁・ピアノ ⑥文化活動委員会  
(囲碁) ⑦昭37.3.8 ⑧毎日、暇さえあれ  
ば、一度は覗いて見たくなる様な、そして  
行けば必ず誰かに会えて、何時迄も帰りた  
くなくなる様な、本当に楽しい倶楽部にな  
る事を切望します。



中村 力

①明38.3.7 ②(有)花見せんべい 代表取  
締役・本町4-335 (電)2-5360 ③同上  
④全国米菓工業組合群馬支部副支部長 ⑤  
旅行 ⑦昭36.8.9





武藤 聡文

①昭9.12.3 ②ムトウ運動具店経営・末広町1—1164 (電)2—5247 ③小曾根町1—1232 (電)2—2151 ④スポーツ(野球・ゴルフ) ⑤行事委員会・文化活動委員会(碁) ⑦昭37.5.9 ⑧倶楽部会員の話し合い等のために、碁会その他良い事とします。



田島常次郎

①明44.3.20 ②(有)田島商店 代表社員・広沢町2—2968—9 (電)4—1184 ③同上 ④群馬県子供育成団体連絡協議会・桐生保護区保護司会会長・青少年センター運営協議会会長 ⑦昭37.3.20



塚越 平人

①大10.12.1 ②桐生瓦斯(株)取締役社長仲町3—6 (電)4—8141 ③横山町255 (電)2—3288 ④桐生ロータリークラブ ⑤写真盆栽 ⑥行事委員会 ⑦昭37.5.17



大槻 円次

①大15.11.30 ②大槻商事(株)取締役社長仲町2—11—18 (電)5—0321 ③東4—4—12(電)4—4033 ④桐生産地織物買継商組合理事・桐生輸出織物商業協同組合副理事長桐生ロータリークラブ幹事 ⑤写真・ゴルフ ⑥行事委員会 ⑦昭37.5.9 ⑧地方都市には少いというより珍しい此のクラブを郷土の諸先輩から受けついで益々発展する様に維持して行きたいものです。



増田 禎三

①大5.10.14 ②(株)矢野商店常務取締役・  
本町2-122 (電)4-7121 ③宮本町1258  
(電)2-9259 ④桐生ライオンズクラブ・西  
中学校PTA会長 ⑤小唄 ⑦昭37.7.17



小島 寅吉

①明35.12.21 ②小島寅吉商店代表・梅田  
町2-251 (電)2-1511 ③同上 ④桐生輸  
出織物商業協同組合監事・日網織物(株)  
取締役 ⑤益裁・清元 ⑥ナン ⑦昭37.7  
11



豆生田邦平

①大2.9.20 ②(資)豆生田織物工場代表社  
員・西久方町1-707 (電)2-3443 ③同上  
④桐生内地織物協同組合着尺副部長・桐生  
法人会常任理事 ⑤読書・旅行 ⑦昭37.8  
24 ⑧倶楽部活動等大変結構に存じますが  
会員が気楽に話し合える雑談室を造ったら  
良い。



鈴木義一郎

①大9.11.25 ②(株)鈴木鉄工所社長・境野  
町417 (電)4-7181(代) ③小曾根町3-17  
60 (電)2-5002 ④桐生機器工業協同組合  
専務理事・桐生商工会議所常議員 ⑤読書  
音楽鑑賞・麻雀 ⑥ナン ⑦昭37.7.11



周東 英助

①明31.12.17 ②錦絹燃(株)社長・錦町2—1358 (電)5—3602(代) ③同上 (電)5—2651 ④日本燃糸工業組合連合会常任理事 桐生燃糸工業組合理事長 ⑤盆栽 ⑥ナン ⑦昭38.5.9



蓮 幸男

①昭9.8.13 ②(資)奈良屋銅鉄本店代表社員・本町4—337 (電)2—2223 ③同上 ④桐生ロータリークラブ・桐生青年会議所 ⑤散歩・読書 ⑦昭38.1.14



岩沢 英一

①明44.3.30 ②岩富士織物(名)代表社員・新宿通2—391—1 (電)5—2201 ③同上 ④ライオンズクラブ・桐生内地織物協同組合理事 ⑤旅行 ⑦昭38.6.7



宮本 正二

①大2.2.27 ②(株)宮本別館取締役・末広町3—1793 (電)2—2681 ③同上 ④桐生ライオンズクラブ ⑤旅行・読書・ゴルフマージャン ⑦昭38.5.9



岡田 晃

①明36.8.30 ②群馬大学教授・天神町(電)2—3181 ③広沢町5—1641 (電)4—1954 ④小唄(名取) ⑤文化活動委員会(俳句) ⑦昭38.10.8 ⑧特定の政党に関係せぬこと。政党人を講師などに招かぬこと。



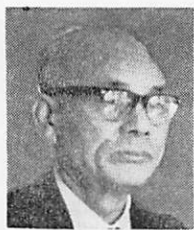
宮地 敬一

①大11.7.7 ②(有)青柳代表取締役・本町5—364 (電)2—5045 ③同上 (電)2—2832 ④群馬県菓子工業組合桐生支部副支部長 ⑦昭38.6.13



土田金一郎

①大2.5.7 ②土田整染(株)代表取締役・新宿通2—533 (電)5—2820 ③同上 (電)5—2827 ④両毛輸出織物整染工業組合理事長・桐生ロータリークラブ ⑤ゴルフ ⑦昭39.3.19



柏瀬安太郎

①明35.4.17 ②(株)柏瀬商店取締役社長・東4—4—1 (電)5—2758 ③同上 ⑤テニス ⑦昭38.7.13



加藤 義平

①大2.8.20 ②群馬県立桐生工業高校校長  
西久方町1-646 (電)2-2022 ③宮本町1  
385 (電)2-3805 ⑤スポーツ・登山・囲  
碁(四段)・麻雀 ⑦昭39.6.6 ⑧50周年を  
迎え今後益々ご発展あらん事を希望し、ま  
た期待致します。  
例会にも殆んど欠席勝ちですが、今後つと  
めて出席したいと思います。



吉田 展雄

①昭3.7.8 ②(株)吉光商店取締役社長・仲  
町2-5-13 (電)4-3521 ③梅田町4-339  
(電)2-1410 ④桐生ロータリークラブ・桐  
生交通センター副理事長 ⑤謡曲・将棋・  
大型二種自動車免許 ⑥行事委員会 ⑦昭  
39.3.23 ⑧月次会にはもっと多くの会員  
の参加が欲しい。また、2階の大広間を、  
もっと拡張して少くとも150名程度の収容  
能力にしたい。



有阪 昌治

①大13.10.8 ②渡良瀬物産(株)代表取締役  
稲荷町1012 (電)5-0166・渡良瀬設備工事  
(株)代表取締役・稲荷町1024 (電)4-9152  
③宮本町1672 (電)2-3577 ④桐生ライオ  
ンズクラブ会員・発明協会桐生支部役員  
⑤絵画・釣 ⑥文化活動委員会(美術) ⑦  
昭40.1.13



小出善三郎

①大4.1.14 ②(有)小出刺繍所社長・三吉  
町196 (電)4-3959 ③同上 ④桐生織物  
協同組合理事・ライオンズクラブ会員 ⑤  
油絵・ゴルフ・自動車運転(35年) ⑥文化  
活動委員会(美術) ⑦昭39.4.7 ⑧例会等  
に欠席勝ちですが時に応じて種々と勉強さ  
せて頂いております。今後ともよろしくお  
願ひします。



前原 元吉

①大7.2.11 ②桐生機械(株)技術部次長・相生町1-124 (電)4-3101 ③本町2-121 (電)5-2229 ④写真・自動車運転(大型免許) ⑤昭40.1.22



古川 三雄

①大10.7.19 ②古川内科医院々長・織姫町1294 (電)5-2143 ③同上 (電)4-1275 ④俳句・絵画・カメラ・囲碁・将棋・麻雀 ⑤文化活動委員会(美術・俳句) ⑥昭40.1.19 ⑦社員たるもの少くとも年数回は月例会など倶楽部の催しに参加し各自の親交と倶楽部の発展に寄与すべきであると思う。



吉田 善一郎

①明30.7.28 ②桐丘女子短大教授・小曾根町1 (電)2-6417 ③足利市小俣町422 (電)足利62-0025 ④昭40.3.19



栗本 博恭

①大8.3.14 ②(有)栗本商店社長・東町4-1-4-15 (電)4-4832(代) ③同上 ④桐生ライオンズクラブ・計画委員長 ⑤旅行麻雀 ⑥ナシ ⑦昭40.1.19



島 勝二

①大1.10.9 ②(有)島画廊代表・本町4-79 (電)4-3734 ③梅田町1-24 (電)2-4892 ④桐生外語学院理事 ⑤美術鑑賞・読書・囲碁 ⑥文化活動委員会(美術グループ) ⑦昭40.5.1 ⑧設立当初のニュアンスを永久に持ちつづけさらに拡大して欲しい。



岸田 英作

①昭5.7.20 ②近江屋書店(資)代表社員・本町4-77 (電)5-3270 ③同上 ④桐生商工会議所議員・桐生青年会議所・桐生ロータリークラブ・桐生商店連盟理事 ⑤スポーツ ⑥文化活動委員会 ⑦昭40.3.20 ⑧古い内にも常に新しさを――。



田島 真一

①明43.6.10 ②田島染工(株)社長・東3-4-13 (電)4-4116 ③同上 ④桐生ロータリークラブ・桐生染色(協)理事長 ⑤バラ造り ⑦昭40.5.28



榎山 欣一

①大3.9.22 ②榎茂絹織(株)取締役社長・相生町3-136 (電)4-3241 ③同上 ④桐生ロータリークラブ理事・桐生織物協同組合常務理事 ⑤魚釣・ゴルフ ⑦昭40.4.12



矢部 靖定

①大8.5.10 ②両毛整肢療護園副園長・広沢町1-2648 (電)4-1182 ③稲荷町996 (電)4-3756 ④日本医師会・群馬県医師会桐生市医師会 ⑤音楽・8ミリ映画 ⑦昭40.7.24



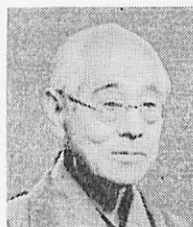
朝倉 融

①大10.11.25 ②朝倉染布(株)社長・浜松町1-878 (電)4-3171 ③同上 (電)5-2062 ④両毛輸出整染工業組合副理事長・桐生南ロータリークラブ会員 ⑤ゴルフ ⑦昭40.5.29



池上 直一

①明38.8.25 ②池上診療所々々長・相生町3-150 (電)4-5385 ③同上 ④群馬県医師会副会長・群馬県対ガン協会専務理事・社会保険診療報酬支払基金審査委員長・群馬県学校医会長・群馬県国民健康保険連合会審査委員長・群馬県医療扶助審議会副会長 ⑤読書・邦楽 ⑦昭40.8.18



大沢 治作

①明18.3.7 ②桐丘女子短期大学教授・小曾根町2 (電)2-6417 ③宮本町1264 (電)2-2027 ④日本英文学会・日本時事英語学会 ⑤囲碁・小唄 ⑥文化活動委員会(俳句・囲碁) ⑦昭40.7.1





早川政次郎

①大9.8.20 ②(有)早政織物工場 桐生合成樹脂工業(株)代表者・本町1-176 (電)2-2426 ③同上 ④消防第一分団長・桐生織協総代・桐生ライオンズクラブ ⑤8ミリ撮影・野球、ボクシング観戦・剣道 ⑦昭40.11.12



設楽 仁

①明31.6.2 ②桐生ドレスメーカー女学院長・小曾根町2-1200 (電)2-6204 ③小曾根町1-1234 (電)2-4837 ④全各総連県各協理事・財務委員長・総会議長・桐生支部長・日公連傘下・公連桐生副支部長 ⑤書道・俗謡・囲碁・将棋 ⑥ナン ⑦昭40.10.29



吉田源太郎

①大9.2.26 ②桐生ヘルスセンター社長・相生町5-111 (電)5-0884 ③同上 (電)4-9117 ④桐生市市議会議員 ⑦昭40.11.24



饗庭 武治

①大1.9.17 ②(株)アイバ商店代表取締役 末広町2-1134 (電)2-5151 ③同上 ⑤ゴルフ・旅行 ⑦昭40.11.8



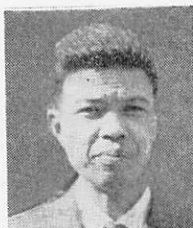
福島 昭吉

①昭3.1.24 ②(株)福島昭吉商店 代表取締役・三吉町186 (電)4-4628 ③同上 (電)4-4628 ④桐生工高保健体育部講師 ⑤柔道・スキー ⑥行事委員会 ⑦昭41.2.18



小堀 隆

①昭7.10.8 ②小堀紋紙(有)代表社員・東町4-6 (電)4-5155 ③同上 ④桐生青年会議所 ⑤音楽 ⑥ナシ ⑦昭41.1.7



西場 和男

①大14.2.20 ②西場工業(有)代表取締役・広沢町6-1087 (電)4-1811 ③広沢町5-甲1274 (電)4-1196 ④桐生機器(協)役員 ⑦昭41.2.18



金谷 利男

①大8.12.16 ②金谷ウェア(株)取締役社長 宮本町1324 (電)2-0321 ③同上 (電)2-0966 ④桐生中央ライオンズクラブ ⑤ゴルフ ⑦昭41.1.17



渡辺 輝己

①大15.11.23 ②自宅において愛玩動物専門の獣医科医院経営 ③仲町1—10—29 (電)4—5133 ④群馬県獣医師会理事 ⑤長唄・写真 ⑦昭41.3.19 ⑧日頃の理事の皆様のご努力に対し敬意を表します。度々話題としてでることですが、クラブの会合が、もう少し気軽に変化に富んだものであると、もっと出席者も多くなるのではないのでしょうか。



糸井京三郎

①大9.6.24 ②(有)一婦美・仲町2—2—29 (電)4—3537 ④同上 ④桐生料理業組合組合長 ⑦昭41.1.22



周東高三郎

①大2.10.22 ②新郷建設(株)社長・稲荷町1035 (電)5—2916(代) ③同上 (電)5—2920 ④桐生商工会議所議員・群馬建築士会理事・群馬県道路協会理事・群馬土地家庭調査会理事・群馬交通安全協会理事・群馬県河川協会理事 ⑤卓球・小唄・釣り ⑥ナシ ⑦昭41.3.24



大屋 定吉

①明41.5.23 ②(有)大定織物工場代表取締役・境野町甲545 (電)5—2379 ③同上 ⑤釣・麻雀 ⑦41.3.17



須賀 武次

①大10.5.14 ②二国(株)社長・本町3-312  
(電)2-4126 ③同上 ⑤絵画 ⑥文化活動  
委員会(美術グループ) ⑦昭41.5.12



青木 治郎

①昭3.7.31 ②青石織物(株)取締役社長・  
東4-11-30 (電)5-2902 ③同上 ⑤桐  
生内地織物協同組合理事・正絹着尺会長・  
桐生青年会議所理事・桐生ロータリーク  
ラブ会員 ⑥広報委員会 ⑦昭41.4.13 ⑧だ  
んだん楽しいクラブになってゆく感じがし  
ます。  
新しい時代の新しい雰囲気にも満ち溢れたク  
ラブで和やかに英気を養いましょう。



太田 兼吉

①大2.1.25 ③錦町1-1338 (電)5-2541  
④桐生市議会議員 ⑥文化活動委員会(将  
棋) ⑦昭41.5.17



小玉 澄男

①明42.3.10 ②小玉製作所・織姫町1265  
(電)5-2414 ③同上 ④桐生保護司会研修  
部長・保護司・桐生ユネスコ協会常任理事  
群馬県青少年対策委員・桐生俳句親交会  
会長 ⑤俳句 ⑥文化活動委員会 ⑦昭41.4  
14 ⑧肩苦しくない交歓の場でありたい。



坂本 浩一

①大3.2.20 ②(有)新桐生薬局代表・相生町1-10-2 (電)4-4686 ③同上 ④日本薬剤師会代議員・群馬県薬剤師会副会長・桐生薬業会長・県計量協会理事・桐生中央ライオンズ理事 ⑤運動 ⑦昭41.7.18



蓮沼 治郎

①大3.11.4 ②群馬県議会議員③宮前町2-1915 (電)2-2765 ⑤旅行・囲碁 ⑥文化活動委員会(囲碁) ⑦昭41.5.17 ⑧桐生倶楽部には、いい意味での桐生の先人指導者の気概と見識が今もなお流れているように見える。ともすれば失われがちな気概と見識が、今の桐生にとって大切なことでしょう。大事にしましょう。



五十嵐 健雄

①昭2.10.17 ②桐生トリコット(有)取締役社長・東1-1-30 (電)4-9077 ③本町2152 (電)5-2478 ④桐生市北幼稚園PTA会長・桐生市公立幼稚園連絡協議会々長群馬県公立幼稚園連絡協議会副会長 ⑤ゴルフ・麻雀 ⑥行事委員会 ⑦昭41.8.19 ⑧最近色々なクラブができてきましたが地方都市で単独で50年の歴史をもつものは数少ないと思います。意義あるこのクラブをお互いに利用し、その本来の目的をよく理解して益々発展させるべきでありましょう。



丸山 貞夫

①明41.8.6 ②大豊建設(株)出張所長・前橋市岩神町4-9-11 (電)前橋31-3833 ③西堤町2553 (電)2-3727 ④群馬県建設業協会理事 ⑤美術・音楽・日曜画家 ⑥文化活動委員会(美術・俳句) ⑦昭41.7.14 ⑧伝統精神を尊重して社員の教養を高めて行きたいと思います。



丸山 正一

①大14.3.22 ②大槻商事(株)管理部長・仲町2-11-18 (電)5-0321 ③菱町黒川13 02-6 (電)5-0275 ④読書・麻雀 ⑤広報委員会 ⑦昭41.11.28



大森 貞夫

①昭7.3.27 ②大森染工(資)役員・東1-1-10 (電)5-3551 ③仲町1-1-30 (電)4-1316 ④桐生青年会議所理事・桐生市生活改善委員会委員 ⑤歌舞伎・麻雀 ⑥文化活動委員会 ⑦昭41.11.14



米田 篤穂

①昭10.12.23 ②米田林業(株)専務取締役 宮本町1687 (電)2-5765 ③同上 ④桐生青年会議所副理事長・日本青年会議所指導力開発副委員長 ⑤歌舞伎鑑賞・囲碁 ⑥行事委員会 ⑦昭41.12.9



関口三四郎

①明35.1.17 ②(有)関口会計事務所・新宿通り3-579-1 (電)5-2238 ③同上 ⑤囲碁 ⑥文化活動委員会(囲碁) ⑦昭41.11.14



吉田 武

①大2.6.6 ②(有)シャイン代表取締役・本町5-67 (電)4-3705・(有)エル代表取締役・錦町1丁目 (電)4-5770 ③本町5-67 (電)4-3705 ④桐生工業会副理事長 ⑤園芸 ⑦昭42.1.28 ⑧会員およびその家族の憩の場としてもっと利用する方法はないものか?それには庭に面した良い場所を美しい食堂とし、しばしば利用して頂くことが倶楽部の認識を深め、発展につながると思う。



須藤 行雄

①昭3.1.5 ②須正織物(有)代表社員・東町7-1-21 (電)4-4782 ③同上 ④桐生青年会議所・桐生中央ライオンズクラブ(幹事) ⑤ゴルフ ⑥行事委員会 ⑦昭42.1.13



中島 健吉

①大10.1.2 ②平和工業(株)代表取締役・広沢町 (電)5-0121 ③西堤町2722 (電)2-6313 ⑤スポーツ ⑦昭42.1.30



岩崎 巖

①大2.10.11 ②(株)岩崎織物工場社長・相生町2-88-2 (電)2-4216 ③同上 (電)2-4226 ④桐生市消防団副団長・桐生織物協同組合監事 ⑤ゴルフ・将棋・俳句 ⑦昭42.1.19



清水 計治

①大12.10.16 ②(有)丸啓社長・末広町1-1164 (電)2-2266 ③同上 (電)2-7922  
④桐生飲食店組合料理部長 ⑤スポーツ  
⑥行事委員 ⑦昭42.7.14



吉田 俊夫

①明43.3.19 ②中代機業(有)取締役・梅田町4丁目 (電)2-1308 ③仲町2-5-12 (電)4-2271 ④桐生ロータリークラブ  
⑤ゴルフ・露語 ⑦昭42.4.17



前原 正一

①大15.8.5 ②農林業 ③梅田町2-甲440 (電)2-1437 ④市議会議員・桐生市農業委員会委員・桐生市農協理事 ⑤読書 ⑦昭42.7.17



川口恵四郎

①大15.8.26 ②(株)あたりや本店第一専務取締役・錦町1-988 (電)4-5214・あたりやビル・本町5-370 (電)2-3053 ③稲荷町940 (電)4-8378 ④いろは通り灯台会々長・桐生防火管理者協会幹事・商誠会渉外部長・西小PTA会計・群馬県遊技業協同組合理事・桐生中央ライオンズクラブ  
⑤野球・麻雀 ⑦昭42.7.14





下山 洋一

①昭7.3.17 ②(合)群馬印刷役員・末広町2-1137 (電)2-0181 ③同上 ④桐生印刷工業組合組合長・桐生青年会議所 ⑤撞球・麻雀・音楽 ⑥行事委員会 ⑦昭42.7.28



川島 宏

①大10.9.7 ②(有)川島製材所代表取締役 梅田町1-824 (電)2-1238 ③同上 ④第14区々長代理 ⑤野球・謡曲 ⑦昭42.7.17



山根 波次

①大12.3.12 ②(有)やまねや社長・本町6-398 (電)4-4802・桐生金襴織物(株)社長・仲町3-16-24 (電)4-4802 ③本町6-398 (電)4-4802 ④桐生商店連盟理事 ⑤囲碁 ⑥文化活動委員会(囲碁) ⑦昭42.9.7



田中 暉莞

①昭7.3.8 ②(株)田中 取締役・末広町1-1168 (電)2-2636 ③同上 ④桐生料理業組合副組合長・桐生青年会議所 ⑤8ミリカメラ・ゴルフ・読書 ⑥行事委員会 ⑦昭42.7.27



森口 量

①明38.11.24 ③本町6—32 (電)5—2106  
④本六町会長・調停委員・交通センター第  
二支部長 ⑤書道・碁・盆栽・小唄 ⑥文  
化活動委員会(碁碁) ⑦昭42.12.1



肥塚 秀雄

①明39.12.20 ②(資)花月旅館代表社員・  
末広町3—1792 (電)2—5051 ③同上 ④  
群馬県旅館環境衛生同業組合常務理事・桐  
生旅館組合副組長・桐生工業会常任理事  
桐生市西郷友会長 ⑤旅行 ⑥ナン ⑦昭  
42.9.7 ⑧現在の二階広間を三倍位にして  
貰いたい。(社員が全部出席して椅子に掛  
けられる位のもの。)



竹内善太郎

①大10.11.30 ②(株)上州屋 代表取締役  
本町6—27 (電)4—4856 ③同上 ④桐生  
商工会議所議員・本町6丁目商栄会長・桐  
生ロータリークラブ会員 ⑤小唄 ⑦昭42  
12.1 ⑧書道の同好会をつくってほしい。



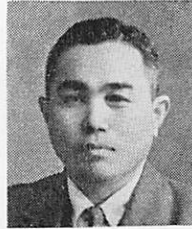
蛭間 義雄

①昭2.1.9 ②前田燃織(株) 営業部長・新  
宿通り2—358 (電)4—4177 ③新宿通り1  
—433 (電)5—0681 ④桐生青年会議所O  
B ⑤謡曲 ⑦昭42.10.13



茂木 浩

①昭3.9.4 ②(有)茂木商店代表取締役・宮本町1266 (電)2-5526 ③同上 ⑤軽飛行機・登山 ⑦昭42.12.6



柏瀬 健一

①明43.10.10 ②(株)柏瀬呉服店取締役社長・本町6 (電)4-5298 ③同上 ④桐生商工会議所商業部会常議員 ⑤スポーツ ⑦昭42.12.1



村田 伊弘

①大11.9.30 ②村田経理事務所々長・巴町2-1810-12 (電)5-2335 ③同上 ④桐生ロータリークラブ・桐生商工会議所 ⑤散歩 ⑦昭42.12.7



新井 秀雄

①明43.4.14 ②(有)丸新既製服店代表取締役・本町6-382 (電)4-3658 ③同上 ⑦昭42.12.1



藤井 竜人

①昭3.5.5 ②共立織物(株) 営業部長・東五丁目5 (電)5-1231 ③仲町二丁目9-13 (電)5-2451 ④桐生青年会議所理事長 ⑤旅・民俗研究(風寛集) ⑥文化活動委員会(囲碁) ⑦昭43.1.13 ⑧桐生クラブのこの性格は地方には珍らしいユニークな団体ですので、この存在の意義を常に忘れぬよう、特に文化の温床として発展させるために努力したいと思っております。



高橋為三郎

①明44.3.30 ②桐生整染商事(株)常務取締役・川内ナイロン工場長・川内町2-618 (電)5-9111 ③東四丁目4-19 (電)4-3615 ④桐生織物(協)常務理事 ⑤長唄・ゴルフ ⑦昭42.12.8 ⑧職業違いの方々より色々とお話ご意見を伺う事が仕事の上で大変参考になります。



橋本 辰巳

①昭4.1.7 ②橋本染色(有)専務取締役・天神町3-529 (電)2-4379 ③天神町3-542-2 ④桐生青年会議所副理事長 ⑤スキー写真 ⑦昭43.2.24



萩原 清彦

①大14.3.30 ②(株)ハイポリマーインダストリー 代表取締役・本町2-281 (電)2-4155 ③本町3-287 (電)2-2672 ⑤読書旅行 ⑦昭42.12.8 ⑧親睦機関であると同時に、啓発的行事(講演会)にも力を注いで欲しい。



平方 敏郎

①大12.6.24 ②(株)茶畑屋商店専務取締役  
稲荷町1029 (電)4-7667 ③同上 ④桐生  
中央ライオンズクラブ・ボーイスカウト第  
11団団委員長 ⑤ゴルフ・散歩 ⑦昭43.3  
30



田代 至宏

①昭10.1.6 ②(有)田代商店専務取締役・  
本町3-113 (電)5-2511 ③同上 (電)5  
-2526 ④桐生ロータリークラブ・桐生青  
年会議所 ⑤スポーツ ⑦昭43.3.8



松本 正二

①大9.1.25 ②松本精機(株)代表取締役・  
新田郡藪塚本町大原1060 (電)本町局(027  
78)2211 ③三吉町197 (電)4-3755 ④桐  
生ロータリークラブ ⑤読書・ゴルフ ⑦  
昭43.7.1 ⑧自学自修を社訓として社員指  
導を行なっている現在、倶楽部を通じ各界  
の有識者の方々と接し自分自身の視野を広  
めたい。



保倉 一郎

①昭11.3.4 ②(有)保倉図案所代表取締役  
西久方町2-785 (電)2-2506 ③同上 ④  
桐生青年会議所理事 ⑤洋画 ⑥文化活動  
委員会(美術) ⑦昭43.3.20



近藤英一郎

①大3.2.4 ②国会議員・近藤酒店社長・群馬県大間々町字大間々1002(電)(027 77)2-2221 ③同上(電)同上 ⑦昭43.8 13

(株)第一銀行桐生支店

- ①本町5—365
- ②2—3141~4
- ③支店長 藤原一二
- ④大9.3.16

桐生機械(株)

- ①相生町1—124
- ②4—3101
- ③取締役社長 沢田武雄
- ④大9.4.7

(株)富士銀行桐生支店

- ①本町4—332
- ②2—4131(代)
- ③支店長 加治義夫
- ④大9.3.17

法人の部

(入社順)

- ①所在地
- ②電話番号
- ③代表者名
- ④入社年月日
- ⑤倶楽部に対してちょっと一言

**(有)桐葉軒**

- ①仲町2-9-33
- ②5-2317
- ③社長 中村 茂
- ④昭2.11.14

**(株)足利銀行桐生支店**

- ①本町五丁目342
- ②2-4101(代)
- ③支店長 荒川準作
- ④大9.6.7

**(株)小川建設桐生営業所**

- ①宮本町1302
- ②2-0521
- ③所長 池田実男
- ④昭5.12.27

**(株)足利銀行新宿支店**

- ①錦町2-1342
- ②4-4106(代)
- ③支店長 岡本正三
- ④大10.1.27

**桐生建設(株)**

- ①宮前町2-1911
- ②2-5112
- ③取締役社長 吉野一郎
- ④昭10.12.17

**(株)三越桐生出張所**

- ①本町2-286
- ②2-0354
- ③所長 春日 修
- ④昭2.8.2



野村証券(株)桐生支店

- ①本町5—345
- ②2—4111
- ③支店長 田中孝太郎
- ④昭24.7.5

両毛通運(株)

- ①末広町3—1805
- ②2—3191(代)
- ③支店長 佐々木己三郎
- ④昭15.1.31

(株)早川製作所

- ①宮前町2—1936
- ②2—3146(代)
- ③取締役社長 早川政雄
- ④昭24.4.26
- ⑤役員の方々は社員を集める事に大変努力しているようです。しかし人は集らぬ。これはクラブ創立当時と現在の社会経済機構の変化のためと思う。ここに思をいたしてクラブ運営をすべきと思う。

(株)群馬銀行桐生支店

- ①本町5—354
- ②2—3151
- ③支店長 松崎正規
- ④昭16.4.9

(株)日本相互銀行桐生支店

- ①本町5—370
- ②2—4136
- ③支店長 伊藤次郎
- ④昭27.4.15
- ⑤倶楽部への集りは概して年輩者が大部分である。(組織上そうなるのであろうが)若い社員(男女問わず)をも集まり得るような社交の場にならないものであろうか?

(株)横浜銀行桐生支店

- ①本町6—371
- ②2—7131(代)
- ③支店長 鈴木友雄
- ④昭22.12

広島高井証券(株)桐生支店

- ①本町6—398
- ②4—4141(代)
- ③支店長 河野達郎
- ④昭29.12

(株)大生相互銀行桐生支店

- ①本町3—313
- ②2—4195(代)
- ③支店長 洪沢善作
- ④昭27.6.17

日本サーボ(株)

- ①相生町3—93
- ②4—8151・8312
- ③取締役工場長 佐々木夏雄
- ④昭31.3

富士計器製造(株)

- ①新宿通3—616
- ②4—4234
- ③社長 渡辺岩雄
- ④昭28.5.14

桐生繊維(株)

- ①宮本町1300
- ②2—8101
- ③代表取締役 木下朝一
- ④昭31.8.25

ミクニ工業(有)

- ①相生町3—94
- ②4—4165~6
- ③社長 新井恒男
- ④昭29.12

同和火災海上保険

(株)桐生出張所

- ①末広町3—1152
- ②2—2665～6
- ③所長 細野芳男
- ④昭32.7.12

朝日火災海上保険

(株)桐生営業所

- ①末広町3—1157
- ②2—5980
- ③所長 岩崎 昇
- ④昭31.11.24

(株)桐生名曲堂

- ①本町5—46
- ②4—3953(代)
- ③社長 平野定治
- ④昭32.10.7

(株)ゲンポー

- ①新宿通り2—甲376
- ②4—4181(代)
- ③社長 松井善作
- ④昭32.3.9

日本勧業角丸証券(株)桐生支店

- ①本町4—334
- ②2—4151(代)
- ③支店長 並木 浩
- ④昭32.12.11
- ⑤50年の歴史あるこの倶楽部が、いつもフレッシュなムードに包まれ、より発展することを期待します。

(株)ユニオンタクシー

- ①末広町3—1142
- ②2—3800～1
- ③社長 宮原繁門
- ④昭32.5.12

**(株)高野商店**

- ① 錦町1—971
- ② 4—3322
- ③ 社長 高野勘藏
- ④ 昭35.7.17

**日本火災海上保険**

**(株)桐生営業所**

- ① 末広町1—1164—2
- ② 2—2625
- ③ 桐生営業所長 楠木 明
- ④ 昭34.2.12

**河原井ホンダ(株)**

- ① 新宿通3
- ② 5—0181(代)
- ③ 代表取締役 河原井源次
- ④ 昭36.4.10
- ⑤ 50年前に立派な桐生クラブができ、輝くこの歴史をさらに発展させるのはクラブ員の力と思います。

**日本レイヨン(株)桐生工場**

- ① 広沢町6—845
- ② 4—1221(代)
- ③ 工場長 長内 清
- ④ 昭34.3.12

**大和縫製(有)**

- ① 本町3—290
- ② 2—2622
- ③ 社長 福田良四郎
- ④ 昭36.7.9

**金井石油(株)**

- ① 新宿通り2—542
- ② 4—3157
- ③ 社長 岡田光弘
- ④ 昭34.12.20

東京電力(株)桐生営業所

①永楽町4—1187—1

②2—8181(代)

③所長 白倉憲三

④昭37.1.17

⑤激動する経済社会の中にあって50年…。改めて先輩各位の桐生市産業文化の向上に尽くしたご努力とその成果に敬意を表するとともに当倶楽部愈々充実発展を願ってやまない次第です。

桐生市立図書館

①小曾根町1—1251

②2—2127

③館長 小林一好

④昭38.6.18

(株)山喜商店

①末広町3—1191

②2—3111(代)

③社長 小野里豊治

④昭36.8.11

桐生中央信用金庫

①本町5—352

②2—0136

③理事長 平井源平

④昭36.8.25

丸莊証券(株)桐生営業所

①本町6—388

②4—4185(代)

③所長 野村年穂

④昭39.3.11

(株)石山商店

①本町5—40

②4—3421(代)

③取締役社長 石山勝利

④昭35.9.12

**新日本絹摺(株)**

- ①東久方町3-55
- ②4-3131~3
- ③社長 中村酉四郎
- ④昭42.1.21

**大桐倉庫(株)**

- ①仲町2-11-19
- ②4-3788(代)
- ③社長 大沢富久子
- ④昭39.8.14

**医療法人岸会岸病院**

- ①相生町2-277
- ②4-8949
- ③院長 岸 直枝
- ④昭42.4.18

**(資)協栄商事**

- ①永楽町3-1177
- ②2-2457・2469・5013
- ③代表社員 駒井満蔵
- ④昭40.5.29

**日本生命桐生支部**

- ①本町6-36
- ②4-2632
- ③支部長 津野恒雄
- ④昭42.9.7

**寺岡商事(株)両毛支社**

**桐生営業所**

- ①仲町2-9-10
- ②4-4111
- ③所長 小林俊一
- ④昭41.1.11

**桐生工業(株)**

- ①相生町2—704
- ②5—0581
- ③社長 川崎舎竹男
- ④昭42.10.11

**両毛倉庫(株)**

- ①巴町2—1820
- ②4—6415(代)
- ③取締役社長 小池邦八
- ④昭43.3.31

**尾池工業(株)桐生出張所**

- ①末広町3—1147
- ②2—2539
- ③所長 今西洋右
- ④昭43.4.1

事務職員



服部 修

- ①大3.10.3
- ②宮本町1319
- ③日曜画家・撞球
- ④昭36.5.19



永井アキジ

- ①明34.9.26
- ②仲町2-9-36
- ④昭2.7.1

- ①生年月日
- ②住所
- ③趣味
- ④入社年月日



桐生俱樂部年表

# 桐生倶楽部年表

(上毛新聞社の「年表ぐんま」を参考にした。  
下段太字は桐生市関係事項)

| 理事長 | 倶楽部の歩み                                                                                                                                                                                           | 年代                                                                                                    | 社会の動き                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | <p>桐生倶楽部創設のことが決まる<br/>調査委員十五名選任</p> <p>森宗作五千円寄附<br/>五名の常任実行委員をきめる</p> <p>内務大臣・文部大臣に社団法人桐生倶楽部<br/>設立を申請</p> <p>社団法人桐生倶楽部設立許可<br/>第一回社員総会 社員一七五名<br/>外に特別社員二十八名 賛助会員二十名<br/>理事長金子竹太郎 副理事長前原悠一郎</p> | <p>大正四年<br/>一・一四</p> <p>大正五年<br/>六・初旬<br/>六・一四</p> <p>大正六年<br/>九・一五</p> <p>大正七年<br/>九・一二<br/>九・二九</p> | <p>(一九一五)<br/>對華二十一カ条要求(一月)<br/>大正天皇即位(十二月)</p> <p>(一九一六)<br/>憲政会結成(十月)<br/>桐生高等染色学校開校<br/>天満宮開帳</p> <p>(一九一七)<br/>日本海軍地中海出動(六月)<br/>桐生中学校開校<br/>蚕糸業界の功勞者町田菊次郎没<br/>上毛モスリン製織部女工スト<br/>足尾線桐生―間藤間開通<br/>中島飛行機製作所設立</p> <p>(一九一八)<br/>シベリア出兵<br/>米騒動起る<br/>桐生工業會創立</p> |

|                          | 金                                                                                                             | 子                                                                                                                 | 時                                                                                                                                                              | 代                                                             |
|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 五礼午餐会                    | <p>内規、使用規定を定める<br/>株式会社桐葉軒開業<br/>桐生懇和会解散<br/>第一回月次会開く<br/>電話七五五番開通<br/>専任理事七名きめる<br/>正門両袖垣完成<br/>構内電話四個設置</p> | <p>会館上棟式<br/>永井源平を書記に採用<br/>会館内外工事完成<br/>会館にて初めて社員總會開く</p>                                                        | <p>清水巖と工事請負契約<br/>社団法人桐生倶楽部設立登記<br/>会館敷地一五八九坪八合三勺を購入登記</p>                                                                                                     |                                                               |
| 大正十年<br>一・一              | <p>大正九年<br/>一・一四<br/>一・二〇<br/>二・一四<br/>五・一四<br/>九・二一<br/>一〇・九<br/>一一・一〇<br/>一二・二七</p>                         | <p>大正八年<br/>一・一九<br/>一一・二四<br/>一二・二九</p>                                                                          | <p>一〇・三<br/>一〇・五<br/>一〇・二〇</p>                                                                                                                                 |                                                               |
| 桐生市制施行 前原良太郎市長<br>(一九二二) | <p>新聞の文章口語体となる<br/>浅間山大爆発<br/>シベリア出兵中の高崎連隊兵士帰還</p>                                                            | <p>(一九二〇)<br/>国連に正式加入<br/>尼港事件(三月)<br/>不況のおおりで桐生織物休止あいつぐ<br/>日本最初のメーデー<br/>第一回国勢調査 人口七、七九六万人<br/>市日七曜制採用 (桐生)</p> | <p>(一九一九)<br/>スペイン風邪大流行つづく<br/>不況で各地にストライキしきり<br/>野口英世黄熱病・病原体発見<br/>桐生染色KK創立<br/>県発表の県内自動車総数一九台<br/>節米のため県職員は麦食をすると発表<br/>群馬紡績会社に初の労働組合誕生<br/>前橋出身の詩人平井晩村没</p> | <p>桐生高等女学校県立移管<br/>中島飛行場製作の飛行機テスト飛行に成功<br/>スペイン風邪大流行、死者多数</p> |

| 金                                                                           | 子                                                                 | 時                                                                                                                                                         | 代                                                                                           |
|-----------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                                             | <p>定款改正委員会<br/>会館使用料改訂<br/>昼夜を通して使用するもの 五〇円<br/>昼間 二五円 夜間 三〇円</p> | <p>市制施行祝賀会<br/>若槻礼次郎来館<br/>第一回学芸講演会<br/>借入金貳万五千円借替の件で実行委員十名<br/>きめる<br/>桐生倶楽部徽章設定<br/>東方壁と屋根の修繕工事<br/>三越呉服店寄贈の緞帳取付<br/>「桐生倶楽部概要」「桐生倶楽部絵葉書」<br/>を社員に配布</p> | <p>四・一<br/>四・二一<br/>五・二二五<br/>七・二七<br/>七・三一<br/>八・八<br/>八・一六<br/>一一・二一</p>                  |
| <p>大正一三年</p>                                                                | <p>大正一二年<br/>一一・二二<br/>一二・一八</p>                                  | <p>大正一二年<br/>一一・二二<br/>一二・一八</p>                                                                                                                          | <p>四・一<br/>四・二一<br/>五・二二五<br/>七・二七<br/>七・三一<br/>八・八<br/>八・一六<br/>一一・二一</p>                  |
| <p>(一九二四)<br/>メートル法実施<br/>生糸の価格暴落のため全国の製糸業者一<br/>せいに休業<br/>群馬町出身詩人山村暮鳥没</p> | <p>(一九二三)<br/>関東大震火災<br/>郡制廃止<br/>東毛の水騒動、農民桐生赤岩に集まる<br/>虎の門事件</p> | <p>(一九二二)<br/>ワシントン会議調印<br/>シベリア撤兵完了<br/>大隈重信国民葬</p>                                                                                                      | <p>皇太子欧州巡遊<br/>桐生中学校県立移管<br/>須永好、強戸村に小作人組合結成<br/>利根発電、東京電灯に合併<br/>原敬東京駅で刺殺<br/>皇太子摂政となる</p> |

| 代 時 藤 齋                                             | 代 時 上 書                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-----------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>御大典記念事業として「桐生郷土史」出版<br/>決定<br/>「桐生郷土史」配本約五百部</p> | <p>書上文左衛門二代理事長となる<br/>尾崎行雄来館</p> <p>北側の土地を新設道路敷地として市及び内務省へ寄附登記<br/>齋藤長平理事長となる<br/>副理事長制を廃し常務理事とする</p>                                                                                                                                                                              |
| <p>昭和三年<br/>五・一<br/>一〇・三</p>                        | <p>大正一四年<br/>一・三〇<br/>九・二三</p>                                                                                                                                                                                                                                                     |
| <p>（一九二八）<br/>普選法による初の総選挙（無産党八名当選）<br/>新川運動場完成</p>  | <p>（一九二五）<br/>日ソ基本条約調印<br/>桐生信用金庫設立<br/>治安維持法、普通選挙法公布<br/>錦桜橋開通<br/>ラジオ放送初まる<br/>桐生ガス会社設立<br/>野間清治雑誌「キング」創刊</p> <p>（一九二六）<br/>大正天貞崩御<br/>新川橋開通<br/>桐生中学校ストライキ</p> <p>（一九二七）<br/>金融恐慌起り銀行の休業続出<br/>桐生市常備消防創設<br/>桐生ガスKK開業<br/>県下初のメーデー<br/>桐生ガス供給開始<br/>桐生輸出織物検査所落成<br/>芥川竜之助自殺</p> |

| 代                                                                             | 時                                                                                            | 藤                                                         | 斎                                                    |
|-------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
|                                                                               | <p>朝鮮商工業視察団三十九名来館<br/>高田又十郎・橋本柳三郎へ五十三坪一合九勺を五十三坪計算で(坪四十五円、計貳千貳百五十円)売渡す。これを償還金にあてる<br/>右登記</p> | <p>桐葉軒との契約を改める</p>                                        | <p>社債償還期限(昭和六年九月三十日)を三か年(昭和九年九月三十日)延期のこと決定</p>       |
| <p>上毛電鉄開通<br/>桐生に望楼出来る<br/>今上天皇即位<br/>前橋出身「資本論」最初の完訳者高島素之没<br/>野口英世・若山牧水没</p> | <p>昭和四年<br/>三・七<br/>一一・二二<br/>一一・二二</p>                                                      | <p>昭和五年<br/>一・三〇</p>                                      | <p>昭和六年<br/>一〇・七</p>                                 |
| <p>金輸出解禁令出る<br/>桐生昭和校開校<br/>町名改称(桐生)<br/>プロレタリア文学隆盛</p>                       | <p>(一九二九)<br/>アメリカに世界恐慌起り、日本の糸価暴落<br/>落<br/>桐生昭和校開校<br/>町名改称(桐生)<br/>プロレタリア文学隆盛</p>          | <p>(一九三〇)<br/>ロンドン軍縮会議 内村鑑三・田山花袋没<br/>浜口首相狙撃事件 群馬会館落成</p> | <p>(一九三一)<br/>満州事変勃発<br/>日本での美学の創始者前橋出身文学博士大塚保治没</p> |
|                                                                               |                                                                                              |                                                           | <p>創設功勞者森宗久逝去<br/>森宗久肖像画出来(斎木芳雄画)</p>                |
|                                                                               |                                                                                              |                                                           | <p>昭和七年<br/>五・一二<br/>五・二七</p>                        |
|                                                                               |                                                                                              |                                                           | <p>(一九三二)<br/>五・一五事件<br/>桐生水道開始</p>                  |

| 齋                                                                               | 藤                                                                   | 時                                               | 代                                                                                                                                                             |
|---------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>撞球利用者皆無となったため、撞球台二台とその付属品一切を百五十円で伴某に売渡すことに決定</p> <p>売却予定地(二百坪)を壱万壱千円で桐生酒</p> | <p>初代理事長金子竹太郎肖像寄附受入(画家牧島要一寄附)</p> <p>東側土地二百坪を藤井竜二郎に坪当り四十五円で売却決定</p> | <p>事務所移転許可書下附</p>                               | <p>官有地(不用水路)払下購入の件きめる</p> <p>高砂町二七〇番地先 三十九坪七合二勺 金六百三十五円五十二銭(単価十六円也)</p> <p>事務所を本町四丁目三三四番地から高砂町二百七十番地に移す</p>                                                   |
| <p>昭和二十二年<br/>一・二五</p> <p>一一・一一</p>                                             | <p>昭和二十二年<br/>六・二七</p> <p>一一・一〇</p>                                 | <p>昭和二十一年<br/>六・二六</p>                          | <p>昭和八年</p> <p>昭和九年<br/>七・二八</p> <p>九・一九</p>                                                                                                                  |
| <p>(一九三七)<br/>日華事変起る</p> <p>日独伊防共協定成立</p> <p>第一回文化勲章</p> <p>南京占領</p>            | <p>(一九三六)<br/>二・二六事件</p> <p>メーデー禁止</p> <p>大本教・ひとのみち教団検挙</p>         | <p>(一九三五)<br/>桐生市図書館開館</p> <p>桐生織物同業組合事務所新築</p> | <p>桐生本町通り舗装</p> <p>(一九三三)<br/>前橋放送局開局</p> <p>日本国際連盟脱退</p> <p>境野村桐生市合併</p> <p>(一九三四)<br/>桐生工業学校開校</p> <p>今上天皇桐生市行幸</p> <p>東郷平八郎元帥歿</p> <p>ブルーノ・タウト高崎少林山に居住</p> |

| 代     |                                  | 時     |                     | 藤     |                                               | 畜              |                                                             |       |                                            |              |                                      |               |                                                 |           |           |
|-------|----------------------------------|-------|---------------------|-------|-----------------------------------------------|----------------|-------------------------------------------------------------|-------|--------------------------------------------|--------------|--------------------------------------|---------------|-------------------------------------------------|-----------|-----------|
| 昭和一三年 | （一九三八）<br>国家総動員法公布<br>桐生市出身野間清治没 | 昭和一四年 | （一九三九）<br>第二次世界大戦起る | 昭和一五年 | （一九四〇）<br>大政翼賛会発足<br>大日本産業報国会結成<br>桐生市商工会議所結成 | 昭和一六年<br>昭和一七年 | （一九四一）<br>米英と宣戦布告<br>（一九四二）<br>萩原朔太郎没・荒木寅三郎（安中出身）<br>枢密顧問官没 | 昭和一八年 | （一九四三）<br>学徒出陣<br>桐生高等工業学校・桐生工業専門学校と<br>改称 | 昭和一九年<br>八・五 | （一九四四）<br>サイパン陥落<br>東条内閣たおる<br>東京都空襲 | 類商業組合へ売ることに決定 | この日の理事会前後から軍需工場関係者の<br>入社申込と銀行・会社などの名称変更しき<br>り | 金属類ほとんど供出 | 知名人しきりに来館 |



| 代                                                                                                                                             | 時                                                                          | 藤                                                                                                                                                                                                | 斎                                                                                                                                                                                        |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>群馬県商工経済会桐生支部に一号室貸与</p> <p>昭和二〇年<br/>二・二七</p> <p>(一九四五)<br/>東京大空襲で廃墟となる<br/>ボツダム宣言受諾<br/>米兵三十三名桐生へ進駐<br/>桐生タイムス創刊<br/>郷土史家岡部福蔵・南画家小室翠雲歿</p> | <p>昭和二年<br/>昭和二一</p> <p>(一九四六)<br/>日本国憲法公布<br/>メーデー復活<br/>農民運動の指導者須永好歿</p> | <p>青年部設置に決定<br/>バッジ二百十二個出来 一個二十五円で配布</p> <p>昭和三年<br/>二・一〇<br/>五・二六</p> <p>(一九四七)<br/>二一・一ゼネスト中止命令<br/>社会党内閣生まれれる<br/>前原一治公選市長となる<br/>キャスリン台風桐生大被害<br/>警察法施行で市警となる<br/>六三制実施<br/>県教員不適格者七四名追放</p> | <p>会館使用料を現在の五割増に決定<br/>九十二才の尾崎行雄来館中食<br/>火災保険新契約 百七十万円(二社)</p> <p>昭和三年<br/>一・二五<br/>七・一一<br/>二二・一〇</p> <p>(一九四八)<br/>新制高校発足<br/>第一回桐生成人祝<br/>アイオン台風<br/>古橋広之進水泳一、五〇〇mに世界新<br/>A級戦犯処刑</p> |

| 代 時 野 境                                                                                                 | 代 時 藤 齋                                                                                                                                                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>自動車部設置<br/>クリスマス祭に新芸術座・群馬フィルハーモニーを呼ぶことなどをきめる</p>                                                     | <p>両毛考古学会を理事室に置く<br/><br/>昭和二四年<br/>一・一四</p>                                                                                                                                               |
| <p>昭和二七年<br/>二・一八<br/>二二・一二</p>                                                                         | <p>昭和二五年<br/>五・二三<br/>九・八<br/>一〇・三<br/>一〇・二一</p>                                                                                                                                           |
| <p>(一九五二)<br/>メーデー流血事件(皇居前)<br/>桐生織物戦後最高の売れゆき<br/>桐生市教育委員会発足<br/>桐生専門店会設立</p>                           | <p>(一九四九)<br/>ドッジライン発表<br/>為替レートきまる<br/>群馬大学開学<br/>桐生結婚改善委員会発表<br/>桐生めいせんストック五万反<br/>キテイ台風<br/>中島知久平歿<br/><br/>(一九五〇)<br/>朝鮮動乱起る。糸へん景気で桐生好況<br/>レッドバージ拡大<br/>桐生市歌・市民の歌制定<br/>桐生福祉事務所設置</p> |
| <p>初代理事長金子竹太郎喜寿祝賀会<br/><br/>昭和二六年<br/>一一・七</p>                                                          | <p>桐生商工会議所織物会館へ移転<br/>消防第六分団火の見を東方物置わきに建設のため土地借用申入れ承認<br/>弓道場寄附申入承認<br/>境野武夫理事長となる</p>                                                                                                     |
| <p>(一九五一)<br/>両毛線全線ディーゼルカーとなる<br/>サンフランシスコで講和条約調印<br/>人絹糸獲得織物業者大者(桐生)<br/>養老院開設(桐生)<br/>第一水源地完成(桐生)</p> | <p>昭和二四年<br/>一・一四</p>                                                                                                                                                                      |

| 代 時 野 境                                                                                                                        | 代 時 野 境                                                                                                                                                                                                                                        |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>滞納市税特別会議(昭和二十六年よりの未納総額七十五万六千九百八十円也)<br/>国際親善懇談会<br/>群大工学部留学生六名招待<br/>弓道場家屋公売公告接受<br/>公売価格 五十万六千三百三十円<br/>公売日時 六月二十日午前十時</p> | <p>群馬県商工課から公益法人の指定を受ける<br/>日中友好協会事務所を置く<br/>書上文左衛門を名与会員に推す<br/>南川理事死去<br/>避雷針盗難にあらう<br/>境野理事長死去<br/>長沢義雄理事長・副理事長前原勝樹選任</p>                                                                                                                     |
| <p>昭和三二年<br/>三・一<br/>五・二四<br/>六・四</p>                                                                                          | <p>昭和二八年<br/>六・一六<br/>八・一四<br/>昭和二九年<br/>九・二五<br/>昭和三〇年<br/>一〇・一七<br/>一一・九</p>                                                                                                                                                                 |
| <p>(一九五七)<br/>南極予備観測隊オングル島上陸<br/>「昭和基地」と命名<br/>造船高世界第一位となる<br/>桐生市結婚改善委員会が桐生市生活改善委員会と改称<br/>群大工学部火災<br/>人工衛生成功(♪連)</p>         | <p>(一九五三)<br/>輸出不振で桐生織物操業短縮<br/>テレビ放送開始<br/>新川児童遊園地開園(桐生)<br/>(一九五四)<br/>梅田・川内・相生三村・桐生市に合併<br/>ビキニ水爆実験で福竜丸被災<br/>デフレで株価下落<br/>(一九五五)<br/>毛里田村一部、桐生市に合併<br/>日本生産性本部発足<br/>佐久間ダム完成<br/>(一九五六)<br/>桐生競艇はじまる<br/>し尿処理場新設(桐生)<br/>東海村に原子力研究所できる</p> |

| 代                                                            | 時                                                                                                                                              | 沢                                                                           | 長                                                                   |
|--------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| <p>小川建設 会館改装工事着工<br/>右工事完成<br/>元三号室除去、中央ロビーに改装</p>           | <p>桐生ロータリー倶楽部事務所設置の件承認<br/>長沢理事長セイロンに於けるアジア・アフリカ教育会議出席<br/>弓道場移転<br/>「桐生倶楽部創立当時を偲ぶ夕べ」開催<br/>創立四十年記念祝賀会<br/>前原準一郎名譽社員となる<br/>「四十年史」脱稿するも未刊行</p> | <p>社員誕生祝を計画<br/>社員総会に桐生管絃楽団を招く</p>                                          | <p>庭園改装工事始まる<br/>初代理事長金子竹太郎胸像を庭園に移転する事に決定</p>                       |
| <p>一〇・一五<br/>一一・二〇</p>                                       | <p>昭和三三年<br/>四・七<br/>四・一九<br/>九・一七<br/>一〇・二五<br/>一一・二一</p>                                                                                     | <p>昭和三四年<br/>一一・六<br/>昭和三五年<br/>一一・二九</p>                                   | <p>昭和三六年<br/>三・二三<br/>四・一〇</p>                                      |
| <p>(一九五八)<br/>ナベ底景気で失業者ふえる<br/>桐生産業文化会館開館<br/>桐生職業訓練所できる</p> | <p>(一九五九)<br/>菱町桐生市に合併<br/>働らく婦人の家完成(桐生)</p>                                                                                                   | <p>(一九六〇)<br/>新安保条約調印<br/>桐生のテレビ六千台突破<br/>桐生厚生総合病院完成<br/>社会党委員長長浅沼稻次郎暗殺</p> | <p>(一九六一)<br/>市営弓道場と相模場が市民に開放される<br/>斎藤長平に長谷川文化賞<br/>人間衛星成功(ソ連)</p> |

## 桐生倶楽部五十年史刊行を祝う

財団法人 交詢社 理事長

高橋 誠一郎

この度「桐生倶楽部五十年史」が刊行されて、私に序文を書くように求められたのでよろこんで筆をとった。というのは、大変失礼な申分ではあるが、地方の一小都市に、五十年も昔から続いている倶楽部がある事を知ったからである。倶楽部経営は東京のような大都市でも、さまで容易ではないが、まして地方都市ではその経営には色々な工夫が必要であろうし、その困難は頗る大なるものがあると思う。そうした中を、とに角五十年の長期間、無事に今日まで継続され、しかも隆昌を誇っているというのであるから誠によろこびに堪えない。

しかもその創立に当って当時の桐生市の先覚者金子竹太郎、前原悠一郎の両氏が、わざわざわが交詢社を訪問され、色々研究を重ねられた結果、わが交詢社の規約その他に従って桐生倶楽部を創設されたというのであるから、いわば親子か兄弟の關係のような親しみを感じる。「姉妹倶楽部」とでも言うことが出来るのであろうか。

| 代                                                            | 時                                                                                                                                              | 沢                                                                          | 長                                                                   |
|--------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| <p>小川建設 会館改装工事着工<br/>右工事完成<br/>元三号室除去、中央ロビーに改装</p>           | <p>桐生ロータリー倶楽部事務所設置の件承認<br/>長沢理事長セイロンに於けるアジア・アフリカ教育会議出席<br/>弓道場移転<br/>「桐生倶楽部創立当時を偲ぶ夕べ」開催<br/>創立四十年記念祝賀会<br/>前原準一郎名誉社員となる<br/>「四十年史」脱稿するも未刊行</p> | <p>社員誕生祝を計画<br/>社員総会に桐生管絃楽団を招く</p>                                         | <p>庭園改装工事始まる<br/>初代理事長金子竹太郎胸像を庭園に移転する事に決定</p>                       |
| <p>一〇・一五<br/>一一・二〇</p>                                       | <p>昭和三三年<br/>四・七<br/>四・一九<br/>九・二七<br/>一〇・二五<br/>一一・二二</p>                                                                                     | <p>昭和三四年<br/>一一・六<br/>昭和三五年<br/>一一・二九</p>                                  | <p>昭和三六年<br/>三・二三<br/>四・一〇</p>                                      |
| <p>(一九五八)<br/>ナベ底景気で失業者ふえる<br/>桐生産業文化会館開館<br/>桐生職業訓練所できる</p> | <p>(一九五九)<br/>菱町桐生市に合併<br/>働らく婦人の家完成(桐生)</p>                                                                                                   | <p>(一九六〇)<br/>新安保条約調印<br/>桐生のテレビ六千台突破<br/>桐生厚生総合病院完成<br/>社会党委員長浅沼稻次郎暗殺</p> | <p>(一九六一)<br/>市営弓道場と相撲場が市民に開放される<br/>斎藤長平に長谷川文化賞<br/>人間衛星成功(ソ連)</p> |

| 代                                                                                                            | 時                                                                               | 沢                                                                                                                                                                    | 長 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| <p>桃色電話架設・きまると土曜懇話会設定」きまると<br/>「桐生倶楽部重要記録」まとめる<br/>台風十八号来たる<br/>社員門標二百枚作る<br/>日本ビクターKKから陶製犬の置物二百個<br/>寄贈</p> | <p>名譽社員前原悠一郎逝去 九十才<br/>第一回園遊会<br/>正門鉄扉完成<br/>雹害、テラスのアクリライト四十枚破損<br/>長沢理事長四選</p> | <p>長沢理事長リオデジャネイロ市で開かれた世界教育会議に出席<br/>群馬県知事よりの通達により、今後公益法人監督規則により群馬県商工労働部所管となる<br/>国際親善の夕<br/>群大工学部外人留学生招待会<br/>ガーナ国エンクルマ理工科大学助教<br/>ライオネルKアイダン氏講演<br/>二階準備室改装工事完了</p> |   |
| <p>七・七<br/>八月<br/>九・二五<br/>一〇・二二<br/>一二・二〇</p>                                                               | <p>昭和三七年<br/>三・二九<br/>五・三<br/>六・三<br/>六・一八<br/>九・二六</p>                         | <p>昭和三八年<br/>七・六<br/>一〇・一四<br/>一〇・二三<br/>一一・二五<br/>一二・五</p>                                                                                                          |   |
| <p>桐生市制四十周年記念式典が産文大ホールで開かれる</p>                                                                              | <p>(一九六二)<br/>桐生市史上中下三巻完成。郷土史家八木昌平が十二年の歳月を費した労作公明党結成<br/>東京への電話がダイヤル即時になる</p>   | <p>(一九六三)<br/>桐生ライオンズクラブ生れる<br/>荒木敏一郎市長当選<br/>米大統領J・Fケネディ暗殺さる<br/>糸価暴落大手九社自主操短<br/>桐生市で日本教育会全国大会開かれる<br/>桐生市役所新庁舎工事起工式</p>                                           |   |

| 前 原 時 代                                                                                                        | 長 沢 時 代                                                                                                                         |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>ローカル紙記者との懇談会<br/>定款改正委員会<br/>ガーデンパーティ、長崎抜天を招く<br/>五十周年記念委員会(第一回)<br/>五十年史刊行委員会(第一回)<br/>暖冷房工事始める。二十二日完工</p> | <p>会館改装工事<br/>名譽社員前原準一郎逝去<br/>倉庫より発見された古文書整理<br/>「桐生倶楽部社報」第一号発行<br/>一号室冷房装置できる<br/>前原一治理事長となる<br/>台風被害あり</p>                    |
| <p>昭和四三年<br/>一・一五<br/>一・二三<br/>二・九<br/>四・二一</p>                                                                | <p>昭和三九年<br/>五・一から<br/>七・三まで<br/>一一・四<br/>昭和四〇年<br/>三・二六から<br/>四・七まで<br/>一一・一<br/>昭和四二年<br/>六・一<br/>九・二六<br/>一〇・二五</p>          |
| <p>(一九六八)<br/>栃木県安藤郡田沼町入飛駒桐生市に合併<br/>R・Lケネディ上院議員暗殺さる<br/>学園騒動各地大学にひろがる<br/>一〇・二一の反戦デーに学生新宿駅で大<br/>あばれ</p>      | <p>(一九六四)<br/>桐生市点字図書館開館<br/>桐生南高校できる<br/>拓植憲邦発明賞受ける<br/>(一九六四)<br/>桐生市新年祝賀式を新しい形式で産文会<br/>館で開く<br/>(一九六七)<br/>桐生の一部に住居表示施行</p> |



川村時代

「五十年史」脱稿  
「五十年史」上毛新聞社に原稿渡す  
「五十年史」印刷終る  
創立五十年祝賀会

七・三一  
八・六  
一〇・三一  
一一・三三

明治百年記念式典が日本武道館で開かれ  
長沢義雄招待を受け出席

## 編集後記

「五十年史」編集事業が始められたのは約一年前の昭和四十二年九月四日であり、正式に「刊行委員会」が活動に入ったのは十月十七日からである。だから原稿が何とこまとまるまでには十か月の歳月が流れている。しかしこれはきわめて「恵まれた結果」なのであって、普通の場合ではとも一年や二年でもものになることは考えられない。

幸にして十年前に「四十年史」（不幸にして発刊にいたらなかった）の原稿が出来ていたので、それを中心に加筆研究を重ねて、ようやくにして今日完成を見たのであるが、あとからあとからと資料が発見され、簡単に終ることはとても考えられなくなったので一応の所で結末をつけることにした。思えば人間とは限りなく慾の深い動物であることを痛感した次第である。

編集を終るに当って、私は次の諸問題に就て、後から社員としてこの倶楽部の経営に当る諸君に對して、一言しておきたい。

その第一は、これからの理事長は、記録の収集正確に熱心であつて欲しいということである。これは今度の編集で大変な苦勞した貴重な体験から言えることであつて、今回の資料は「四十年史」の時とその後と二回にわたつて資料整理をやつて、やつとどうやらその緒がつかめたのであつて、古い資料が服部事務員によつて発見されることがなかつたならば、とてもこれだけの正確は期し得なかつたのである。

第二に申し上げたいことは、理事会は執行機関であって諮問機関ではない、ということである。

だから当然理事諸君は理事長に協力して、ピンピンその責任を果して欲しいのである。

第三に、そのためには、理事は少なくとも在社歴十年以上の、よき倶楽部の古い伝統の理解者である事を、不文律でよいから定める必要があると思う。

最後に経営の面である。これに対しては多くの反対意見者がいるのであるが、私は飽くまでも主張する。経営なくして倶楽部の存在はないということである。「自分たちのものだから自分たちで出し合ってやればよい」というが、果してそれが正論であろうか。一家の保持でもむずかしいというのに、まして公衆のものである場合、誰れが最後の責任をとるのか。つぶれてもさして痛痒は感じないのである。自分の物だと思えば、「ああそうだったのか。」ですますわけにはいかないはずである。

互いに苦しまない程度に経営がなりたたない限り、倶楽部の前途は悲観的であろう。その意味で会館の改築、鉄筋××階建などという私の夢も出て来るのであって、東京のような大都会の倶楽部の運営に、大いに教えられるところがなければならぬ。

私は最後まで苦言を呈して、私と相容れない人たちからは大いに嫌われてこの稿を終ることにする。

最後に御協力下さった委員各位、特に編集の面で悪戦苦闘をしてくれた中川信彦氏と、色々な無理な注文を快く引受けて下さった上毛新聞社の三ッ松・木村両氏に、深く感謝の意を表すものである。

また本書のために「序」を賜った交詢社理事長高橋誠一郎先生や知事、市長、その他、原稿をお

書き下さった社員の皆様に心から厚く御礼申し上げて「編集後記」といたしたい。(長沢記)

社員紹介・社員寄稿集の編集を担当した立場から説明やらお詫びやらを申し上げます。

当初の予想よりは、予め送附させて頂いた名簿資料の回収率は良かったのですが、それでも約半数。未提出の方々には、さぞうるさいと思われたでしょうが、催促につぐ催促をして、どうやら形がつかまりました。写真は桐生タイムス木村氏の御好意で、タイムス所有の物まで借り出しましたが、最後まで集め得なかった顔写真が数枚あったのは残念でした。

編集に当たり、頁数の都合やら、編集委員会の意見で、折角記入された家族紹介が削除されたり法人社員の方々の個人的な部分を省略させて頂いたりした事は、全く申訳ありません。

特に、法人代表者から頂いた写真が掲載出来なかった事は申訳ありませんでしたが、法人社員という性質上、個人社員と全く同じ取扱いも出来ませんし、又、法人社員の場合、その資料の集まった数が実に少くて実際問題としても揃える事が不可能でした。この点、くれぐれもあしからず御諒解願います。

社員紹介を入社順にした事は御不便を感じられるかも知れませんが、五十年史という性質上、敢えて平常の名簿の配列と変えてみることにしました。

御寄稿頂いたものに、こちらで勝手に見出しをつけさせて頂いた事も御寛恕願いたいと存じます。(小池記)



左から齋藤喜、長沢、小池、丸山、岸田

桐生倶楽部五十年史編集委員

委員長

長沢義雄

副委員長

小池久雄

委員

齋藤喜平

丸山正一

野田友次郎

岸田英作

(所感集、社員紹介担当)

編者

中川信彦

査集

# 桐生俱樂部五十年史

昭和四十三年十月二十五日印刷  
昭和四十三年十一月十五日發行  
【非売品】

發行 社団法人 桐生俱樂部

桐生市仲町二丁目九十三六  
電話(桐生)⑤二七五五

編集 桐生俱樂部五十年史編集委員會

代表者 長 沢 義 雄

印刷 上毛新聞社出版局

前橋市古市町九〇  
電話(前橋)④四三四一



**PHF**

桐生倶楽部創立五十年記念式典に当り、記念品として本書を貴殿並に貴職に呈します。光輝ある五十年の歴史を一人でも多くの方に御理解頂きたく、御読了のあかつきには是非共貴殿御書齋又は貴職図書館などに御供えおきの上閲覧に供するよう御手配賜らば幸甚に存じます。

尚御読了後史実の誤り等につき御気付の点がありましたら御指摘下さい。次の八十年・百年史の編集の参考に供したく存じます。

更に本書に対し感想文も併せてお寄せ下されば幸いです。

昭和四十三年十一月二十二日

創立五十周年記念日

社団法人  
桐 生 倶 楽 部